

幻想戦記クロス・スク エア

蒼空の魔導書

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

世界の脅威に対抗する為、戦士達を集め競わせ育成する為に設立された戦島都市スクエアで日夜戦い続ける少年《武内出雲那（たけうち いずな）》。

彼の非常識な日常が壊れる時、物語は始まる。

※この物語は多数の作品のキャラが多く登場する多重クロス小説です。

*登場予定キャラの原作一覧

東京ザナドゥ

学戦都市アスタリスク

落第騎士の英雄譚

英雄伝説軌跡シリーズ

B L E A C H

B L A Z B L U E シリーズ

ハンドレッド

空戦魔導士候補生の教官

魔法少女リリカルなのは S t r i k e r S

めだかボックス

F A I R Y T A I L

R A V E

ワールドトリガー

アカメが斬る！

テイルズシリーズ

クオリアディア・コード

この素晴らしい世界に祝福を！

ソードアート・オンライン

F I N A L F A N T A S Y シリーズ

シャイニング・ブレイド

シャイニング・レゾナンス

対魔導学園35試験小隊

家庭教師ヒットマンREBORN!

インフィニット・ストラトス

ソウルイーター

ニードレス

ブラック・クローバー

ロクでなし魔術講師と禁忌教典

ハイスクールD×D

※各作品の全キャラが出るわけではありません、数多く出す作品もあればたった一人しか出さない作品もあります。

目次

壊れた非常識な日常編

| | |
|-----------------------|-----|
| 非常識な日常が壊れた夜 | 1 |
| 騒がしくて言葉のドツジボールな朝 | 30 |
| 突然やって来た謎の編入生 | 47 |
| 先人の言葉は偉大なり! | 60 |
| ルールとマナーを守って楽しくランチタイム♪ | 77 |
| ドラグーンスタジアム | 97 |
| 青竜学園生徒会の一時(ひととき) | 120 |
| 激突、黄金タッグVS双竜コンビ!! | |

| | |
|----------------|-----|
| 純星煌式武装(オーガルクス) | 137 |
|----------------|-----|

| | |
|--------------------|-----|
| マイ・ナツメという存在 | 163 |
| 疑心から確信へ・・・ | 178 |
| 夜に塗り替えられる空 | 204 |
| 異界化(イクリプス) | 226 |
| 朱き摩天楼、襲い来る怪異(グリード) | 247 |
| 達! | 267 |
| 宿命の出会い、出雲那とプルート | 283 |
| 冥界の焰(ヘルフレイム) | 301 |
| 霊剣使いVS極光の魔女 | 320 |

もう一人のクレア | 339

堕ちた女王の闇 | 362

その一刀を以って偽りの陰を斬り裂け

! | 386

葵柳流VS葵柳流、踏み躪られた友と

決定的な格の差 | 415

創生神との契約、解放されしチカラと

受け継がれる宿命 | 434

Welcome to the SQ

UARE | 455

銀綺の一刀と復讐の幻弾編

夜明けと共に目覚める出雲那、新たな

る非日常の始まり | 485

可憐なる銀綺との邂逅 | 506

邂逅去ってまた天災？ 走れ一輝！

523

底知れぬ絶望の海につ、沈

めエエーッ!! | 537

壊れた非常識な日常編

非常識な日常が壊れた夜

今より凡そ百年前、後に《第一次遭遇（ファーストアタック）》と呼ばれる事となる世界中に大多数の謎の隕石が突如として降り注いだ未曾有の大災害《落星雨（インベルティア）》によって齎された未知の元素《万応素（マナ）》の影響を受け、人々は人間の内に秘められたチカラを覚醒させた。

全ての生物が持つ潜在エネルギー——《気力》

一部の才能のある人間が《魔核》という名の特殊な体内器官を先天的に持つて生まれ、そこから発せられる事象に干渉し超常現象を発生させる特殊エネルギー——《魔力》

精神体に干渉し霊的に様々な事象を発生させる魂の奥底に在る精神エネルギー——

——《霊力》

これらは人間が持つ《三大源力》と名付けられ、世界は暗黒の時代を迎える事となる。人間という生き物は手に入れたチカラを使わずにはいられないものだ。人々はその

チカラを巡り、世界を巻き込む規模の争い《超常大戦》を引き起こし自分達の欲望の為に世界を破壊し尽くした。

そんなある日、今より約四十年前にあたる時期に再び【落星雨】が世界に降り注いだ《第二次遭遇（セカンドアタック）》と共に多くの外来生物が飛来、更には再び世界に分布した膨大な万応素が異次元の扉を開きそこから多くの異生物や悪霊が世界中に出現しそれらが世界中の人々を襲い、蹂躪し、皮肉にもそれが【超常大戦】を終結させたのだった。

生き残った人々は大戦の終結と共に今までの遺恨を水に流して結託し、世界を蹂躪する怪物達の大部分を掃討した、だがそれでもなお怪物達が居座るこの世界は平和が戻ったとは言えなかった。

人々は世界中に跋扈する残った怪物達の掃討やこれからの未来に三度飛来するかもしれない【落星雨】に備える為、若き戦士達を競わせて育成する都市を二大大国の一つ《武闘王国ダイランディア》より南に位置する正方形の形をした島の上に建設したのだった。

この物語はその都市——戦島都市（せんとうとし）《スクエア》に集い、互いに競い高め合う少年少女達の戦いの物語である。

「・・・おい、《決闘（デュエル）》しろよ」

勇ましい凜とした女性の声が微風に乗って夜空に響き渡る。

戦島都市スクエアは東西南北四つのエリアに区分けされており、この場所はその内の東エリアの一角であるアーケード街だ。

煉瓦が敷き詰められた道に煉瓦の建物、そして様々な草花で彩られたアーチが道の至る所に設置されているという安らぎを感じるこの場所でフード付きパーカーを着た高校生だと思われる少年がランニングをしているところに一人の女性が現れてその少年の行く手を阻んでいたのだった。

「・・・懲りねえなアンタも、何度ブチのめされりや気が済むんだ？」

「無論私が勝つまでだ、他者に後れをとったままでは騎士の名折れだからな・・・それに、敗北したままおめおめ引き下がれる性など私は持ち合わせてなどいない、お前だってそうだろう？」

「……へっ！ そうだな、負けっぱなしはムカつくしな！」

啖呵を切る女性に対して不敵の笑みで返答した少年はパーカーのポケットから表紙に蒼い竜が描かれている手帳のような小型端末を取り出して開き起動すると端末のディスプレイからルーン文字が模様のように細かく刻み込まれた球体のモニュメントが飛び出し空中に浮かんだ。

「なんだなんだ？ 決闘か？」

「こんな夜中におっぱじめるとか元気が有り余ってるわね〜」

「いいぞ、やれやれえっ♪」

モニュメントが空に浮かぶと周りに多くのギャラリーが集まって来た。世界の災厄に対抗する戦士を育成するこの都市では都市の中ならどこでも自由に戦闘を行う事が許されている、故に誰かが戦闘を行いそれが見世物になる事などこの都市では日常茶飯事な風景なのだ。

ただし都市としての秩序があるので「決闘」を行う際にルールが存在する、決闘するにあたり攻撃による殺傷ダメージが精神ダメージになる非殺傷フィールド《ソーサラーフールド》を展開するモニュメント《ソーサラークューブ》を起動し、展開されたソーサラーフールドの結界の中で戦闘する事が義務付けられているのである。この都市は戦士を育成する場であっても殺し合いをする場ではないのでこれは戦闘によって死

人が出ないようにする為の処置である（場合によってはショック死する事もあるが）。

『DUEL standby』

空中に浮かぶソーサラーキューブが起動しそこから機械音が発せられるとソーサラーキューブを中心にドーム状の結界が展開されて二人はその中に入って20m距離を空けて互いに向かい合い戦闘準備を始めた。

「来い！我が魂の焰の魔剣《レヴァンティン》っ!!」

女性が何も無い空間から片刃の刀身の剣と鞘を取り出して剣を上段に構えた、鮮やかな桃色の髪をポニーテールに束ね、射貫くような鋭い目線で目の前の少年をその双眸に捉えるその姿は中世の騎士のような勇ましさを感じさせている。

「へっ！新学期が始まる前の肩慣らしとしちやあ丁度いいぜー!」

対する少年は腰のベルトに差している二つの得物の内「伊邪那岐」という文字が刻まれた鞘に収められた太刀より一回り小さなもう一つの刀の柄に手を添えて不敵な笑みで女性と向かい合う。前髪に黄金色のメッシュが入ったツンツンとした黒髪が微風で揺らめき、額に身に付けた青ふちのゴーグルと170cmくらいの低身長の為で生意気そうに見えるものの、全く物怖じせず相手を真っ直ぐと見据えるその夜空と同じ色の瞳からは全てを撃ち倒す轟雷のような強い意志を感じさせていた。

『3・2——』

周りの緊張感が高まりソーサラークューブが戦闘開始前のカウントを開始する……互いに戦士である以上情けは無用——

「《流離の烈火の将》《八神シグナム（やがみ しぐなむ）》——」

「《青竜（せいりゆう）学園》高等部二年《武内出雲那（たけうち いずな）》——」

『I——LET, s GO AHEAD!』

「推して参る!!」

戦闘開始!

「……夜だというのに騒がしいわね、これが戦島都市スクエアか……」

東エリアアーケード街より約2km離れた人気の無い高台、そこに建ち並ぶ無数の街灯の内の一つの上に驚異的な跳躍力で跳び乗って立ちアーケード街の一部に展開されたソーサラーフィールドを見据えている一人の少女がいた。

面積の少ない足場の上に一切の体勢の乱れもなく毅然と立つその少女は恐らく今アーケード街で戦闘を始めた出雲那と同じぐらいの年齢だろう、美しく整った亜麻色の長髪が背景の満月の光に照らされて際立ち、歪みの無い碧色の瞳は確固とした強い意志を感じさせる。

「あの辺りみたいだね・・・成程、強い《霊圧》を感じるわ・・・」

少女は手に持った携帯端末を確認してそう呟くと街灯の上から大きく跳躍して建物の上を乗り継ぎ、ソーサラーフィールドが展開されている場所に向かって行った。

「《紫電一閃（しでんいっせん）》っ！」

「うおっとっ！」

シグナムが振るう紫炎の剣が煉瓦の地面を爆砕し発生した衝撃波が近辺のアーチを薙ぎ倒す、腰に差す二つの得物を未だにどちらも鞘から抜かない出雲那は弧を描く軌道で後退して紫炎の剣を回避し10mの高さがある煉瓦の高台の上に跳躍して跳び乗り衝撃波を回避する、その動きは凄まじく速く普通の人間の眼では捉える事は適わない速度だ・・・普通の人間ならばの話だが・・・。

「フツ、流石は《星脈世代（ジエネステラ）》だ、身体能力では敵わんか・・・」
「ほざけよ！テメエ並の星脈世代より動けるだろうが！」

下方から見上げて気分良さそうに称賛するシグナムに皮肉を言うなど返す出雲那、今二人が発言した【星脈世代】とは【落星雨】が世界中に散布させた【万応素】の影響で誕生した新人類であり【三大源力】の内全ての生物が持っている【気力】を先天的に実用可能な域の量を持って生まれた者をそう呼ぶ、気力は三大源力の中で最も身体強化に長けたチカラである為生まれながらにしてそれを多く保有する【星脈世代】は他の人間より頭二つ三つも飛び抜けて驚異的な身体能力を發揮できる、気力は向上性が低い他の

二つのチカラと違って身体を鍛えればその分保有量が増えるので普通の人間でも鍛練や経験を積んで鍛えぬけば強力な気力使いになれるのだが、いかんせん最初から達人と言われる通常の人間と同等の気力を持って生まれる星脈世代は他とはスタート地点が違う、故に星脈世代は身体能力最強と認識されているのだ。

「威勢がいいのは結構だが・・・そんなところに退避したところで無駄だ！レヴァンティン、シユランゲフォルム!!」

レヴァンティンの柄にある弾薬の補給口を開き一発の弾薬装填したシグナムがレヴァンティンを上に掲げると同時に弾薬を発砲する、それと同時にレヴァンティンの刀身が蛇の様に「伸びた」。

「チッ！《法剣（テンブルソード）》かよ！」

無数の刃節に別れて下から襲い掛かって来るレヴァンティンの刀身を正面に見える建物に向かい跳躍して躲す出雲那、しかし無数の刃節を一本のワイヤーで通して伸ばす【法剣】は伸縮湾曲自由自在だ、数秒前まで出雲那がいた場所を通過した刀身が意志を保持ったかのように曲がり出雲那を追跡する。

出雲那は空中で身体を捻り小さい方の刀を鞘に収めたまま手に取って振るい後方から迫り来るレヴァンティンの刀身を弾き返すのだが、弾いた刀身はすぐに方向を変えて間髪入れずに出雲那を立て続けに襲い掛かり出雲那に反撃の隙を与えない。

「ふっ！はっ！身体能力はオレが上でも！アイツのような《魔導士（ウィザード）》は高火力が厄介だからな！速攻で行くぜっ!!」

出雲那はレヴァンティンの刀身を弾き返し続けながら着地地点の建物の側壁を蹴って加速し、周囲の建物を利用して空中を凄まじい速さで縦横無尽に跳び回り蛇のように追撃して来るレヴァンティンの刀身を振り切ってシグナムの許へと向かい――

「くらえっ!」

シグナムの前にある街灯の上を蹴って大きく跳躍しそのまま急降下して特撮ヒーローの如く跳び蹴りを彼女に叩き込みに行く。

――法剣の弱点は連結刃を伸ばしている間は使用者が無防備になる事だ、不用意に伸ばし過ぎたな!

出雲那は勝利を確信してほくそ笑むと同時に跳び蹴りをシグナムに叩き込んだ、星脈世代の強大な気力で強化した凡そ数十トンの重さがある蹴りによる衝撃で爆発するよ、うに地が陥没する、こんな並外れた一撃常人が受けて無事な筈が無い・・・そう、常人なら――

「今日はそう簡単には行かんぞっ!ハアッ!」

「チッ!」

出雲那の渾身の跳び蹴りはシグナムが片手に持った鞘によって防がれ彼女はそのまま

ま鞘を振り上げて出雲那を上空に弾き飛ばした、数十トンの蹴りを弾き返すシグナムの脅力も大したものだが蹴りを受けて罅一つ生じなかった彼女の鞘も相当な強度があるようだ。

シグナムのレヴァンティンは【魔力】制御をスムーズに行える《魔装錬金（ミスリル）武装》である、彼女のような生まれながらにして【魔核】という器官を体内に持ちそこから練り上げる魔力を使つて事象干渉をし様々な超常現象を発生させる《魔法》を使う者達は【魔導士】と呼ばれ、一部例外は存在するものの魔導士の大半は魔装錬金武装を所有する保管庫用の異空間に所持していて戦闘時に《換装魔法》を使つて異空間から魔装錬金武装を取り出して使用するのである。

「今日こそ勝たせてもらおうぞ、武内出雲那っ!!」

シグナムはいつの間にかレヴァンティンの刀身を戻して鞘に収め抜刀の構えをして宙に舞う出雲那の姿をその鋭い双眸に収めていた。

「やばっ!」

「《飛竜一閃（ひりゆういっせん）っ!!」

空中に投げ出されて大きな隙を見せた出雲那に向けてレヴァンティンの連結刃が鞘から抜き放たれた砲撃の様な一撃が炸裂した、炎熱付加の爆炎が周囲を爆砕し生じた衝撃波が周囲にある煉瓦造りの建物を半壊させる。

「きやあああああ!!」

「うおっ! 凄え風だ! 飛ばされそうだけ!」

衝撃波はソーサリーフィールドの外にいるギャラリーにも届いており、突風の被害を受けて騒ぎ立てる人達の声がシグナムが放った一撃の凄まじさを物語っていた。

この威力にこの規模・・・どうやらレヴァンティンの鞘には魔力を圧縮して事象干渉力を底上げする《縮退魔力》を精製する《魔力縮退炉》としての機能があるようだ、鞘の中で精製した縮退魔力を受け取った刀身は抜き放たれると同時に膨大な縮退魔力を炎熱に属性変換付与して纏い一気に伸ばして空中の出雲那を襲い直線上にあるモノを全で一瞬にして貫いたのだ。

「・・・勝った、遂に勝ったぞ!!」

正面を覆う爆炎と舞い上がる粉塵の中で歓喜の声をあげるシグナム、手応え有りといった表情をしている・・・だがその刹那、一陣の突風が吹き荒れて爆炎と粉塵を吹き飛ばした。

「《葵柳（あおやなぎ）流》帯刀術——《櫛風車（くぬぎふうしゃ）》っ!!」

「何いっ!!?」

爆炎が吹き飛ぶと同時にシグナムが目にしたのは出雲那が空中で身体を捻り上下反転して頭を支点にしアクロバティックに横回転して伸ばされたレヴァンティンの刀身

の腹を踏みつけるように横から蹴り付けて刀身を逸らしている光景であったので彼女は驚愕した、飛竜一閃の剣速に対応されただけでなく一蹴りで爆炎どころか刀身に纏っていた炎熱ですら消し飛ばされていたからだ。

「惜しかったな！もう少し右にズレていたら防げなかったのによ！」

「くっ！」

「様子見は終わりだ！一気にケリを着けてやるぜっ!!」

悔しそうに苦虫を噛み潰したような表情をするシグナムを見据えて出雲那は決着宣言をすると彼の両足から放電現象のような何かがバチバチと弾ける、そして――

「《雷光石火（らいこうせつか）っ！》

「っ!?!」

連結刃となって伸びているレヴァンティンの刀身の上を「駆けた」、魔力によって動体視力を強化したシグナムにも捉える事ができない程の速力で。

――疾過ぎて身体が反応できない!?!くっ!!

出雲那は稲妻と見紛う速度で連結刃を伝うようにシグナムに向かって行く、その光景はまるで黄色の雷光が連結刃を侵食するかのようだ。

先程魔導士が高火力である事を愚痴っていた出雲那であったが実は星脈世代である筈の彼も体内に魔核を所持している、星脈世代の中には極稀に魔核を持って生まれる者

がおり、その中で強化に長けた気力を魔力とリンクさせて魔法以上の事象干渉力の異能を発現させる事ができる者を、男性は《魔術師（ダンテ）》女性は《魔女（ストレガ）》と呼んでいる。

「負けるものかあああああああつ!!!」

「これで終わりだあああああああつ!!!」

黄色の雷光が連結刃を侵食し尽くした瞬間に出雲那が鞘に収められた小さい方の刀の柄を握り抜刀の構えでシグナムの眼前に現れた、その刀の鞘は気力で事象干渉力が強化された魔力による電気の属性変換付与により凄まじいプラズマを放電している、シグナムも再び手に取った鞘を振り上げて抜き放たれようとする出雲那の刃を受けようとするが――

・・・もう遅い。

「——《雷切（らいきり）》っ!!!」

鞘の中に磁界を発生させてレールガンのように射出された刀の刀身は雷速を超越し有無を言わさず流離の烈火の騎士の胴を一閃して斬り抜けた。

「うわああああああああああっ!!!」

「マジやべええええええええええっ!!!」

「助けてええええええええええええええっ!!!」

雷速を超越した一撃により発生した暴風のような衝撃波によつてガチで吹っ飛ばされて行くギャラリー達、周囲数十メートルにあるモノはギャラリー達と共に飛んで行き建築物は次々と倒壊していく、先程シグナムが放った飛竜一閃とは比較にならない威力だ。

「・・・マタカテナカッタ・・・」

やがて衝撃波が収まると刀を振りきった格好の出雲那を後目にシグナムはそう呻きながら膝から崩れ落ちて意識を失った。

「またつまらぬものを斬ってしまった・・・なんてなっ！パーペキだぜっ!!」

『END OF DUEL! winner 武内出雲那!!』

出雲那が馬鹿みたいに格好付けながら刀を鞘に収めるとソーサラーキューブの両脇に出雲那とバツが付けられたシグナムの写真が表示された空間モニターが出現して機械音が出雲那の勝利を告げると自動的にソーサラーフィールドが解除されてソーサラーキューブが出雲那の手帳のデイスプレイの中に戻った、これで決闘終了だ。

出雲那は手帳をパーカーのポケットにしまい俯せに倒れ伏して気絶しているシグナムを見る、ソーサラーフィールドの効果で非殺傷ダメージになっていたので身体は無傷だが通常なら上半身と下半身が両断されていた事だろう。

「つたくOBが出しゃ張り過ぎだったの………にしても」

出雲那は周囲を見回す、辺りは兵（つわもの）どもが夢の跡と呟きたくなるような酷い有様であった、煉瓦で敷き詰められていた道は地雷原の地雷が暴発したかのように凹凸だらけになっており煉瓦造りの建築物や草花で彩られていたゲートはサイクロンが通り過ぎた後のように倒壊していて観戦していたギャラリー達は全員どこかへと飛ばされて行ったみたいだ。

「チツ、この程度か、剣速も破壊力もまだまだだ、【刀華さん】の雷切にはまだまだ及ばねえぜ……」

周囲の惨状はシグナムが放った【紫電一閃】や【飛竜一閃】の被害もあるが一番被害

が大きかったのは出雲那が最後に放った【雷切】の余波だろう、だが出雲那は自分が放った雷切がまだまだ不完全だと悪態を吐く、一体彼の目指すものはどれだけ高いのだろうか？

「ま、これからだな・・・もうこんな時間か、明日は新学期だしそろそろ——」

ピキ・・・ピキピキキイツ！出雲那が腕時計で時間を確認し既に日を跨いでいる事に気がついたので明日に支障が出ないように自分が住んでいる学生寮に帰宅しようとしたその刹那、何か割れるような甲高い音が辺りに響いた。

「なっ!?・・・何だこれ・・・赤い・・・罅？」

身が凍るような風を感じ嫌な予感がした出雲那が後ろを振り返ると20m先に視える半壊した噴水池の前に異様な赤い罅が「頭れていた」、噴水池のふちや地面に亀裂が入っているのではない、噴水池の前の空気を割ったかのようにそれが浮かんでいる、異能者が蔓延るこのスクエアに一年でも滞在していれば並大抵の異常現象にはイヤでも耐性が付くのだがこれは流石に異常過ぎると思った出雲那は動揺せざるを得なかった。

「これはなんか・・・やべえな・・・」

この都市で数年間戦い続けてきた経験が出雲那に危険信号を発している、「ここにいと危険だ」そう本能が叫んでいる・・・しかし赤い罅は見る見るうちに広がりはじめ空間を侵食していく、気が付けば空が朱く染まっていた、まるで血のように不気味な朱だ。

やがて出来上がった空間は周囲の形の変化こそ無いが辺り一面朱に染まっていた、半壊した噴水池の水は血のようだ、空気は邪気が充満しているかのように気持ち悪い、まるで滅びかけの死の世界、周囲はそんな印象の場となっていた。

「・・・何がなんだかわからねえがとにかくここを離れた方がいいか・・・」

目を回して困惑気味な出雲那だがやはり異常現象に慣れているのか精神は平静を保っており、とにかく安全な所へ移動するべきだと判断し行動を開始する。

「おいっ、寝てる場合じゃねえぞ！とつとつここから離れ——」

先程の決闘で出雲那の雷切をモロにくらいブラックアウトして倒れているシグナムの許に駆け寄って彼女の背中を揺すり起こしている——突如怪しい光が二人を取り囲むように無数に出現してそこから「異形」が顕れた・・・黒い色の悪魔にも似た姿をした化物が次々と出現して来てあつという間に二人を包囲したのだった。

「おいおい、何の冗談だこれは・・・夢じゃねえよな・・・最悪だぜ」

突然の出来事に出雲那の額に冷や汗が流れる、包囲している化物共からは友好的な感じは一切しない、明らかに二人に危害を加えようとしている事は明白だ、出雲那は立ち上がり化物共を迎撃する為腰のベルトに差している二つの得物の内一回り小さな刀の柄に手を添えて身構える。

出雲那が周囲の化物共を睨みつけて威嚇していると丁度彼の正面にいる一体が鋭く尖った爪を振り上げて飛び掛かって来た。

「うおらっ！」

対する出雲那は小さい方の刀を手に取り刃を鞘に収めたまま化物が飛び掛かるタイ

ミングを合わせて薙ぎ払いを繰り返す、完璧なタイミングだ、一見すると化物には飛行能力が備わっているように見えるが、小さな放物線を描いて宙に居るこの状態じゃ、躲す事は不可能だろう……だが――

「なっ!!？」

鞘付きの刀が化物に直撃するかと思われた瞬間になんと化物は刀を「すり抜けた」、貫通したのではなくなんの手応えもなく通り抜けたのだ。そうなると必然的に怪物の凶刃がなんの障害を受ける事なく出雲那に振り下ろされる。

「ぐあゝあゝあゝっ!!」

三本並ぶ凶器の爪閃が出雲那の右肩を引き裂き、激痛のあまり悲鳴を上げた出雲那は地に片膝を着いてしまう。

――気力で干渉力を高めた魔力でコーティングした得物がすり抜けただ？ 《霊体》かよコイツ等！いきなり顛れて問答無用で人間を襲う悪霊……《虚（ホロウ）》なのかコイツ等？

出雲那は左手で肩の傷口を押さえ激痛に耐えながら化物共の正体を模索する、【虚】とは40年前の第二次遭遇の影響で生じた次元の裂け目から出現した異世界の化物の一部だ、虚は死亡した生物の肉体から抜け出した魂が中心（こころ）を亡くして生まれる【墮ちた魂】所謂【悪霊】らしい、その為虚はあの世から来たのではないかと推測されてい

るが詳しくは解明されていない・・・ただ判るのは「霊体」である虚は精神体に干渉できる【灵力】でしかダメージを与える事ができないという事だ。

——だとしたらオレの【魔術師】としてのチカラは通用しなくて当然か・・・なら

出雲那が数秒で敵の分析を終えて再び化物共と刃を交える為に立ち上がりとした時、後方にいる数体の化物共が彼の足下に横たわって未だに意識が戻らないシグナムににじり寄って来ていた、それを見た出雲那はギリツと歯を軋ませる。

「チツ、世話の焼ける先輩だぜ！」

舌打ちした出雲那は仕方なく気を失っているシグナムの腕を自分の肩にまわし彼女を肩に背負いながら包围を突破しようと試みる・・・しかし、さっきからやけにおとなしい化物共に胸騒ぎを覚えた出雲那は嫌な予感がして自分の正面を振り向いてみた・・・そこには自分より遥かに巨大な黒い化物が佇んでいた。

——何だコイツ!?!いつの間!!

禍々しい黒い巨体に大木のような太い腕、頭部は前に突き出ている前面に青い眼のようなものがありその下に人一人呑み込めそうな程大きな口がある、更には突き出た頭部の両側面にも三つずつ青い眼が存在していて凄く禍々しい形状の化物を見て出雲那は身が固まるように畏縮した。

巨大な化物が大木のように太い右腕を振り上げる、その腕で出雲那達を殴り飛ばす気だ、これを受けたら如何に星脈世代や魔道士といえどもひとまりもない、絶体絶命の危機だ・・・そんな時、出雲那は化物達の存在に違和感を感じていた。

——コイツ等は・・・虚じゃねえ・・・。

出雲那は先程出した化物達の正体の推測を否定、何故なら虚という存在は例外無く全て不気味な白い仮面を身に着けているという特徴があるからである、今彼等を襲っている化物達にはそんな仮面は身に着けていない、奴等は別の何かだ。

じゃあ何なんだと考える間もなくその凶腕は無慈悲に振り下ろされた。

「がぐあゝあゝ——
つ!!!」

出雲那の身体を上回るサイズの拳は彼の表面を丸ごと押し潰し、言葉にならない声をあげさせて後方に真っ直ぐ豪快に吹っ飛んで半壊している建物の壁面を背中から追突して破壊した。

「うゝうゝ・・・」

30m程吹っ飛んで破壊した建物の煉瓦に身体半分が埋もれている状態の出雲那だがなんとか生きてはいるものの無事とは言い難い、意識が朦朧として今にも逝ってしまうような危険な状態だ、額から血を流してゴーグルのレンズが赤く染まり、いくつか内臓が潰れたのか口から血が流れでている。

——やべえ・・・マジやべえ・・・身体が重くて動かねえ・・・。

すぐに起き上がろうとする出雲那だったが身体がもうボロボロでもがく事しかできなかつた、首を動かして前を見てみると2 m前方に彼の肩から離れて投げ出されたシグナムが横たわっている、彼女に外傷は無いようだが安心できる筈がない、30 m先から出雲那を殴り飛ばした巨体の化物を最後列に化物の軍団がゆつくりとこつちに向かって来ているのが見えるからだ、出雲那にはもう戦う体力は残されていない。

——くそ・・・こんなところで死ぬるかよ・・・アイツとの約束があるんだ・・・こんなところ・・・で・・・。

出雲那はこんな絶望的な状況でも諦めず打開策を考える、徐々に接近してくる化物達、その間に彼の頭の中には三つの選択肢が浮かび上がった。

- ① 不屈の精神で諦めない武内出雲那は突如反撃のアイデアを思い付く。
- ② 頼もしい助っ人が来て助けてくれる。
- ③ 助からない、現実是非情である。

——②は期待できねえな・・・オレの推測が正しければこの空間は《空間凍結結界》のような現実の時間軸から隔離された空間だ・・・霊力の高い人間が相当意識を集中しなければこの空間は見つけられない筈だから可能性は低い・・・③は論外だ・・・①しかねえな・・・。

腹を括った出雲那は思考をフル回転させて詮索の限りを尽くす、あらゆる可能性を考えるが座学の成績が芳しくない出雲那ではどんなに考えたところで猿知恵でしかない・・・健闘虚しく化物達が残り僅か5mの位置まで接近して来た。

—— チクシヨウ・・・やっぱ③になるのかよ・・・すまねえな・・・約束・・・果たせそうもねえ・・・。

朱く染まった空を見上げて嘆く出雲那、化物達は今日の前で倒れているシグナムに手を出そうとしている・・・そう、選択肢の答えは——

・・・・②だ。

「出でよ、《エクセリオン》ハーツ!!」

強い意志を秘めた少女の声が高らかに朱い空に響き渡る、同時に出雲那の3m手前までの範囲に迫った小型の化物達が纏めて消し飛んだ、まるで浄化されたように。

「うゝ・・・ん・・・?」

観念して静かに眼を瞑っていた出雲那だったが、突然聞こえてきた声と肌を撫でるような突風を感じてゆつくりと眼を開く。

「・・・誰・・・だ?」

彼が目にしたのは自分とシグナムに背を向け二人を護るように化物達の前に立ち塞がっている亜麻色の長髪の少女の姿だった、意識が朦朧としているうえに額の傷口から流れ出る血が眼に入っている為視界が霞んでいるのでハッキリとはわからないが、その少女は出雲那と同じ高校生くらいの年齢であり、背を向けているので顔は判らないが目につくのは彼女が右手に携えている冷気を放つレイピアだ、鬼火のように青く輝くそのレイピアから放たれる冷気からは気力でも魔力でもない神秘的なチカラを感じる。

このチカラの正体は「三大源力」の一つ「霊力」だ、少女の持つレイピアは物質ではなく彼女の持つ霊力で《顕現》させた物である・・・出雲那は彼女の事は知らないがこ

の武装とそれを行使する異能者の事はよく知っている。

「あれは・・・《固有霊装（ゴバイス）》・・・《伐刀者（ブレイザー）》・・・か・・・」
 【伐刀者】——己の魂を霊力で具現化させて顕現する武装【固有霊装（以下【霊装】と呼称する）】を行使し様々な異能を使い戦う者をそう呼ぶ。

霊装による攻撃は霊力による霊的な事象干渉であり霊体にダメージを与える事ができる、つまりこの少女は目の前の脅威を退けるチカラを持っているという事だ。

化物達は強大な霊力を放ち立ち塞がるこの少女の事を自分達にとつてこの場で一番の脅威だと察したようであり、最後列にいる巨体の化物を除いた小型の化物達が目の前の脅威を排除しようとして一斉に襲い掛かった。

「はあああっ！」

多数の化物の凶爪が少女を引き裂こうとするが彼女はそんなものなど脅威にも感じている様子もなく冷静に飛び掛かって来た化物を霊装で一閃した。少女を引き裂く筈だった凶爪は彼女に届くこと適わず飛び掛かった化物は空中で上半身と下半身が分断され消滅する。

「はっ！やっ！シュートッ！」

少女は踊るような鮮やかな剣技で斬り倒し冷気の飛弾を撃ち放つて次々と小型の化物達を葬っていく、圧倒的だ、化物達に付け入る隙を与えない、あっという間に小型の

化物達は殲滅され、残すは巨体の化物のみとなった。

「二気に行くわ！はあああああっ!!」

少女は弓から放たれた矢のような勢いで一直線に巨体の化物に飛び掛かり一瞬にして無数の突きを放つ。

「はあっ！やあっ！」

あまりの速さに反応が遅れた化物は彼女の突きをまともに貫つた為仰け反り、化物の懐に入った少女は化物が仰け反った隙に容赦なく交差するような氷の斬撃を二発叩き込み、化物が苦痛にもがいている間に大きく跳躍して空中で化物を睨みつける。

「これで終わりよ」

決着を宣言した少女は右手に持つ霊装に強大な霊力を纏わせる、そして地上の化物に狙いを付け・・・霊装を投げ下ろした。

「《クリミナルブランド》ツ!!」

睡蓮の華が咲いた、巨体の化物は少女が投げ下ろした霊装に貫かれ無惨に散るのであった。

——・・・凄え、あんなデカブツを瞬殺しやがった・・・奴は何もんだ？

《伐刀絶技（ノウブルアーツ）》——伐刀者が霊装を行使して使う技や異能はそう呼ばれている・・・出雲那は体力の限界を迎え薄れゆく意識の中で伐刀絶技を放つ少女の姿

に圧倒されていたが同時に彼女は何者なのかという疑問を抱いていた。

この都市は名の有る猛者達が大勢集まっている魔境だ、百を超える化物の大群を僅か数分で殲滅してしまう程の実力者なら二つ名が付くレベルで都市に名が知れ渡っている筈なのだが出雲那は少女の事を知らない。

出雲那は勘繰り深く考えていると落下途中の少女がこちらに振り向こうとしているので顔を見れば知っている奴かもしれないと思つて彼女を凝視するが。

——・・・やべ・・・もう・・・無・・・理・・・。

少女が振り向く寸前で出雲那の意識は暗転してしまった、結局少女の正体は判らず仕舞いに終わったのだった。

斯くして運命は動き出す、数多の戦士達が集うこの戦島都市スクエアを舞台に繰り広げられる少年少女達の熱望と根性と青春の物語が幕を上げるのだった。

騒がしくて言葉のドッジボールな朝

小鳥の囀りが聴こえる……窓から朝日の光が射し込み何の飾り気のない部屋を照らし出す。

「ん……んあ?……」

そんな場所の隅にある二段ベッドの下段で前髪に黄金色のメッシュが入った黒髪の少年——武内出雲那が目覚めました。

——知らない……いや、知っている天井だ、ここは……。

【青竜学園】……通称【青学】の男子学生寮の424号室——出雲那の自室だ、彼は何時の間に帰っていたのかと心の中で呟きながらウトウトと起き上がる、すると正面のソファアームに座って【刀剣特集】というタイトルの本を読んでいる爽やかな印象の少年が出雲那が目覚めました事に気が付き、読書を中断して彼に声を掛けた。

「あ、出雲那君?……良かった、目を覚ましたんだね……」

「……一輝?」

自分を心配するように声を掛けてきた黒髪の少年の名を寝ぼけながら口にする出雲那、少年の名は《黒鉄一輝（くろがね いつき）》、出雲那のルームメイトにして一番の

親友だ、青学の中等部に入学してからの付き合いである（断じてBL的な意味では無い）。

——何で心配そうにしているんだ？いつもならアイドル顔負けの爽やかさで「おはよう！」って言う奴の筈。

出雲那は一輝の声の掛け方に違和感を感じた、まるで自分に何かがあつて眼を覚まさなかつたみたいだ。

——……っ！そうだ、オレはアーケード街でシグナム先輩と決闘した後わけのわからねえ霊体の化物に襲われて——

出雲那は額に右掌を当てて意識を失う前の出来事を思い出した。

世界の終焉を思わせる朱い世界、悪魔のような化物の大群、そして死にかけの自分の前に現れて助けてくれた青く光るレイピア型の霊装を持った伐刀者の少女……。

「……なあ一輝、オレが気を失った後に何かがあつたんだ？どうしてオレは寮の自室で寝ている？」

「何があつたのか聞きたいのはこつちだよ、昨晚出雲那君は僕が演習場から帰つて来た時に寮の手前にある木の陰に八神さんと一緒に倒れていたんだ、八神さんはたまたま近くを仕事帰りに通りかかったハラオウンさんに引き取つてもらつたけどあんところで倒れていたなんて不自然だ、一体どうしたんだい？」

恐らく自分を自室に運んでベッドに寝かせてくれたのは目の前の親友の少年だろうと思つて出雲那は本人に自分に何があつたのか聞いてみたのだが当の一輝は困つた顔をして聞き返してきた、どうやら一輝は何も知らないようだ。

情報を共有する為に出雲那は昨晚の出来事を簡潔に一輝に説明した。

「空間凍結結界のような空間に正体不明の霊体の化物、そして氷結能力を使う伐刀者の少女か・・・出雲那君、その人の顔は視たの？」

「いや、化物共が正面にいたからずつとこつちに背を向けて戦つていた、だから見てねえよ、それに自分の血で眼がやられていたから特徴とかハッキリと見・・・え・・・？」

一輝の問いに対して額に掌を当てながら気怠そうに答えていた出雲那だったがそこで彼は自分に違和感を感じた、自分はその戦いの時に重傷を負つて額から血を流していた筈だ、他にも内臓が幾つか潰れたなどの一晩ではとても回復しないような負傷を幾つか負つていた筈だ、それなのに今の出雲那の身体にはそんな負傷も手当をした痕すら見当たらない至つて健康的な身体だったので異常に感じたのだ。

——— どういう事だ？あの時あんなに死にかけた筈だったのにその時の傷がねえ・・・あの女が治したつていうのか？それとも———

夢だつたのか？・・・少なくともシグナムと決闘をしたところまでは現実である事だけは確かだ、気になつて枕元に置いてあつた青い竜が表紙の手帳の様な形状の端末———

―青竜学園の生徒手帳を開いて決闘の履歴を調べたところ本日の0時11分に八神シグナムに勝利したと表示されたのでそれが証拠だ、となるとその後の出来事は現実だったのか……。

「……一輝、お前オレ達が倒れていた辺りでなにか【霊圧】を感じなかったか？もし全部夢じゃねえんならオレとシグナム先輩をこの寮の前に運んだのもオレの傷を治したのもあの時の女だっていう可能性が高けえ、奴が伐刀者なら霊力を使った形跡がある筈だ」

黒鉄一輝も【一応】伐刀者である為彼ならその時何か霊力を感じたかもしれないと思いを聞いてみた。

「ごめん、僕には何も感知する事はできなかったんだ、辺りの気配も探ってみただけど草むらに蛇が潜んでいたくらいだったよ」

「……そうか」

申し訳なさそうに答える一輝、やはり夢だったのだろうか、一輝は伐刀者としての能力が限りなく低い為霊圧感知能力に關しては低いがその代わり気配察知能力がズバ抜けて高い、あの少女が近くにいたのならこの親友が見逃すはずがないだろう。

出雲那はどうしようかと思ひ悩む、そこに一輝が何かを思い付いたように拳で掌をポーンと叩き提案する。

「そうだと云う君、靈力関係なら《伐刀騎士連盟》と《瀨靈護廷隊》に出向して今回の出来事を話してみたらいいんじゃないかな？ 仮に君が話した事が事実ならもしかしたら昨晩の夜に何か不審な靈圧が察知されているかもしれないし、少なくとも伐刀者や靈体の化物の関係で事件の火種があるなら彼等に報告しておいた方がいいと思うんだ」

【伐刀騎士連盟】とは伐刀者のみが所属できる組織であり、外部から求められた戦力を派遣する伐刀者の窓口的な役割を果たしている。また、世界中の伐刀者に対する取り締まりも行っており伐刀者が罪を犯した場合、その処遇は連盟が決める事となっている。

【瀨靈護廷隊】とは伐刀騎士連盟と同じく人員が伐刀者のみで構成されている組織なのだ、ある特殊な靈装を顕現できる伐刀者しか入隊する事ができない。現世を彷徨う亡靈を成仏させたり【虚】という悪靈を退治するなどの様々な靈的な事項に対応するという活動をしている。

——確かに伐刀者が何らかの事件に関係しているんなら連盟が黙っちゃいねえだろうし靈体の存在が人を襲っているんなら護廷隊がほつとかねえだろうな・・・よし！

「分かった、学校が終わったらその二つの支部に行ってみようぜ、幸い今日は新入生の入学式だから午前で終わるしな」

「決まりだね、連盟には僕が連絡して話を通しておくよ」

「そーいやくこの都市の連盟の支部長はお前の親父だったな、頼んだぜ」

本日のスケジュールを決めた二人は学園に登校する準備を始める事にした。時計を見てみると午前七時を周っていたので急がないと遅刻（青学のホームルーム開始時間は八時）だと判断して二人は慌てて朝食を取り、学生服（青学の学生服は男子が黒の学ラ、女子が紺のセーラー服である）に着替えて急いで寮を出るのだった。

戦島都市スクエア、世界の災厄に対抗する為の戦士達を育成するこの都市には中等部

から高等部までの学生が在籍する学園が東西南北の四つのエリアごとにそれぞれ一校ずつ建っている。

北エリアには名門校である《ナイトニクス学園》、西エリアには実力主義の《ヴァイスフアング学園》、南エリアには表向き文武両道を掲げている《聖ルシフェル学園》、そして出雲那達が在籍する東エリアの【青竜学園】。

世界中から戦士を志す少年少女達が集まっているだけあつてどの学園も野球場が十個は造れそうな程広大な敷地の上に建っており、彼等は一人前の戦士になる為にそれぞれの学園で六年間修練と勉学に励んでいくのである。

当然学園には校則が存在し、それは一般的な学園の常識的な決まりから戦島都市スクエア特有の戦闘に関する規制まで様々なルールがある。

「おい、決闘（デュエル）しろよー」

脚が不自由なお婆さんが歩道橋を渡るのを補助したり、迷子になった子供の親と一緒に探したりしながら急いで登校して来た出雲那と一輝は竜の頭を模ったモニュメントが出迎える青竜学園の校門前に威風堂々と立つ三人の女子生徒達と揉めていた。

「いいでしょう、もしあなた達が勝つたのなら無条件で通してあげましょう、しかしわたくし達が勝つたらあなた達は半年間毎日放課後に学園中の男子トイレ掃除をしてもらいますわ！」

三人の女子生徒の中央に大将のように陣取るいかにも金髪ドリルのお嬢様という言葉が連想される女子生徒《クレア・ハーヴェイ》が決闘の条件を提示して生徒手帳を開き、ディスプレイからソーサラーキューブが飛び出して宙に浮かんだ。

「どうしてこうなっただろう……」

一輝が若干困惑気味に呟いている、事の発端は遅刻三分前に校門前に到着した時、校門前でクレア達が持ち物検査を行っていて出雲那が「遅刻しそうだから見逃してくれ」とクレア達に懇願したところ、それをクレアが「規則は規則です、時間に余裕を持つ事を心掛けていなかったあなた達の落ち度ですわ」と拒否されたのでしびれを切らした出雲那が持ち物検査の免除を賭けて決闘を申し込んだという流れだ、見事な言葉のドツジボールである。

「覚悟しろ、武内出雲那！黒鉄一輝！」

「クレア様に楯突く者はわたし達が許しません！」

ソーサラーフィールドが展開されクレアの両隣に従者の如く陣取っている褐色肌をしたポニーテールの女子生徒《リディ・スタインバーグ》と眼鏡をしたショートカットの女子生徒《エリカ・キャンドル》も臨戦態勢に入る。

彼女達は右腕に【風紀委員】と書かれた腕章を身に着けていてクレアの右腕には【風紀委員長】と書かれた腕章がある、持ち物検査をしていたので分かると思うが彼女達は

青学の風紀委員だ、青学の秩序を護り風紀の乱れを正すのが彼女達の仕事なので規則を破ろうとする生徒を見逃すわけにはいかないだろう。

『DUEL stand by』

「一輝、時間がねえから速攻でカタを付けるぞ」

「はあ、わかったよ……来てくれ、《陰鉄》」

基本的に真面目な一輝は規則を破る行為をしようとしていた為気が引けていたのだが、戦闘を行うと決めた瞬間彼の纏う空気が変わり表情が引き締まった戦士の顔になっていた。彼は鳥のように黒い日本刀の形をした霊装を顕現して出雲那の隣に並び、風紀委員の三人を射貫くような目線で睨みつけた、恐るべき気の切り替えの早さである。

一輝が霊装を顕現している間に風紀委員の三人は学生服の内ポケットから何故かひし形の小さなクリスタルのような物体を取り出して上に掲げた。そして三人同時に高らかにこう叫ぶ――

「百武装展開（ハンドレッド・オン）！！」

解除コードのような言葉が天高く響くと三つのクリスタルが眩しい光を発し、光が消えると三人はそれぞれ異質な武装を展開していた。

40年前の第二次遭遇の時に現れた外来生物の一部に《サベージ》という名の頑丈な鋼殻を持った怪物がいる、奴等の鋼殻を破るには戦略破壊級の大火力が必要であり通常

の兵器では歯が立たない、当初は魔導士の魔法や伐刀者の伐刀絶技の大火力をもって奴等を殲滅していたのだが、その余波による周囲の被害は凄まじく人里でサベージと交戦したら必ず町や都市が全壊するという深刻な問題があった。

この問題を解決する打開策として民間軍事会社である《ワルスラーン社》によって戦略破壊級の破壊規模を出さずにサベージを葬れる破壊力を出すことのできる武装兵器《百武装（ハンドレッド）》が開発された。

百武装は一定の気力を媒体にして展開する為必然的に星脈世代が所有者となる、何故だか魔術師や魔女は展開する事ができないのだがこれは彼等が持つ魔力が百武装の展開を阻害しているかららしく、どうやら気力以外のチカラは百武装との相性が絶望的に悪いと推測されている。

現在ワルスラーン社は百武装の実用化の為の最終テストとしてこの戦島都市スクエアの学園に在籍する適正のある学生達に所有させて戦闘データを取っているようだが、彼女達がそのテスターなのは確実だろう。

因みにワルスラーン社は百武装の所有者の事を《武芸者（スレイヤー）》と呼ぶようにその名を世に広める広告活動を行っているようだ。

『3・2・1——LET'S GO AHEAD!』

「特別指導ですわ！覚悟しなさいっ!!」

戦闘開始と同時にクレアが先制を仕掛けてきた、ドラグーン型と呼ばれている武装である六つの浮遊砲台が女王に刃向かう二人の愚者共を殲滅する為彼等を包囲しようとして一斉に飛翔する。この赤い六つの浮遊砲台の名は《気高き戦姫（アリストリオン）》、クレア自身の意志で制御し敵を殲滅する百武装だ。

不規則な軌道で飛翔し包囲する前に撃ち落とされる事のないよう出雲那達に狙いを付けさせない、彼等は魔術師と伐刀者だとはいえ近接戦（クロスレンジ）主体の剣士だ、空から手数で攻めれば反撃を受ける事無く圧倒できる筈．．．クレアはそう思ったのだが彼女の碧い瞳に映ったのは出雲那が一輝の前に出て刀の柄を持ち空から向かって来る気高き戦姫を見据えて抜刀の構えを取っている姿だった、そして——奴はほくそ笑んだ。

「葵柳流【抜刀術】——《星墜とし》っ!!」
「っ!!?」

クレアは眼を見開いて驚愕の表情を露わにする、出雲那が鞘から抜き放った剣閃が空を翔け浮遊砲台の一つを両断するとそこから拡散するように無数の閃光が飛び散り残りの浮遊砲台が全てそれに撃ち抜かれ誘爆し、経った一瞬にして気高き戦姫が全滅してしまっただからだ。

六つの浮遊砲台が爆発した事により爆炎と煙がソーサラーフィールド内を覆い尽く

す、出雲那と一輝は迅速に背中合わせをして互いに視界の悪さをカバーし相手の奇襲に備える、親友同士なだけあって二人の意思疎通と迅速な連携は見事なものだ。

——《薔薇の女王（ローズクイーン）》と名高いハーヴェイさんが一つの策が破れたところで手詰まりになる訳がない、恐らくこの視界の悪さを隠れ身に使ってスタインバーグさんとキャンドルさんが僕達を奇襲挟撃して来る筈。

「うおおおおおおおおおつ!!」

「隙ありですー!」

一輝の予想は的中した、辺りを覆う煙に紛れて右側から飛び出して来たリデイが突騎槍の形状をしたフアランクス型の百武装《漆黒の天槍（ミドガルドシユランゲ）》をもつて一輝にランスチャージを仕掛け一輝の陰鉄と激突し押し合い状態になる。それと同時に左側の煙に紛れてピンク色の長い鎖が飛び出して来て出雲那の胴に巻き付き両腕ごと拘束した、これはエリカの百武装《絶対運命の鎖（エヴァー・ラストイング）》だ、アルセーヌ型と呼ばれるそれは気力で作りだした武装であり、エリカの意志に反応して伸縮したり強度を上げたりする事ができるのでそれを応用して相手を拘束する事が可能なのである。

「読まれたか・・・ならこれでどうだあああああああつ!!」

「観念しなさい武内出雲那!これで終わりですつ!!」

奇襲に成功した二人は出雲那達を追い込む為更にダメ押しを掛ける、リディが漆黒の天槍に氣力を流して刀身をドリルのように螺旋回転させて突破力を上昇させ陰鉄を押し込み、エリカが絶対運命の鎖に氣力を流し込んで拘束している出雲那をギリギリと締め上げていく。

「くっ！」

「ぐあああああつ!!」

突破力が増大した漆黒の天槍に押し負けそうになる一輝が苦渋の表情を浮かべ、絶対運命の鎖の凄まじいチカラで締め付けられる出雲那は身体の圧迫による苦しみで悲鳴を上げる・・・それを見た風紀委員の三人は勝利を確信したのだが――

よく見てみると奴等は……苦痛の中でほくそ笑んでいた。

「第六秘劍《毒蛾の太刀》」

《雷流し》

「がつ!!?」

「あゝあゝあゝあゝあゝあゝつ!!?」

一輝と出雲那が技名を口にした瞬間唐突にリデイは倒れエリカは感電して倒れた。筋肉の振動による衝撃波を相手の人体に直接叩き込む一輝の妙技がリデイに炸裂し、出雲那が自分の異能による電流を絶対運命の鎖に流してそれを伝いエリカが感電したのである。

「リデイッ! エリカツ! ……よくも……」

倒れ伏した部下達を目の当たりにしてクレアは静かに激昂、呟きと共に彼女の身体から眩い光が放たれ、光が消えたときクレアの両腕両脚に赤の装甲が纏われ、背中には小型の推進装置（スラスター）が現れていた。

百武装には《単純武装》と《全身武装》の二つの形態がある、使用者の気力の一部を使って行使するのが【単純武装】、反対に使用者の気力を一気に解放して武器武装を作りあげるのが【全身武装】であり今のクレアの形態がそれである。全身武装は単純武装よ

り強大なチカラを発揮できるのだが、その分気力の消耗が激しく長時間使用する事ができない上に身体への負担も大きく制御が難しいが故、如何に星脈世代といえどもまともに見えるのは一握りの武芸者だけだろう。

「あなた達もう許しませんわ！ペタルッ!!」

クレアは一直線に向かって来る出雲那と一輝を睨みつけて大声でそう言い放つと彼女の推進装置の上部が開いて中から複数の【小型浮遊砲台（ペタル）】が飛び出し、クレアの周囲を隙間無く守護するように展開された、その数十機、圧倒的な防衛網を作りあげたそれはまるで女王を護る難攻不落の城塞のような圧力を感じさせる存在感であった。

「わたくしが全身武装を使った以上、あなた達に勝ち目はありません！おとなしく降参しなさい武内出雲那！黒鉄一k——」

全身武装を展開しドヤ顔で勝利宣言を口にしたその瞬間・・・まだ15mくらい離れていた筈の出雲那が一瞬にしてクレアの眼前に現れた、まるで瞬間移動したかのように・・・【クレアの目はそう錯覚していた】。

実際にそう錯覚したのは彼女だけで周りは出雲那が普通にクレアに向かって駆けて近づいたと認識している、何故なら出雲那は今《抜き足》という特殊な歩法を使ったからだ。人間の脳には優先度の低い情報の認識を放棄する【覚醒の無意識】というものが

存在する、これは相手に一切悟られないように半歩呼吸と身体をずらす事で自らの存在を相手の【覚醒の無意識】に滑り込ませて誤認させるといふ体技である。

「……ようっ♪」

「……ぎげんよう……」

何故か挨拶を交わす二人：ドヤ顔だったクレアの表情が一瞬にして引き攣った、凶悪な笑みを浮かべる出雲那が刀の鞘に電流を流して抜刀する寸前だったからだ……オワタ。

「雷切いいっ!!!」

「んきやああああああっ!!!」

雷 光 一 閃！瞬くような閃光が煌きその対処不可の一刀が薔薇の女王を一閃し大気の爆発が暴風となつて周囲の木々を薙ぎ倒す。成す術なく雷切をモロにくらつたクレアは普段の高貴な彼女からは考えられないような猿っぽい叫びを上げて転がるように吹き飛び校門を通つて正面に建っている竜の石像に正面衝突した。あまりにも強い推進力だった為に竜の石像は粉々に碎け散り——

「……きゆうっ……」

クレアは碎け散つた石像の残骸に埋もれて目を回して気絶していた……合掌。

『END OF DUEL! winner 武内出雲那&黒鉄一輝!』

「急げ一輝、時間がねえええええええっ!!」

機械音が出雲那と一輝の勝利を告げてソーサラーフィールドが解除されると出雲那と一輝はロケットダッシュと言わんばかりに校門を駆け抜けて校舎に向かつて全速力で走る・・・全壊した石像と無様に目を回して頭の上に黄色い鳥が周っているクレアを横切った時、一輝はこう思った。

——これ・・・素直に持ち物検査を受けていた方が早かったんじゃないの・・・。
身も蓋も無い、骨折り損のくたびれ儲けであった。

突然やつて来た謎の編入生

時刻は午前八時、数万人は入るであろう広大な講堂の中でズラリと整列する紅いブレザーの学生服を着用している学生達、神妙な空気の中「騎士甲冑を身に纏う鳳凰」の校章の下、壇上で一人の女子生徒が毅然と演説をしていた。

「化物が跋扈する世界は恐怖か？ 未来は不安か!? 現実絶望か!!」

威厳のある凜とした声が講堂内に響き渡る、声の主は目の前に並ぶ学生達を誰一人として見逃さないようその全てを見通すような眼光でしっかりと見据えている。眼に焼き付く程黒く美しい長髪が眩しい彼女の堂々とした佇まいが全ての人の眼を惹きつけて離さない。

「それならばこの私を頼るがいい！ 安心しろ、私は《黒神（くろかみ）めだか》だ、私は見知らぬ他人の役に立つ為にここに居る!!」

壇上で演説する少女黒神めだかは何の躊躇いも無くそう言い放つ、クレア・ハーヴェイが女王なら彼女は「王」だ、圧倒的な威厳を放つその姿は上に立つ者の貫禄を感じさせる。

「そんなわけで本日よりこの私が貴様達の生徒会長だ！ 学業・恋愛・家庭・労働・私生活

や修練に至るまで、悩み事があれば迷わず私達生徒会に相談するがよい!!」

めだかは一呼吸をおいて目の前の全学生を見据え毅然と締め言葉の言葉を言い放つ。

「二十四時間三百六十五日、私は誰からの相談でも受け付ける!!!」

「「「」」」

青竜学園本校舎四階、高等部二年A組の教室内にて四人の少年少女達が机の上に置いた生徒手帳のディスプレイから【浮き出ている】小型の空間モニターに映し出された映

像を觀賞して唾然としていた。

「とんでもないわね……これが今年高等部一年にして生徒会長に拔擢されたっていう【ナイツニクス学園】の黒神めだかか……」

金髪真紅眼の気が強そうな女子生徒《アリサ・ラインフォルト》が呆れ半分にそう口にする、空間モニターに映し出されている映像はスクエアの北エリアにある名門校【ナイツニクス学園】の入学式の生中継であり現在生徒会長就任の挨拶を行っているところだった。

「《完全無欠の聖人（ザ・パーフェクト）》の二つ名は伊達じゃないな、なんて圧倒的な存在感だ……」

腰のベルトに刀を差した御人好しそうな黒髪の男子生徒《リン・シユバルツァー》が空間モニター内の映像で演説を続けるめだかを称賛する。名門であるナイツニクス学園の入学式は他の三校より始める時間が早く一時間前の午前七時から開始されていた。

「スクエアの四大学院の名門ナイツニクス学園ぶつちぎりの首席でスポーツにおいてもあらゆる記録を総なめ状態、手にしたトロフィーや賞状は数知れず、実家はスクエアの都市運営のスポンサーである《統合企業財団》筆頭で世界経済を担う《黒神グループ》という冗談みたいなお金持ち、戦闘力においてもスクエアの学生トップクラスでその眼で【観た】相手の技・技術・異能を氣力で強化した魔力だけで再現し【完成させて自分のモ

ノにする」《完成（ジエンド）》という名のキチガイな能力を使う魔女……善吉、本当にこんな凄い人に《四武祭（フェスタ）》で勝つつもりでいるの？」

長い青髪を黄色いリボンで縛りポニーテールにしている豊満な乳房を持つ女子生徒《マイ・ナツメ》がめだかの経歴を読み上げて眼前の椅子に座っている薄めの茶髪で吊り眼の男子生徒に話し掛ける。

「カッ！当然だろ、俺はあいつに勝つ為にあいつとは別の学園に入ったんだぜ？今更撤回なんかするかよ！」

吊り眼の男子生徒《人吉善吉（ひとよし ぜんきち）》はマイの質問に不機嫌そうに答えた、どうやら善吉はめだかに因縁のようなモノがあるようだ。

「でも【完全無欠の聖人】と言ったらこの三年間全ての【四武祭】に出場して一つの例外もなくベスト8に名を連ねている猛者でそのうちの約半数は優勝だそうだ、そんな相手に勝つなんて並の難易度じゃないぞ？」

「カッ！そんな事は先刻承知だぜリイン！寧ろ望むところだ！」

雲の上……いや太陽より遠い目標に挑む事に意味があると拳で掌を叩き気合いを入れる善吉、彼等が話題にしている【四武祭】とは戦島都市スクエアで季節を跨いで年に四回行われる学生同士の武闘大会であり、この都市の所有国である武闘王国ダイランディア政府監視の下、都市運営のスポンサーである【統合企業財団】主催で行われる。

【四武祭】はスクエアの四大学園の生徒全てに参加権利があり出場不出場の選択は自由、大会は大きく分けて四つあり、まず最初に春に行われるタッグ戦の《鳳凰四武祭（フェニクス）》、次に夏に行われる五人一組のチーム戦の《獅鷹四武祭（グリプス）》、その次は秋に行われるスクエア最強の学生を決める個人戦の《王竜四武祭（リンドブルス）》、そしてシーズンの締めくくりの冬に行われるスクエア最強の学園を決める学園対抗の団体戦《獣王四武祭（レギオス）》という流れの強行軍で開催されて行く。【鳳凰四武祭】【獅鷹四武祭】【王竜四武祭】の三つの大会の制覇者には莫大な賞金と大会制覇者（チャンプ）の名誉が与えられ学園卒業後の進路先で色々と優遇される（ダイランディア軍に入った場合は最初から尉官として迎え入れられる）という特典があり、【獣王四武祭】で頂点に立った学園は来年度の学園運営予算を他の学園の倍額貰う事ができ学園の施設を充実させ学園を発展させる事ができるのである。

故にスクエアの学生達は四武祭の覇者を目指して日夜鍛練や決闘に励むのである。そんな四武祭のベスト8常連であるという黒神めだかは中等部時代の三年間で鳳凰四武祭で二回優勝、王竜四武祭で一回優勝、獅鷹四武祭に至っては毎回メンバーを替えて出場し三回全て優勝、そして団体戦である獣王四武祭も全戦に出場して三年間ナイツニクス学園をスクエアの頂点に君臨させる事に貢献をしているというとんでもない学生だ。

「黒神めだかもそうだけどナイトニクス学園にはスクエアどころか世界に名を轟かす有名な猛者がいっぱいいるのよねえ、今年の生徒会副会長に指名された《白舞の姫将》（プリンセスジエネラル）でしょ、《聖騎士（ペンドラゴン）》に《風の剣帝》、《黒の剣士》に《閃光》、《空を翔ける者（フリーグラビティ）》に《不動空斬》、そしてここ二年間の王竜四武祭の決勝で二度黒神めだかを破っている中等部の《狂犬》・・・他にもとんでもない猛者達が沢山いてここ三年間の四武祭は全て例外なくナイトニクス学園が制覇しているわね・・・」

「特に三年前の黒神さんの《グランドスラム》は凄かったよね、中等部一年にして全四武祭を制覇した異端児って凄い話題になったし・・・」

アリスとマイが言うように名門であるナイトニクス学園は多くの武才を持った学生達が在籍していて毎年四武祭はナイトニクス学園の学生が総なめ状態であるのだ、なので学園の規模も他の三学園と比べて大きく施設も充実している、今やナイトニクス学園はスクエアの頂点なのだ。

「ああそうだな・・・けどだからと言っていつまでもナイトニクスの連中に好き勝手やられっぱなしでいいと思ってるのかよ!?俺はヤダね!そんな俺の反骨精神が許さねえ」

そう言って善吉は席から立ち上がり教室の開いた窓の前に移動して立ちリイン達にピシッと指をさして宣言をする。

「いいか!?俺は絶対四武祭の舞台でめだかちや・・黒神めだかをブツ倒s「ダイナミツク入室ううっ!!」うがっ?!!」

「キヤアアアアアアアアアアッ!!?」

大きく宣言し終わる前に開いた窓からいきなり突風と共に額にゴーグルを着けた男子生徒が飛び込んで来てその勢いのまま飛び込んだ窓の前にいた善吉の背中を踏みつけて床に沈め、吹き荒れた突風の所為で正面にいたアリサとマイのスカートが捲れ上がり一瞬彼女達の下着が丸見えとなる、因みにアリサがピンクと白の縞模様でマイが純白だった。

「間に合ったああーっ!セーっ!フツ!!」

「って出雲那!?ビツクリさせないでよ・・・」

「リン!貴方見てないでしょうね!」

「み・・見てない見てない!ピンクと白の縞色なんて見と「しっかりと見てるじゃない!バカッ!!」ぐはっ!!」

「出雲那君勢い付け過ぎだよ、もつと静かに入らないと」

「一輝!?!ここ四階だよ!?!星脈世代の出雲那はともかく何で大した霊力を持っていない伐刀者の一輝がここまで跳んで来れるの!!?」

『キーンコーンカーンコーン!』

「うるせえぞこの馬鹿共がっ！とつとと席に着け、ホームルーム始めんぞ！」

派手に窓から教室に飛び込んで来た出雲那の後から音も無く一輝が入って来るとチャイムが鳴り、教壇側の入り口から入室して来たA組の担任の先生の怒鳴り声が教室内に鳴り響き、教室内の生徒全員自分の席に着席した（出雲那に踏みつけられた善吉は氣絶していたのでマイがお姫様抱っこで席に運んで座らせた）。

担任は白いツンツンした髪を揺らして教壇に立ち甲に赤い珠のようなモノが裝飾された黒いグローブを着けた両手をホワイトボードの前に置かれた教卓の上にバンツと着いてその赤と緑のオッドアイに生徒達の姿を収めぶつきらぼうに挨拶と自己紹介を始めた。

「今日から一年間 teme たちの面倒を見る事になった《ラグナ》だ、好きな食い物は天玉うどん、嫌いな物は権力を振りかざす奴等だ、よろしく頼むぜ！」

「『……』」

シーンと静まり返る教室内だが無理もない、自分達の担任として着任したラグナ教諭は厳つい面をしていて素行も悪くどう見ても社会不適合者という印象がプンプンするのだから。不遜な沈黙にラグナは訝しそうな表情を浮かべる。

「何だよシケてやがんな、ここは葬式会場か？ああん？」

不機嫌になって生徒達にガン飛ばすラグナ、本当にこの男は教師なのだろうか？まる

でチンピラである。

「ねえ出雲那、あの人が私達の担任の先生なんだよね?・・・」

「ん? そうなんじゃねえの、青学の教師達は皆強えから不審者が変装して侵入したなんてありえねえと思うし・・・一輝はどう思うんだ?」

「マイ君の気持ちは分かるけれど僕も出雲那君と同じ意見かな・・・それにしても何故この手の人種は気に入らない事があると人を威嚇するのだろうか?」

「まあ教師になる程だから根はいい人間なんだろう、人を見た目で判断するべきじゃないと思うよ」

「確かにリインの言う通りだけど、銀髪オツドアイだなんて今時厨二病の人間でもやらないわね」

「オイツ! 聞こえてんぞ其処っ!」

ひそひそ話をする出雲那達を指さしてツツコムように怒鳴るラグナ、聴こえていたようだ。

「つたく! これは銀髪じゃなくて色が抜け落ちてんだって・・・」

——髪の色が抜け落ちたって苦労人なのか? イライラしてんのはストレスの所為なのかもな・・・。

ラグナの愚痴を聞いて出雲那は勝手に解釈して納得していた。

「・・・まあいい、廊下で待たせている奴もいるしとつとと進めるか・・・」

ラグナは気を取り直して生徒達と向き合う。

「実は今日新しくテメエらの仲間になる奴がいる、編入生ってやつだ」

ラグナが人差し指で耳の穴を穿りながらそう言うと言うと教室内の生徒達がざわざわしだした。

「編入生？随分唐突ね」

「四大学園から別の学園に異動するのは原則禁止の筈だろう？」

「【転入】じゃなくて【編入】って言ったでしょ？スクエアの外から来たって事よ」

「男子？女子？美少女だったら是非御近付きになりたいな」

あちこちから話し声が聴こえて来る、転校生や編入生の話題となると色々騒がしくなるのは皆戦士を志しているスクエアの学園でも同じのようだ。

「・・・はあ・・・んじゃもういいぜ、入って来いよ」

「失礼します」

「ん？」

ラグナが教壇側の出入り口に向かって手招きしながら声をかける、その時出雲那はその出入り口の扉から聞こえてきた高い声を聴いて何か違和感を覚えた、この声どこかで・・・と・・・。

扉が開いてそこから入室して来たのは整った亜麻色の長髪をした如何にも優等生という雰囲気を感じさせる美少女だった、彼女は教卓の横に立ち氷の結晶のように透き通った碧い眼でクラスメイト達を見据えると丁寧な自己紹介を始めた。

「皆さん初めまして、今日から皆さんと共に色々な事を学び鍛練に励んでいく事となりました、《柊明日香（ひいらぎ あすか）》といいます、私は名前で分かる通り《帝国ヤマト》の出身ですが三年前から前年度まで《ヴァーミリオン皇国》にある学園に留学していました、この度この戦島都市スクエアの青竜学園に編入し皆さんと共に将来に進んで行ける事を大変喜ばしく思います、基本的なルールは一通り覚えたつもりですが新参者である私はまだまだ至らぬところがあるかと思しますので、皆さん御指導御鞭撻をどうかよろしくお願いします」

手慣れたように自己紹介をした編入生の明日香が一礼をすると周りから様々な声が聴こえてきた、素直に新しい仲間を歓迎する者、美少女の登場に歓喜する男子生徒、イケメン男子じゃなかった事にガツカリする女子生徒、丁寧な自己紹介を聞いて凄いと圧倒された者、明日香のスタイルが抜群なのでいやらしい妄想をする男子生徒など色々あったが、そんな中で出雲那は明日香の姿を見た瞬間に頭の中で何かの映像がフラッシュバックして額を掌で押さえていた。

——何だよこれは？いきなり訳がわからねえ……。

一瞬だったうえに映像に靄が掛かっていたので出雲那は何がなんだかわからなかった……ただ一瞬だけ視えたのは水晶のように青く光るレイピアと一輪の睡蓮であった。

——…今のは……あの時の女の霊装？

「つたく堅つ苦しい自己紹介だな、まさに優等生って感じだよ」

出雲那はぶつきらぼうなラグナの声で現実に取り戻される、壇上の明日香に目を向けてみると彼女はラグナに向けて軽く微笑んでいる。

「ふふふ、すいません、少し退屈させてしまったようですね、どうも私は言葉を考えるのは不向きのようにして」

「控えめな事をほざくところも絵に描いたようだな……テメエの席はそこが空いてつからそこに座れ、ホラ行けよ」

ラグナの指示に従って窓側の最前列の席に座る明日香、出雲那達から見てかなり奥の右斜め前の席だ。

——今のは編入生を見た瞬間に出て来やがった……アイツがあの子と何か関係してんのか？それともただの白昼夢か？

わからない、出雲那は突然のフラッシュバックの事を気味悪く思った。

それからホームルームが終わるまでの間、出雲那は気が付くと明日香を目で追っていた、先程のフラッシュバックは何を意味するのか？昨晚の伐刀者の少女と明日香の関係

は？今はまだ何もわからなかった。

先人の言葉は偉大なり!

編入生の柊明日香の紹介から始まった青学二年A組の朝のホームルームはその後編入初日にしてクラス委員長に立候補した明日香の度胸に皆驚いてどよめき上がるなどのハプニングがあつたりしたものの順調に終え、現在出雲那達は始業式を兼ねた中等部一年生を迎える入学式に在校生として出席する為青学の講堂にいた。

「——最後に君達に一つの言葉を贈りましょう」

ナイツニクス学園の講堂と比べて質素な講堂に並べられた席は一通り埋まっており、壇上から見ると一番手前の数列に新入生、その後ろに出雲那達在校生、その後ろに新入生達の保護者などの来客達が座つていて、皆壇上で祝辞を述べている穏やかな顔をした初老の男性の声に耳を傾けている。壇上の両脇にはラグナを含む青学の教師達が立ち並んでおりその一人一人が只ならぬ雰囲気を感じさせた猛者の風格を感じさせている。

「最初の流星雨が世界に降り注いだ凡そ百年前の第一次遭遇により多くの異能者が誕生し《幻想歴》が始まりました。チカラを得た人々は愚かにもそのチカラを争いの為に使い、大地を壊し、罪の無い多くの生命を奪うという償いきれない罪を犯してしまいました。四十年前の第二次遭遇による災厄は罪を犯した人類への天罰なのかもしれません、

しかしその中で人々の争いを収め、第二次遭遇により現れた怪物達の掃討の為に立ち上がった英雄達により私達人類は導かれ今ここにこうして存在しているのです。時が経つと共に英雄達は姿を消して逝きましたが、それでも英雄達が遺した【ある言葉】は今でも現代に息づいています」

初老の男性——青竜学園五代目学園長《轡木十蔵（くつわぎ　じゅうぞう）》が目の前の教卓にチカラ強く両手を置き、一息間をおいてから——

「若者よ——世の礎（いしずえ）たれ」

と全学園生徒の耳に届かせるようにその言葉を伝えた。

「【世】という言葉はどう捉えるのか、何をもって【礎】たる資格を持つのか・・・これからの六年間で自分なりに考え、切磋琢磨する手掛かりにしてください・・・私の方からは以上です」

十蔵が祝辞を終えるとそれに感銘を受けたかのように講堂内に拍手が響き渡った。十蔵が伝えた言葉は新入生だけでなく出雲那達在校生の奥底にも刻み込まれたのだった。

「うーん、いきなりハードルを上げられちゃった感じだね？」

「ああ、流石は超常大戦を平定させた英雄達と言うべきか・・・単なるスパルタなんかよりも遥かに難しい目標だな」

「【世の礎たれ】・・・か・・・僕の持つちつぽけな才で一体どれだけの事ができるのだろうか・・・そういう事を考えさせられる深い言葉だ」

「はっ!?・・・ここはどこだ?俺は誰だ?【剣道サンバルカン】って何だよ!」

「善吉・・・貴方今頃起きたの?寝ぼけちゃって一体どんな夢を見ていたのよ?・・・」
一部事情により祝辞を聞いていなかった奴もいたが十蔵が伝えた言葉の意味を早速考えている出雲那達。

———【世の礎たれ】・・・なあ・・・【世】が【全】だという意味なら正直言つてオレは何とも思つていねえ知らない他人の為なんかの為に生きたくねえな。

ここにいる皆が【世】の為に何ができるのかを考えている中で出雲那は【世】という言葉を自己解釈して否定していた。

———【知つているからこそ大切】なんだろう?よく【大切なこの世界を護りたい】なんて事をほざく奴がいるが、よく知りもしねえものまで護ろうなんざ根拠がねえ偽善もいいところだ、オレが護りたいと想うのはダチや仲間、そして自分(テメエ)の信念(プライド)と【アイツ】に誓った約束だ、知らねえ【全】よりも大事な【個】だろうが。【【個】だからこそチカラを振るう価値がある】というのが出雲那の現状の答えだった、【よく知りもしない根拠のない大切】なんて意味がない、知つているからこそ護りたいしチカラを尽くしたいと心から思える大切なものであると言えるのだから。

・・・と言つてもそれはあくまでも優先するべきものの話だ、出雲那は他人と仲間のどちらかしか助けられないという選択を迫られたら迷わず仲間を助けて他人を見捨てるが両方助けられる手段があるのならそれを実行するだろう、現に彼は今朝自分が遅刻しそうだという状況だったにも拘らず見ず知らずの老人や子供の手助けをして来ている、本人は無自覚のようだが自分が思っている程彼は人でなしではないのだろう。

『え、続きまして【生徒会長就任の挨拶】・・・本年度生徒会長、高等部三年C組《東堂刀華（とうどう とうか）》さんお願いします』

「はこ」

十蔵が講堂内の人々に数度礼をして壇上から降りると司会進行の放送が次のプログラムを告げる。名前を呼ばれた栗色の長髪を三つ編みにした在校生が席から立ち上がリ講堂内の席に着いている人達が全員が注目する事ができる中央の通路を通つて壇上へと向かう。

——刀華さん・・・やっぱり今年の生徒会長はこの人が選ばれたか・・・。

出雲那は壇上へと向かう刀華の姿を羨望にも似た目線で追い納得するように頷いている、彼女に対して恭敬の意を表しているからだ。昨晚の決闘で出雲那がシグナムに雷切でとどめを刺した時に刀華の名前を呟いていたのは覚えていたのだろうか？ 実は出雲那にとって刀華は剣の師匠のような存在であり、出雲那に【雷切】と【抜き足】を伝授

したのは彼女なのである。

一見淑やかそうな印象だが掛けた眼鏡越しに在る瞳の奥に燃えるような強き意志が宿っている、刀華は青学でも屈指の実力者だ、彼女が抜き放つ【雷切】は出雲那が使うそれとは比較にならない程鮮烈で別次元の一撃らしく、閃光が瞬く間に斬り伏せる一刀は一人の例外も無く地に沈める無敗の一撃、その一撃があまりにも強すぎる為に彼女の二つ名そのものが《雷切（らいきり）》となっている。

皆から羨望と尊敬の目を向けられながら刀華は壇上の正面に設置された階段に毅然と一歩足を踏み出し――

「ふぎゅ!!」

……最初の段差に躓いて盛大に前のめりに転倒し顔面を階段の四段目辺りに打ち付けた……。

「!!!!!!.....!!!!!!」

なんとも言えない沈黙が講堂内の空気を支配している、万有引力の法則に従って倒れたままズルズルと階段からズリ落ちる刀華の姿は皆の羨望を呆然に変えてしまう生徒会長とは思えないなんとも間抜けな姿であった。

「いたたたた.....めがね、めがねどこお?」

「!!!!!!?!!!!!!!」

階段の前で刀華が四つん這いの体勢で起き上がると彼女は掛けていた眼鏡が外れたようであり、四つん這いのまま手探りで外れた眼鏡を探しだしたのだが、その時に講堂内の人達の眼が全員点になった・・・転倒した時にスカートが捲かれて純白のショーツに包まれた刀華の尻が丸出しになっていたからだ。

「刀華ちゃん！スカート！スカートが捲れてるよお!!」

「え?・・・いやああああああつ!!」

壇上の右脇に立っていた小柄な教師《九重永遠（このここのえ とわ）》が慌てて刀華に駆け寄って声を掛けると刀華は一瞬呆けた後自分が今周囲に晒している醜態に気が付き羞恥心のあまり大声で悲鳴をあげて慌てて立ち上がりスカートを直した。

「・・・はあ、何やってんだか・・・」

クスクスという笑い声が講堂内に木霊する中、出雲那は師のように尊敬する刀華の痴態を目の当たりにして呆れるように溜息を吐いた、若干恥ずかしく思ったのか少々頬を朱らめている。

「もー、階段を昇る時は足下に注意しなくちゃダメだよ」

「(い、い)めんなさい・・・」

困ったような表情をして刀華に注意する永遠、彼女の顔が童顔な為か今の刀華の姿は遙かに年下の妹に怒られる情けない姉のように見える、二人の髪の色が同じ栗色なので

余計である。

「しつかりしてよね、生徒会長がそんなんじやみんなが不安になるよ……はいこれ」

「あ、ありがとうございます九重先生」

永遠は床に転がっている眼鏡を拾い上げて刀華に渡し、眼鏡を受け取った刀華はそれを掛け直して永遠にお礼の言葉を述べた。

「よろしい!……それじゃあ挨拶頑張つてね刀華ちゃん!だいじょうぶ、落ち着いて自分の気持ちを丁寧に伝えればきつと上手くいくから」

「は、はいっ!……では、行つてきます」

「うん!」

刀華はとびつきりの笑顔で送り出してくれた永遠に感謝して壇上に堂々と上がり教卓の前に立つ、先程まで木霊していた笑い声はピタリと止み、優しい眼差しで席の人々を見据える刀華にここにいる全ての人間が耳を傾けている……刀華は一呼吸間を置いてコホンと一回咳をするとハツキリとした声で演説を始めた。

「全学園生の皆さん、おはようございます!新入生の皆さんは入学おめでとうございませう!本日は気持ちのいい晴天に恵まれ——」

永遠のアドバイス通り丁寧に言葉を述べていく刀華、挨拶に始まり新入生の入学を祝福する言葉を述べ今年の生徒会の目標や新入生への学園生活のアドバイスなどをわか

りやすく話して順調に演説を進める、朝のホームルーム前に善吉達が生徒手帳で見っていた黒神めだかの演説と比べると少々見劣りする演説だが、年端も行かない学生である彼等にとってはこの方が親しみやすく、大勢の在校生に紛れて演説を聞いている出雲那達も関心していた。

「ふーん、なかなか立派な演説じゃねーか……めだちやん——黒神めだかに比べたら全然だがよ」

「あはは……あれと比べちゃダメだよ……でも私は刀華先輩の方がいいかな？わかりやすいし……」

「私もそう思うわ、黒神めだかはなんとというか……存在感が圧倒的過ぎて一歩引いちゃうのよねえ、その点刀華先輩は身近に感じるから親しみやすいわね」

「目標は【日進月歩】か……シンプル・イズ・ベストと言うべきか学生らしくも日々の積み重ねの大切さを掲げているいい言葉だ」

「うん、流石は東堂さんだね、あの眼を見ていると引き込まれそうだな」

「……ああ、そうだな……」

出雲那達が刀華の演説を聴きながら雑談している間にも刀華はどんどん話を進めていき、新入生が退屈しない内に締めに入ろうとしていた。

「——最後となりますが、これから皆さんがこの都市で一流の戦士を目指す参考……」

になるかどうかわかりませんが、先程学園長が教えてくれた「若者よ——世の礎たれ」という言葉の私なりに考えた答えを述べましょう」

講堂内におおーっ!というどよめきが響く、一生掛かっても答えが出せない人間もいるであろう大戦時代の英雄達が出した命題の答えを壇上の少女はその若さで見つけたと言うのだ。

「・・・皆さんの多くは【世】という言葉を聞くと【世界】と考えるかもしれませんが、私の思う【世】とは世界ではなく【未来】だと考えています、そしてその為の【礎】となる為には【自分の成すべき責任を背負い、果たす事】です」

刀華はまず単刀直入に答えを言葉にして述べた、【世】は【未来】、【礎】たる資格は【責任】だと。そして一呼吸置いてその根拠を話した。

「とはいえ【三大源力】というチカラを得てもなお人間という生き物はあまりにもちっぽけな存在です、どんなに有能な人間でもたった一人で成せる事なんてたかが知れていません、だけど世界に生きる一人一人が自分のできる事を考え協力し合つて事を成そうとすればより大きな壁を越える事だつてできる筈です、【人は城、人は石垣、人は堀】、これは私の故郷である国【帝国ヤマト】の第一次遭遇以前の大昔の英雄が謳つていたとされる言葉で【人が集まれば難攻不落の城にも匹敵する】という意味があります、一人一人が成す小さな責任が積み重なりやがて大きなチカラとなつて【未来】を創る」

刀華は教卓に両手を置いて心からの言葉を皆に言い放つ。

「そしてそのチカラを次の世代へと託し次の未来へと導いて繋いで行く……これが未来への【礎】となる事だと私は信じています。これから先の経験の中で皆さんは自分なりに考え自分なりの答えを出していくと思いますが、今日私が伝えたこの想いを皆さんの未来（あす）への道しるべにしてほしいと私は願っています……以上です」

刀華が演説を終えて一礼をすると盛大な拍手が鳴り響いた、彼女の心からの想いを受けて講堂内にいる人達が皆感動を覚えたのだ、人生経験の少ない学生の身でこの命題の答えを出せる者などそうはいないであろう、青学の学生達はもう既に彼女を尊敬に値する生徒会長だと認めていたのだった。

「……前言撤回、刀華先輩も十分圧倒的だわ……」

「あはは……やっぱり昨年の王竜四武祭ベスト8は伊達じゃなかったか……」

「カツ！【未来】だとか【責任】だとか！まったく上に立つ人間はいつもこいつも……遠いぜ……」

「【人は城、人は石垣、人は堀】……帝国ヤマトの大昔の英雄の言葉だと言っていたが……」

「帝国ヤマトには何百年も遙か昔【戦国乱世】って呼ばれていた内戦の時代があつたんだ、その時代に最強と名高い軍を率いていた英雄の言葉なんだけど……そんな言葉を

織り交ぜて「責任」と考えるあたりは東堂さんらしい答えだったと思う……凄いや、僕も自分なりの答えを見つけないとね」

「……………」

拍手が鳴り止まぬ中、一輝達は命題の答えを出していた刀華の話聞いて思った感想を言い合っており、出雲那は刀華の話の中に出ていた「ある言葉」が心の中に引つ掛かって感傷に浸っている。

——…「自分の成すべき責任を背負い、果たす」事が大切……あの人はオレに【雷切】を伝授してくれた時にも同じ事を言っていたな……。

四年前、出雲那は自分が青学に入学したばかりの頃に起きた「ある事件」がきつかけで刀華と知り合い、その時の「ある事情」によって彼女の必殺の伝家の宝刀【雷切】を本人から伝授された。その際に教えられた言葉と同じ事を刀華は今の演説の中で皆に伝えていたので昔を思い出して出雲那は懐かしく思っているのである。

——成すべき責任は「人から与えられる命令」じゃなくて「心から思った大切な事」だということに関心したのは今でも覚えている……でもオレはまだ【自分の成すべき責任】と言えるものを背負えていない……。

伝えられた技と言葉に込められた期待に対し相応に答えられていない自分に歯痒い想いを抱く出雲那、この先自分は刀華のように強い戦士になる事ができるのか……出

雲那はそういう不安な想いでいっぱいだった。

【強い戦士】というのは戦闘力の事を言っているのではない……もちろん戦闘力も大事なのだが戦闘力なら出雲那だって相当なものだ、昨晚決闘して負かした八神シグナムや今朝決闘して負かしたクレア・ハーヴェイ等風紀委員も決して弱かったわけではないので戦闘力は問題ない……【強い戦士】とは鉄のような強き意志を持ち、鋼のような強靱な精神を秘めた者の事をいうのだ、武内出雲那という男はどんな相手だろうと強気の姿勢を崩さずに全力全開で挑み掛かる不屈のチャレンジャーという印象だが内心はいつも【未来】に不安と恐れを抱いている、彼はまだまだ未熟な存在なのだ。

「……………」

出雲那はふと右側を向き自分が座っている席の列の最奥を眺め、列の最端の席に座っている編入生の柊明日香が刀華の演説に非情に感銘を受けて笑顔で拍手をしているのを見る。

——…アイツは刀華さんが言った言葉の重さを解っているのか？並べた言葉だけに感動したっていうんなら呑気なもんだぜ。

今自分が気になっていいる少女に対してスクエアはお前が思っている程甘い場所じゃないと念を送る出雲那、やがて時間は過ぎて行き入学式は閉幕したのだった。

この日は授業も修練もなく午前で学園でのスケジュールは終わる、帰りのホームルームを終えた出雲那達六人は帰路に就く為雑談をしながら本校舎のエントランスに向かっていった。

「———んでお前等今日これからどうするんだ？俺はこれから春の鳳凰四武祭に向けてそこらの奴に決闘を振っ掛けるつもりなんだがよ」

両腕を頭に組んで歩きながら出雲那達に放課後の予定を聞いてくる善吉、自分はこれから「おい、決闘（デュエル）しろよ」と其処らの奴に勝負を挑むから一緒にどうだと誘っているみたいだ。

「んく．．．まあ今日は特に予定はないし、いいかな?」

「鳳凰四武祭にはアリサと組んで出る予定だし丁度いいな、俺達も同行させてもらうよ」
「ええ、連携の確認ぐらいはしておいた方がいいでしょうしね」

「三人了承つと! 出雲那達はどうか?」

マイ、リイン、アリサの三人の同行を確認した善吉は残る出雲那と一輝にも話を振ってきた、出雲那達は今日昨晩の出来事を伐刀騎士連盟と瀾霊護廷隊の支部に伝えるに行くという用事があるのだが――

「出雲那君、連盟と護廷隊には今日中に行けばいいだろうし、夕方までなら付き合っても大丈夫だと思うよ」

「そうだな、んじやあオレ達も――」

「．．．ちよつといいかしら?」

用事に行くには時間に余裕があると判断したので同行する事を伝えようとしたその時、後ろから出雲那達に誰かが声を掛けてきた。

「ん? なんか用k――つ!?!? ．．．お前は．．．」

「えくと確か編入生の．．．」

「柘明日香】よ、お話中に邪魔をしましてごめんなさいね」

後ろを振り返ってみると、なんとそこにいたのは明日香だった。昨晩の出来事に係

わっているかもしれないので気になっていた少女が突然声をかけてきたので出雲那は一瞬動揺してしまうのだが、明日香はそんな出雲那の横を通り過ぎて何故か一輝と向かい合った。

「突然で悪いけど・・・あなた黒鉄一輝君よね？」

「え?・・・あ、はいそうです・・・」

「ちよつと私の知り合いがあなたに会いたいそうなの、少し時間をもらえないかしら？」

「知り合い？」

「イツキイイイイツキ!!」

「え?・・・おああつ!？」

「[[[[[[へっ?]]]]]]」

それは突然の出来事だった・・・明日香の知り合いが一輝に用事があると言うので明日香以外の全員が何の事かと思つて呆けていると突然明日香が通つて来た通路から燃えるような紅い髪を黄色いリボンで二括りに纏めている女子生徒が一輝の名前を叫びながら駆け寄つて来て一輝の胸に飛び込んできたので周囲の時間が止まったような錯覚を覚えた・・・。

「やつと会えた、会いたかつたよイツキ」

「・・・もしかして・・・ステラ？」

一輝は自分の胸に顔を埋める少女の顔を上げさせて目を合わせた、彼女の真紅の瞳を見て一輝は彼女が何者なのかを察しておもむろに彼女の名を口にした。すると少女は涙目になって再び一輝の胸に顔を埋めて騒ぎだした。

「バカバカバカ！今まで何で連絡一つよこさなかったのよ!? ずっと……ずっと寂しかったんだからね!! バカアツ!!」

「……ごめん……ごめんねステラ……」

一輝は泣きじやくる少女を優しく抱きしめる、騒ぎを聴き付けた周りの生徒達が野次馬のように集まって来たので出雲那達は動揺していた。

「……あー! あのコ《ステラ・ヴァーミリオン》さんじゃない!」

「マジ!? 【ヴァーミリオン皇国】第二皇女で世界最高峰クラスの靈力を保有している天才伐刀者の!」

「おいおい、じゃあ今皇女サマを抱きしめている男とはどういう関係なんだ?」

ざわざわと騒ぎ出す野次馬達、一輝が抱きしめている少女——ステラは一国の皇女様らしい、そんな有名人が何故一輝の胸に顔を埋めて泣きじやくっているのか? ……これではまるで——

「い、一輝……お前……それとどういう関係なんだ? ……」

善吉が恐る恐る一輝に問い質してみた、それを聞いた一輝は参ったなど言わんばかり

ルールとマナーを守って楽しくランチタイム♪

青竜学園の東側にある体育館の隣には青学の生徒達が食事をする為の大食堂がある。

最大約千五百人が一度に食事を取る事ができる広さがあるこの学生食堂の内装は穏やかな空をイメージした空色で塗装されており、日々修練に励む青学の生徒達の安らぎの場である。

「イツキ、あーん♪」

「あーん・・・うん、美味しい♪ステラ、また一段と腕を上げたね」

「でしょ♪イツキの為に朝四時に起きて愛情込めて作ったんだから当たり前よ♪」

「そんな朝早くから僕の為に？・・・ありがとうステラ」

雲のような白い模様が壁や天井の所々に描かれた眼にも良い空色の空間・・・の筈なのだが、この日この昼は一部桃色の空間が形成されていた・・・。

「じゃあお返し、あーん♪」

「あーん・・・うん、さすがアタシねー花嫁修業の成果はバッチリ出ているわね♪」

「それもあるだろうけど、やっぱりステラの愛情が沢山籠められているから凄く美味し
いんだろうね♪」

「嬉しいわイツキ……でもそれ以上にきつと貴方が食べさせてくれたから何倍にも美味しく感じられたのよ♪」

「ステラ……」

「イツキ……」

その桃色の空間の中で幸せそうに手を握り合つて見つめ合う二人の男女——黒鉄一輝とステラ・ヴァーミリオンは二人共に整つた顔をした美男美女であるが故にこの光景は思春期真っ盛りで恋人いない歴Ⅱ年齢な学生達には目に毒だ、今の彼等を遠くから視界に入れてしまっただけでも口から砂糖を吐いてブラックアウトしてしまう事だらう……なので——

「——うがあああああああああああああっ!!! てめえ等いい加減にしろ——!!!」

同じテーブルの席に座つて食事をしている奴等とはとても我慢できるものではない(笑)、目の前の桃色の空間を数分間至近距離で目にして数分間意識を保つた猛者——人吉善吉は遂に我慢の限界を迎えて大声で怒声を上げたのだった。

「うっさいわね! 黙つて食事しなさいよアンタ!」

「善吉君、食事中に大声で叫ぶのは感心しないよ、少し周りの迷惑を考えた方がいいんじゃないかな?」

「DA★MA★REバカップル共！人の眼前でイチヤイチャイチャと！！いい加減にしやがれ！！辛口のカレー食ってんのにメイプルシユガーの味がするわっ！！」

「善吉、塩飴あるけど食うか？」

「おっとサンキュ！気が利くな出雲那・・・あむ」

「・・・武内君・・・それってコーヒー用の角砂糖じゃ・・・」

「あ、間違えた」

「ぶろうーーーーーーーっ!!?」

「鬼畜だ（ね）・・・」

いきなり目の前で怒声を上げた善吉に対して抗議する一輝とステラ・・・お前等が言うなど納得のいかない善吉が怒りの感情をぶちまけると隣にいる出雲那がスープを飲みながら小さな白い塊を善吉に差し出し口の中が激甘で吐きそうだった善吉はそれがありがたく受け取って口の中に放り込む、すると口の中が焼けるような痛みを発したと思ったらステラの隣にいる明日香が気まずそうに出雲那に間違いを指摘する声が聴こえてきた事によってこれが甘味の過剰摂取によって舌の神経がバカになっている事に気が付き反射的に口の中の白い塊を嘔き出した、それを見たリンとアリサはワザと善吉に角砂糖を渡した出雲那に呆れ半分恐怖を覚えて顔を青くしていた・・・。

十人程座れる大きな円形のテーブルを囲んで楽しく愉快に食事をする出雲那達、何で

彼等はこのところで昼食を取っているのかというと、数分前に本校舎のエントランスでの騒ぎを治めた出雲那達はステラの強引な申し出によって明日香とステラも放課後の用事に同行する事となり、丁度お昼時という事もあって学生食堂で昼食を取る事にしたのであった。

この学生食堂は食券式で様々な料理を提供してくれるのだが、ステラが久々に会った恋人の一輝の為に朝から作った手作り弁当（重箱）を持って来ていてそれを出雲那達の目の前で一輝とステラはイチヤイチャと食べさせ合って桃色空間を形成し周囲に無数の口から砂糖を吐いた屍を量産していたのである（笑）。

「ごめんなさいね、ステラちゃんの内儘であなた達に迷惑を掛けてしまつて・・・」

「ううん、全然構わないわよ、気にしないで」

「寧ろ新しい学園の仲間の役に立てて光荣だと思つている、何かあったらこれからも遠慮なく言つてくれ」

「ふふ、そう言つてくれると助かるわ、ありがとう」

友人を恋人に会わせる為とはいえ出雲那達に迷惑をかけてしまった事を謝る明日香にアリサとリインは気にしなくていいからもっと頼つてほしいと言ひ、明日香はそれに対してお礼を述べた。さつきまで少々余所余所しい喋り方をしていた明日香であったが、話している内に大分打ち解けたみたいだ。

「・・・でも大丈夫だったのかしら？ステラちゃんは今全く気にしていないみたいだったけど、仮にも一国の皇女が公衆の前で堂々と恋人と抱きしめ合っていたなんてスキヤンダルになるんじゃない？」

明日香の言う事も尤もだ、普通なら一国の王族が身分の違う異性と交際していただなんて国際問題にもなりかねないだろう・・・そう、普通なら。

「それなら心配はいらねーんじゃない？スクエアは身分よりも戦闘の実力がものをいう都市だからな、めだかちゃ・・・黒神めだかや東堂先輩が誰かと交際していたんなら大スキヤンダルになるけど、皇族だろーが世界最高峰クラスの霊力を持った伐刀者だろーがまだ実績一つ残していない新入りのヴァーミリオンがどうしようとその場で騒ぎにはなるけど大したニュースにはならねーだろうからな」

「ついでに言っておくと外から修行の為に來てる王族がスクエアの四大学園に結構いるからあまり珍しくねえしな、おまけにそいつ等かなり自由気ままに生活してるみてえだし」

「そうそう、この前南エリア商業地区にあるジャンクフード店で聖ルシフェルの《華焔の魔女（グリユーエンローゼ）》がハンバーガーを超笑顔でがつついてんのを見かけたぜ」
「確か《リーゼルトニア》の王女だったなそいつ・・・そーいやオレもこの間北エリアセンター街のゲーセンでナイツニクスにいる《ルシス王国》の王子がダチらしき金髪を連

れてシューティングゲームやってんの見かけたな……」

「へー……. だけど一番フリーダムだと思つたのは一週間前に西エリアのシヨツピングモールで彼氏らしき野郎と堂々とデートしてたヴァイスファンクにいる《グーデンブルグ王国》の第三王女だな、彼氏の腕に抱きついてイチャイチャしながら歩いてやがったからあれは身分とか関係なしに目に付いたぜ……」

さつきから出雲那に嵌められて砂糖を食わせられた善吉が腹を立てて嵌めた張本人と座りながら取っ組み合いをしていたが明日香の質問を聞いて二人は取っ組み合いを止めて思い出したかのように話した、どうやらスクエアには数多くの王族が生活に溶け込んでいてビックリする程自由に暮らしているようだ。

「そ、そうなの……. なら問題なさそうね……」

明日香は二人の話を聞いてやっぱりここは変わった場所ねと言っているかのように顔を引き攣らせて無理矢理納得する、そもそも外部のマスコミやジャーナリストなどの情報メディア関係の人間は四武祭の取材でしかスクエアに入る事ができない決まりがあるので四武祭の期間にボロを出さなければ問題は無いだろう。

「つたく、中等部ん時毎晩毎晩コソコソと何を熱心に書いてんのかと思つたら恋人と文通してやがったとはな……. お前等一体いつから付き合い始めたんだ？」

「あ、それ私も興味あるわね♪どうなの？」

出雲那は肩肘をテーブルに着いてパスタを食いながら一言呟いて一輝とステラに二人の馴れ初めについて聞き、アリサが興味津々でそれに同意した。

「ははは、別に隠してたわけじゃないんだけどね．．．あの時僕は十一歳だったかなあ、僕はその頃剣の修行の一環として帝国ヤマト各地の道場を周って道場破りをしていった。その道中で腕試し目的で帝国ヤマトに來国していたステラと出会ってさ．．．その．．．色々あつて決闘する事になつて．．．」

色々つて何があつたんだ？ 頬を朱らめて少し恥ずかしそうに語る一輝を見てそう思ひ気になった出雲那達だったが一輝の隣でステラが「聞いたらタダじゃおかない」と言っているかのように笑つていない視線の笑顔で自分等を牽制していたので心の中に思ひ止める事にした。

「結果は一応僕が勝つただけど、その時彼女が僕について行くとつて聞かなくてさ、それで一緒に修行して周っているうちに．．．お互いに好意を抱いていたみたいで．．．」
「．．．ある日デバートを占拠したテロリストと戦つて大怪我を負つたイツキが病院で目覚めた時にいきなり【僕は．．．ステラが好きだ】つて告白してきて．．．それで．．．恋人同士になつたの．．．」

段々と恥ずかしくなつてきて赤裸々に口止もりそうに語る一輝、最後にもじもじと顔を朱らめているステラの口から二人が恋人同士になつた経緯が語られたのだった、昔の

思い出を語るのがよっぽど照れくさくて恥ずかしかったのだろう、二人の頭の上から湯気が出ている。

「「「「「.....」」」」」

明日香を含めて何と言ったらいいのかわからなそうに黙り込む出雲那達、そりやあ十一歳という幼さでテロリストと戦ったなんて聞かされたら誰だって呆気にとられるだろう、当然の反応だ.....。

「.....ま、ツッコミたいところはすげえあるがそれは置いて.....要するにヴァーミリオンは一輝を溺愛していて一輝と同じ学園に通う為にわざわざ青学に編入して来たってわけか.....よかつたじゃねえか一輝、そんな重箱に豪華な昼飯作って来てくれるようないい彼女を持ってよ.....あむ！」

パスタをフォークに巻きながら一輝に皮肉のようにそう言いフォークに巻いたパスタを口に運ぶ出雲那、彼も彼女いない歴〃年齢の条件に当てはまる男なので嫉妬しているようにも聞こえるが言っている事は的外れではない、ステラ程強大な霊力を持つ伐刀者ならここ三年間四武祭常勝の名門ナイツニクス学園にだって簡単に編入できた筈だ、なのに彼女は一輝と共に学園生活を送る為にわざわざ青竜学園に来たのだ、溺愛という表現は的を射ている。

「ははは、当たり前だよ、ステラは最高の女性さ、僕は幸せ者だと思うよ♪」

「まあ、イツキつたら♪．．．．．ところだ．．．．．アンタのその昼食．．．．．なんか凄いわね、赤々しくて眼が痛いつて言うか．．．」

一輝とステラは出雲那に煽られた事によつて再びイチャ付きそうになったが、ステラは昼食の事を言われて先程から気になっていた事を出雲那に言った。

彼の目の前に置かれた赤一色の昼食——トマトスープにトマトサラダ、トマトジュースに焼きトマト、そしてメインディッシュとしてトマトソースパスタ．．．トマト尽くしの昼食メニユーを出雲那は今食している。

「あゝ、やっぱ初めて見る奴はツツコムよなあ」

「出雲那君トマト大好きだもんね．．．」

ステラの発言を聞いて仕方ないと言う善吉と一輝、中等部からの友人である一輝達はもう慣れていようだが彼等の発言からして出雲那はほぼ毎日昼食はトマト尽くしのメニユーのようだ．．．。

「へっ！美味しいもの食つて何が悪いってんだ？トマトは凄えぞ、低カロリーで超美味い、ビタミンCとEを含んでいて生活習慣病予防や老化抑制にもなる、煮て良し！焼いて良し！ケチャップなどの調味料にしても良し！作れる料理のレパートリーも豊富だ♪」

日本語名〔唐柿（とうし）〕、学名〔*Lycopersicon esculentum*（リコペルシコン エクスレンタム）〕と呼ばれ、今出雲那が力説したビタミンCとE

の他にも強力な抗酸化作用を持ったリコピンと呼ばれる栄養成分が含まれていてトマトが赤いのはこれのおかげらしい、また10と10で「トマト」と読む語呂合わせがあり十月十日はトマトの日とされているようだ。

「この赤さだ！この赤さと美味さがオレの心と魂を昂らせる！まだまだオレは戦士として上を目指せるぜっ!!ふははははははははっ!!」

大好物なトマトの話をして気分良くなった出雲那はトマトジュースが入っているコップを手にとって立ち上がりテンションMAXで高笑いをし、そのままトマトジュースを一気飲みした。出雲那はトマトの事になるとおかしくなるようだ、彼のトマトによる豹変っぷりを初めて見る明日香とステラはドン引きしていて一輝達は苦笑している。

「ようっ！相席いいか？」

「相変わらずやかましい連中だな、どうでもいいが・・・」

場が混沌としてきた時に金髪で学生服のボタンを全開にしている陽気な印象の男子生徒と黒髪で学生服の上から黒い外套を羽織っているクールな印象の男子生徒が昼食を乗せたトレイを持って出雲那達に相席を求めて来た、それによって出雲那は高笑いを止める。

「双竜コンビじゃねーか、珍しいな、お前等が昼メシを食堂で食うなんてよ」

「へへっ、青い空の下で食うメシは最高だがオレ達だつてたまには食堂を利用する事

だつてあるんだぜ、なあ？」

「べつに、ただ今朝出雲那と一輝がクレア先輩達と戦りあつて居る隙にコツソリと横を通り抜けて持ち物検査を避けた事がクレア先輩達にバレたから鉢合わせしないように食堂で食う事にしただけだろう」

「ちよつ!?!お前それを言うなつて!」

二人は他愛の無い談笑をしながら出雲那と反対側の善吉の隣の席に座つて昼食をテーブルの上に置いた、突然やつて来た二人が誰だかわからないステラと明日香は少し困惑する。

「な、何なのこいつ等?」

「皆の知り合いみたいだけど、紹介してもらつてもよろしいかしら?」

「ああそうだね、紹介するよ、この二人は僕達と同じ高等部二年生でB組の生徒なんだ、金髪の方が《ステイング・ユークリフ》君、黒髪の方が《ローグ・チェーニ》君、二人は《白竜（はくりゆう）》と《影竜（えいりゆう）》という竜の二つ名で呼ばれているコンビである事から《青学の双竜》って呼ばれているんだ、昨年【鳳凰四武祭】ベスト8で青学でも指折りのタッグなんだよ」

「よろしくな!いやーこりやあまたなかなかの別嬪さん達じゃねーか、なあ?」

「興味ないな」

初対面のステラと明日香に二人を紹介する一輝、ステイングが彼女達に気さくに挨拶をして彼女達が美人である事をローグに同意を求めると冷めた口調で返された。

「へえ、鳳凰四武祭ってこの春行われるタッグ戦の大会でしょ？ 帰りのホームルームで担任の先生が言っていたわ」

「そう、スクエアの四大学の学生にとっての一大イベントである闘技大会〔四武祭〕の一つ、優勝すれば莫大な賞金と大会制覇者（チャンプ）の荣誉、そして卒業後の進路先での優遇などの特典が与えられる」

「二度でも優勝すれば将来安泰つつーわけだ♪今年の鳳凰四武祭はオレ達がいただくぜ！」

話を聞いたステラが興味深そうにそう言って、ローグが鳳凰四武祭について捕捉をし、ステイングが上に拳を掲げて優勝宣言をした。そこでステイングの優勝宣言が聞き捨てならなかった出雲那が対抗心剥き出しで横槍を入れる。

「おっとそうは行くかよ！ 今年の鳳凰四武祭を取るのオレと一輝だけ！」

「へへっ、おもしれえ、オレとローグの双竜コンビにケンカ売るとはいい度胸じゃねーか！」

「それはこっちのセリフだベスト8止まりが、オレと一輝は昨年ベスト4だけ、テメエ等より上だ！」

「んだとー！」

火花を散らして口喧嘩をする出雲那とステイング、実は出雲那と一輝も昨年の鳳凰四武祭に出場していてなんと準決勝まで勝ち進んでいたのである。しかもベスト4に残った青学のタッグは彼等だけだ、つまり出雲那と一輝はその大会で青学最優秀の成績を納めたのだ、その影響で出雲那は《瞬雷（ブリッツ）》、一輝は《無冠の剣王（アナザーワン）》とそれぞれ二つ名が付き、二人揃って《青学の黄金（ゴールドデン）タッグ》と呼ばれるようになったのである。

なので先程の騒動で恋人がいる事が発覚してスキヤンダルになる危険性があるのはステラより寧ろ一輝の方であったのだが、運がいい事に周りに集まって来た野次馬達は全員ステラに意識が向いていて一輝の顔が見られる前に事が収まったので大事にはならなかったようだ。

「それは事実だろう、いちいち目くじらを立てる事ではない」

「おい、お前悔しくないのかよローグ！」

「記録だけの戦績など興味ないな、出雲那達と直接戦り合って負けたわけでもあるまいし、ならオレ達が出雲那達より弱いという証明にはならないだろう？」

「あ、そーいやそーだな」

自分が対抗心を燃やしているのに冷めた口調で話の腰を折って来るパートナーに腹

を立てるステイキングであったがローグが言った事に納得したのでアツサリ怒りは冷めた。

「へへっ、言われてみるとオレ達は優勝したナイツニクスの【白舞の姫将】と【不動空斬】に負けたけどアンタ等が負けたのは準優勝だったヴァイスファングの《浪速（なにわ）の星》と《絶剣（ぜっけん）》のペアだったしなー」

「何勝ち誇ったような面でニヤニヤしてこつちを見てやがる、結局テメエ等も負けた事には変わりねえじゃねえか！」

「全然違うね！オレ達が負けたのは優勝者、アンタ等が負けたのはオレ達を負かした奴等に負けた準優勝者、格が違うんだよ格が！」

「それこそ記録だけの戦績だろうが！テメエ等がオレと一輝より強え証明にはならねえよ!!」

「だったらこの後やるか!?オレとローグ、アンタと一輝とでタツグ決闘をよおっ!!」

「上等だ・・・おい、決闘（デュエル）しろよ！」

「くだらないな」

「ははは・・・」

醜い争いを続ける出雲那とステイキングにローグは呆れ一輝は苦笑いをする。

「・・・ねえ、ちよつといいかしら？」

そんな混沌とした中で何が不満だったのかステラがムツとした表情で会話に入ってきた。

「イズナだっけ？ 悪いけど今年からアタシがイツキのパートナーとして鳳凰四武祭に出場するから出場するなら他を当たってちょうだい」

「ちよつ、ステラ!?!」

「あゝ?」

唐突にステラが一輝の片腕に抱き付いて自身の豊満な乳房を押し付けながら出雲那に向かつて自分が一輝と組むからタッグを解消しろと要求してきたので出雲那の額に青筋が浮かんだ、自分のタッグパートナーを横から搔つ攫おうと言うのだから癪に障ったのだ。

「何言つてんだテメエふざけるなよ、オレと一輝は中等部の頃からずっとタッグを組んで戦つてきたんだ!」

「アタシはアンタがイツキと知り合う前からイツキの彼女なのよ、恋人同士がペアを組むのは当然じゃない」

「オレ達は昨年のベスト4で青学最優秀の実績を出しているんだぜ? つまり青学最強タッグだ! 今更タッグを解消するわけねえだろ!」

「い、出雲那君、ステラ、ちよつと落ち着いて・・・」

一輝のタッグパートナーの座を巡って言い争いをする出雲那とステラ、困った一輝はなんとか二人を落ち着けようとするが――

「聞き捨てならねーな出雲那！青学最強タッグだあ？それはオレ達双竜コンビを倒してから名乗りやがれ！」

「誰が一輝のパートナーになろうが興味ないが、直接戦り合ってもいないのに格下扱いされるのは心外だ、取り消せ」

「ああ、もうー！」

出雲那の「青学最強タッグ」発言によつてステイングとローグも口論に参戦し四人で騒ぎだしたので場が更に混沌と化した為に一輝は頭を抱えた、あまりにもやかましいので周りで食事をしている生徒達が鬱陶しそうに彼等を睨みつけている。

「まったく、ステラちゃんが短気なのはいつもの事だけど、武内君達もかなり沸点が低いみたいね……」

「はあ、ごめんね明日香、ウチのおバカ達はいっつもこうなのよ」

「気にしなくていいわ、私はこういうのステラちゃんに慣れてるから……それにしてもさつきからマイさんの姿が見当たらないのだけど……え？アリサさん？……何これ？……」

明日香が言い争って騒ぎ立て周りに迷惑をかけるバカ共を腕を組んでジト目で見て

呆れ、アリサが溜息を吐いて明日香に謝罪するのだが、明日香は友人であるステラが毎回騒動を起こすから慣れているので平気だと言い、食堂に来てからマイがどこかにいなくなつた事が気になつている事を口に出して呟く、すると突然アリサとリインと善吉が顔を真っ青にして鼻栓を取り出して自らの鼻に詰め、その後アリサがスペアの鼻栓を取り出してそれを無言で明日香に渡した。

明日香はその行動の意味が解らないので困惑する、顔を青くして俯いているアリサに
 どういう事か聞こうとしたが・・・その時——

「いつもゴメンみんな、ちょっと作ってもらうのに手間取っちゃつて☆」

今までどこかに行つていたマイがようやくやくやつて来た・・・強烈な異臭を放つ紫色の何かが乗つたトレイを持って・・・

「「うゝっ!」」

「「げっ!」」

「・・・」

マイが来た瞬間に喧しかった場が一気に静まり返りバカ共による言い争いも止まつた、一輝と善吉とリインとアリサは来てしまったかと呻き声を上げ、立ち上がつて言い争いをして鼻栓をしていなかった出雲那とステイングとローグは異臭を嗅いでしまつて声を上げ、明日香とステラはマイが持っている紫色の何かを見て絶句してしまつた。

「アアアンタ何なのよそれええええっ!!?」

「これ?私の昼食【マイ・ナツメスペシャル】だよ♪」

「昼食っ!!嘘よ!こんな食べ物あつてたまるもんですか!!!」

「————」

「ローグ!?!ステイング!?!気をしっかり持て!!死ぬなあっ!!!」

マイは機嫌良さそうに笑顔で空いた席に座りテーブルの上に紫色の何かが乗ったトレイを置く、それをステラはこの世の物とは思えないような目線で見て指さし声を荒げて叫んだ、するとマイが超笑顔でこれは食べ物だと衝撃の発言をしたのでステラは全力全開でそれを否定する。周りを見てみるとステイングとローグが泡を吹き目を回して倒れてしまっている、マイが食べ物だと言った物体から発せられる異臭を嗅いで耐えられずに気絶したのだ、善吉が二人を現世に繋ぎ止める為に必死になって声をかけている。

「それじゃあ、いったただつきまーすっ♪」

「.....」

そしてマイはその紫色の何かをスプーンで掬って食べ始めた、彼女が気泡がボコボコと鳴っている紫色のソースが掛かった物体をまるで限定販売されたスイーツを頬張る女子高生のように幸せそうに食べている姿を見て明日香は顔を引き攣らせている。

「ア、アリサさん……その……マイさんって……ひよつとして……」
「たぶん貴方が思っている通りよ……マイはね……凄く悪食なの……」

明日香は思い切つて思っている事をアリサに聞いてみる、返つて来た返答は思つた通りのものであり彼女はまあ好みは人それぞれでしょうと心の中で必死に自分に言い聞かせた。

「マイ・ナツメスペシャル」、それは味覚がおかしいマイの為だけに作られた特製定食だ、様々な食材を混ぜ合わせ「ルーンポトル」という名の薬品を丸ごと投入してできたそれはまさに物体X……いや「デスデイナー」と呼べる代物だろう、周りに飛び散つた紫色のソースから「アオ……アオ……アオ……」と鳴くウネウネした何かが精製されているので凄く奇妙だ。

因みにこの「マイ・ナツメスペシャル」はこの食堂の厨房の裏でこれを作る為だけにアルバイトをしている女子高生によって製作されているらしいが詳しい詳細は不明である……。

「ん〜美味しい〜♪」

「……これを見ると新学期が始まつたつて実感するぜ……そんな想像を絶するモンを幸せそうに食いやがつて……」

「ん？出雲那も食べてみる？」

ドラグーンスタジアム

マイ・ナツメ嬢の恐ろしい所業（笑）によって倒れた我らが主人公武内出雲那、彼はその後しばらくの間生死の境を彷徨い――

「うぷっ……まだ口の中がヒリヒリして気持ち悪りいぜ……」

なんとか生還して九死に一生を得ていた、楽しい昼食の時間がとんだ災難になったものだ（笑）。

「……本当にゴメンね出雲那、本当に美味しかったから良かれと思って……」

「すまないと思っただったら別にいい、次やったら許さねえけど……うっぷー！」

「まったく『マイ・ナツメスペシャル』とはよく言ったものだけ、あんなの世界広しと言っても食えるのはマイしかいねーだろ……てか居てたまるかよ」

口を押さえて気分悪そうに歩く出雲那に罪悪感を感じてマイは謝罪をする、出雲那は次やったら許さないと釘を刺してマイを許し、善吉はマイが食べていたデスディナーを思い出してそう口にした。

昼食を終えた出雲那達は現在、当初の予定通りタッグ戦の練習を行う為に学園の模擬戦場を目指してぞろぞろと歩いていて、出雲那より軽傷（？）だったステイングとロー

グも先程言った通り出雲那と一輝のペアと決闘をする為に同行している。

青学の模擬戦場は学園の敷地内の北東にある楕円形のスタジアムである、スクエア内ではソーサラーキューブさえ所持していれば基本的にどこでも決闘を行う事ができるのだが、四大学の敷地内では原則的に模擬戦場以外では決闘を行う事は禁止されている（今朝の出雲那達とクレア達の決闘は校門前だったのでギリギリ敷地外）、戦闘の被害による学園施設の破損を防ぐ為だ、三大源力を持った超人達はいとも簡単に建物を倒壊させ大地を砕き地形を変える事ができる、そういう規則ができるのも当然と言えるであろう。

「ステラ、柀さん、ここが青学の模擬戦場（ドラゴンスタジアム）だよ」

「へえ、見た感じなかなか立派な模擬戦場じゃないの」

「そうね、全世界の戦士候補生が集まるスクエアの学園が保有する訓練施設なだけあって結構な建設費が使われているみたいね」

学園敷地内の大通りを通り、二体の竜の石像が出迎えるスタジアムの正面ゲートにたどり着くと一輝が来るのが初めてであるステラと明日香にスタジアムの名前を教えた、ステラは今まで知る限りの他の模擬戦場と比べて規模が大きいスタジアムに関心を示し、明日香はスタジアムの周囲に建っている竜の石像や三大源力に大きな耐性がある特殊強化ガラス張りの外壁を見て建設するのに使った費用の予想を口にする。

自動開閉式の正面ゲートを潜り、スタジアムのエントランスに入ると円形のカウンターで四方八方から来客に対応する事ができる総合案内受付が正面に見える。総合案内の周囲には無数のベンチが設置されている待合所になっており、受付の順番待ちをしたり、知り合いとの待ち合わせや休憩など様々な利用目的でベンチに腰を掛ける学生達があちこちにいる。

「さーて、どこに居やがるんだアイツ？」

「善吉、何きよろきよろしているんだ？」

「ここで俺のタッグパートナーと待ち合わせしているから探しているんだよ、悪りーけど先に受付を済まして来てくれ、たぶんそこらへんのベンチの上で寝てんだろーし、アイツを見つけたらすぐに行くからよ」

「ああ彼ね？確かに鳳凰四武祭に向けての決闘なのにタッグパートナーがいらないじゃ練習にならないわね」

「私達も一緒に探してあげるよ、この待合所は結構広いから手分けして探した方が早いだろうし」

「そうだな、模擬戦場の使用申請はオレと一輝でやってくるからお前等は探してこいよ」
「そ、そうか、すまねえなみんな」

受付を出雲那と一輝、そして探し人である善吉のタッグパートナーと面識がない明日

香とステラの四人に任せて残りのメンバーで善吉のタッグパートナーを手分けして探す事にした。

円形でかなりの広さがあり模擬戦場を利用する学生達で込み込みしているエントランスの中にいる個人を探すとすると一人ではかなり苦勞するだろうが、複数で手分けすれば大して時間は掛からないだろう。

「すー、すー、……むにやむにや……」

「ようやく見つけたぜ……こんなところで気持ちよさそうに眠りやがって……」

「あはは……なんか気持ちよさそうで起こすのに気が引けるね」

探し始めてから五分後、善吉とマイが太陽の日差しがよく当たるガラス張りの外壁の近くにあるベンチの上……ではなくその下に潜ってまるで猫のように丸まってスヤスヤと寝ている善吉のタッグパートナーである小柄で癖毛のある紫の髪をしている少年を見つけた。待ち合わせをしている筈なのにかなり見つけ難い場所で探すのに苦勞した人の気も知らないで呑気にぐっすりと寝ている少年を見て善吉は愚痴をこぼしマイは苦笑いをしながら自分の蟬谷を人差し指で搔いてそう言う。

マイの言った通り気持ちよさそうに寝ている少年を起こすのは気が引けるのだが、いつまでも眺めているわけにはいかないので少年を起こす事にした。

「トニー……んなどころで寝てんじゃねえ!とつとと起きやがれ!!」

「むにや?・・・んゝ後五年ゝ」

「いや、長え(い)よ!それだと学園卒業しちゃうだろーが(よ)!?」

善吉は寝ている少年——《トニー・フィルウィン》を怒鳴るようにして起こそうとするがトニーが寝言でふざけた事を要求して一向に起きようとしないので善吉とマイはツツコミを入れた、二人は息がピツタリだった。

「いい加減に起きろよこの居眠り小僧!みんな待たせてんだよ!!」

「トニー、眠いだろうけどそういうわけだから我慢して起きてくれないかな?」

「むにや?抱き枕ゝ」

「ひゃんっ♥どこに抱き付いてんの!?!私の胸は抱き枕じゃないよ!」

「ん?・・・あ、マイ、それに善吉も・・・おはよゝ」

「もう昼だよ!」

トニーは身を屈めて顔を覗き込んで声を掛けてくるマイの豊富な乳房を寝ぼけて抱き枕と勘違いをして抱き付いたりするなどをして二人を困らせるが何とか目を覚ました。幾らマイが巨乳だからと言って抱き枕として機能してしまう程小柄な体型であるトニーはあどけない童顔に据わった眼を小さな手で擦ってお惚けの表情で善吉とマイに朝の挨拶をしたが見ての通り既に昼なので二人はツツコンだ。

「善吉、マイ、こんなところにいたのか、トニーの奴は見つかったか?」

「模擬戦場の使用申請は貰ってきたよ、十一番模擬戦場だけど二人先客がいるみたいで他は相当混雑しているから共同で使ってくださいってさ」

「新入生や編入生の《学生戦士証明》の発行には一日掛かるからアタシとアスカはまだ訓練施設を使用できないってどういう事よ？久しぶりにイツキと楽しく戦えると思ったのにー！」

「まあまあステラちゃん、同行者として黒鉄君達と一緒に中には入れるみたいだから今日はおとなしく見学しましょう」

「いくら探しても見つからないと思つたらベンチの下にいたのか・・・」

「まったく、本当に猫みたいに自由奔放な子ね・・・」

「おっ、いたいた！相変わらずトニーはちっこいな、本当に中等生かと思っぜ？なあ？」

「興味ないな」

そうこうしているうちに仲間達が続々と集まって来た。トニーと面識が無い明日香とステラに出雲那達はトニーの紹介を簡単に済ませると（幼児体型のトニーが中等部二年生だということに二人は驚いていたが）一行はトニーを連れて使用許可を貰った第一番模擬戦場に向かうのだった。

「へえ、フィールウィン君は魔術師なのね」

「そうだよ、〔魔力のボールをぶつけて弱くする〕事ができるんだ」

「コラッ！無闇やたらと自分の能力を人に話してんじゃねーよ！」

雑談しながら歩いて行く武内出雲那一行は緩やかにカーブを描く通路を進んで行く。通路の内側の壁には窓ガラスと中に入る為の扉が先の先まで無数に並んでいてそこを覗くとスタジアムの中にある多数の模擬戦場の様子を見る事ができる、それはここがスタジアム内の観客スタンドの下で模擬戦場の内壁のすぐ向こう側だからだ。

スタジアム内の模擬戦場は《鋼石（こうせき）》と呼ばれる核兵器級の爆発にも耐える

事のできる頑丈な特殊素材で造られた石畳のバトルフィールドだ、縦横共に50mある正方形の形をしており、それがスタジアム内に無数に並べられていて、それ等のバトルフィールドの上では学生達が武装を振るい炎を燃え上げらせ弾丸を飛ばして熾烈な決闘を繰り広げていた。

それぞれのバトルフィールドには番号が付けられている、青学の学生達は受付で使用申請をもらい指定された番号のバトルフィールドを使用して模擬戦という名の決闘を行って日夜汗水流して修練に励むのである。

「ふん、どいつもこいつもなかなかいい動きをしているけれどここから見えている限りじゃアタシやアスカの敵じゃないわね．．．ねえイツキ、アタシいちいち弱い奴と決闘するのは遠慮したいの、だから、こう．．．学園のみんなの強さが判るような．．．」

「．．．ひよつとして【学園序列】？」

「そう、それよ！学園序列とかそういうのってどうなっているの？これからの為に聞いておきたいんだけど？」

窓の向こう側で決闘をする青学の学生達を見てソイツ等と自分が戦うとなると物足りないなど思ったステラは隣を歩く一輝に学園内で強い奴を見分ける為の目安みたいなものはあるのかを聞こうとしたら上手く言葉が出ずに口籠ってしまい、そこで聞かれた本人が助け船を出して事を得たので改めて聞いた。

「残念だけど序列制度とかそういうのはスクエアの四大学園には無いんだ、昔はあったみたいだけどそういうものがあると上下関係の優劣感で生徒達に背徳感情が生まれて学園内で深刻な抗争を起こしたりするから廃止したんだってさ．．．でも四武祭で勝ち上がる程の実力者なら大体みんな「二つ名」を持っているから新入生や編入生はともかく在学生なら大体強い人は判ると思うよ」

「そうだな．．．例えば出雲那と一輝はさつき学食で言った通り昨年の【鳳凰四武祭】でベスト4に勝ち残ってスクエアの《運営委員会》から【瞬雷】と【無冠の剣王】と言う二つ名を貰っている、ステイングとローグは近年の鳳凰四武祭上位陣の常連で【白竜】と【影竜】の二つ名を持っているな」

「リイン、貴方も去年の【王竜四武祭】でベスト16に入って《灰色の騎士》の二つ名を貰っているでしょ？それからマイも去年の【獣王四武祭】のシングル戦で当時聖ルシフェルの期待の新星（ルーキー）って言われていた《蒼雫（ブルー・ティアーズ）》相手に大金星を上げて特別に《変革の槍術士（ヴァリアブルランサー）》なんて二つ名を貰っていたわね」

「そういうそんな事もあったよね、マイも大人しそうな顔をしてなかなかやる、やつぱりおつきなオツパイは伊達じゃないね」

「あはは、そう言われるとちよつと照れるな．．．って胸は関係無いよ!？」

一輝が言うには昔は序列制度があったが今は廃止されたらしくスクエアの学生の強さの目安は【四武祭】で上位に入ると付けられる二つ名があるかどうかで判断するみたいであり、リインとアリサが自分達の二つ名持ちを挙げてその中に意外にもあまり強くなさそうなマイの名が挙がった事でトニーがお惚けた表情でマイを褒め、マイは褒められた事で頬を朱らめて照れたがトニーが何故かマイの巨乳を理由にしたのでマイはツツコミを入れた。

「まあそんな感じで色んな奴が居るが、【青学最強】と言ったら真っ先に挙がるのは……やっぱり【雷切】の二つ名を持つ刀華さんかな・・・」

「そうか？俺は《妖精女王（ティターニア）》の【スカーレット先輩】だと思っけどな」

「中等部の《疾風刃雷（しつぷうじんらい）》もなかなか凄い剣士だって聞くけどね」

「いいやこのオレ、ステイング・ユークリフだね！オレが最強だ!!」

「先日東堂先輩に挑んでフルボッコにされていたのはどこのどいつだったろうな……」
「グツ!?余計な事言うんじゃないやねーよローグ!」

しばらく歩きながら会話しているうちに何故か【青学最強】は誰なのかという議論に変わり、騒がしく雑談しているうちに出雲那達は自分達が使用する第十一番模擬戦場に通じる扉の前に来ていた。

「さて、二人先客がいると聞いたが、どんな奴等が来てんだらうな……っと!」

出雲那が扉を開けて一行はぞろぞろと摸擬戦場内に入室する、目の前にあるバトルフィールド上では彼等から見て手前の方にいる大柄でガツシリとした体躯の青年が自身の巨体にも劣らない大型の戦斧をどつしりと構えて立ち、そこから20m程奥の位置に剣を構えて立っている女子生徒と睨み合つて対峙し、緊迫した雰囲気醸し出している。どうやら彼等が話にあつた先客の様だ、バトルフィールド中央の真上には既にソーサラーキューブが駆動していてバトルフィールドをソーサラーフィールドが包み込んでいた。

「ん？誰だ、ここは今見ての通り使用し——つててめえ等は!？」

「ようつ、レスター！先客つてのはお前等だつたんだな」

大柄な青年は後方の出入り口から誰かが入室して来た気配を感じて振り向き、この摸擬戦場は今自分達が使用しているからという理由で来訪者達を追い返そうとするが、出雲那達の顔触れを見て言葉詰まらせる。出雲那はそんなのお構いなしに大柄な青年に気さくに右手を上げて声を掛けた。

「てめえ等何しに来やがつたんだ？ここは今見て分かる通りオレ達が使用している、決闘するなら他を当たれ」

「受付のねえちゃんが他は混雑してるからお前等と共同で使えつてよ、せつかくだから一緒にやろうぜ」

「・・・ちっ！仕方ねえな、後で相手してやるから今はそこで見てろ」

「武内君、もしかして彼は知り合いなの？」

「ああ、ヴァーミリオンと同じ高等部一年の《レスター・マクフェイル》だ、《轟遠の烈斧（コルネフォロス）》つつう二つ名持ちの実力者で見た目通り戦斧型の《煌式武装（ルクス）》を振るうパワーファイタータイプの星脈世代だぜ」

「アタシと同学年!?このオッサンが!？」

「誰がオッサンだ誰がっ!?オレ様はまだ十五だ!!」

改めて出雲那達を追い返そうとするレスターだったが出雲那がここへ来た理由を簡単に説明すると舌打ちをして仕方なく共同で使用する事を認めて対峙している女子生徒の方を向き、明日香が出雲那にレスターとの関係を尋ねると出雲那はレスターについて説明をしてステラが自分と同学年だと聞いて驚愕し、ステラが不快な事を口にしたのでレスターは再び出雲那達の方を振り向いて文句を言つて怒鳴った。確かにレスターは厳つい面構えな所為で若干老けて見えるから高等部一年生と聞かされて驚くのも仕方がないだろう（笑）。

「・・・おいレスター、いつまで余所見をしているつもりだ？」

出雲那達の所為で気を散らしているレスターに対峙している女子生徒が痺れを切らして威勢のいい毅然とした声を掛けてきた。

「気を散らすな、戦いは一瞬でも敵に隙を見せれば命取りだぞ、こつちを見る、そのケダモノのような目で私を見る！」

「ん?・・・ああ、悪いな」

女子生徒は射貫くような鋭い視線でレスターを睨み毅然とした真剣な表情で剣を正眼に構えてそう言葉を発する、あまりに真剣な声で言つて来るのでレスターは無視した事を軽く謝罪して彼女と向き合つた。

——あの立ち振る舞い、なかなかの覇気を感じるわ、マクフェイル君も相当な実力者みたいだけど、彼女もかなりの実力を持っているみたいね・・・。

毅然とした姿勢、騎士のような勇猛さを感じさせる雰囲気、野外から吹く微風がポニーテールに纏めた金髪を揺らし、その鋭く碧い双眸が相手を捉えて離さない・・・そんな女子生徒の計り知れない実力を目算した明日香はこれから行われる決闘はかなりハイレベルなものになりそうだと予想して息を呑む。

「・・・始まるわよ」

『DUEL standby』

ステラも同じ事を思っていたのか真剣な表情でバトルフィールド上の二人に注目している、ソーサラーキューブから機械音が発せられ緊迫した空気が更に重くなつていく。

『3・2・1——』

レスターと女子生徒がそれぞれが持つ得物を構えて「気力」を昂らせる中、明日香はふと気になる事があつた——

——こんな緊迫した空気の中なのに・・・何で武内君達はみんな白々しそうに眼を細めてあの女子を見ているの？

『LET' s GO AHEAD!』

「うおおおおおおおおおおおおおつ!!」

明日香が感じた懸念の正体がわからぬままレスターと女子生徒の決闘が始まり、お互い雄叫びをあげながら一気に距離を詰めて全力で得物を振るいぶつけ合う、火花が飛び散るチカラとチカラの正面衝突だ、互いの得物の刃が接触して鏗り合い状態になる。

「ぐおおおおおおおつ!!」

「ふぬぬぬぬぬぬぬつ!!」

腕にチカラを加えて押し込もうとするレスターと足に踏ん張りを効かせて押し返さんと踏ん張る女子生徒、体格差で言えば断然レスターに軍配が上がるのだが彼等は「星脈世代」、その身体能力は鍛え抜かれた自力以外にも他よりも飛び抜けた「気力」の大きさがものをいう。

「はああつ!!」

「くっ!」

女子生徒の剣がレスターの戦斧型煌式武装——《ヴァルディツシュレオ》を外側に突き出した。巨体を持つレスターが細腕の女子に押し負けたというのにそれを見ていた出雲那達は当然だと言わんばかりに無反応だ、第一次遭遇の落星雨により「三大源力」が人類に齎された事によつて現在は小さな女の子が大のプロレスラーを投げ飛ばすなんて出来事など珍しくない時代だからだ。

——これでマクフェイル君の胸が大きく空いたわね、このままあの人が隙だらけに

なったマクフェイル君の胴に剣を振り抜けば気力次第だけど決定的なダメージが入る筈、勝負は視えたわね……。

女子生徒の剣が隙だらけになったレスターの胴を狙って振るわれるのを見て明日香は女子生徒の勝利を確信する、彼女の思った通り防御に回した気力の量次第ではダメージを軽減する事が出来るのだがこれだけ無防備になった胴に剣がクリーンヒットすれば幾ら頑丈なレスターと言えども一溜りも無いだろう、轟遠の烈斧これで万事休すか？

「もらったああああああああああああつ!!!」

るような錯覚を感じてしまう、出雲那は手で自分の後頭部を搔いて気を紛らわし、一輝とマイは苦笑いをしながら人差し指で自分の蟀谷を掻き、リインとステイングは片眉と口の片端を小刻みに吊り上げて何だこれ的な微妙な表情をして、善吉とアリサはだらしなく口を開け眼を細めて呆れた表情をして、ローグは腕を組み眼を瞑って他人のフリを敢行し、トニーはのほほんとしている・・・何だこのカオス・・・。

「え〜つと、なんだか微妙な決着になつて微妙な空気になつてしまつたみたいけど・・・とりあえずこれでこの決闘は決着・・・という事でいいのかしら？」

「そ、そうね、あの人倒れたままちつとも動かないみたいだし・・・」

明日香はなんとか微妙な空気を押しきつてこの場にいる皆に決闘が終了したのかと尋ね、彼女と同じ編入生であるステラは明日香に同意する。間拔けな格好で俯せに倒れている女子生徒は未だに全く動く気配は無い、ソーサラフィールドの影響下で全てのダメージが非殺傷ダメージになつているから恐らく命に別状は無いだろうが強力なレスターの腕力で振り下ろされた戦斧がおもいきり脳天にクリーンヒットしたのだ、終わったと思うのが普通の反応だろう・・・だと言ふのに未だにソーサラークューブは決闘の勝利者を告げず、レスターも倒れ伏した女子生徒の1m前でヴァルディッシュレオを構えたまま女子生徒を見下ろして臨戦態勢を解かず、混沌としていた出雲那達も今は倒れ伏す女子生徒を固唾を呑んで見守つていた。当然明日香とステラはそれを見て

変だと感じる。

「え？どうかしたのみんな？」

「何いきなり神妙な空気になってんのよ？勝負はもう着いっ——」

その時だった、間抜けな格好で倒れている女子生徒の指先がピクリと動き——

「くううう——んっ!!」

「えええ——んっ!!?!」

何故か自分の身体を抱きしめる格好で立ち上がりその場で異常に変な絶叫をしたので明日香とステラは思わず素っ頓狂な声をあげてしまった。

ハツキリ言つて異常だ、女子生徒のその絶叫は何だか喜んでいるように感じたからだ。立ち上がった彼女は頬を朱らめて激しく息遣いをしながら剣を構え、まるで欲情しているかのようにとろけた眼をして口を開いた。

「良い——っ！レスター、相変わらずお前の一撃は凄まじいな！思わずイッてしまったではないか！んっ、この頭から足の指先に雷が駆け抜けたかの様な衝撃い、なんと言う快感だ!!」

「ちっ！やっぱりくたばってなかったか、この変態女騎士が……」

「んあっ♥」

「喘ぎ声をあげてんじゃねえっ！」

「……何なのこれ？」

「どうなってるのよ、あの女頭おかしいんじゃないの……」

「……あの人は『ダクネス』先輩……高等部三年でレスターのタツグパートナーなんだけだよ……困った事にあの人は重度の「ドM」だったりするんだよな……」

「あの人見た目は凛々しくて勇敢で凄く強そうな女騎士なんだけど……実は剣の腕は剣を握ったばかりの小さな女の子にも完敗する程で……相手に攻撃が全く当たらないみたいなんだ……」

「……」

バトルフィールド上で繰り広げられる茶番を見てドン引きし善吉とマイの説明を聞いて絶句する明日香とステラ、ドMで剣が当たらないとか騎士として無能もいいところではないのだろうか……そうこうしている内にダクネスのテンションもレスターの怒りのボルテージも上昇して行く。

「くたばりやがれ年中欲情女っ!!」

「ぐふっ……ふふふ、今のは効いたぞレスター……だがこれだけでは足りないぞ！もつとだ！もつと私を楽しませろ！そしてその凶刃で私の身体を甚振りつつ身に着けている学生服を徐々に引き裂いて私を扇情的な姿にして辱め、そして「ぐふふふ、身に染みたかよダクネス、これがてめえとオレとの実力の差だ、理解したんならオレ様に跪

け、この雌豚が！」と私を屈服させ、「わかったんならオレ様に敬意を見せてもらわねえとなあ、くつくつくつ、ならオレの靴を舐めろ、この負け犬が！」と公衆の面前で私に服従プレイをs——」

——ブチッ！

レスターはヴァルディッシュユレオによる怒りの轟撃を次々とダクネスに叩き付け続ける、しかし中途半端な威力の攻撃はドM女騎士の劣情を煽るだけであり、ダクネスは欲情のあまり観戦している出雲那達もドン引きするような妄想を口走って暴走し始め、それがレスターの怒りを頂点に達しさせた。

「いい加減にしゃがれ!!この筋金入りのド変態がああああああつ!!」

レスターが練り上げた気力が大きく振り上げたヴァルディッシュユレオの光刃を二倍近くに膨れ上がらせ、それを興奮しながら暴走する変態騎士の脳天に振り下ろされた。

「んあああああああ————っ!!」

憤怒と共に振り下ろされた巨大戦斧は変態を再び地に沈めた、派手な轟音が鳴り響き核兵器の爆発にも耐え得るバトルフィールドに亀裂が入る程の威力だった。

この一撃はレスター・マクフェイルの必殺技《ブラストメネア》であり、これは多くの星脈世代が好んで使用する【煌式武装】と呼ばれる武具の核である《マナダイト》に

練り上げた気力を注ぎ込むことよつて一時的に煌式武装の出力を高める《流星闘技（メテオアーツ）》と呼ばれる技である。

そんなダイヤモンドですら砕きそうな一撃を脳天に叩き落されたダクネスは「イツた・・・逝つたではなく【イツた】・・・」。

「はあつ、はあつ、はあつ・・・ふざけやがつて、はあつ、はあつ、はあつ、さすがの変態もこれをくらつて」「ああつ、この全身の骨を粉碎するような火力、なんというご褒美だ♥」：この変態が・・・」

そして変態は再び立ち上がった、非殺傷ダメージとはいえブラストメネアをモロにくらつたのにこの変態はピンピンしていて身体を火照らせながら顔を引き攣らせるレスターに劣情の目を向けている・・・。

初めてこの光景を目にする明日香とステラは勿論、偶にこの光景を見る事のある出雲那達でさえダクネスの変態的奇行と規格外の耐久力の前に絶句していた。

「じよ、冗談よね？流星闘技をまともに受けて立ち上がった・・・」

「言い忘れてたぜ、ダクネス先輩は攻撃が当たらない代わりに防御力と耐久力が異常に高いんだつた・・・」

「去年《魔導星防軍（エトワール）》の《航空教導隊》が期間限定で開催した教導体験会の模擬戦で魔導星防軍の《エース・オブ・エース》と名高い【高町大尉】の集束魔法を

まともに受けてケロツとしてた上に「ああつ、こんな星を軽く砕きそうな火力、くらつた事は無い♥」と発情して高町大尉に迫り寄って大尉にトラウマを植え付けていた出来事は悪い意味で印象に残ったよね・・・」

「しゅ、集束魔法をくらって発情ってどんだけよ?」

ダクネスの防御力は呆れる程恐るべきものだった、それも下手をしたら青学どころか四大学園一かもしれないくらい・・・これも真性のドMが成せる業か・・・。

「とつととくたばりやがれ!このド変態がつ!!」

「んあつ!良いつ♥公衆の面前で痛めつけられているだけでも精一杯なのに、その上罵倒まで・・・っ!お、お前は一体こんなに私を喜ばせてどうするつもりなのだ!」

「どうもしねえよ!このド変態!!いい加減沈めよ、沈めええええええええつ!!!」

「んああああああああああんつ!!」

怒り心頭で激昂するレスターは罵倒しながら狂うようにヴァルディッシュレオの轟撃を変態女騎士に浴びせまくり、ダクネスは斧撃のラッシュをモロにくらい続けて狂喜乱舞し、観戦する出雲那達は異常過ぎる光景の前にひたすら啞然とする。

それから約三十分後、ブラストメネアを通算十三発程放ったところでダクネスはようやく気絶し（まるで事後の様に身体を火照らせて満足そうなアへ顔で絶頂（エクスタシー）している）、この決闘はレスターの勝利で幕を閉じたのだった・・・。

青竜学園生徒会の一時（ひととき）

出雲那達がドラゴンスタジアムの模擬戦場に足を踏み入れている頃、青竜学園本校舎内にある生徒会室に今朝出雲那と一輝に決闘で負けた風紀委員の三人が訪ねて来ていた。

「という訳で、最近の我が学園の生徒達は規則を蔑ろにして学園の秩序を乱す傾向がありますわ、学園に不必要な所有物を持ち込み他者に不敬を働くなどの素行の悪い行いをする者が大勢居るといふ困った現状・・・東堂刀華、あなたは生徒会長としてこの事をどう思っていますの？」

風紀委員長のクレアが目の前にいる刀華に青学が抱える問題をどう思っているのかを問い質している。リディとエリカが従者のように左右に立ちパイプ椅子に座って優雅に紅茶を飲んでいる為一見高慢な態度の様にも見えるがクレアの目は真剣だ、この一件を非情に重く受け止めているのだろう、刀華はそれを感じて真剣な表情でクレアと向き合う。

「学園の現状については私も良いとは思っていません、なるべく早く改善策を取るつもりではありますが・・・クレアさん、あまり厳し過ぎるのも良くないと思いますよ？や

り過ぎた抑制は人の心に不満を生みますから」

「甘いですね、素行の悪さは意識の緩さからなるもの、不遜な輩というのは少しでも甘さを見せればすぐに付け上がり好き勝手に秩序を乱すものなのですわ、それを正す為に規則はあります、故に生徒の取り締まりは厳重でなければなりませんのです、東堂刀華、あなたも生徒会長になったのなら皆の模範であるその立場をしっかりと自覚してもらいたいものですわね」

「私はみんなに恥じるような振る舞いをしているつもりはありませんよ」

「ならこの生徒会室内の無秩序っぷりは何ですの!？」

クレアは室内全体を指さして大声で指摘をした、それもその筈、生徒会室内は今床に足場が無い程物が散乱した散らかり様であり混沌と化しているからだ。

更に言うところ此処にいる生徒会役員等の立ち振る舞いも問題である、書記である紫掛かった茶髪で真面目そうな男子生徒《アスベル・ラント》と金髪で高飛車そうな印象の男子生徒《ユーシス・アルバレア》は執務机で資料を纏めており、会計である黒髪で吊り眼の男子生徒《ジュード・マティス》と桃色の若干ウエーブが掛かった髪をしていて清楚な印象の女子生徒《江迎怒江（えむかえむかえ）》はその隣で設備運営に関する費用の計算をしていて、庶務である薄紫の髪で気の弱そうな男子生徒《ユーマ・イルバーン》は来客者であるクレア達に御代わりの紅茶を酌んでいる為、この五人に関しては真

面目に仕事をしているので問題は無い、だがその他の三人が問題だ。

「あらら指摘されちゃった、【貴女達が連絡も入れずに急に来たから片付けられませんでしたー】なんて理由ワルスラーン社のお嬢サマには通用しないよね、いや流石【二元】無敗の女王（パーフェクトクイーン）、二年前にボコボコにされた上に今年の生徒会長の座まで奪った相手には大変お厳しい事で」

刀華の一步後ろ隣に立っている生徒会のもう一人の庶務である黒いボサ髪で気の抜けた表情の男子生徒が悪怯れるフリをして皮肉を言う。

「《千種霞（ちぐさ かすみ）》！貴様あつ！！」

「クレア様に対して何たる侮辱をっ！！」

「お止しなさいリディ、エリカ、わたくしがワルスラーン社の令嬢なのも、二年前にわたくしが初出場した王竜四武祭で東堂刀華に負けたのも、わたくしが生徒会長になれなかったのも全て事実ですわ」

「しかしクレア様！」

「いいからお黙りなさい」

「くっ、申し訳ありませんでした・・・」

霞の皮肉に当然クレアを慕っているリディとエリカは霞に食って掛かろうとするのだが、クレアが冷静に二人を制して下がらせた。口では平静を装っているクレアだが彼

女の右手を見てみると血が滲む程拳を握りしめていて内心穏やかではなさそうである。その事からどうやら刀華とクレアの間には大きな罅があるようだ。

「アハハ☆、霞君さあ、それはちよつと風紀委員長さんに失礼なんじゃない？ 幾ら本当の事だからって過去の古傷を抉るのは良くないと思うぜ☆」

「お兄いマジデリカシー無さ過ぎ、て言うかキモい」

「キミたち・・・自分達は関係ないような態度取っているけど、東堂会長が風紀委員長さんに怒られているのは主に君達二人の所為なんだからね・・・」

室内の端にある大型テレビで仕事をサボってテレビゲームに没頭する怠け者副会長二人が皮肉を言った霞を扱き下ろす。癖毛のある銀髪で幼稚園児のように小柄な男子生徒《御祓泡沫（みそぎ うたかた）》、赤混じりの茶髪でやる気のなさそうな雰囲気な霞の妹《千種明日葉（ちぐさ あすは）》、生徒会室内を散らかしたのはこの二人だ、霞はその事を指摘するが二人は話を聞かずにテレビゲームを再開する・・・だが――

「もう！ うた君も明日葉さんもゲームはいい加減にして片付けなさい！」

「わっ!?! ちよ、ちよつと待って刀華！ それ二時間前からセーブしてな、ちよま、う、うわあ ああっ!!」

「あくあ、ラスボス前だったのに消えちゃったよ、また最初からラストダンジョンやり直しじゃん、あははウケる♪」

「ウケませんっ！まったく二人共こんなに散らかしてだらけ過ぎですよ！クレアさんの言う通り風紀が乱れています！全ての生徒の模範となるべき生徒会役員としてあるまじき姿です！」

「いやウケるでしょ？会長だって寮だと下着のまま昼寝してたりするくせにだらけ過ぎって」

「何、東堂会長の下着姿？・・・明日葉ちゃんそれ詳しく」

「千種君！」

「あはは☆、刀華は昔から気を張る相手がいないと際限なく怠け出すからねー」

「いい今私の私生活は無関係でしょ！と、ともかく早く片付けてください！」

「あははは・・・なんなら僕も手伝うよ、丁度仕事も一区切り着いたところだし」

「私も手伝います」

「ほら、ジュード君と江迎さんも手伝うと言ってくれていますよ！協力して早く片付けて下さい！片付けないと全部捨てちゃいますからね!!」

「うわ、わかったわかった！」

「さあ、ハリー！ハリー！」

刀華（オカン）の掛け声によりドタバタと慌ただしく部屋の片付けが始まった、人目も気にせずに埃を起して動き回る生徒会役員達を見てクレアは呆れている。

「はあ．．．まったくあなた達ときたらいつもいっつも．．．普段から規則正しい行動を心掛けていれば人前で醜態を曝す事などありませんのに．．．」

「本当にすいません、みつともないところをお見せしてしまいましたね．．．」

「謝罪の言葉は不要ですわ、あなた達が生徒会に相応しいと言うのなら言葉よりも行動で示してほしいものですわね」

クレアは頭を下げて謝罪の言葉を述べる刀華にそう言つて立ち上がり、刀華に背を向ける。

「あなたも生徒会長ならば胆に銘じておきなさい東堂刀華、青学の生徒達はあなたに期待しているのですからね、その期待を裏切るような事はなさないように」

「ええ、もちろん承知しています」

「ならいいですわ、その意識を努々忘れないように．．．それからあなたの弟子である武内出雲那にも風紀を乱すような行為は控えるよう言っておきなさい、あの男は今朝もわたくし達が行つていた持ち物検査を遅刻するからという不誠実な理由で見逃すよう決闘を仕掛けて来たのですからね」

「ほう、なるほどねえ、要するに武内にその決闘で無様に負けたから奴の師にあたる東堂会長に自分達の失態の尻拭いをしろというわけだな、無様に負けた失態の尻拭いを」

「ええいつ、二度も言わなくて結構ですわ！リディ！エリカ！行きますわよ！」

クレアは誠意を尽くして自分の言った事に同意してくる刀華に今朝問題を起こした出雲那に注意を呼び掛けるよう言うが、その事でまたしても霞が皮肉を言ってきたのでクレアは腹立たしくなりプンプン頬を膨らませながら取り巻きであるリディとエリカを引き連れて生徒会室から去って行った。

「やれやれあの風紀委員長さんマジ堅物で分かりやす過ぎでしょ、揶揄いやすいつたらありやしない」

「千種君、あまり迂闊な事を言って人を怒らせるのは感心しませんよ」

「や、それ無理だと思うから、て言うか無理だから。お兄いは相手の悪意にカウンター打つことでしかコミュニケーション取れないし、て言うかコミュニケーション取れないし」

「はあ、明日葉ちゃんは手を動かさそうねー」

「お兄いキモい」

クレア達が生徒会室を去ったのを確認すると刀華はクレアを怒らせた霞を戒めるのだが、話を聞いた明日葉が片付けを中断し霞を貶す感じで言っても無駄だと刀華に断言し、その事に不満を感じた霞が誤魔化すような口調で明日葉に片付けを再開するよう言い、明日葉はそんな霞を罵倒する言葉を放って片付けを再開した。

「それで？学園の風紀の乱れについてはまず自分達がしつかりしない事には何も言えな

いのはいいとして・・・武内には注意しておくの？」

「いいとしてって、いい訳ありません！しっかりして下さいね！当然イズ君・・・いや、武内君が他人を困らせたのならO☆S E☆L T U☆K Y O☆Uします！」

「なんだか【お説教】のニュアンスがおかしい気がするが、どうやら刀華はクレアの要望通り出雲那に注意を呼び掛けると決めたようだ、そこへ——」

「会長、今月の資料を纏め終わりましたので確認と承認印をお願いします」

とアスベルが刀華に呼び掛けてきた。

「・・・という訳で千種君、私は仕事で忙しいので代わりに武内君を探してここへ呼んで来てくれますか？」

「・・・・・・・・」

刀華が霞の肩に手をポンツと乗せて出雲那の搜索を命じる、見計らったかのようなタイミングに霞は嫌そうな顔をするが内に社畜魂を秘める彼は無言で頷いた、悲しい性である。

「それと別件なのですが、ついでにマイ・ナツメさんも呼んで来てくれますか？多分彼女は武内君達と行動を共にしているでしょうから面倒にはならないと思いますし」

「？・・・構わないけど・・・何で？」

探して来るのは構わないが何故マイを連れて来るのかを疑問に思った霞は刀華に理

由を訊ねる。

「それは——」

刀華が理由を話すと霞は「ああ、ナルホドね・・・」と納得して生徒会室を出て二人の捜索に向かうのだった。

レスターVSダクネス（変態）の決闘後、レスターが事後の様に満足そうな表情で気を失ったダクネスを後方の控えベンチに放り投げてバトルフィールドを降り、協議の結果、善吉&トニーVSライン&アリスの決闘を先に行い、次に出雲那&一輝VSステイ

ング&ロークの決闘を行うという順番に決まった。

そして前者の試合が始まってから両者互角の拮抗状態のまま数分が経ち、バトルフィールド中央で善吉とリインが近接戦（クロスレンジ）で打ち合う。

「おらおらっ！どうしたリインッ！太刀筋が寝ぼけてるぜっ！」

「くっ、速い!?なんて凄まじい蹴りの応酬なんだ！」

それは一輝のセリフだろ!?とツツコミが入りそうな事を言い放ちながら善吉はシューズ型煌式武装を履いた足で怒濤の蹴りの乱撃をリインに浴びせ、リインは善吉の蹴りの速度が速過ぎる為手に持った太刀を盾にして防ぐのが精一杯であり防戦一方な状態だ。

人吉善吉——彼は蹴り技を主体とした肉弾戦を得意とする星脈世代である、幼い頃から鍛え上げたその蹴速は音速を超え、敏感な恐怖心を利用して人間の限界反射速度である0.1秒で敵よりも速く攻撃を叩き込み、手数で相手を圧倒するバトルスタイル。

——善吉の足技は本当に圧倒的に速くて鋭いな、だけど良く見極めれば必ず隙は見つかる筈！

善吉の蹴りの猛ラツシュに耐えながら守勢から抜け出すチャンスを探うリイン、耐えに耐えて善吉の疲労が蓄積されるのを待ち——

——・・・ここだっ！

「ハアッ！」

「っ!？」

蹴り続けた疲労により一瞬蹴りの鋭さが鈍った所をリインは太刀の柄尻で善吉の蹴り上げを叩き落し、大きくバックステップで後方に跳躍して善吉から距離を取った。

「チャンス！燃え尽きなさい！《フランベルジュ》ッ!!」

そこへリインの後方に控えていたアリサが魔弓型魔装錬金武装に炎の魔力矢を装填しフリーになった善吉に狙いを定めて放つ。

「うおっと！危ねっ!!」

善吉は身体を反らす事によつて間一髪炎の魔力矢を躲す事に成功するのだが――

「逃がさないわ――」

アリサは炎の魔力矢を放つてからすぐに次の魔力矢を魔弓に装填し、今度は善吉の真上に狙いを定めて弦を引き絞り――

「――《メルトレイン》ッ!!」

魔力矢に多量の魔力を《収束》すると同時に上空に放ち、魔力矢が善吉の頭上10mの位置で破裂すると同時にそこを中心として広範囲に火の雨が地上に降り注いだ。

アリサ・ラインフォルト――彼女は魔弓型魔装錬金武装《プリマシューター》による遠距離支援を得意とする魔弓士タイプの魔導士であり、【炎熱】と【光翼】の属性変換

付与による属性魔法攻撃と回復支援魔法を使い熟す。

「ちよつ!?マジかよ!やべえつ!!」

体勢が不安定な状態で上から降って来る無差別絨毯爆撃に戸惑う善吉、身体を反らし
た無防備な体勢ではこの広域殲滅魔法をやり過ごす事など不可能だろう、万事休すか?

「そうは行かないよ、そおれ、《怠惰の欲球(ニートボール)》」

そこへ経った今左サイドでラインの水平斬りをスライディングで下に潜り抜けて躲
したトニーが一瞬の間を突いて「銃型状態の煌式武装」の銃口を善吉の頭上の火の雨に
向けてその銃口から大きめの鈍色の魔力球を撃ち放つ、一直線に飛んで行った鈍色の魔
力球が火の雨の一部に直撃するとパンっ!という音を立てて破裂し、そこから侵食する
ように赤い火の雨の色が鈍色に染まって行き、火の雨全体が完全に鈍色に染まるとな
んとその落下速度が大幅に減速した。

「おおつ、ナイスだトニー!サンキュな!」

「貸し一つだよ、今度ケーキ奢ってね〜♪」

メルトレインが減速している隙に善吉は空爆範囲から避難してトニーと言葉を交わ
した。鈍色の炎雨が誰もいない広範囲の石畳の床に突き刺さって行き床に焦げ目一つ
付けずに全ての火が消滅していく、本来ならばアリサのメルトレインはこの鋼石のバト
ルフィールドを焦がすくらいの威力はあるのだが、どうやらトニーが放った怠惰の欲球

は直撃したモノの速度だけでなく破壊力まで減少するようだ・・・それにしてもイヤな技名だな・・・。

トニー・フィルウィン——彼は魔術師である、ここへ来る途中でトニー本人が明日香に暴露していた通り彼は「被弾した対象を弱体化させる魔力球」を生成する能力を持つている、様々な形状の武装に変化する《煌式可変武装（フェアルクス）》を二刀流で自在に使いこなし、小柄な身体で素早く動き回って相手を翻弄する。

バトルフィールド上で一進一退の攻防を繰り返り広げる善吉達、両者一步も引かない手に汗握る戦闘に外野も気を昂らせていた。

「へえ、四人共なかなかやるじゃない、ホント今日戦えないのが残念だね」

「ははは、気持ちわかるよステラ、僕も早く剣を交えたくてしょうがないからね」

「ああー早く戦りてーっ！そろそろケリ付けろよ善吉いっ！」

「うるさいぞステイング、黙って観れないのか？」

「あはは・・・でも四人共以前より一段と腕を上げたよね、リンとアリサは相変わらず息ピッタリだし、善吉とトニーはタッグ結成当初はバラバラだったのに今じゃあんなに上手く連携を取るようになったしね！」

「フンツ！ま、まあまあやるじゃねえか・・・」

ワイワイガヤガヤと観戦する一同、早く自分も戦いたくてうずうずする者や決闘して

いる四人を以前の彼等と比べて評価する者など様々な盛り上がり方で気を高まらせている。

「へっ、アイツ等なかなか熱くさせてくれるじゃねえか！」

「ええそうね、実力は両タッグほぼ互角。人吉君達は人吉君が手数 of 近接戦で相手に何もさせずに攻め立て、逃したのならフィルウィン君が弱体化の能力で時間を稼ぎ、再び人吉君がラツシユで攻めるといふ攻撃コンビネーションが主軸の戦法。一方シユバルツアー君達は近接戦主体のシユバルツアー君を攻撃の基点として遠距離支援主体のアリサさんが臨機応変にシユバルツアー君を援護するといふ比較的安定した戦法。人吉君達もシユバルツアー君達もなかなかいいタッグだわ」

「へえ、終、お前なかなか良い眼してるじゃねえか」

「ふふっ、こゝろ見えても戦術眼には自信があるの……まあ、さっきのダクネス先輩には凄く驚かされたけどね……」

出雲那と明日香もかなり楽しそうに会話しながら観戦している。

「あれは究極の初見殺しだからな、ある意味……んじやよ、お前はどっちが勝つと予想する？」

「ん、そうね……一見すると強力な必勝パターンを持っている人吉君達の方が有利に見えるでしょうけど、私が見る限りでは勝つのはシユバルツアー君達よ」

「奇遇だな、オレもそう思うぜ、なにセリインは「灰色の騎士」つつう二つ名持ちの実力者で、そのリインを経つた今フリーにしちまつたんだからな」

出雲那と明日香は共にリイン達が勝利すると予想した。

リイン・シユバルツァー——今出雲那が言つた通り彼は「灰色の騎士」の二つ名で知られる実力者だ、彼は一応ただの星脈世代なのだが煌式武装ではなく通常の太刀である《風切（かざきり）》を使用、気配察知能力と洞察力に優れそれを活かした堅実な戦い方をする、それだけなら至つて平凡より少し上というくらいの星脈世代なのだが……彼は《八葉一刀流》という流派の使い手だ。

「八葉一刀流」とは東方出身の剣士である《劍仙（けんせん）》《ユン・カーファイ》老師によつて創始された流派であり一部例外はあるが基本的に刀や太刀を使用する剣術だ、この流派は一から八の型まで細かく分かれていて八葉を修める者は一通り全ての型を学んでいる、そこから更に自分に合った型を選んで修練を積んでいき、どれか一つの型でも皆伝に至つた達人はこう呼ばれるのだ……《劍聖（けんせい）》と……。

「これで決める！四ノ型《紅葉切り》っ!!」

「しまつて——ぐはっ!」

「おろく☆」

アリサの援護のおかげでフリーになつたリインが風切を鞘に収め、音速にも近い目に

も留まらぬ速度で一ヶ所に固まった善吉とトニーの眼前に接近し、弧を描く剣筋の抜刀術で二人を斬り抜け、斬られた二人は床に沈んだ。

『END OF DUEL! winner リン・シユバルツァー&アリサ・ライン
フォルト!』

ソーサラークューブから発せられる機械音声が勝者達の名を告げバトルフィールドを覆っているソーサラーフールドが解除され決着が着いた、勝ったのは出雲那と明日香の予想通りリインとアリサのタッグだった。

「負けたあつ、チキショー!おいトニー!もう少しリインを抑えてられなかったのかよっ!」

「抑えててもよかつたけど、それだと善吉はアリサのメルトレインで丸焼きになっていたよね〜」

「ははは・・・でもいい勝負だった、危うくこっちも押し切られるところだったよ」
「そうね、機会があればまたやりましょう」

決闘が終了し倒れた二人を起こしてから四人は和気藹々とした言葉を交わしてバトルフィールドから降りる、とても充実した時間だったのだろう、四人とも気分のいい顔つきをしている。

「よっしゃ!やつと終わったかあ、待ちくたびれたぜ!」

「確かに結構待ったな、退屈はしなかったが」

「次は僕達の番だね、行こう出雲那君！」

「ああ！ たっぷり暴れてやるぜ！」

そして待つてましたと言わんばかりに出雲那と一輝とステイングとローグの四人が善吉達と入れ替わるようにバトルフィールド上に上がった．．．青学最強タッグの榮譽を懸けた決闘が今始まる。

激突、黄金タツグVS双竜コンビ!!

『DUEL standby』

「来てくれ、陰鉄!」

「へっ、いつでもいいぜ、どっからでも来やがれ!」

浮かび上がったソーサラークューブが起動しソーサラークューブが展開された、石畳のバトルフィールド上で伐刀者である一輝が刀型の霊装を顕現しその柄を手にする、その右隣では出雲那が腰のベルトの右側に差す鞘に収められた二つの得物の内小さい方の刀の柄を左手で握り20mの間を挟んで正面に相對する二人組を凝視し不敵の笑みを浮かべている。

『3・2・1——』

「上等!アンタ等とオレ等、どっちが上か白黒ハッキリ付けてやるぜ!」

「.....」

対するその二人——ステイングとローグは二人共得物を持たずに丸腰で出雲那達と對峙している、ソーサラークューブから発せられる機械音が試合開始のカウントダウンをする中ステイングは今にも飛び出して行きそうな前傾姿勢で意気込み、その右隣に

立つローグは無言で拳を握る。

「昨年、鳳凰四武祭ベスト4【青学の黄金タッグ】VSベスト8【青学の双竜】、真に強いのはどちらか——」

『LET'S GO AHEAD!』

試合開始!

「行くぜええ!」

「ああ」

互いに意思疎通し合って気合いを入れる双竜、二人は先制を仕掛ける気満々だ、スティングは出雲那を、ローグは一輝を見据えてそれぞれ正面から向かって行こうと一歩を踏み出す……が——

「っ!?」

その瞬間二人は声を発する暇も無い程の驚愕を目にした、20m先にいた筈の出雲那と一輝が「抜き足」を使用して双竜を欺き一瞬のうちに二人の至近距離（クロスレンジ）まで距離を詰めて来ていたのだ。

「ドッ! ガツ!」という打撃音と共に出雲那の柄打ちがスティングの腹に突き刺さり、一輝の峰打ちがローグの顔面を打つ。一瞬の隙を突かれてキツイ先制をもらった双竜は石畳の床を弾むように転がり、場外手前ギリギリでスタイリッシュに受け身を取ってそ

の場に片手を着き、片膝を着く体勢でなんとか堪えた。

——やってくれるじゃねーか、そう来なきやな！

一瞬の出来事に額に冷や汗を掻くステイングであったが、引き締まった表情でまるで油断する素振りも無くこつちを見据える出雲那と一輝を見て面白いという笑みを浮かべていた。

「おいおい、出雲那の奴【どつからでも来やがれ】と言っておいて速攻かよ・・・」

「アハツ、ステイングとローグ棒立ちでやられてるよ」

出雲那と一輝の先制の一撃があまりにもスマートに入ったので外野の善吉達は様々な反応を示す、呆然と呆れる者もいれば愉快に笑みを浮かべている者もあり、ざわざわと少し興味が沸き上がってきていた。

「相手の意識の間に自分の存在を刷り込ませる歩法・・・やるわね武内君、正直驚いたわ」
「イツキもしばらく見ないうちに初動のキレが良くなっているじゃないの、ふふつ、手合わせするのが一段と楽しみになってきたわ！」

明日香とステラの編入生コンビも感心を示していた、明日香は出雲那達の一連の動作を視て【抜き足】の原理を理解して微笑を浮かべ、ステラは昔より腕を上げていた恋人を目の当たりにして面白いと不敵の笑みを浮かべている。

「流石イツキとイズナ、今年の鳳凰四武祭ベスト4つてだけはあるわ♪まったく相手の

頭悪そうな金髪とネクラっぽい黒髪は舐めているのかしら？煌式武装も魔装錬金武装も通常武装すら持たない丸腰でイツキ達の相手をするなんて」

一輝達に感心を寄せるステラであったが彼女には解せない事があった、それは今彼等と対峙している双竜コンビが二人共に丸腰のまま戦闘を始めている事だ。星脈世代ならば煌式武装、伐刀者ならば霊装、魔導士ならば魔装錬金武装を手に戦うのが基本であり、クレア・ハーヴェイ等武芸者のような特殊な戦士も百武装のような何等かの武装を使用して戦闘に臨むものだ、出雲那が通常の刀を携えるように慣れ親しんだ武装を好んで持つ戦士も少数だが存在する、このように戦士なら誰しもが武装を用いて戦闘を行うのが常識であるのだがステイングとローグは何故か丸腰だ、故にステラは双竜コンビが一輝と出雲那を舐めて掛かっているのかと不快に思っていたのだ。

「ヴァーミリオン、別にステイング達は出雲那達を舐めているわけじゃねーぞ、素手で戦うのがアイツ等の戦闘スタイルなんだよ」

ステラの発言を聞いて善吉がそう補足してきた。

「素手で戦う戦闘スタイル？じゃあアイツ等武装がいらないくらい相当身体能力の優れた星脈世代だっというの？」

「いや、身体能力が優れているのはその通りだけど、ステイングとローグは二人共魔導士だよ、かなり特殊な魔法を使う・・・ね」

「特殊な魔法？」

ステラは疑問を口にする、すると今度はマイが双竜の二人について簡単に説明をし、ステラの隣で話を聞いていた明日香がどういう事なのと首を傾げた。

まあ、まずは見てみなよとマイが促すようにバトルフィールド上に視線を向けると、フィールド端のステイニングがなにやら思いつきり息を吸い込む動作をして何かを口内に含むかのように頬を膨らませて息を止めるかのように口を閉じていた、そして——

《白竜の咆哮》っ!!」

出雲那達に狙いを付けるよう見定めると床に四つん這いになるよう勢いよく体勢を倒すと同時に口から吐き出すように純白のレーザー光線が放たれた。

「なっ!?!」

「口からレーザーを吐いたあっ!?!」

余りにも非常識な光景に明日香は声を洩らして驚きの表情を浮かべ、ステラは驚愕のあまり動揺の言葉を口にする、他の皆は見慣れているらしく平静だが、編入生である二人にとっては人間が口からレーザー光線を吐くなんて日常では考えられない事だろう・・・まあ、そもそも異能者蔓延るこの時代に非常識もヘツタクレもないのだが・・・。

「うおっとっ!?!」

出雲那は直線的に正面から飛んで来たレーザーを身体を傾けてギリギリ躲す。

「やつハアツ!!」

「くっ!」

続けてスティングは一輝に狙いを変えて永続的に口から放出しているレーザーを曲げ、薙ぎ払うようにレーザーが一輝を襲う。瞬時に身を屈めてレーザーをやり過ごした一輝であったが、そのすぐ後ろの床を弧を描くようにレーザーが着弾し、爆煙が一輝を包囲した。

「.....」

視界を封じられた一輝は動揺せず陰鉄を正眼に構えて冷静に周囲の気配を探り始める、この不測の事態にも冷静に対処する精神力の高さは流石と言ったところだ。

——誰かが右方向からこっちに向かって来ている、結構気配を隠すのが上手いね.....いつも感情を剥き出しにしているスティング君がこれほど上手く気配を隠せるとは考え難い.....つまり今この煙に紛れて僕に奇襲を仕掛けて来ようとしているのは

もう一人の相方だろう.....一輝が予測した通り案の定スティングの相方であるローグが勢いよく視界を覆う煙を突き抜けて来て一輝を奇襲した。

「《影竜の斬撃》っ!!」

ローグは激しく迸る黒い靄のような魔力を纏った右拳を一輝に繰り出し、拳圧で周囲

を覆う煙が吹き飛ばされる。

「!!」

「甘いよローグ君」

事前に奇襲を察知していた一輝は取り乱す事無く澄ました表情でローグの拳を陰鉄で受け流し、切り返してローグの拳を外側に弾き飛ばして隙を作る。

「くっ!」

「おっ、来た来た!」

「何っ!?!」

その隙を狙って陰鉄が再度切り返されその刃がこの身を斬り裂く前にローグは瞬時にバックステップで後方に大きく跳躍して一輝から距離を取る、しかし跳躍した先には既に出雲那が回り込んでいたのでローグは眼を見開いて驚愕する。

「葵柳流帯刀術、《拡星雨（かくせいう）》!!」

出雲那は鞘に収められた刀を左手に取り右脚を軸にして身体を一回転させ遠心力を付けると、その勢いのまま鞘付きの刀を床に突き刺し内側から捲き上げるようにゴルフスイング、それによって碎かれて打ち出された鋼石製のバトルフィールドの破片が無数に前に打ち出され、拡散された無数の「白い石」の弾丸の嵐が豪雨のようにローグの背面に襲い掛かる。

「おっと、させるかよっ!」

そして無数の白い石がローグを撃ち抜く前にステイングがローグの壁になるよう立ち塞がった。

「なっ?! アイツやっぱ見た目通りバカなんじゃないの? 幾ら相方を庇う為とはいえ魔力障壁一つ展開しないで肉壁になるなんて!!」

ステラはステイングの咄嗟の行動を目の当りにして叱咤するようにそう言う、無防備のまま壁になったところで自分がやられるだけだろうし、下手をすれば防ぎきれずに相方諸共無数の破片をモロにくらって共倒れ敗北が確定してしまうだろう、なのでステラはステイングが愚かな行動をしたと思ったのだ。だが、次の瞬間彼女の予想は裏切られる事となる、ステイングは飛来して来る無数の白い石を前にしてペロリとごちそうを目の前にする子供のようになど唇を一回舐める、そして――

「ガブガブガブツ! バキバキバキツ! ふーっ、喰った喰った、金掛かっているだけあつてなかなか美味いじゃん」

一欠片もの残さず喰い尽くした、飛来して来た無数の「白い石」を。。

「な、なああああつ?! 食べちゃったあああああああつ!!」

「あく、やっぱりそうなるよな。。」

「驚いて当然よ、私も初めてこれを見た時は恥ずかしいくらいに取り乱したんだから」

そんなメチャクチャな光景を目の当たりにしたステラは当然驚愕して取り乱している、当然だ、人間が石を食してしまうなんて馬鹿げた現実すぐに受け入れられる筈が無い、善吉達はこれにも見慣れている為動揺はしていないが大声で発狂するステラを見て同情している、この異常な光景を初めて目の当たりにした時今のステラと同じくらい発狂したというアリサの発言からどうやら皆この光景に慣れるのに相当苦労したという事が窺い知れる。

一方、ステラと同じ編入生である筈の明日香は意外な事にこの光景に納得して平静であつた。

「・・・成程、あの二人は《滅竜魔法》の使い手、《滅竜魔導士（ドラゴンスレイヤー）》だったのね」

「なんだ終、お前ステイング達が使う魔法の事知ってたのか？」

「ええ、希少な《古代魔法（エンシエントスペル）》だったからこの学園にその使い手がいるとは思っていないくて正直さっきは驚いたけど」

「ちよつ?!アスカ!知っていたのなら前もって教えなさいよ!アタシだけ大声で叫んじゃつてバカみたいじゃない!!」

明日香はステイングとローグが使う魔法の事を知っていたようであり、善吉がそれに軽く驚く、善吉の疑問に対して明日香が答えると発狂し終えたステラがその事を教えな

かった明日香に文句を言った、同じ編入生なのに自分だけ恥をかいいたのが気に喰わなかったのだろう。

「まったくもう!・・・それにしてもレーザー吐いたり石を食べたり、アスカ、あれ本当に魔法なの?」

「ええそうよ、竜の肺は己の属性の息吹を吹き、竜の鱗は己と同属性の攻撃を溶かし、竜の爪は己のチカラを纏う・・・ユークリフ君とチェーニ君の【滅竜魔法】は自らの身体を竜の体質へと変換させる太古の魔法」

「何それ凄そうっ!!」

「凄そうなんじゃなくて凄いのよ、元々は竜迎撃用の魔法だしね」

「・・・竜迎撃用・・・」

竜（ドラゴン）——40年前の第二次遭遇時に開いた次元の狭間より現れた異生物最強といわれている大型の魔獣、その巨大な体躯は圧倒的な存在感を出し、その身体は世界最硬の希少鉱物（レアメタル）オリハルコンすら凌駕する硬度を誇る鱗に覆われ、その膂力から繰り出される一撃は山をも砕き、その口から吹く焔は全てを溶かす・・・そんな竜の体質に身体を変換させる【滅竜魔法】は全魔法の中でも最強クラスの破壊力を誇り、滅竜魔法を行使する魔導士を人呼んで【滅竜魔導士】と呼ぶ。

明日香が説明した滅竜魔法の内容を聞いてステラは内心揺れていた、彼女は霊力を行

使して異能を使う【伐刀者】であって【魔導士】ではない、しかし彼女の使う伐刀絶技の名は《妃竜の息吹（ドラゴンブレス）》、【竜】の名を冠する異能なのだ、故にステラはステイング達の滅竜魔法に興味を示していた、自分の異能と彼等の滅竜魔法はどちらが強いのかと。

「そして滅竜魔導士は自らが持つ属性と同じモノによる攻撃を無効化し、同じ属性のモノを体内に取り込む事によって自らの魔力を回復、或いは増幅させる事が可能な。私の見立てだとチェーニ君は【影】、そしてユークリフ君は最初【光】かと思っていたけれど白い鋼石の破片を取り込んだのを見て思い直したわ、彼の属性は【白】だろうとね」
「凄い・・・正解だよ明日香！」

「まー、【白竜】と【影竜】だしね〜」

「へえ〜、そうなんだ・・・フッフ、この学園での楽しみがまた増えたわ」

「何を考えているのか想像できるけど、ステラ・・・貴方今一国の皇女様に有るまじき悪い顔をしているわよ・・・」

「二輝との馴れ初めを聞いてもしやと思っていたけれど、やっぱりステラも戦闘狂だったんだな・・・」

明日香が説明し終えてステイングとローグの属性を見た予測で言い当てるとマイが明日香の予測が合っている事に感心しトニーがのほほんとした表情で言う。ステラは

明日香の言った滅竜魔導士の説明を聞いて戦うのが楽しみだと思っているのがバレバレな極悪な笑みを浮かべ、アリサとリインがそれを見て顔を引き曇らせていた。

一同は再び視線をバトルフィールド上に向ける、現在中央に双竜コンビが背中合わせで立ち互いに正面にいる相手と睨み合っている状況であった、ステイングの正面には出雲那、ローグの正面には一輝、彼等は中央の双竜コンビを両側から挟む形で出方を窺っている。

「ちえつ、やっぱ簡単にはいかねえか・・・」

「うん、上手く連携が決まったかと思っただけど流石ステイング君達だね、パートナーのカバーも立ち直りも迅速で追い打ちを掛ける隙がない」

「へっ、当然だろ！オレとローグは青学の双竜だぜ！・・・まっ、今のは少しヒヤツとしたけどな」

微妙な笑みを浮かべて不服そうに言う出雲那と不敵な笑みを浮かべて双竜コンビのコンビネーションに感服する一輝にステイングは強がるように言う、結構ギリギリだったのかステイングとローグの額から若干の冷や汗が流れ出ている。

「しかしオレ達が一制されるとはやっぱ強エなア・・・へっ！こうじゃなきや張り合いが無いぜ」

「ああ、様子見は終わりだステイング」

「だな・・・んじゃ、ギアを上げていくぜっ!!」

ステイングとローグは出雲那と一輝の力量を見て二人を滅竜魔導士のチカラを解放して戦うに値する実力者だと判断する。

《《ホワイトドライブ》》

《《シャドウドライブ》》

双竜が魔力を解放する、ステイングの身体が穢れの無い純白の光を纏い、ローグの身体からドス黒い闇が溢れ出す。出雲那と一輝は竜殺しのチカラを間近で感じ強烈な圧力によって若干畏縮するものの、待つてましたと言っているかの如く楽しそうに笑みを浮かべてそれぞれ得物を構えた。

「・・・いくぜっ!」

第二ラウンドの始まりだ、ステイングの声をゴングに双竜が同時に正面の相手に向かって勢いよく駆ける。

「聖なる白き裁きをくらいなアツ! 《《白竜の鉄拳》!!》

「ぐっ!!」

白き光を纏う白竜の拳が出雲那に放たれる、出雲那は鞆に収められた刀を盾に防御するが最強クラスの攻撃力を誇る滅竜魔法がこの程度で止められるわけがなく、出雲那は刀の防御の上から殴り付けられたステイングの白拳の衝撃によって後方に吹っ飛んで

しまい、今度は彼が場外ギリギリの位置に危なげに着地した、さっきの仕返しと言ったところか。

「くっ！・・・ハッ!!」

一方一輝は闇を纏ったローグの飛び蹴りを身を屈めて下に躲し、脚を振り切った隙を狙って陰鉄を横薙ぎに振るうのだが、それはローグの胴を両断できずに空を斬った、ローグの身体が身に纏う闇と同化した為、彼の本体を捉える事ができず、闇だけしか斬れなかったからだ。

「影は捕らえる事ができない」

闇を纏うローグは同化と実体化を使い分けて一輝を翻弄し攻め立てる、闇と同化している間はその刃を届かせる事は適わない。

「これは魔力増幅の術!?滅竜魔導士が使用するのは初めて見るけれどこんなにも凄まじいなんて・・・」

「イツキイーーツ!!がんばれーっ!!」

「双竜の必勝パターンに入りやがった!やべーぞ出雲那!一輝!!」

「これは二人の勢いを止めないと出雲那達の勝利は厳しいな」

「フンツ!だらしねえな、オレ様なら逆にパワーで押し返しているところだ」

強大なパワーと捕らえる事ができない闇によって一方的に攻撃し出雲那達を追い詰

めていく双竜、出雲那と一輝は防戦一方だ、あまりの苛烈さに外野の明日香達もヒートアップしてきている。

——このままじゃマズいな・・・だけどローグ君は攻撃する時に実体化するみたいだね、ならその実体化する攻撃の瞬間を見切つて彼を捕らえれば！

攻撃が通用せず防戦一方な戦況でも黒鉄一輝は冷静に闇に紛れるローグを捉える方法を模索していた、思い出せ、痛みを受けた順序と方角を、痛みの深さを、角度を：：そこに闇の中の影竜に刃を届かせるヒントがある。

「これで決めるぜっ!!」

一方、圧倒的なパワーによる息の吐く暇もない猛ラツシュで出雲那を完膚無きままに攻め続けていたステイングは重なるダメージによつて動きが鈍くなつた出雲那にとどめを刺す一撃を放とうとしていた。

「白き竜の拳は炎さえも灰塵へと還す——《滅竜奥義（めつりゅうおうぎ）》——」

握りしめる右拳に膨大な魔力が収束し、純白の極光が奔流となつて白竜の右拳を包み込む・・・その魔法、竜の鱗を砕き、竜の肝を潰し、竜の魂を狩り取る・・・これぞ【滅竜奥義】——

「——《ホーリーノヴァ》アアアアアアッ!!」

満身創痍でフラフラな出雲那に激しく迸る純白の極光の奔流を纏つたステイングの

右拳が迫る。

「影なる竜はその姿を見せず、確実にエモノを狩る……」

一方ローグは闇に身体を同化させた状態で眼を瞑り意識を集中させている一輝の背後を取っていた、獲物を引き裂かんと闇の中からその右腕を伸ばし、竜の爪が煌いた。

如何に魔術師や伐刀者として竜の一撃などまともに受けるものなら間違いなく粉微塵に吹き飛んでしまうだろう、ソーサラーフィールドによつて非殺傷ダメージとなる為実際に粉微塵になつてしまふわけではないが少なくとも苦しまず一瞬で意識を刈り取られるのは確実だ、外野の明日香達も決着の瞬間に息を呑む、青学の黄金タッグ万事休すか？

「・・・これ待ってたぜ」

「確実にエモノを・・・何だって？」

「っ!!?」

白竜の拳が瞬雷の顔面を砕き影竜の爪が無冠の剣王の背中を引き裂く直前で出雲那と一輝はこれ待ってましたと笑った。瞬間出雲那が今まで使わなかった【伊邪那岐】という文字が刀身が収められた鞘に刻まれた太刀を左手に取りそれを鞘に収めたままの状態です。右腰から左斜めに斬り上げるように振るい弧を描く軌道で極光迸るステイングの右拳の側面を叩き出雲那の左肩の横の空間に拳の軌道を逸らす。それと同時に一輝が迂闊にも闇から姿を現したローグの右手首を振り向かず片手で掴み取った。決まったと思われた一撃が止められた事態に双竜コンビの眼が見開かれてその顔が驚愕に染まる。

「葵柳流抜刀術、《臚撫子（おぼろなでしこ）》!!」

ステイングのホーリーノヴァを逸らした出雲那は太刀を振るつた勢いを殺さず左脚を軸にしてすかさずその場で回転し太刀を床に捨てる、一回転すると右腰のベルトに差してあるもう一つの刀の柄を握り、大振りですて右拳を伸ばしきついている無防備な体勢のス

テイングの懐に左脚を踏み込んで刀を抜刀——

「がはあっ!!」

「ぐふっ!!」

前に重心が向いていた為にステイングは出雲那の一閃を躲す事ができず左腰から右胸にかけて逆袈裟に斬られ、同時に一輝がローグの右手を引き影竜を闇から引きずり出しそのままローグを陰鉄で一閃した。宙に放物線を描き床に倒れ摩擦で煙を巻き上げてスライドしてバトルフィールド中央で互いの頭が衝突する双竜コンビ、身体を斬られた痛みよりもこの衝撃の方が絵面的に痛そうだ、二人共仰向けに倒れたまま激突した頭を痛そうに手で押さええて悶絶している。

出雲那達がステイング達の決定的な一撃にカウンターを決めて返り討ちにした事により外野の明日香達も終わらなかつたかと胸を撫で下ろしていた。

「マジかよ、アイツ等あれを躲しただけに飽き足らず一瞬でやり返しやがった」

「さすが昨年鳳凰四武祭ベスト4だね、出雲那も一輝も凄いや」

決定的な一撃にカウンターを決めた出雲那達に善吉が呆れるように驚きマイが二人の実力に改めて感服する、他の皆も同じように圧倒されていて開いた口が塞がらない表情をしていた。

「【葵柳流】・・・聞いたことが無い流派ね・・・」

明日香は腕を組んでそう呟く、先程から出雲那が使用している剣術が珍しくて聞き覚えのない流派だったので気になったからだ、それを見兼ねたりインが葵柳流を知らない彼女の気を使ってさり気なく説明する。

「葵柳流」——《劍姫(けんき)》の名で知られる帝国ヤマト出身の劍豪《葵柳流美(あおやなぎ るみ)》が創設した「帯刀術」と「抜刀術」の流派。その独特な型から必然的に葵柳流で使う得物は東洋の「刀」に分類される物を使用する。流派の真髄は《螺旋》、「回転」の動作による武術の立ち回りで俺が修めている「八葉一刀流」にも取り入れられている武術の形の一つなんだ。全ての基本であり応用でもあるこの型から派生する技は無数に存在し、「螺旋」を極め《無》を操る者は全ての武術の究極にして到達点、《理(ことわり)》に至るとされている。「葵柳流」はそんな「螺旋」の集合体である剣技で、理に至った者はこの世で最強の劍豪【劍王(けんおう)】になると謳われているけど、葵柳流を修めた劍士で理に至れた者は流派の創設者である葵柳流美も含めて未だ嘗て一人もいないらしい……」

【理】——それはこの世の全ての事象を意味する、故にこの世の全ての【形】と【流れ】を理解し自らに取り入れる事ができる者は《理に至る者》とされているのだ。過去に理に至った武術家は【八葉一刀流】の創設者であるウン・カーファイ老師を含め世界に数える程しか存在しない。

「《究極の理に至る為の剣》、それが葵柳流の意味なんだそうさ、出雲那は帝国ヤマトで暮らしていた時代に葵柳流の門を叩いて門下に入り葵柳流の修練に励んできたと言っていたな、帝国ヤマトには名高い名門の剣の流派が多数存在する国だが葵柳流は知名度が低くて門下生も限りなく少ないんだ、聞き覚えが無いのも無理はないな」

「ふうんなるほど、教えてくれてありがとうシユバルツアー君」

「なに、礼には及ばないさ、聞きたい事があつたら何でも言つてくれ」

「まつたく、リインつたらお人好しなんだから・・・」

礼を言う明日香に対して真顔で謙虚に返すリイン、そんな彼の真面目な態度にアリサは呆れ、明日香は微笑む。

「ふふふ、それはそうと黒鉄君もなかなかの胆力ね、普通チエーニ君の影の魔法のような得体の知れないチカラを向けられたら畏縮して怯むものだけど、彼は冷静さを見失わずに落ち着いて対処していたわ」

「当然よ、何たつてイツキはアタシの彼氏で昔から追い続けて来た背中なんだから」

明日香は今度は一輝に注目した、するとステラが自慢気に鼻を鳴らしてそう言う、そして彼女は自分の彼氏の話が止まらなくなつて熱く語り出した。

「フフツ、精神力の強さもイツキの強みでもあるけれど、彼の一番の強みは「見るもの全ての本質を暴く照魔鏡のように研ぎ澄まされた洞察眼」よ、たぶんイツキはさつきまで

ネクラ男の猛攻を最小限のダメージに抑えるように上手く受け流しながらネクラ男の動きを観察していたんだと思うわ、そしてそこから相手の思考や行動パターンを分析してネクラ男の魔法を見切ったのよ、さすがアタシのイッキ！まったく追いかけて甲斐のある背中だわ！」

「あはは・・・」

熱く語るステラの話を聞いて苦笑いをする明日香は視線をバトルフィールド上に戻す。

痛つてえと頭を手で摩りながらゆっくりと立ち上がるステイングとローグ、どうやら戦闘続行は可能のようだ、さすが滅竜魔導士というべきかさつき斬られた時に受けた激痛は既に治まっているようだった、やはり身体を竜の体質に変換させる滅竜魔導士はソーサラーフィールドの影響下による非殺傷ダメージだと剣一撃を入れたところで倒すには至らないようだ。再びフィールド中央で背中合わせになる形で立ち上がった双竜は先程と同じように互いの正面の相手に向き合う、ローグの正面の一輝は陰鉄を正眼に構えて隙を見せず、ステイングの正面の出雲那は先程【朧撫子】でステイングのホーリーノヴァを受け流した直後に床に捨てた【伊邪那岐】という文字が刻まれた鞘に収められた太刀を拾い上げてそれを右腰に差し、もう一つの刀の柄に手を添えた抜刀体勢でステイングと向き合った。

ふと明日香は疑問に思った――

――武内君、何であの時太刀を捨ててもう一つの刀に持ち替えて抜刀したの？あれは太刀をそのまま抜刀した方が確実にワントンポ速く攻撃が届いたわ、それなのに得物を持ち替えるなんて効率が悪過ぎる、さつき人吉君達の決闘を観ていた時に武内君が話していた戦闘考察からして彼がそれを解っていないなんて事は考え難いわ、一体何故？

出雲那が「朧撫子」でホーリーノヴァを受け流した際にそのまま太刀を抜かなかつたのが明日香は理解できなかつた、今思えば出雲那はシグナムと決闘した時もクレア達風紀委員と決闘した時も一切その太刀を鞘から抜き放とうとしなかつた・・・。

「・・・へっ！どうやらこの勝負、お互いマジにならないとケリが付きそうもねえな！」

沈黙を破つた出雲那が急に強大な電撃を身体中から放出し不敵の笑みを浮かべてそう言う、このまま戦闘を続けてもジリ貧だ、なので彼はそろそろ本気で戦り合おうと言つたのだ。

「おっしやあああつ！んじやあやるか！・・・出雲那、アンタがその太刀を抜くわけにはいかないのは知っているけど、魔術師としての異能は全開で来いよなあっ!!!」

出雲那の提案に触発されてステイングが両脚を大きく開いて腰を落とし滅竜魔導士が秘める膨大な魔力とチカラを体内から引きずり出す、額や腕に鱗のような痣が浮かび上がり、身体中から溢れ出る膨大な魔力が激しく輝き出した。

「・・・いくぞ、一輝!!」

「臨むところだよローグ君、僕の最弱(さいきょう)を以って、君達の【龍殺しのチカラ(さいきょう)】を打ち倒す!」

出雲那が太刀を抜くわけにはいかないとは一体どういう事なのだろうか?・・・それを考える暇も無くローグもステイングと同じように身体の部分部分に鱗のような痣を浮かび上げらせ膨大な魔力を放出し、一輝は宣言すると同時に青白い焰のような靈力を身体中から放出し始めた。

「イツキ、【アレ】を使うつもりね!」

「おおく、《ドラゴンフォース》だ、アハハ♪空気がビリビリ痺れるう〜!」

「ちよっ?!アイツ等摸擬戦場を壊す気か?!マジでアイツ等が暴れたらヤバイ事になる!!」

外野の空気も最高にヒートアップしていた、善吉を始めとした常識人は出雲那達が本気で戦闘を繰り広げた場合の大惨事を思い浮かべて慌てているが、その他の非常識人は熱狂して盛り上がっている。

「へっ!んじゃあ・・・行くぜええええええええええつ!!」

出雲那が放出する電撃が地を穿ち、一輝が解放した靈力と剣気が大気に圧力を掛け、ステイングとローグが発する竜の魔力が空を唸らせ、両雄はいよいよ本気で激突する!!

最終ラウンドの始まりだ!!!

「盛り上がっているところ悪いんだけど……その決闘は中断してもらおうか」
やる気を感じられない男の声が響いた瞬間、宙に浮かぶソーサリーキューブをどこからともなく飛来してきた弾丸が貫いた。

「……えっ!?!」

「何？突然何が起こったの？」

「ソーサラーフィールドが解除された？」

突然の事態に困惑する一同、ソーサラーキューブには外部からの攻撃を受けると緊急停止する機能がある、その為バトルフィールド全体を包み込んでいたソーサラーフィールドが解除されたのだ。

「おいっ！一体どこの誰だよ！」

「面白くなってきたところを邪魔しやがって！出て来いっ!!」

出雲那とステイングが怒声をあげて叫ぶ、すると明日香達が居る場所の後方の内壁（フェンス）の上にある観客スタンドからまた声が聴こえてきた。

「ぎやーぎやーぎやーぎやー、少しやかましいんじゃないの？・・・いや訂正、めっちゃやかましいわホント」

一同は声が聴こえて来た観客スタンドを見上げる。

「・・・テメエは・・・生徒会の・・・」

いつの間にか人が居ない筈の観客スタンドのど真ん中に肩掛けベルトが付いたスナイパーライフルを携えたボサ髪で死んだ魚のような眼をした男子生徒が立っていた、そう、生徒会長の東堂刀華に出雲那とマイを連れて来るようお使いを命じられたザ・社畜、生徒会庶務【千種霞】である。

「本当は決闘が終わるまで待つてもよかったんだけど・・・俺、この後の仕事が溜まって
いるんだよねえ、というわけで高等部二年A組の武内出雲那とマイ・ナツメ、生徒会長
東堂刀華の命により生徒会室に連行しまゝっす」

霞は片腕を小さく上げて気怠そうに全員にそう告げる、出雲那はそれを聞いて自分が
置かれた状況を察して顔面蒼白となるのだった・・・。

純星煌式武装（オーガルクス）

無数の高層ビルが立ち並ぶ東エリア中央区の裏通りの道を一台の赤いリムジンが駆ける。

民間軍事企業ワルスラーン社の令嬢であり青竜学園風紀委員長であるクレア・ハーヴェイは現在このリムジンの車内にある高級バーのカウンターのような席でカクテルを飲みながら従者の様に自分を慕う友人であるリディの運転で帰路についていた。

普段は優雅な笑みを絶やさないどこか余裕を感じさせる雰囲気のカレアだが、この時の彼女は無言の仏頂面で気分が優れない重い雰囲気であった。

それはどう考えても先程の生徒会室でのやり取りの所為である。こっちの問い詰めに對して自分達の傷を抉るような事をさりげなく言ってくる死んだ魚のような眼をした皮肉屋の庶務、仕事を放ってテレビゲームに興ずる非情に不真面目な副会長達、そして青学の全ての生徒達の長という立場でありながら学園の危うい現状に對して危機感を感じさせない呑気な生徒会長……彼女が不機嫌になる理由を挙げたら切りが無い、そしてそれはクレアの部下であり友人であるリディとエリカも同じであった。

「クソッ！千種霞、なんて無礼な男なんだ！〔無様に負けた尻拭い〕だなんて暴言冗談で

も許せん！次言ったらあの男々ダじゃおかないぞ！」

「学園の業務を執行する神聖な場である生徒会室を私物で散らかすなんて無秩序……いや、非常識です！あんなに不真面目な生徒達を副会長に選ぶだなんて東堂刀華は何を考えているのでしょうか!?明らかに人選を間違えています！あの方はそれが理解できない愚か者ではないでしょうに！」

運転席でリムジンを運転するリデイがイライラしながら先程自分達の失態を嘲った霞の事を思い出して悪態を吐き、クレアの隣の席に座っているエリカが先程目の当たりにした生徒会室内の汚い有様に対してここには居ない生徒会長の刀華に対して文句を吐き捨てながらオレンジジュースを自棄飲みしている。二人はやはり生徒会室での出来事の事が我慢ならないようだ、クレア達はただ学園の素行の悪い生徒達の取り締まりについて生徒会に相談しに行っただけだったのに霞等態度の悪い役員達の所為で一触即発となったあの場合はクレアが抑えたおかげでなんとか穏便に済んだものの、風紀委員の誇りを侮辱した生徒会役員達（侮辱したのは霞のみだが）に対する怒りは簡単に収まりはしなかった。

「ですが何よりも納得いかないのは学園の生徒達がクレア様ではなく東堂刀華を生徒会長に選んだ事です！まったく、青学の生徒達は誰が本当に自分達の長に相応しいのかを理解していないから困ります！クレア様なら皆が規則正しい学園生活を送る事のでき

る秩序を創り上げる事ができるといふのに！」

「まったくだ！ 昨年の王竜四武祭ベスト8だからなんだと言ふんだ！ トップに相応しい者というのは気高き誇りを持ち、学園の為、延いては人の為に尽くす【持つべき者の義務（ノブレスオブリージュ）】を敢行できる者だといふのに！」

エリカとリディは苛立ちのあまり刀華を生徒会長に選んだ学園の生徒達にまでケチを付けはじめた、普段の彼女達ならば例え納得いかなくとも決まった事項に対してこのようなあからさまに否定的な事など口に出さないのであるが、あの生徒会の危機感の無さを見た為に口に出して文句を言うのを我慢できなくなつたようである。まあ、腹が立つのは解る（主に霞の所為で）、ただリディが言つた【ノブレスオブリージュ】は正確には【貴族の義務】であり、直訳すると【高貴さは義務を強制する】を意味し、財力・権力・社会的地位の保持には責任が伴う事を指す言葉なのだが……。

何はともあれ幾ら気分が優れないとはいへそんな見苦しい痼癩を起こす友人達をクレアが放つておく訳がない。

「……もうお止しなさい、二人共みつともないですわよ、生徒会長の資格があるのは皆に認められた者、それを否定するのは幾らあなた達といえどもこのわたくしが許しませんわ」

「クレア様……」

冷静な一喝でクレアは二人を黙らせる、その声には静かな怒気が込められており、自分の価値観と偏見で刀華の器を卑下に量るような発言をしたリデイとエリカに牽制の意を露わしていた。

「確かに東堂刀華は身内に対する危機管理能力が疎いですわ、その為余程深刻な問題でない限り多少の小さな事項ならば最終的に穏便に済ましてしまい、周りから侮られる事もあります。しかし彼女は人を思いやる慈愛の心を持ち、人の為に全力を尽くせる者だという事をわたくしは知っています。リデイ、エリカ、東堂刀華はあなた達が思っている程器の小さな人間ではないのですわよ」

「も、申し訳ありませんクレア様……」

「出過ぎた事を言いました、未熟なわたし達をお許し下さい……」

リデイとエリカはクレアの戒めを聞いてバツが悪くなってしまう素直に謝罪を入れた。今日生徒会室を訪ねた時クレアは刀華に対してあれほど厳しい姿勢を見せていたというのに今はまるで刀華の事を擁護するような姿勢である……そう、クレアは別に刀華を認めていないわけではない、認めているからこそしっかりとほしいと厳しく当たったのだ。

——確かに学園の生徒達がわたくしより東堂刀華を選んだ事については非情に悔しく思いましたわ……ですが上を任せられる者が他にいるというのはとても喜ばしい

事です。優秀な戦士は多ければ多い程学園の為、延いては世界の平和を護る為になるのですから……。

クレアは例え自分が認められなくとも学園や世界の為になるのならそれでいいと心の中で自分に言い聞かせていた。彼女はスクエアに来る前までワルスラーン社の軍事施設で武芸者となる為の鍛練を積み、世界に跋扈する化物の脅威から人々を護る《薔薇の守護者（ローズ・ガーディアン）》としての使命を全うしてきた。守護者としての使命を果たす為にクレアは誰にも何であろうと負けないと心に誓い、軍事施設で行われる模擬戦大会では一度だって負けた事は無く「無敗の女王（パーフェクトクイーン）」とまで称される存在となったのだ：しかし、この戦島都市スクエアに来て彼女は負けた：狭い軍事施設（はこにわ）の中で築き上げたちっぽけな無敗伝説は一人の少女が持つ真正銘の無敗の一刀によって容赦なく両断されてしまったのだ。「無敗」と「守護者」の名は地に堕ち、ただの「薔薇の女王（ローズ・クイーン）」となってしまったクレアは悔しさを噛み締めながらも自分が世界の為にできる事をしようと思死に戦い続けてきた、例え何度負けて泥を被ろうとも世界の厳しさに屈してはならないと……全ては世界の平和の為……そして――

「……リザ……」

クレアが誰かの名を呟いたその時――

「なっ?!?!何なんだアレはっ?!?!」

リムジンの運転を続けるリデイがいきなり奇声を上げた。一体何なのかとクレアとエリカはリデイが座っている運転席の近くに寄り、前方に見える強化ガラスの窓の外を見た。

「なっ?!?!アレは一体何ですのっ?!?!」

「赤い・・・罅?」

クレア達が乗っているリムジンが走る道の前方に突如として空気を割って入るような赤い罅が「顕れた」、ピキピキキキイイという甲高い音と共にその罅はどんどん広がりに続き、このままではクレア達のリムジンが罅に迫ると同時に空間が割れてしまうだろう。

「リデイ! ハンドルを切りなさい! このままではアレにぶつかってしまいますわっ!!」

「ダメです! 間に合いません!! 伏せて下さいクレア様っ!!!」

今走っている道が人通りの少ない裏通りであったが為にかんりの速度を出してしまっていたのが災いしてしまった、クレア達を乗せたリムジンは前方に浮かぶ罅を避ける事ができずに突っ込んでしまう。

「「きやああああああああああああああつ!!!」」

リムジンが罅に接触すると同時に罅は割れ、少女達の悲鳴と共に世界が砕けた・・・。

生徒会庶務千種霞の介入により出雲那&一輝VSステイング&ローグの決闘は中断となり、この決着は今年の鳳凰四武祭で着けると四人は約束を交わした。そしてその場は解散となり、ステイングとローグの双竜コンビはセンター街に遊びに行くと言ってその場を跡にして行き、レスターはあれだけ騒いでいたにも拘らず未だに幸せそうに眠ったままのダクネスを肩に担いで出雲那達と別れて行き、生徒会長東堂刀華の呼び出しを受けた出雲那とマイを含む残りのメンバーは霞に引き連れられて生徒会室に向出した。「わかりましたか武内君？今後規則に反する目的で決闘を持ち掛ける行為は慎んでくだ

さいね！遅刻しそうになってまで人助けをしたのは立派ですが、チカラずくで勝手に押し通そうとするのは感心しませんよ！」

「はい、ごめんなさい刀華さん、もうしません・・・」

「約束ですよ、もし約束を破ったら「ハリセンボン」飲んでもらいますからね！」

「ゲッ！それだけは勘弁してくれえっ！」「ハリセンボン」は嫌だあああああっ！！」

「武内君が尋常じゃなく発狂している・・・一体何なの「ハリセンボン」って？」

「「ハリセンボン」は「ハリセンボン」だよ、それ以上でもそれ以下でもないから」

「いや、それじゃわかんないわよっ!?!てかアンタ何そんなところで寝ようとしているのよ!!」

「「「あははは・・・」」」」

生徒会室で出雲那を出迎えたのはブンブン頬を膨らませて大層御冠な刀華による一時間に渡るO☆SE☆LTU☆KYO☆Uフルコースであった。一時間冷たいタイルの床の上に正座させられ刀華（オカン）に指をビシビシ指されてガミガミ言われ続けた出雲那は精神的に相当参ってしまい、同じ過ちは二度と行いませんと誓うと刀華は出雲那にその誓いを破ったら「ハリセンボン」なる謎の何かを飲ますという誓約を懸けてきたので出雲那は一瞬で顔を真っ青にして発狂する、その姿があまりにも滑稽だったので明日香は誓約による罰として指定してきた「ハリセンボン」とは何なのかを在校生組全

員に聞いてみるのだが、来客用のパイプ椅子の上で丸くなって寝る体勢に入っていたトニーが訳の解らない説明をしたのでステラが眠ろうとしている事も含めてツツコミを入れた為に一輝達在校生組は苦笑いをするしかなかった。

「さて、武内君のお説教はこれくらいにしておいてっと、次はマイさんへの用件ですね、お待たせしてすみません」

「い、いえ、今日は大した用事もないので構わないんですけど、一体私に何の用があるんですか?」

刀華は魂が抜けたように真つ白になってしまった出雲那を床に放置してここへ呼び出したもう一人であるマイに声を掛ける。一時間も待たせてしまって申し訳なさそうに言う刀華にマイは謙虚に返すところの場に呼び出された用件について尋ねた、すると刀華は困った表情を浮かべる。

「マイ・ナツメさん、貴方《純星煌式武装（オーガルクス）》の定期メンテナンスをまだやっていないでしょうか? 《第七機関》から急ぎ貴方の純星煌式武装を提出するよう催促の通知書が幾つも届いていますよ」

「うゝ?! やっぱ! すっかり忘れてた……」

「忘れてたって、マイ、お前なあ……」

刀華から用件を聞かされたマイはうつかりしていたと動揺し、それを見て善吉が呆れ

る。

「お知らせのメールはちゃんと読むように心がけてくださいね、純星煌式武装に不具合が出たら代えが利かない上に貴方の身体にだって何か悪影響が出るかもしれないんですから」

「ご、ごめんなさい、以後気をつけます・・・」

「ねえイツキ、【純星煌式武装】ってなんなの？不具合が出たら身体に悪影響が出るかもって言っていたけれどそんなに危険な武装なの？」

刀華がマイに注意を呼び掛けている背景で純星煌式武装については無知であるステラが悪影響と聞いて心配雜じりに一輝に純星煌式武装についての説明を求め、一輝が「純星煌式武装っていうのはね」と説明を始めようとするとステラの隣に立っていた明日香が話に割り込むように説明を始めた。

「純星煌式武装は通常の煌式武装の核（コア）である【マナダイト】よりも極めて純度の高い《ウルムⅡマナダイト》を核に使用した特殊な煌式武装の事をいうの、ウルムⅡマナダイトは通常のマナダイトとは比較にならないエネルギー量を秘めていて、それを使用している純星煌式武装は魔女魔術師や魔導士、伐刀者のような異能のチカラを発現する事ができるわ、だけどその一方で扱いが非情に難しく、純星煌式武装自身が使い手を選ぶとされている為に誰でも使えるわけではないの、どうやら武装自体に意志のような

ものが宿っているらしいわ、その為純星煌式武装の使用申請には「適合率」検査を受ける必要が義務付けられていて、武装の適合率が八十パーセントを超えていなければ申請は通らないのよ、どれだけ大きなチカラでも使いこなせなければ意味が無いし、チカラが暴走して周りに甚大な被害を齎してしまう場合だつてあるのだから」

純星煌式武装はスクエアの都市運営のスポンサーである【統合企業財体】によつて製作され、あまりに強大な武装であるが故にその大半がダイランディア政府によつて管理されているのだが、その一部はデータ収集も兼ねてスクエア内の各組織・学園に提供されている。統合企業財体がスポンサーになっているのは彼等各企業が開発した武装やアイテムをスクエアに集まる戦士達に使用してもらい、今後の実用化の為にデータを取る為である。つまり一種の人体実験である、統合企業財体は自分達の実験の為にスクエアの戦士達を利用しその見返りとして都市運営に財力や武装などを提供しているのだ、純星煌式武装もそうだがクレア等武芸者が使用する百武装もその一つである、もちろん危険過ぎる武装の貸し出しや非道な実験はダイランディア政府により規制されているが……。

「へえ、純星煌式武装つて凄い武装なのね……でもさつきトーカさんが言っていた悪影響つてどういう事なの？マイが純星煌式武装を持つているつて事はマイは適合率検査つていうのに合格したわけよね？それなのに何で悪影響が出るつていうの？」

ステラは純星煌式武装が使用者の身体に悪影響を与える詳細についてを求めた、適合率が必要水準を上回っているという事は使用しても問題ないと判断されたのだろうかと思っただからだ。するとステラ以外の全員が何と言えはいいのやらという感じで困った表情をする。

「・・・純星煌式武装はその強大なエネルギー量が故にそれ相応の膨大な気力を消費するの、その分使用者の身体への負担も相当なものになるわ、その為使用する事ができるのは生まれながらにして膨大な気力を保有する星脈世代に限られるの。純星煌式武装の使用を認められているのを見るとマイさんは星脈世代のようだけどそれでも純星煌式武装の使用による負担は掛かっている筈よ、適合率が必要水準を満たしていてももし武装が故障したらどうなるかわからないわ」

明日香は説明しながら眼を瞑って厄介な事にと言うようにゆっくりと首を左右に振る、大きなチカラには大きな代償が伴うのは当然の事だ。

「それだけならまだよかったのだけど、純星煌式武装というモノは使用者にチカラを貸す対価として何らかの代償を払うよう求めてくるのよ、さつきも言ったように純星煌式武装には何か意志のようなものが宿っているらしく、使用者との適合率は武装に宿る意志との相性の良さに関係するみたいなの、そして代償はその武装の意志により強制的に使用者に与えるのよ、例えば並の星脈世代ならあつという間に枯渇してしまう程の莫大

な気力を消費したり、武装の能力を使用する度に何か不幸が訪れたり純星煌式武装は宿る意志によって様々な制約を課してくるのよ」

純星煌式武装とは宿る意志によって代償を課し、その能力が強力であればある程代償もまたシビアなものになる傾向がある。意志があるという事は個性・・つまり性格があるという事だ、遵って代償は武装に宿る意志がどうという性格をしているのかに起因するのである。

「．．．なるほど、要するに悪影響っていうのは純星煌式武装が故障したらその代償というものが過大に増幅して使用者の身体に危険が及ぶかもしれないという事なのね？」

「その通りよ、強大なチカラにはそれ相応の責任が伴うように純星煌式武装という物のチカラを振るうのもタダじゃないって事」

「ふーん、ねえイツキ、マイは純星煌式武装を持っているみたいだけど、それならその代償というやつも懸けられているわよね？マイが懸けられている代償ってどういうものなの？」

「え、え〜つと．．．それは．．．」

ステラがマイに懸けられている代償についての話を振ってきた瞬間に一輝は何かバツが悪いように言葉を詰まらせて思い悩む、周りを見てみると明日香以外の全員がステラの疑問を聞いて重い雰囲気を出しながら沈黙している。

「ちよ、ちよつと!? なんなのよこの空気!? アタシ何かまずい事言ったの!？」

「い、いや、ステラが悪いわけじゃないんだけど・・・」

「マイさんに懸けられている代償が口に出して言えない程深刻なモノだつて事なの? でもそれ程危険な純星煌式武装なら使用許可なんて下りない筈だけど」

「い、いや、深刻と言つたら深刻だけど、危険というわけじゃなくて・・・」

「・・・いいよ一輝、私が・・・いや、【僕】の口から言うよ・・・」

ステラと明日香に言い寄られて困惑する一輝、どう説明したら良いものかとあたふたしている話を聞いていたマイ本人が何かを覚悟したかのような真剣な面持ちで話に割つて入ってきた。

「・・・いいの、マイ君?」

「無理する必要はねえぞ、お前この代償の所為で——」

「うん、ありがとう一輝、出雲那・・・でも大丈夫、最後は皆こんな身体になった私を受け入れてくれたから平気だし、例え二人に軽蔑されて嫌われたとしても隠し事をしたままにしておきたくないから・・・」

マイは自分を心配してくれた一輝と出雲那に感謝の言葉を伝えると覚悟は決まつたと言うかのように堂々たる姿勢で明日香とステラの前に出て彼女達と向き合つた。尋常じゃない雰囲気なので明日香とステラは息を呑んでマイの眼を見つめこれから語ら

れる話に耳を傾ける。一体マイに懸けられている代償とは何なのだろうか？

マイ・ナツメという存在

二大大国の一つ〔武闘王国ダイランディア〕には《十二宗家（じゅうにそうけ）》という十二の貴族の家系が存在する。

軍に優秀な人材を輩出し国の為にチカラを振るう十二宗家は《矛十二支》と呼ばれ、その家系に属する子は将来ダイランディア軍に従軍する為に戦島都市スクエアの四大学園に入学し、戦士としての素養を身に付ける事が義務付けられていた。

十二宗家の一つである《ハヅキ家》の嫡男として生まれ、家の次期当主候補であった少年《マイ・ハヅキ》もまた義務に従って四大学園の一つである青竜学園に在学し、将来ハヅキ家の当主として国に尽くす有能な戦士となる為日夜勉強・修練に励んでいた。

『周りの人間は全て敵と思え、当主たる者に友などいらぬ、孤高こそ真の強者の証よ』
ハヅキ家の現当主である父親の教えに従いマイは中等部時代誰一人として友達を作らず、ただ有能な戦士となる為だけにひたすら一人で知識を身に付け戦闘技術を研磨し続けて淡々と三年間を過ごした。その姿はまるで機械人形のように生気が無く、周りの人間はマイを気味悪く思い誰も彼に近寄ろうとしなかつたのである。

優秀な戦士を輩出する十二宗家の子は在学中に何か名誉となる成果を収め「自分は有

能な戦士である」という事を示し家の面子を維持する必要がある。その最たるものはスクエア四大学園の一大イベントである武闘大会〔四武祭〕に出場しベスト16以上の成績を収める事であるのだが、マイは中等部時代に三度個人戦である〔王竜四武祭〕に出場しその全てが初戦敗退、無情にもなかなか成果を上げられずにいたのであった。

自分にチカラさえあればと考えたマイは統合企業財体に属する開発研究所の一つである〔第七機関〕に自分専用の純星煌式武装を製作しよう依頼、その日にマイは〔学園を卒業するまでに必ず四武祭を制してみせます〕と堂々と父親に宣言する。

依頼した純星煌式武装はマイが高等部に上がって間もなく完成し、その年の四月下旬にマイは製作された純星煌式武装の適合率を確認する為にスクエア中央エリアに存在する《装備局》を訪れたのだった。

「これが・・・僕の純星煌式武装・・・」

装備局内の一角に存在する天井が高くて一部の壁面がガラス張りになっているトレーニングルームのような空間の中央にて、マイは目の前の収納ケースに格納されている朱塗りの長槍と向き合っている。

『はい、その槍が第七機関にて製作されたマイ・ハツキ様専用の純星煌式武装、《朱弾の魔槍（ガリアスフライアウトシール）》です』

装備局の研究員の一人がマイに放送でそう伝えると収納ケースが開く。マイは既に

んだ。

「うおっ!?まぶしっ!」

「なんとというエネルギー量ですか!?!」

「ああつ、眼が!眼がああああつ!!」

強化ガラス一枚越しの計測部屋で様子を視ていた装備局の研究員達がその巨大な光に宛てられて腕で眼を塞ぎ驚きの声をあげている、マイの気力が注がれた朱弾の魔槍から放出されるエネルギー量が凄まじく予想以上だったようだ。やがて光は収束して消えていき、モニターに計測結果が算出された。

「・・・適合率・・・100%・・・マイ君と朱弾の魔槍は完全に同調しています・・・」
「なんと・・・」

検査結果は脅威の完全適合(100%)、これ以上ない完璧な相性の良さだ、まさにマイの為に存在する純星煌式武装である。

「第七機関は個人のプロフィールに合わせて順当なウルムⅡマナダイトを選出し個人専用の純星煌式武装を作成することができるとは聞いてはいたが・・・これほどは・・・」

研究員長と思わしき人物が検査結果を見て感嘆としている、第七機関の科学力は侮れないという念を抱いてしまったからだ。光が完全に消滅すると研究員達はマイが居る武装保管室の扉を開き、彼の状態を確認しに部屋へと入って行く。

「マイ君、適合率検査はこれで終了で——」

「適合率100%でしたので身体に異常は無いと思いますが、一応健康状態をチェックする必要があるので医務室で健康診断を——」

研究員達の言葉は・・・それ以上進まなかった・・・何故なら部屋の中央に居る筈の少年の姿は何処にも見当たらず、代わりに一人の見ず知らずの人物が朱弾の魔槍を持ってその場にへたり込んでいるのを目の当たりにしたからである。

「……………」

研究員達は絶句した。サラサラな青い長髪に丸みを帯びた美しい曲線のしなやかな肢体、そして胸部に盛り上がる非情に柔らかそうな豊満な双丘がその人物の性別が女性だと認識させる、一体これはどういう事だ？先程まで此処で検査を行っていた少年マイ・ハツキはどこへ消えてしまったのか？

「……………貴方は……………誰ですか？……………」

研究員の一人が目の前で座り込んでいる青髪の美少女に恐る恐る尋ねてみる、この時点で研究員達は全員ある仮説を立てていた、「純星煌式武装を使用するには何らかの代償を払わなければならない」、そして「適合率の計測の為に純星煌式武装を手にして発動した少年が消えて代わりにこの美少女が現れた」というこの状況・・・それ等から導き出される答えは取り返し時の付かない非情に深刻な内容であった。

・・・そして、その仮説は現実であるという事実が少女の口より明らかとなる――

「・・・僕はマイ・・・マイ・ハツキ・・・です・・・」

純星煌式武装【朱弾の魔槍】の代償・・・それは【自分の本来の性別を失う】という
ものだった・・・。

「自分の性別を失う．．．」

「じゃ、じゃあアンタって．．．」

マイが語った自分の純星煌式武装の代償の内容を聞いて唖然と立ち竦む編入生の二人、明日香は塞がらない自分の口を両掌で押さえ、ステラはワナワナと震える右指の先を非情に気まずそうに下を向いているマイに向けて恐る恐る確認の言葉を口に出し、出雲那達は全員何と説明したらいいのか判らず黙る以外の行動を取れずに困り果てている。

「．．．うん．．．私は．．．僕は元々は【男】だったんだ．．．」

ステラの確認に承えて衝撃の真実を告白をするマイ、その表情はこの後返って来るで

あろう二人の反応を恐れて影を落としていた。

マイ・ナツメの本名は「マイ・ハツキ」であり、元男……純星煌式武装の代償によって性別を変えられた少年であつたのである。

「あ、あ……ああ……」

「……」

マイの告白を聞いてステラは震えながら声を詰まらせ、明日香は驚愕のあまり言葉が出てこないようだ、無理も無い、他の女性が羨むような美しい曲線を描く理想の身体つきをしていて、自身の豊満な乳房の事を話題にされて恥ずかしがる乙女のような反応を見せるこの美少女が本来は男性だつたなんてとても信じられるものではないだろう（殺人料理を笑顔で平らげる悪食などころは置いておくとして）。

勇気を振り絞って自分の正体を暴露したマイは編入生二人の応答を恐れ今にも泣き出しそうな程表情を曇らせている、元々男であつた人間が恥も外聞もなく女として生活しているなんて聞いた人間はその人物を軽蔑し拒絶するのが普通だからだ。

「……へ……変た！——」

「っ!!」

そして案の定ステラが口を開き蔑みの言葉をマイに投げかけようとする。嫌われて罵倒されるのは覚悟の上だつた、しかしいざさうなろうとするととても耐え難いもので

あり、マイは恐れていた言葉が発せられようとしている現実。心が砕けそうになる。眼から涙が流れ出そうな悲痛が身体を支配し今にもこの場から逃げ出したい衝動に駆られてしまう。

——・・・やっぱりこうなるか・・・ははっ、そりやそうだよね・・・元々は男だったというののうのうと女として生きている異常者なんかと仲良くなんてしたくないよね・・・残念だったなあ、友達が増えると思ったのに・・・やっぱり悲しいよ・・・。

非難される悲しみが刃となつてマイの心に突き付けられた、ステラがその言葉を言い切ればその刃はその矮小な心を突き穿つだろう、マイは恐れるあまりにチカラの限り眼を瞑つた——

バチンツ！ステラがその言葉を言い切る直前にそんな何かを叩くような音が生徒会室内に響いた。

「……えっ!?!」

突如として鳴り響いた効果音の後に訪れた静寂の中マイは恐る恐るゆつくりと眼を開き、目に入って来た光景に啞然と言葉を洩らした。・何故かアリサが自分とステラの前に割り込むように立ち、ステラの頬を平手打ちしていたからだ。

「……貴方……」体今マイに何て言おうとしたの?」

アリサの行動に周りが動揺する中、叩かれた頬を手で押さえて何がなんだか分からなさと無言で困惑しているステラにアリサがそう問いかけた、その声には怒気が込められており、彼女が相当な怒りを露わにしているという事が明らかである。

「何……ってそれは……」

「【変態】って言おうとしたわよね?ふざけないで!マイがこの代償の所為で半年間どれだけ辛い目にあつたと思つているの!?!良く知りもしないで知つた風な事を言わないでちょうだい!!」

「ア、アリサ……」

「ア……アタシはー」

困惑するステラに右人差し指を突き付けてアリサは激怒する、彼女の突然の激情に庇われたマイは戸惑い、出雲那達在校生組はやってしまったなと困り果てている。一体どうして自分は怒鳴られているのかと理不尽に思いステラはアリサに反論しようとするが、それを制止するように一輝がステラの肩を掴んだ。

「今のは……ステラが悪いよ……」

「イツキ……」

「ステラ、柊さん、マイ君は何故【マイ・ハツキ】ではなく【マイ・ナツメ】って名乗っているのか解るかい？」

「姓が変わっている……まさか!？」

一輝が神妙な空気で編入生二人に問うとマイの姓名が変えられている事に気が付いた明日香が何か重大な事実を察して眼を見開き、その反応を確認した一輝は明日香の返答を待つまでもなく語り出した。

「そう、マイ君は実家であるハツキ家を追い出されたんだ。以前にマイ君から聞いた話だと【女になってしまったお前にもはや価値など無い】と父親から言われたらしく、その上女性となってしまうたマイ君がハツキ家の者と悟られぬよう姓まで変えられてね……」

「っ!？」

明日香とステラはあまりにも荒唐無稽な話に驚愕する。

「第一次遭遇以前には世界中で男尊女卑の風潮があつたのは知っているよね？三大源力が世の要となつた現代は実力主義の為にそんな風潮は薄まりつつあるけれど、マイ君の実家であるハツキ家にはその風潮が残っているらしく「女を上にしたせるのは恥」とされているみたいなんだ。マイ君はハツキ家の嫡男で次期当主候補だつたみたいだけど家の掟で「当主は必ず男性でなければならぬ」と決まっているらしい、その為次期当主候補でありながら女性となつてしまったマイ君は当主候補から外されて実家から見捨てられたという事なんだ」

「何よ……それ……」

「酷い話ね……」

一輝が語つたマイの過去にステラと明日香は絶句する、幾ら性別が変わつてしまつたとはいえ家の掟を優先して子を追い出すなんて人としてやっていい筈がない、況してや家の名を捨てさせるなど狂気の沙汰だ。

「青学に通い続ける事は姓を変えた事で許されたけみただけど、これまでハツキ家の当主となる為だけに生きて来たマイ君が新たな生き方を見つける為には他人に頼る必要があつた……だけどマイ君が元は男性だつたというのは皆が知っている、その為学

園の皆がマイ君の事を気味悪がつて誰もマイ君に手を差し伸べようとせず皆が彼女を拒絶した・・・元々マイ君は実家の教えで誰とも関わりとうとしてこなかったから自分を理解してくれる友達もいなくて完全に孤立してしまつたんだ。これは去年の五月の始めくらいの頃の話だね」

「・・・・・・・・」

明日香とステラは悲惨過ぎるマイの過去に対して何も返す事ができなかった・・・純星煌式武装「朱弾の魔槍」が課した代償はあまりにも重く、マイ・ハツキという人間の全てを奪つてしまつていたのだから。

「あの頃のマイは正直見ていられなかつたぜ、毎日毎日教室の隅で死んだ魚みてえに虚ろい眼をして塞ぎ込んでいて、魂が抜けちまつた様な気に入らねえ響めつ面をしてやがつたからな、あれは見てるこつちが気分悪かつた」

「っ!!?」

「出雲那、貴方ねえっ!!」

出雲那の不敬な物言いに今まで黙り込んでいたマイがショックを受けるように顔を強張らせ、アリサが出雲那を窘める。しかし出雲那は全く動じる事無く一輝から引き継ぐように話を続けた。

「話は最後まで聞けよ・・・まあそんなわけで誰もマイを助けようとしなかつたわけだ。

それが気に入らなかつたオレ達はなんとかしてやろうとマイに話を聞こうとしたんだがよ、その時のマイは誰に対しても突つ撥ねるような態度で拒絶してやがってまるでこの世の全ての人間を親を殺した仇に見てやがる感じだったんだ。当然オレ達も「僕に関わるな！放つておいて！」と聞く耳持たず追い返されちまつてさ、どうする事もできなかつたんだ」

出雲那、一輝、善吉、リインの四人は当時絶望に打ちのめされていたマイをなんとか救おうとしていたが、マイの絶望は相当深いものであり、彼女は癪癪を起す子供のようになつて狂っていた。その為出雲那達はマイに話を聞く事も儘ならず、結局引き下がるしかなかつたのである。

出雲那は壁に背中を預けるように寄り掛かりその時の事を思い出してあの頃の無力を嘔み締めるように黄昏る。

「結局マイはそのまま周里から完全に孤立し、その状況が変化する事も無く月日が経つて半年・・・今からすると約半年前にマイはどうとう生きる気力するなくなつたらしく、この都市の中央エリアに建っている《シリウスタワー》の屋上にある展望台から身投げして自殺しようとしやがったんだ」

「な、なんつですつてえっ!!?」

「自殺・・・」

「シリウスタワー」とは戦島都市スクエアの中心に高々と聳え立つ180階建ての超高層ランドマークタワーである。その高さは1000mを越えており、そんな高さの屋上から地上に落ちたのなら例え身体能力最強の星脈世代であっても即死は免れないだろう。そんなところからマイは身投げしようとしたのだからステラが驚愕するのも明日香が絶句するのも無理はない。

「その時青学は休校でな、オレ達は偶然その場に遊びに来ていて、落下防止の柵を乗り越えて身投げしようとしてやがったマイを誰よりも先に目撃したんだ。そしてそれを見て真つ先にマイを救おうと飛び出したのが其処のアリサだ」

「アリサさんが？」

「一輝もリインもかなりのお人好しなんだがよ、アリサは「放つとけない病」患者として認定される程の超お人好しで困っている奴を見かけたら助けずにはいらねえ人間なんだぜ、本人はツンケンしてて認めないけどな」

「誰が「放つとけない病」患者よ!? 貴方にだけは言われたくないわ!」

出雲那に言われた事をアリサは全力で否定する、しかし実はアリサはその半年間何度もマイを心配して話し掛けようとした唯一の者であり、出雲那達がどうしようもないと諦めにも似た様子見に徹している中彼女だけが何とかしてマイに話を聞こうと行動していたのだ。まあ、実際に話し掛ける事が出来たわけではないのだが……。

「んでアリサは柵からマイを強引に引きずり下ろしてマイの自殺を阻止したんだが、その後【僕はもう誰にも必要とされていけない屑なんだ！だからもう死んだ方がいい！！もう一人のまま生きるのは嫌だっ！！】と叫んで手が付けられない程激昂したマイに平手打ちをかまして言ったのが印象的でな「ちよ、出雲那!? 貴方を——」その時のクサイセリフだったら・・・ぶぶっ！」

アリサがマイを救った時の場面を語る出雲那、説得の為に言い放ったクサイセリフとやらを言おうとした事でアリサが非情に恥ずかしそう顔を赤らめて抗議しようとするも出雲那はお構いなしに思い出し笑いをしながら事情を知らない明日香とステラにそのセリフをバラした。

『確かに生きていれば目を背けたくなるくらい理不尽な目に遭う事が沢山あるかもしれない！ 貴方の心の痛みは今叩いた痛みなんかよりもっと痛いのでしょうか！ だけど貴方、このまま誰にも理解されずに終わるなんて本当はイヤでしょう!? だったら他人に言われるがまま黙っていないで自分からぶつかって行きなさい！ 相手に拒絶されるのが怖いのは誰だって同じよ！ 人との繋がりといいのはそれに乗れ越えて創っていくものなの！ だから前を向いて歩きなさい!! 自分を偽らずに有りの儘の自分を曝け出して行きなさい!! 大切なのは姿・形じゃないわ! ——

——人との繋がりを求める誠実な【気持ち】よ!!』

「わあああああああああ—————っ!!!」
「……………」

出雲那が語るアリサの恥ずかしいセリフを話題の本人は恥ずかしさのあまり顔を真っ赤にしてセリフを遮るように大声で発狂する、しかし編入生二人はどうやらしつかりとセリフを聞き取ったみたいであり無言で啞然としていた……。

「人との繋がりがって……………」

「大切なのは姿・形じゃない、【気持ち】よって……………」

「復唱しないで！お願いだから!!」

「ぷぷぷつ、確かに生きていれば目を背けたくなくなるくらい理不尽な「いい加減にしないと本気で引つ叩くわよ出雲那!!」

「あははは・・・」

編入生二人は啞然としながら気になったセリフの部分で復唱し、アリサはそれによる恥ずかしさに耐えられず二人に復唱を止めるよう全力で懇願する、出雲那が面白がつてもう一度アリサの恥ずかしいセリフを繰り返そうとすればアリサは激怒して怒鳴る始末、なんとという話の脱線具合なのだろうか、一輝の苦笑いが場の哀愁さに拍車を掛けている。

「ふふつ、そろそろ止めてあげたらどうですか？アリサさんが顔を膨らまし過ぎて爆発してしまいそうですよ」

「刀華先輩まで!?!」

「まあいいじゃないかアリサ、その言葉があつたから俺達とマイは友達になれたんだから、そうだろうマイ?」

「・・・うん、そうだね」

リインの求める同意にマイは頷く、言葉はどうあれマイはこのアリサの純粋な想いに救われたのだ。

「私の心が弱かった所為であの時みんなには大きな迷惑をかけちゃって今でもゴメンと思っている、だけどそれ以上に感謝の気持ちでいっぱいだよ、元々男だった私を気にかけてくれて、受け入れてくれて、それでもって友達になってくれてとても嬉しかった。特にアリサには感謝してもしきれないよ、自殺するつもりだった私を救ってくれたし、私が女として生きると決心した時もしやべり方や遊びなどの女の子の事を色々教えてくれて本当に助けられた。おかげで私はこの身体や自分の境遇と向き合い前を向く事ができた、今の自分が好きだと心から思えるようになったんだ」

「マイ……」

「半年間みんなと一緒に頑張ってこれて本当に良かった、三ヶ月前の獣王四武祭で私が聖ルシフェルの【蒼雫（ブルー・ティアーズ）】に勝った時は青学のみんなが喜んで私を認めてくれて……ううっ……とてもうれしくて……なんで言っだらわがらなくて……ぐずっ……」

「カツ！泣く程の事じゃねーだろ？男だろーと女だろーとお前はお前だろうが！」「マイ・ナツメという人間」をみんなが凄げえと思ったから認めた、ただそれだけの事だぜ、何も不思議な事じゃねえ」

「うん、ありがとう善吉。もう一度言うけどみんなありがとう！みんながいたから私は今ここにいて、だから本当にありがとうっ!!」

マイは嬉し涙を流しながら仲間達に感謝の気持ちを伝えた。どんな存在でも胸を張って生きて良い、自分の居場所を作って良いのだ、それが「当たり前」なのだから：。「まったく、なんだかアタシ達すつかり蚊帳の外じゃないの・・・」

「ふふ、まあいいじゃないステラちゃん、マイさん達の絆がどれほど大きいか分かるいい話を聞かせてもらったのだし」

「・・・そうね、最初は気分最悪の暗い内容だったけれど最後はしみじみとしたわ・・・はあ、なんだか取って聞かされたような感じよね、これでマイの事を認めなかったらこっちが悪者じゃないの」

「そんな事言ってるけれど、どうせもうどうするか決めているのでしょうか？」

「当然」

心温まる空気の中で明日香と話し合ったステラは若干気まずさを抱きながらマイの前に足を踏み出す。その為マイは動揺してビクツと身体を一回震わせるが、気をしっかりと保ってステラと真剣な表情で向き合った。面と向かうのが恥ずかしいのか、それとも先程マイを傷つけるような事を言いそうになった事を気まずく思っているのかステラはモジモジと頬を赤らめて若干そっぽを向きながら口を開く。

「さっきはその・・・悪かったわね。アンタの事情も知らないで偏見で勝手な事を言うて・・・」

ステラの口から出て来たのは先程言おうとした発言についての心からの謝罪であった。生まれつき才能に恵まれている所為か少し傲慢なところが見え隠れするステラだが彼女は自分の過ちを素直に認める事のできる人間であり、それが彼女の美点と言える、だからこそ彼女は皆から慕われているのだ。そんなステラの想いをマイは嬉しく思い温かな微笑みを浮かべた。

「ううん、私の方こそゴメン。もつと早く話しておくべきだったのに黙って隠したままにしておこうとしていたんだもん、私、凄く卑怯だったよね？」

「もう気にしていないからいいわ、誰にだって隠しておきたい事の一つや二つあるものよ、アタシだって昔イツキが脱いだ靴下を一足コツソリ盗んで毎晩匂いを嗅いでいた事をイツキに黙ったままなんだから」

「ちよつ、ステラア!!？」

「テメエの方が変態じゃねえか・・・」

「あはは・・・」

和解の空気の中トンデモ発言をして周りをドン引きさせるステラであったが、どうやらステラはマイの事を認められたようである、これで二人の罅りはなくなっただろう。

「コホン！ンンッ！・・・改めてよろしくねマイ！これから友達として学園生活を楽しみましょうー！」

「私からもよろしくマイさん、私はステラちゃんと違って最初から貴方の事を受け入れるつもりでいたから安心してね、純星煌式武装の代償で不幸な境遇に陥る事なんてよくある話なのだから気にする必要はないわ」

「なっ!?!ズルいわよアスカ!自分は気まずい事言わなかったからってアタシだけ悪者にするだなんて!」

「ん、それにしても・・・マイさん肌が白くて綺麗ねえ、元男性だというのにこんなに女性として完成した身体になっているのは元々女性ホルモンが多かったのかしら?正直妬けるくらい羨ましいわ・・・」

「ひゃん!?!唐突に腕を突つかないでよ明日香!ビックリするじゃないか!」

「アタシを無視して和気藹々としてんじやないわよ!アタシにも突つかせない!!」

「イヤアアアーーーーツ!!」

無事和解をしたマイと編入生二人は早速仲良くじゃれ合いを始めてしまい、場は和ましい雰囲気にも包まれたのだった。三人は良い友達になれそうだ。

「やれやれ、女が三人集まれば姦しいとはよく言ったもんだぜ」

「そうだな、アリサが身体を張った甲斐があったというものだ、お疲れアリサ」

「ふふっ、マイの親友として当然の事をしたまでよ、別に特別な事をしたわけじゃないわ・・・親との折り合いが悪いのは私も人の事言えないからね(ボソ)・・・」

「・・・アリサ?」

ワイワイと打ち解けているマイ達を眺めて一時はどうなるかと思つたと安心感に包まれる一同、そんな中で今回の一番の立役者であるアリサは過去に自分がマイに言つた【大切なのは人との繋がりを求める誠実な気持ち】という言葉について思い耽つていた・・・自分の実家との現状を照らし合わせて・・・。

——あの時あんな言葉が自分の口から出て来るなんて思いも由らなかつたわ、私自身人の事言えないっていうのに・・・そうか・・・あれが私の本音なんだ・・・なら言い出しつぺの私が行動で示さないとね!今度実家に戻る機会があつたらその時は母様と・・・。

「燥いでいるところ悪いんだけど、お客様がお見えになつてますよ東堂会長」

「ん?ありがとう千種君。そういうわけですから皆さんそろそろお開きにしましょう、マイさんは装備局に向いて【朱弾の魔槍】を第七機関に提出してから寮へ帰宅してください、他の皆さんは暗くならない内に速やか寮に戻る事!・・・特に武内君は昨晚もまた決闘を行つて騒ぎを起こしたそうですね、その件についてはまた後日詳しい話を聞かせてもらいますから今晩は大人しく就寝する事!いいですね!!」

「いや、その件については今聞かせてもらうぜ、出雲那」

「ちよつとユーリ!?勝手に入つたらダメだつて!」

「ん？・・・アンタ等は・・・」

そうこうしているうちに事務室に書類のコピーを取りに行っていた霞が来客を連れて戻って来ていた。刀華が来客を迎え入れる為場を解散させようとして注意事項を言っているとその最中に出入り口の扉から丁度二十歳くらいの男女一組が断りもなしに勝手に扉を開けて入室して来る。

「よおつ、出雲那！それに他の奴等も！元気に学生生活を謳歌してるか？」

「お忙しいところ失礼します・・・一輝、昨晚振りだね。出雲那も身体の具合は大丈夫？引き取ったシグナムと一緒に倒れていたみたいだけど」

「ユウリー！」

「ハラオウンさんも、どうしてここに？」

男性の方は腰の上まで伸ばした黒い長髪をしていて腰に鞘に刀身を収めた刀を携えたぶっきらぼうな印象の青年であり、女性の方は金色のロングストレートの髪型をしていてアリサ同様真紅（ルビー）色の瞳をしているがアリサより落ち着いた印象を感じさせている。二人に共通するのはどちらも二十歳くらいの歳である事と全体的に黒一色の服装である事と歴戦の戦士の雰囲気漂わせる猛者である事、そして盾を背景にした籠手のシンボルマーク——《支える籠手》のバッジを身に付けている事であった。

「仕事だよ仕事、【瀨霊護廷隊】の依頼で昨晚東エリアのアーケード街で観測された【霊

「圧の残滓」についての調査にな。昨晚その場に居たお前なら何の事か分かっているんだろ、出雲那」

「っ!？」

男性が出雲那に來客した用件を伝えると出雲那は何の事かハッと察する事ができた、それは昨晚、出雲那が入り込んでしまった謎の空間とそこで突如顕れ襲ってきた化物達の事だ。その靈力の残りカスを護廷隊はしっかりと観測していたのであった。

「そんなわけで・・・《遊撃士協会》スクエア東エリア支部所属、B級《遊撃士（ブレイサー）》《黒狼（こくろう）》の《ユーリ・ローウエル》」

「同じく東エリア支部所属、C級遊撃士《金色の閃光》の《フェイト・T（テストロッサ）・ハラオウン》」

「協会規約に基づき、件の当事者である武内出雲那高等生に昨晚の話を伺わせてもらおう！調査の協力よろしく頼むぜ！」

二人は身に付けているバッジと同じ「支える籠手」の紋章が描かれた表紙の手帳を掲げて毅然とそう言い放つ。地域の平和と民間人の保護の為に世界中で活動する調査と戦闘のスペシャリスト【遊撃士】の登場であった。

「・・・・・・・・」

何事かと一同が騒然となる中、柊明日香は眉を顰めて若干険しい表情を浮かべてい

た
・
・
・
。

疑心から確信へ・・・

《遊撃士協会（ブレイサーギルド）》、民間人の安全を護る為「支える籠手」の紋章を掲げて世界中に支部を構える民間団体、彼等の理念は地域の平和や民間人の安全を護るといふ点に集約されており、どんな事があるとも常に民間の保護を優先する。各支部に所属する協会の構成員——「遊撃士」達は協会を通して依頼を受け日々様々な問題解決に当たっている、その実務は迷子のペット探しや図書館より貸し出された本の回収などの雑用から世界各地に跋扈する化物の退治や民間人に危害を加える犯罪者の鎮圧などの戦闘関係の仕事まで様々であり、その多種多様な依頼に対応する為彼等遊撃士協会には様々な分野に適した優秀な人員が所属している。

協会は内政や戦争への武力介入などといった国家権力に対して不干渉である中立な立場であるが故に武闘王国ダイランディアをはじめとする世界中の国家にも「一部を除いて」広く受け入れられているのである。

戦島都市スクエアにも東西南北のエリアに一つずつ・・・計四つの支部が点在し、その内の一つである東エリア支部に所属しているB級遊撃士「ユーリ・ローウエル」とC級遊撃士「フェイト・T・ハラウン」もまた担当区域の平和と民間人の安全を護る為

に今回の件の依頼を受けて調査に乗り出していた。

調査の名目で青学の生徒会室にやって来た二人に出雲那は昨夜の出来事を覚えている限り説明し、その内容を聞いたこの場に居る一同は騒然としていた。

「いきなり空間凍結結界のような現界から隔離された朱い空間に閉じ込められて悪魔のような姿をした正体不明の霊体の化物共に襲われた・・・なあ・・・話を聞く限りソイツ等は〔虚〕じゃねえみてーだが、連盟や護廷隊の周到な網に引つ掛からずにそんなモンがスクエア内に顕れるだなんて俄かに信じられねーけど、実際に霊力の残滓が残っていたとなると・・・重要な手掛かりになりそうだな・・・」

「化物達から出雲那とシグナムを救った氷結能力を使う女子高等生伐刀者というのも気になるね・・・出雲那、他に覚えている事はない？」

「・・・悪い、化物共にやられて死にかけた所為か幾つか記憶が飛んじまったみてえだな、これ以上はどう頑張っても思い出せねえんだ・・・」

ユーリが右手の親指と人差し指を顎に添えて首を傾げて考え込み、遊撃士手帳にメモを取るフェイトが更なる手掛かりを求めて出雲那にその他に思い出せる事はないのかを聞いてみる。出雲那はこれ以上は思い出せないと申し訳なさそうに告げ、「そう・・・」と残念そうに言つてメモを取り終えた手帳を懐にしまうフェイトから目を逸らして周りを見回してみた。皆昨夜危険な目に遭つていた出雲那に心配そうな目を向けている、

特に彼の師のような存在であり人を思いやる気持ちの強い刀華は命に係わるような危険な事をした出雲那に対して怒っているのか非常に訝し気な眼をして出雲那を見つめており、その眼は笑っていない・・・。

——やべえ、刀華さんメチャメチャ怒ってやがる・・・はあ、こりやあ最低説教六時間は覚悟しといたほうがいいな、しばらく夜のランニングも控えた方がよさそうだ、あくかつたりい・・・ん？

笑っていない眼で無言で見つめてくる刀華を恐れて逃げるように目を他に向ける出雲那であったが、そこで明日香が真剣な表情で何やらブツブツ言いながら携帯端末を手に持ってディスプレイを見ているのに気が付いた。

——何やってんだアイツ？優等生のくせに話を聞かないで端末を弄っているなんて・・・アイツ本当は優等生のフリして実は不真面目なんじゃ——

「よし、もういい、話してくれてサンキユな出雲那。あとは現場に行つて直接調べてみるぜ」

明日香に疑いの意を向ける出雲那であったが、ユーリの一声によつて我に呼び戻された。

用事が済んだユーリとフェイトは生徒会室を跡にしようとするが折角なので出雲那達は全員で二人を外まで見送る事にし、一同は校舎の玄関口前に移動した。

「んじや、オレ達はもう行くぜ、これでも忙しい身なんでな、取り込んでいるところ邪魔して悪かったな、生徒会長さん」

「いいえ、こちらこそ折角来ていただいたのにお茶菓子一つ出せなくてすいません、また何かあったらいつでも来てくださいね」

「うん、ありがとう。出雲那、あまり皆に心配かけちゃだめだよ。一輝達も今日は暗くなる前に真つ直ぐ寮に帰りなさい、連盟の方には私達が出向いて伝えておくから」

「分かっているさ、痛い目に遭ったからな、もう刀華さんの長え説教を受けるのも勘弁だし……」

「ありがとうございます、ハラオウンさん達もお気をつけて、お仕事頑張ってください」
「おうつ、じゃあまたな」

ユーリが左手を小さく上げて気さくに別れの言葉を言うとフェイトが出雲那達に軽く一礼をし、二人は出雲那達に見送られながらピツタリ横に並んで校舎の昇降口を出て行く。

「しつかしフェイト、あまり皆に心配かけるなってお前さんも人の事言えないだろ？準遊撃士時代「セームベル」の孤児院が放火された事件で中に孤児院のガキが一人取り残されたと聞いてオレの制止も聞かずに炎の中に飛び込んで行ったくせによ」

「ユーリだって私に説教できる立場じゃないでしょう？貴方が王国騎士だった頃、魔獣

の群れの殲滅作戦で隊列から突出し過ぎて防衛術式内への退避に間に合わなくなりそうになった事があつたつてフレンが愚痴を言っていたよ」

「げっ!?あのヤロウなに勝手に人の失敗談を人のパートナーに話してやがるんだよ!」

「フレン、ユーリの事が心配で心配で仕方がないって感じだったよ。たまには休暇を取って王国騎士団に顔を出しに行ったらどう?遊撃士になってから一回も会っていないでしよう?親友同士なのに」

「それこそお前に言われたくねーよ。お前だって遊撃士になってからというもの、なのはに連絡すらよこしていないんだろ。お前こそ休暇を取って魔導星防軍に顔を出しに行けよ」

「いや、それは違うよ。私は何度ものはの携帯にメールを送ったり直接電話を掛けたりしたけれど全く・全然・ちっとも返信が返ってこないし毎回留守なんだ。たぶん・・・いや確実に仕事に熱中し過ぎて二十四時間携帯メールも読む間もなく働き詰めなんだと思う・・・」

「おい、それもう労働基準時間ガン無視なんてレベルじゃねえって!?アイツいつか過労死するぞ!今回の件が終わったら休暇届出して航空教導隊舎になのはを止めに行くぜ、オレも行くからよ!」

「う、うん・・・」

昇降口を出た二人はそんな他愛もない（？）雑談をしながら校門に向かって学園敷地の内の広場を歩いて去って行ったのだった。

「……………今日はこれで解散としましょうか……………」

「……………」

遊撃士の二人の姿が見えなくなると重くなる空気の中今は一旦お開きにしようと刀華が重い声音で一同に伝え、この場は解散となった。仲間達が【また明日】と次々に帰路に就いて行き、夕陽の光で夕焼け色に染まったエントランスには出雲那と刀華だけが残った。

「……………」

出雲那に背を向け無言で昇降口の外を眺める刀華、その背中はどこか悲し気で夕焼け色に染まった背景も相俟って哀愁漂う雰囲気を感じさせている。

——刀華さん、やっぱりかなり怒っているのか……………当然か……………いつもの決闘でのドンパチなら説教一時間で許してくれるけど今回は不足の事態と言っても死にかけたんだ、相当心配させてしまったんだらうな……………。

出雲那は刀華の背中を眺めて気まずそうに眉を顰めていた。今回は本当に危険な目に遭ってしまった、仲間達も去り際に気遣うような目線を出雲那に向けていたし、況してや技を伝授してくれた師のような存在に多大な心配を掛けてしまったのだ、出雲那は

相当な負い目を感じている事だろう・・・。

「・・・刀華さん・・・」

「・・・」

刀華は何も答えない。彼女はそのまま生徒会室に向かう階段がある廊下に向けて歩き出し出雲那に何も言わずに去るかと思われたが――

「・・・イズ君」

廊下の手前で足を止め、出雲那に背を向けたまま彼女は口を開いた。

「今回の件は予測すらできなかつた不足の事態だったという事で不問とします・・・だけでももう危険な事はしないですね、君は戦士である前に未熟な学生なんだよ、学園を卒業したら死の危険を伴う戦場に出なければならぬ事もあるかもしれないけれど、少なくとも学生生活の中だけは安全に過ごして・・・」

そう言つて刀華は出雲那に想う気持ちを寂し気な声音で伝えてきた、やはり出雲那が昨夜死にかける目に遭つたと言う事実にも刀華は不安を抱いていたのだ、他者を思いやる慈愛の心を持つている彼女にとって誰かが危険な目に遭う事柄など見過ごせるものではない、況してやそれが大切な後輩で弟子のような存在であるならば尚更だ。

・・・それに、出雲那に限つてはある懸念もある・・・。

「・・・イズ君・・・君は『葵柳君』のように絶対にならないでね、戦士として甘い考

えなのかもしれないけれど……目の前で誰かが消えるのはもう……たくさんだから……」
刀華は寂しげな声音のままそう言つて再び歩き出し今度こそこの場を去つて行つた。

「……そんなの……分かつているさ……アイツとの約束を果たすまでは絶対に……」
エントランスに一人残された出雲那は心にスツキリしない気持ちを秘めたまま昇降口を出て寮に帰る事にしたのだった。

「あ、来た来た」

「遅かつたじゃないイヅナ、危うく待ちくたびれそうになつたわ」

「お前ら……」

校門前では一輝とステラの二人が出雲那が来るのを待つていた、二人はどうやら出雲那と帰り道を共にしようと考えていたようだ。

そのまま三人は校門を出て夕焼け色に染められた歩道を歩いて行く。

「一輝はともかく、どういう風の吹き回しだヴァーミリオン？せつかく一輝と二人きりになれるチャンスだったというのによ」

「別に。イツキがアンタを気にかけていたから気を利かせただけよ、アタシ個人もイツキの親友であるアンタの話を聞きたいと思つていたところだしね、普段のイツキの私生活とか……」

「あはは……にしても新学期初日から驚くくらい色々な事があつたよね、登校初っ端か

ら風紀委員にケンカを売ったし、終さんが僕達のクラスの仲間になったし、入学式の東堂さんの演説は素晴らしかったし、ステラと再会できたし、みんなで食事をしたり模擬戦もやったし、ステラとマイ君は解り合えたし、そのうえ遊撃士まで訪ねて来るなんてね」

「・・・なんだかイツキ嬉しそうね、遊撃士の話で少し口もとがニヤけているじゃない、あのキンパツの女遊撃士と親しそうだったし・・・まさか浮気じゃないでしょうね？」
ステラは疑いの目線で一輝の横顔を覗く。言われてみれば一輝はフェイトと話すとき「ハラオウンさん」と妙にハキハキと会話をしていたからもしや彼女に気があるんじゃないかと疑うのも仕方がないのだが・・・。

「僕がハラオウンさんに？それは無いよ、僕が異性として好きなのはステラだけだし、それにハラオウンさんはユーリさんと付き合っているしね」

「えっ!?! そうなの？確かに仲良さそうだったけれど・・・」

「因みにあの二人は同棲しているぜ」

「ふえっ!?! ど、同棲っ!?!」

「ナハハ！顔真つ赤にして、お前大胆に見えて意外と純情（うぶ）だなヴァーミリオン。残念ながらあの二人は今のところ今お前が妄想したような事をするまでは行つてねえみたいだぜ。フェイト先輩は青学のOBだからよくオレ達のような後輩に愚痴を聞いて

てもらいに来るんだよなあ、主にユーリ関係の」

同棲と聞いて茹で上がったように顔を真っ赤にするステラをニヤニヤとイジリながら出雲那が言ったようにフェイトは二年前に青学を卒業したOBであり一輝が親しうにしていたのもそういう理由である、遊撃士の採用試験を受けられるのは十六歳からなのだが、フェイトは学園卒業後すぐに採用試験に合格して十八歳で見習いである準遊撃士となり、経ったの一年間で準遊撃士から正遊撃士になる為の条件を達成し、現在協会から二つ名を貰うに値するC級に至り、日夜遊撃士として人々の平和の為に活動している。彼女がユーリと組むようになったのも二人は幼少期からの幼馴染で準遊撃士時代に起きた「とある事件」で再会したのが切っ掛けであり、元々ユーリに気があったフェイトは正遊撃士となった日の夜にユーリに自分の想いを打ち明けた事で二人は仕事のパートナー兼恋人同士の関係になったのであった。

「ははは、まああの二人に限らず遊撃士の男女ペアの多くがカップルになる傾向があるみたいだね。ハラオウンさんが準遊撃士となった二年前に起きたあの世界規模に及んだ《万応素（マナ）枯渴事件》解決の立役者である《陽光》と《漆黒の牙》の二人も恋人同士だったみたいだしね」

「あつ、その二人ならアタシも知っているわ！現在ダイランディア軍参謀長を務める元《S級》遊撃士、《劍聖》《カシウス・ブライト》准将の娘と養子だつて聞いたわ」

「うん。あの二人は本当に凄いとと思うよ、準遊撃士になつてから経つたの半年で正遊撃士として認められて、事件時に世界中を巡つて多くの人々の助けになつて、最後に多くの仲間達と共に事件を引き起こした主犯の組織が潜む浮遊要塞へと突入し主犯格の間を見事に撃破・・・まるで小説の英雄物語みたいだと思つたよ。【陽光】と【漆黒の牙】の二人はこの剣で多くの人々を救う騎士を目指す僕の理想像さ」

「・・・イツキ?」

ステラは遊撃士の事を語る一輝が楽しそうに感慨に耽つているのを感じて疑問に思つた、何故彼は遊撃士の話を楽しそうに語るのだろうか・・・そんなステラの心情を察したのか、一輝は徐（おもむろ）に語りだした。

「・・・ステラ・・・僕が昔【弱い人も才能が無い人も差別せず大勢の人の助けとなる騎士】になるという夢を語つたのは覚えてるよね・・・」

「・・・うん、それでイツキは将来連盟に加入して理想の騎士になるって言っていたわね」「そう・・・夢は今でも変わらなければ、今は連盟に加入しようとは思っていないよ・・・僕は・・・遊撃士になりたいんだ・・・【陽光】と【漆黒の牙】のような大勢の人を救う最高の遊撃士に・・・」

一輝は自分の胸の内を告白した。遊撃士はチカラにも権力にも屈しない【自由騎士】とも呼ばれている、基本規約により遊撃士は国家権力には干渉できないが、彼等が何よ

りも優先する規約は「民間人の安全」であり、国家が民間人に危害を及ぼすならば例外的に正面から国家にケンカを売る事も辞さない。一輝はそんな彼等と自分の理想を重ねて自分の夢を叶える為には遊撃士になるのが一番だと思ったのであった。

「・・・そう・・・浮気じゃないと分かってなんとなく予想はしていたけれど・・・うん、いいんじゃない？人の為に活動する組織なんてイツキに向いていると思うわ」

「ステラ・・・」

「それじゃあ学園を卒業してもし遊撃士になれたのなら・・・アタシの国に来て一緒に国民のみんなを護ってくれる？」

意外にもステラは一輝が目標を変えた事をアツサリと受け入れた。ステラ自身も愛するヴァーミリオン皇国民達を護りたいという理念で戦士となったので人々を護る為に活動する遊撃士には感心の念を抱いており、ヴァーミリオン皇国でも支部の遊撃士達は国民の安全の為に日夜手助けをしてくれていたので感謝すらしている。故にステラは一輝が遊撃士を目指す事に賛成し、正遊撃士となった暁にはヴァーミリオン皇国にある支部に所属して自分と共に国民達を護ってほしいという想いを抱いていた。

そんなステラの想いに対しての一輝の答えは言うまでもなく――

「もちろんだよステラ、一緒に多くの人々を護って行こう、僕と君ならきつと・・・」

「イツキ・・・」

「ステラ・・・」

歩みを止めて将来の約束と共に見つめ合う二人、暖かな夕陽はそんな二人を祝福するかのように見守っているようであった・・・なんとロマンチックな絵面だが忘れてはいないだろうか？我が主人公がこの場に居るといふ事を――

「おーい、オレ邪魔のようだし先帰っていいか？」

「「フアツ!?!」」

二人の世界に浸透している最中に突然声をかけられたのでギョツと我に返る一輝とステラ、眼を細めて呆れた表情をしていた出雲那が付き合い切れなような表情をしていた為に二人は急に恥ずかしくなり頬を朱らめて明後日の方向を向いて誤魔化しはじめるのだがもう遅いと思う・・・。

「・・・まあそれはいいとしてヴァーミリオン、柊の奴はどうした？お前アイツとダチなんだろ？一輝と二人きりで帰るんじゃないんならアイツも誘っても良かったと思うんだが・・・」

甘々で鬱陶しく感じた空気が無くなった事により出雲那は気を切り替えて先程から気になっていた事をステラに聞いてみる。するとステラは何と言ったらいのか分からないのか「うゝん」と唸り眉を蹙めた訝し気な表情になる。

「アタシもアスカを誘おうと思ったんだけど、さつき遊撃士の二人が去って行ってトー

カさんが場を解散させた時にはもうどこかへ行っちゃったのよ。アスカの奴ヴァーミリオンに居た頃も偶にふらつとどこかへいなくなる事があったの、いつもはしっかりとした優等生なんだけど放浪癖でもあるのかしら？・・・そういえば今日アンタが話していた昨夜の事件の話の中に気になった事があつただけだ」

「気になった事？」

「ほら、アンタを助けたっていう女子高等生伐刀者の話、確か氷結能力を使っていたって言ったわよね？」

「・・・そうだ」

眼は額の傷から流れ出る血で霞んでいたとはいえ氷なんて個体を見間違える筈がない。出雲那は半ば曖昧にステラの疑問に応えたのだが、ステラはそれを聞いて言い難そうに言う。

「なんと言うか・・・偶然だとは思うけれど——

——アスカも氷結能力を使う伐刀者なのよ」

「っ!!!」

ステラがその事実を告げた瞬間に出雲那の頭の中に電流が流れるかのような衝撃が奔った。

—— 柊が昨夜化物共を相手に無双していた女と同じ氷結能力を使う伐刀者？今日教室で編入して来た柊の姿を見た時に見たフラッシュバックといい。一体——

柊明日香は何者なのか？その疑心が出雲那の心を支配し、彼は居ても立っても居られなくなった。

「・・・悪い一輝、ヴァーミリオン、やっぱり二人で先に帰ってくれ・・・」

「出雲那君？」

「ま、まさかあ、偶然でしょ？アスカは優等生よ、そんな夜中に散歩して化物退治をしているなんて・・・」

「悪い！気になって仕方がねえんだ!!」

出雲那は焦燥に駆られて走り出した。

「あつ、出雲那君!?!危険だから今日は早く帰れつて「陽が落ちるまでには戻る!」終に話を聞きに行くだけだから心配すんな!」ちよつ、待つ・・・」

出雲那は一輝の制止も聞かずに行つてしまった。疑心が確信に変わりそうので焦る気持ちはわかるが・・・。

「・・・イズナ・・・アイツ今アスカがどこにいるのか分かつているのかしら?」
ステラの眩きの後に「カー!カー!」と夕陽の前に飛ぶカラスが鳴いた。

「・・・《異界化（イクリプス）》の反応があつたのはこの辺りだったな・・・」

無数に建ち並ぶ高層ビルとその眼下のコンクリートの上を多くの車両が行き来する東エリア中央区、ガラス張りの側面で夕陽の光が朱く反射するその景色を良く見渡す事のできる高層ビルの屋上で黒い外套を纏つた一人の少年がその景色を眺めていた。

「成程、眼で視る限りは何も異常など無いように思えるが所々の空間に綻びが生じているな・・・フツ、下手な偽装だ。無数のダミーを創る事によつて《ゲート》の出現場所を《適格者》に発見されるのを困難にする腹のようだが・・・それで俺の眼が誤魔化せるとでも思っているのか？」

少年は外套のフードを外して素顔を露わにさせる。少年は出雲那と殆ど変わらない歳のようにあり、色が抜けたような銀髪が目立つ、左右の瞳の色が違ふ黒と紅のオッドアイであり右の紅い瞳の中心には無数の鎖が巻き付けられた六芒星のような紋様が宿っている、顔は整っているが無愛想な雰囲気醸し出し、褐色肌の顔の右側三分の一はジグザグに仕切られた黒い痣が侵食していてかなり・・・厨二だ。左腰に差してある紫色の鞆に収められた太刀も相俟つて凄く厨二臭い（笑）、彼の姿を見た一般人がいたら百人中九十八人が不審者だと思ふ事だろう。

キザっぽい笑みを浮かべて微妙にドヤ顔をしている銀髪の少年であったがその時、少年は背後から来る気配を感じ取った。

「プルートゥ〜♪」

「ふっ」

「……アレ？」

少年は自分の背中に気さくに飛び掛かってしがみ付こうとして来たキャスケット帽を頭に被った少女を右に一步ズレてやり過ぎた。飛びつく対象を見失った少女は当然少年の左を通り過ぎて切り立った端から飛び出してしまい、万有引力の法則に従って身体は奈落へと落下を始める。

「……ちよっ!? 下っ! 落ちる! 死ぬ! あたし死んじゃう! ぐえっ!!」

「やれやれ、鬱陶しい女だ……マリ、何馬鹿をやっている?」

「ぐお〃 お〃 お〃、はやぐ上げでえ〃 え〃!!」

少女が落下しそうになる寸前、「プルート」と呼ばれた銀髪の少年が少女の首に巻かれているマフラーの裾を掴み落下を防止する。マフラーが首に締まって苦しそうに顔を青くする少女の名は《二階堂マリ（にかいどう まり）》、彼女は魔女ではなく純粋な魔導士なのだが何故か《極光の魔女》と呼ばれている。

「……フンッ!」

「んがあつ——がっ!？」

苦しむマリの喘ぎ声が鬱陶しく思ったので少年はマフラーを掴む腕に一気にチカラを加えてマリの身体ごと引つ張り上げて上に放り、宙を舞ったマリは頭から元の屋上の床に落下し彼女の眼から星が出た。

「痛つっ——っ!!何すんのよ、頭パーになつたらどうしてくれるの?もつと優しく引き上げてくれたつていいじゃない・・・いたた・・・」

「元々パーだろう?問題ない」

「誰がパーよ!?!あたし二大大国の名前両方間違えずに言えるんだから!」

「それは一般常識だ。それに貴様は飛行魔法が使えるだろうが、冷静になれば対処できた筈だ、この愚か者が」

少年は打ち付けた頭を痛そうに手で押さえて立ち上がってギャーギャー言ってくるマリの文句を川のせせらぎのように流して眼下の街を再び見下ろす、少年の名は《プルート・A・イグナイト》、素性不明の謎の少年だ。

「さてと、そろそろ頃合いだな・・・先に行くぞマリ」

「ちよっ!?!待つてよプルート!アタシ魔導士だから【適格者】じゃないし、アンタがいないと【ゲート】潜れないじゃない!!ちよつと——っ!!!!」

プルートは後ろで喚くマリを無視してビルの屋上から飛び降りて行く。

「フツ！昨夜の【異界化】反応といい、今回の件といい、どうも最近この都市で【異界化】が頻発しているようだ、これはひよつとすると【俺達の目的の奴】が出て来るかもしれないな・・・フツ！鬼が出るか蛇が出るか・・・楽しみだ。なあ、《冥界の死刀（イザナミ）》」

落下しながら不敵に笑うプルートの左腰の太刀の紫色の鞘には白い字でこう彫られていた——《伊邪那美》と・・・。

東エリアの街中を出雲那は駆け抜ける、陽はもうすぐ沈みそうだが、夜の闇が東の空を侵食しはじめている。彼が目指す目的地は・・・昨夜化物に襲われたアーケード街。

——犯人っていうのは犯行現場に戻るモンだけ、もし終の奴が昨日の女ならそこに居る可能性が高けえ筈。

無論、出雲那は全く見当違いの場所を目指していたのだった。ハッキリ言っただけで出雲那そんなに頭は良くない、戦いに關しては頭の回転が速いのだが、推理とか憶測とかそういう分野はからつきしなのだ・・・。

「・・・よしつ、もう少しd「おい、決闘（デュエル）しろよ！武内出雲那!!」ん？——
——ってどああっ!？」

背の高い建物が密集する間にある通り道を通り抜けようとした瞬間、出雲那の頭上からデカデカと「5t」と書かれた分銅が落下して来た。それに気付いた出雲那は慌てて前に飛び込んでそれを回避し、分銅の重量で破砕したコンクリートの破片が粉塵となつて舞う中出雲那は前転をして受け身をとり、立ち上がって分銅が落下して来た場所の近くの建物の上を見回して分銅を落とした犯人を探る・・・そしてそこに居たのは——
「フツ！やはり躲したか、そうでなければテストタロツサのライトニングバインドを執念で引き千切って舞い戻った意味が無い。心が滾るぞ武内！」

「・・・おい、何騎士がセコイ真似してんだよ・・・昨日おもいつきり雷切くらわせたよ

いうのにもうピンピンして出てきやがったのかよ……シグナム先輩!」

屋根の上に立って威風堂々と出雲那を見下ろす美しき【流離の烈火の将】シグナムだった。気付いた時には既にソーサラーフィールドが展開されていて、どうやら決闘は避けられる様子ではないようだ。

「悪りいけど今テメエの相手をしている暇はねえんだ!速攻で決着を着けてやるから恨むんじゃないぞ!!」

『LET'S GO AHEAD!』

身体中に激しく電光を迸らせて出雲那は星脈世代の強靱な跳躍力によつて空へと飛び出して行ったのだつた……今、この戦島都市スクエアで何かが起きようとしている……。

夜に塗り替えられる空

出雲那がシグナムと遭遇している頃、その数キロメートル先にあるアーケード街に先程聞き込みの為に青学の生徒会室を訪れていた遊撃士の二人、ユーリとフェイトが到着していた。

「現場に到着つと．．．なるほどな、あちこちで修繕ガジェットが工事をしてやがる」

陽が沈みかけた夕空の下、ユーリはアーケード街の辺り一帯を見回してそう呟く。そこから中で酷く破損した噴水池や煉瓦造りの建物、倒壊したアーチなどを円柱状の機械がロボットアームを出して修繕作業をしているのが見えるので明らかにこの場で何かがあつたという事が一般人の目でも判別できる。

「これだけなら出雲那とシグナムが決闘で暴れたつてだけかもしれないけれど、此処に靈力の残滓があるとすると．．．」

「ああ、いよいよキナ臭くなつてくるな。出雲那の奴は「表向き」魔術師つて事で通しているからよっぽどの事が無い限り「あのチカラ」は使わねえだろうし、使つたとしても靈的な何かを退ける為だろうから、どっちにしろ霊関係の事件があつたつて事だ。出雲那から聞き出した話にも信憑性が出てきやがったな．．．」

「もし霊体の怪物が襲って来たら星脈世代と魔導士の私達じゃあどうにもならないね。一応その対策は用意してあるけれど、ザコはともかく大物が出たらこれだけじゃ心もたないかな……」

仕事の依頼を出したのが澗霊護廷隊であるので事件の内容が霊関係である可能性は大いに考えられるが、もし出雲那から聞き出した通りこの被害が何らかの霊体の化物によつて齎されたモノだとするならば、もしそれに襲われた場合、星脈世代であるユーリと魔導士であるフェイトでは太刀打ちする事は不可能だ。何故なら霊体には霊力でなければ干渉する事ができないからであり、霊力以外のチカラでは一切霊体に傷を付ける事ができないからである。一定以上の気力や魔力を保有していれば霊体を視認する事ぐらいは可能なのだが、やはり霊体の化物を倒すには霊力が必要なのだ。

一応戦闘をする可能性を考慮してフェイトは幾らかの対策を事前に用意し、自身も今先程青学に訪れた際に着ていた私服ではなく《防護服（プロテクター）》と呼ばれる魔導士専用の防具を身に纏っている。髪型も金色の長髪を二つの黒いリボンで括つて可憐なツインテールにしており、それが裾が長めの黒い軍服風のジャケット&ミニスカート。防護服と相まって非常に彼女の可憐さを引き立てている……風に棚引く白いマントは少し痛々しい気がするが、どこかの執行者のような黒服を着ているユーリとはお似合いなのもかもしれない……。

「んな事はわかってるって。だから護廷隊に助っ人を出してくれと頼んだんだろ？」

「その筈なんだけど・・・まだ来ていないみたいだね・・・」

正遊撃士は依頼を遂行するにあたり手持ちの戦力では能力不足だと判断した場合、依頼を受けた遊撃士は自己判断と責任で協力者を募る事が許されている。今回、スクエアに点在する協会支部に動ける伐刀者の遊撃士が誰一人としていなかった。この戦いのために備えて依頼主である瀟霊護廷隊スクエア支部の方から隊士を一人協力者として現地に派遣する運びとなっているのだが・・・護廷隊の隊士らしき人物はこの場のどこにも見当たらない。恐らくは派遣予定の隊士が外部での戦闘許可証をもらったり、記録の為の書類を用意したりと準備に戸惑って遅れているのだろう、大きな組織故にフットワークが遅いのだ。

「まっ、来てないんならしょうがねえな。この場の霊力の測定だけでも先にやっちゃまおうぜ」

「うん、そうだね」

「たのむぞ、フェイト」

「来て、《バルディッシュ》」

フェイトはその場で換装魔法を発動し、何も無い空間から黒い魔戦斧型の魔装錬金武装を取り出した。そして彼女はそれを右手に持ち、夜の漆黒に染まりかけている天に掲

げる。

「アクセス——」

バルディッシュの黄色の核が発光しフェイトの全身が金色の膜に覆わる、その後彼女を中心に金色に光る輪が形成され、それが波のように周囲に広がって行く。

「……どうだ？ 周りに靈力の残りカスはあったか？」

「——……うん、発生してから時間が経っているみたいだから濃度が薄いけれど周囲には靈力の残滓がある。それも一つや二つじゃない、判り難いけれどもかなり多いみたいだね……」

バルディッシュを持った右腕を真上に掲げたまま眼を瞑って制止しているフェイトにユーリが靈力の残滓は見つかったのかを尋ね、フェイトはそれに頷いて肯定する。どうやらフェイトは今周囲に存在する靈力を探っているようだ。

何故魔導士であるフェイトが靈力を探れるのかというと、現在彼女の魔装錬金武装であるバルディッシュの内部には遊撃士協会のバックアップをしてきている《エプスタイン財団》により開発された《万応素測定装置》が組み込まれており、今はそれを作動させて近辺の万応素を測定しているからである。元々生物の潜在能力である気力はともかく魔力と靈力は万応素によって齎されたチカラである為、空气中に散布する万応素の質を調べる事によりその場に漂っている魔力や靈力を測定する事が可能なのだ。

「どうやら霊絡みの案件なのは間違いないみたいだな」

「そうだね、伐刀者のならず者グループ同士の抗争というのも考えられたけど、それなら昨晚の内にギルドに情報が届いて緊急クエストが発生していただろうし、連盟の騎士達だつて鎮圧に出勤している筈だからその線はあり得ないかな」

測定の結果、昨晚この場で霊的な何かが暴れたのだろうと結論付け、フェイトは測定装置を停止させてバルディッシュを持つ右腕を下ろした。

「やれやれ、どうやら出雲那が言った正体不明の霊体の化物が現れたつてというのが事実だという可能性が高そうだな」

「うん。でもそれだと私達にできる事はここまでだね。悔しいけれど霊力を持つ伐刀者でないとい霊関係の案件に対処するのは無理だ」

「まっ、しようがねえか、後は護廷隊の仕事だ。これから此処に来る予定の遅刻隊士クンに調査を引き継いで依頼達成としようぜ」

霊関係の事件となるとこれ以上は伐刀者ではない二人にできる事は何も無いだろう。二人は後は専門家に任せて身を引く事を決める、これが出雲那ならば最後まで首を突っ込もうとするだろうが二人はプロだ、引くべき時に引くという引き際を弁える事ができる。

「よしっ、というわけで遅刻隊士クンが来るまでの間、その辺ブラブラとデートでもする

か」

「ちよつ!? デ、デートつて一応今は仕事なんだよ! そ、そんな不謹慎な・・・」

「おいおい、なにキョドつて赤くなつてんだ? 今更デートぐらいで初々しくなる仲でもねーだろ?」

「そ、それはそうだけど! ユーリが急に言うから驚いたんじやない!!・・・まったく・・・」

「はは、悪い悪い、そんなにカリカリすんなよ、美人が台無しだぞ」

「大きなお世話だよ・・・」

一応まだ仕事申中だというのに解放感に当てられてニヤニヤと意地悪な笑みで揶揄ってくるユーリに対してフェイトは恥じらいによる動揺のあまりに頬が朱く染まる程怒鳴り声をあげている、誘いを断ろうとしないあたりフェイトも満更ではないのだろうし恋人同士なのだから別にデートくらいで恥ずかしがる程初心では無いのだが、急な不意打ちは気に喰わなく思つたのだろう。

「・・・ねえ、ユーリ・・・」

「ん?」

頬を朱く染めたまま不機嫌そうに腕を組んでムスツとそっぽを向くフェイトであったが、しばらく気持ち落ちけると彼女は腕を組んだまま横目でユーリに視線を合わせてきた。その頬は先程よりも濃い朱に染まっついてモジモジとかなり恥ずかしそう

にしている。

「あのさ……そろそろ私達付き合ってから一年になるよね……」

「……ああ、そうだな……」

「ならさ……えくつと……そろそろ私達も……そのう……」

「?……なんだよ、ハッキリ言ったらどうだ?」

「だから……そのう……そろそろ恋人同士らしい事をというか……一つ上の関係に
というか……」

「二人で同棲してんのに恋人同士らしい事も何もないだろうが……何だ?キスでもして
ほしいのか?」

「そ、それもそうなんだけど……そのう……」

ユーリは焦れつたいなとモジモジと尻込みして何かをねだろうとするフェイトにジ
ト眼を向けて自分に何をしてほしいのかを言うのだが、フェイトはハッキリとそれを口
に出そうとしない……いや、おいそれと言えないような恥ずかしい事なのだろう。今
の彼女は女の顔だ、キス以上の事で恋人同士らしい事と言えば大人ならば察する事がで
きる筈なのだが、生憎ユーリ・ローウェルという男はこの手の事に関しては疎い……

「……ユーリ……」

このままの調子だとまた何もできずに終わってしまうと悟ったフェイトは意を決し

てユーリの眼前に立ち、うつとりとした上目でその黒い水晶の様な瞳を見つめる。空気が神妙になり、彼女が向ける真紅の瞳に当てられてユーリも自然と無言になり息を呑まざるを得ない状況となっていた。

——おいおい……一体何をするつもりなんだ……。

ユーリは自分のパートナー兼恋人の突然の行動に困惑しているがその女の瞳に心臓は激しく鼓動している。彼女が醸し出す神妙ながら扇情的な雰囲気飲まれて戸惑っているのだ。そしてその雰囲気に乗じてフェイトがその全身を戸惑いで硬直するユーリに傾け……ようにとしたその時——

「——つ!!? フェイト! 跳べえつ!!」

「っ!!?」

巨大な【異形】の接近を察知したユーリが我に返り、フェイトに叫ぶと彼女も我に返る、瞬時に二人はその場から跳び退き、二人が0.5秒前に居た場所に大木のように巨大な【腕】が振り下ろされ、煉瓦で舗装された地面が砕けて粉塵が舞った。

「チツ! 幾ら何でも気を抜き過ぎた。こんなデカブツの接近に気付けねえなんてよ!」

フェイトと共に地に着地したユーリは今まで【異形】の接近に気付かなかった自分の不注意を戒めて悪態を吐いた。粉塵が晴れるとその中から出て来たのはユーリの身体の上の二倍以上の大きさはあるであろう化物、全体的には人の様に直立で立ってはいるが首

から上は魚の頭蓋骨の様な【仮面】に覆われていて、斑模様の巨大な体躯の胸の中心には円形の【孔】が空いている。このような【仮面】と【孔】を持つ霊体の化物を人はこう呼ぶ——

「【虚（ホロウ）】・・・くっ、油断した。これだけ多くの霊力の残滓が漂っている場なら何時虚が現れたとしても不思議じゃない！少し考えてみれば判る事だったのにつ!!」

「フェイト！反省すんのは後だ!!とにかく応戦するぞ!!用意した【アレ】を出せ!!」
「う、うんつ!!」

ユーリの指示に応じたフェイトは換装魔法を使用してバルディッシュを別空間に仕舞い、代わりにその空間から二本の木刀を取り出した。

「ユーリッ！」
「おうっ！」

フェイトは手に持った二本の木刀の内の一本をユーリに投げ渡す。この木刀が用意した対霊体の秘策だと言うのだろうか？ユーリは渡された木刀を肩に担ぎ、フェイトは木刀を正眼に構えて虚を睨みつけ、臨戦態勢に入っている。

「気を付けろよフェイト！コイツは確か『フィッシュボーンD』とかいう呼称（コード）付きの虚だった筈だ！たぶんこんな木刀じゃ倒すのは無理だろーから、今オレ等がやるべき事は——」

「護廷隊の隊士が来るまでの時間稼ぎだよな？わかつているよ、都市に虚が出現したとなれば護廷隊だって急行せざるを得ないだろうし、靈力を持たない私達が簡単に倒せる相手じゃないって事ぐらいは判る・・・でもユーリ」

「ん？」

「時間稼ぎとは言ったけれど・・・別に倒しちやつても構わないよね？」

「・・・それは死亡フラグって言うんだ——よつとつ!!!」

間を空けた後のユーリの一声と共に戦闘は始まった。刹那、ブオン！という風切り音と共に二人はその場から姿を消し——

「《幻狼斬（げんろうざん）》っ！」

「《ブリッツアクション》！」

一瞬にしてフィッシュボーンDの背後に現れて手に持つ木刀を同時に振るった。

「ブオオオオオンツ!!」

「おっとー！」

背中に叩き付けられた木刀が効いたのかフィッシュボーンDは弓なり背中を仰け反らせて奇声を上げる。直後、お返しと言わんばかりにフィッシュボーンDは大木の様に太い右腕で背後の二人に裏拳をくらわせようと振るうが、二人はフィッシュボーンDが振り返ると同時にその場から後方に跳び退いたので腕は空を切って風圧を起こすだけ

で済んだ。

「へっ！どうだバケモン、霊木製の木刀の味はよ？伐刀者の霊装と比べればシヨボイだろーが、ちったあ効いただろ？」

不敵な笑みをしてユーリが言うように今二人が手に持っている木刀は万応素の影響で霊力が宿った樹である霊木を削って作られた代物だ。これならば霊力を持たないユーリやフェイトでも霊体にダメージを与える事が可能・・・だがしかし――

「グオオオオオオッ!!」

「全然効いてないね・・・」

「だな・・・」

ザコ霊体が相手ならばともかく虚を倒すには木刀では火力不足であった。

「グオオオオオオオッ!!」

「ちっ！《蒼破刃（そうはじん）》っ！」

《フォトンランサー》、発射（ファイア）っ！」

形成不利を悟ったユーリとフェイトは逆上して襲いかかって来たフィッシュボーンDに気力の剣波と魔力の槍弾を撃ち込み、被爆によって張られた爆煙の煙幕に乗じてその場から退避する、どんなに攻撃力が高かろうと気力と魔力では霊体である虚には傷一つ付ける事ができない故に攻撃としては効果が無いが目暗まし程度にはなるのだ。

ユーリは五階建ての建物の屋上の端に星脈世代の超人的な跳躍力で跳び移り、フェイトは飛行魔法を發動させてユーリが居る建物から5 m程離れた空間に飛翔した。

フェイトは通常の魔導師ではない、彼女のように飛行魔法を使用し空戦を可能とする魔導師は《空戦魔導師（エリアルウィザード）》と呼ばれ、空戦のスペシャリストとして世界中の高空を戦場として活躍するのだ。

空戦魔導師はフェイトのような一部の例外を除けば大体「魔導星防軍」の《航空魔導戦団》に所属し、【第二次遭遇】時に出現した異次元の扉より現れた怪物の一部である《魔甲蟲（まこうちゅう）》と戦うという義務を全うするのだが・・・その詳細については今は関係無いのでまたの機会に話すでしょう・・・。

「ユーリ、どうする？虚が相手じゃ長くは持たないよ！」

「分かっているって！クソツ、気力と魔力さえ通じればこんな野郎！」

空中に滞空するフェイトがユーリに指示を求め、ユーリは爆煙が覆う眼下の噴水広場を眺めて歯痒そうに唇を噛み締めている。戦闘のプロとはいえども自分達のチカラが通用しない敵が相手では時間稼ぎをする事しかできない、況してや虚は護廷隊が《第一級討伐対象》として優先的に征伐を行っている悪霊なのだ、このままのジリ貧な状況が続いたら危険だ。

ユーリはフェイトと視線を合わせアイコンタクトを送るとフェイトは頷き、爆煙が覆

う眼下の噴水広場を見据えて魔法の詠唱を開始する。

フェイトが発動しようとしている魔法は《バインド》と呼ばれる拘束系の魔法である、それは対象を空間に固定して動きを封じる魔法、これならば魔法の効力は敵では無く空間に作用するのでその空間に存在する霊体にも通用する筈だとユーリは考え、バインドが使用できるフェイトに指示を送ったのだ、「煙幕が晴れて虚が姿を現した瞬間を狙って奴にバインドを掛けろ」と。

「ま、あくまでも直感で思い付いた事だから実際に通用するのは分かんねえけどモノは試しだな、フェイト、タイミングを逃すんじゃねえぞ——」

徐々に爆煙が収まってきたその時、突如爆煙の一部が膨れ上がり、なんとそこから爆煙を突き破ってフィッシュボーンDが空中で詠唱中のフェイト目掛けて跳び上がった。来たのだった。

「なっ?!?!マジかっ!!」

「くっ?!?!バルディッシュを仕舞うんじやなかった!このタイミングじゃバインドが発動できない!」

「フェイト!避けろっ!!」

「ダメ、間に合わないっ!!」

詠唱中故にフェイトは身動きが取れない、先程換装で別空間に仕舞ったバルディッ

シユが手元にあれば高速詠唱や詠唱破棄も可能なのだが今それは彼女の手には無い、後悔しても時は戻らない、ユーリが必死にフェイトに呼び掛けるものの動けないものはどうしようもない。

気が付けばフィツシユボーンDはフェイトの目前に迫っていて、金色の魔導士を空から叩き墜とさんと大木の様な腕を振り上げており、もはやフェイトの命運は尽きたかと思われた・・・その時――

「咆えろ！ 《蛇尾丸（ぎびまる）》！！」

フィツシュボーンDの背後からいきなり黒い人影が飛び掛かった。その手に持った刀型の霊装の名を言い放つと共に刀型の霊装が鋸の様な刃と無数の刃節を持った蛇腹刀へと姿を変え、振り下ろされた刃が撓るように伸びてフィツシュボーンDの脳天を引き裂き、仮面ごと頭を両断して大木のような腕がフェイトに触れる直前でフィツシュボーンDは霊力の塵となって現世より消え去ったのだった。

「——えっ!?!」

謎の人影の助太刀により危機から脱したフェイトは何が起きたのか理解が追い付かずに茫然と眼を見開き戸惑っていた。もう自分は駄目かと思っていたところで眼前に迫っていた脅威が突然消滅したので意識が啞然となったからだ。

今、彼女の目の前には黒い着物の様な戦闘装束を身に纏ったユーリより眼つきの悪い赤髪の男性が蛇腹刀型の霊装「蛇尾丸」を肩に担いで宙に「立っている」、額を覆う黒い布の下には刺青があり、浮かべる笑みは獐猛な雰囲気を感じさせている……この男の素性、それは——

「待たせたな遊撃士共! 瀨霊護廷隊スクエア支部【副長】《阿散井恋次(あばらい れんじ)》! 唯今参上!!」

ユーリ達が待っていた瀨霊護廷隊の隊士……いや、彼は隊士どころか支部の副長格であった。

「へっ、ようやくお出ましか、間一髪だったな」

「ワンツ！」

《ラピード》、お前もお疲れさん」

恋次の登場でフィッシュボーンDが倒されフェイトが助かった事に安堵するように人差し指で鼻元を拭うユーリの許にはいつの間にもやらキセルを啜えた隻眼の大型犬が寄って来ていた。どうやらこの犬——ラピードはユーリの飼った犬のようであり、ラピードを褒めるユーリの言動からしてどうやらユーリはラピードに何か指示を与えていたようだが……そんなやり取りをしている間に恋次とフェイトがユーリ達の前へ降りて来た。

「よお遊撃士、遅れちまってすまなかったな」

「いいって事よ、ラピードが上手く道案内してくれたみたいだしな。にしてもあのバケモンを一撃で仕留めるとは恐れ入ったな、まさか支部の副長が直々に協力してくれるだなんて思ってもみなかったぜ」

「へっ、当然だぜ！呼称付きとはいえ討伐手当0ガルドのザコ虚を瞬殺できねえようじゃ護廷隊各支部の副長は務まらねえからな！」

「さすが虚退治の専門家の《魂律士（コンタクター）》ですね。危ないところを助けていただき、どうもありがとうございます」

ユーリの前に降りた恋次は気さくな挨拶を言ってから指定した時間に遅れた事を謝罪し、ユーリが気にするなど言ってフィツシュボーンDを一撃で倒した事を称賛し、恋次は称賛された事をこそばゆそうにして自分の実力を誇るように言い、恋次の隣に降りたフェイトが恋次に称賛と救われた礼の言葉を送った。

瀟靈護廷隊の隊士は皆「魂律士」と呼称される特殊な伐刀者である。魂律士とは二段階の形態に「解放」する事が可能な霊装《斬魄刀（ざんぱくとう）》を顕現する事ができる伐刀者の事を言い、斬魄刀には霊を導き悪霊を浄化する能力が備わっている。斬魄刀は通常《浅打（あさうち）》と呼ばれる刀の形状をしているが、所有者である魂律士が己の斬魄刀の名を呼ぶ事によって斬魄刀のチカラを解放する事ができるのである。

今恋次が肩に担いでいる蛇尾丸は斬魄刀解放の第一形態《始解（しかい）》、これは所持者の魂律士が斬魄刀の「仮の名」を呼ぶ事で解放する事ができ、始解すると形状が変化して固有の特殊能力が使用可能になる。これは通常の伐刀者の霊装より霊体に対する事象干渉力が高く、対霊体の戦闘に関しては他より一線を画している。

更に斬魄刀には例外を除き護廷隊の「支部長格」のみが使用可能な斬魄刀の「真の名」を呼ぶ事で解放する第二形態が存在するのだが・・・その詳細はまたの機会に説明する事としよう・・・。

「礼ならいいぜ、それよりも仕事の話だ。この辺りの霊力測定ぐらいはやったんだろ？」

「ああ、かなりの霊力の残りカスが漂ってやがった。昨晚ここで虚のような霊体の化物の大群が出現して暴れていた可能性が高けえ、事が済むまで護廷隊（そっち）の網に引っかけからなかつた事を考えると相当手の込んだ空間凍結結界を張ったんだろうよ、昨晚の被害者もそう言っていたしな」

「やっぱりな、【朽木支部長】の予測通りだ。となるとさっきのもそれに関係あるかもしれねえな」

恋次はユーリからこのアーケード街の霊力測定結果を聞き出すとニヤリと悪どい笑みを浮かべてそう言う。それはどういう事だという表情をしてユーリとフェイトは次に説明を求める目線を向け、恋次はそれを受け取って二人に説明をする。

「実は遅れた理由なんだが・・・経ったさつき東エリアの中央区に微妙な空間の乱れが観測された」

「雷切いいっ!!」

「紫電一閃っ!!」

煉瓦造りの建物の屋上で雷速の抜刀と紫炎の剣が交錯する。直後に周囲の建築物を崩壊させるような強烈な爆風が巻き起こり、爆心地となった建物は無数の瓦礫となって崩れ落ちていく。

『END OF DUEL! winner 武内出雲那!!』

「マタカテナカッタ・・・」

爆心地を覆っていた爆煙が晴れるとそこには抜刀を振り切った体勢で毅然と立つ出雲那とその後ろに煉瓦の瓦礫に埋もれて目を回している情けないシグナムの姿があった、出雲那の刀が先に届いたのだろう。

「ペッ!・・・ったく、毎度毎度しつけないだよ。【一対一の戦いでベルカの騎士に負けは無い】ってお前一对一で勝った事なんて無えじゃねーか：何だよ【ベルカの騎士】っ

て?」

ソーサラーフィールドが解除され、目を回して気絶しているシグナムを一瞥すると共に、出雲那は痰を吐き捨てる。急いでいたところで邪魔されたので相当イライラしているのだろう、見上げるともう既に空の十分の九が夜天に染まっていた。

「こんな事してる場合じゃねえんだ、一刻も早く柵の奴を探さねえと・・・」

この男には諦めて明日学園で聞くという選択肢は無いのだろうか、空がもう暗くなりかけているのを見て出雲那は焦り出す。

——やべえ、マジで早く柵を探し出して話を聞いて他の青学の誰かに見つかる前に寮に帰らねえと刀華さんにどやされる!急がねえと!!

出雲那はそう思つて再びアーケード街に向かおうと足を踏み出そうとした・・・その

時——

「明日香はそつちには居ないわ」

突如出雲那を呼び止める女性の声が聴こえてきた。

「つ?!誰だつ!!」

突然聴こえて来た女性の声に出雲那は足を止め、警戒をして声が聴こえて来た方向を振り返る。

出雲那の呼びかけに応えるように物陰から姿を現したのは肩周りと豊満な胸元を露

出させた漆黒のドレスの様な衣服を身に纏った妙齡の女性であった。黒いリボンで長いポニーテール状に纏められている黒髪は月夜に照らされて美しく、聖母のように整った顔立ちは神秘的な雰囲気漂わせる。出雲那を真つ直ぐ視る瞳は戦乙女のような凛々しさを感じさせ、漆黒の長刀を携えるその姿は女神の様にも死神の様にも見えた。

「こんばんは、武内出雲那君。私は《サクヤ・マキシマ》、結社《終焉の盾（エインヘルアル）》のエージェントよ」

その女性——サクヤは警戒する出雲那の眼を真つ直ぐ見つめて子供に語りかけるように優しく微笑むのだった。

この時、空の色は完全に夜へと塗り替えられた……武内出雲那の非常識な日常は、この邂逅をもって崩れ去る事となる……。

異界化（イクリップス）

こっちの都合も知らずにいきなり決闘を仕掛けてきたシグナムをいつも通り雷切で斬り倒した出雲那は急ぎアーケード街に向かおうとするが、そこへ「終焉の盾」のエージェントと名乗る謎の美女「サクヤ・マキシマ」が出雲那の前に現れ、出雲那を呼び止めたのであった。

——何だ？誰だこの女？何でオレの名前を知ってやがるんだ！・・・統合企業財体をはじめ、このスクエアには多くの組織が活動してやがるが【終焉の盾】なんて組織聞いた事ねえし・・・それにこの女・・・間違いなく強え。

出雲那は優しい微笑みで自分を見つめて近づいて来るサクヤを警戒し身構える。出雲那はサクヤとの面識は一切無いうえ、【終焉の盾】などと得体の知れない組織を名乗って近づいて来ているのだから警戒するのも無理はないだろう。

「ふふ、そんなに警戒しなくても大丈夫よ。安心して、私は君に危害を加えようとしていた訳ではないわ」

「そんなの信用できねえな。見ず知らずの奴が名乗ってもいないのに人の名前を呼んで、得体の知れねえ組織を名乗って声をかけて来るなんざ、怪しいと思わない方がバカ

だぜ」

「ふふ、確かにそうね。でも知りたくない？明日香が今何所で何をしているのかを」

サクヤは警戒心剥き出しの出雲那の目の前に立つと、出雲那の眼を真つ直ぐと見つめて優しく問う。その子を見る母のような微笑みは素なのか、それとも演技なのかは分からないが、例え素だとしてもそれだけでサクヤが信用足る人物であるという判断材料にはならない。それに――

「・・・アンタ、柊と知り合いなのか？」

出雲那が今探している柊明日香という少女の情報を知っているかのような口振り、それがサクヤの怪しさを、延いては明日香への懸念をより一層強めていた。もし明日香がサクヤ・・・【終焉の盾】という組織の関係者であるならば彼女達がこのスクエア内で何か後ろめたい事を行っている可能性も考えられる。

「そうね、その認識で間違いはないわ。言ってみれば私と明日香は【先輩】と【後輩】つてところかな」

返つて来た返答は肯定、これで柊明日香という少女がサクヤが所属していると言う【終焉の盾】という組織の関係者である事が濃厚となった・・・いや――

——もしかしたらこのサクヤって女がオレと柊を罫に嵌める為に嘘を吐いているつう可能性もあるな・・・。

出雲那は仮説を決めつけずに様々な可能性を模索する。今会ったばかりの他人であるサクヤの言葉を鵜呑みにするのは早計だ、真実をこの眼で確かめるまでは結論付けるのはまだ早い。

「まあ明日香のやつている事と私の任務は全く無関係とは言わないけれど、別件だからあの子は私がこの都市に来ている事は知らないでしょうけどね」

「・・・アンタ、随分とよく喋るじゃねえか。オレの予想だが【終焉の盾】ってえのは【裏】の組織だろ？オレ達スクエアの学生は将来の戦士候補生で一般の学生とは違うとはいえ【表】の人間だぜ？守秘義務とか任務に対する機密事項とか無えのかよ？」

「もちろん原則として組織の情報・エージェントの任務内容は表の人間に口外する事は禁止されてはいるわ、【普通なら】だけどね・・・」

「？」

淡々と語るサクヤにジト目で指摘を入れる出雲那であったが、サクヤは動揺する事も無く矛盾するような事を言ったので出雲那は首を傾げた。

「どういう事だよ？それだとまるでオレに任務内容をベラベラと話す理由は【普通じゃない】からって事に聞こえるんだが・・・まさか、アンタの任務ってオレにも関係があるってのか？」

「ええそうよ。ふふつ、貴方なかなかの洞察力を持っているわね、正直驚いたわ」

「茶化すんじゃないやねーよ、こんなの一輝に比べたら凡人レベルだつての・・・で？オレに何の用があるんだ？終焉の盾のエージェントさんよ」

出雲那は腕を組んで面倒臭そうにサクヤに用件を求めた。

「そうね、時間も無いし簡単に話すわ・・・私の任務は武内出雲那君、貴方を探し出して協力者になつてもらおう事よ——」

——《八百万の神刀》の二振りが一つ——《創生の雷刀（イザナナギ）》に選ばれた《伊邪那岐の創り手》である貴方にね

「っ!!」

サクヤがスクエアに來た目的を語ると出雲那は喉を詰まらせるように顎を引いて眼を見開き、自分の腰に差す二振りの得物の内「伊邪那岐」と名が刻まれた鞘に収められた太刀を一瞥する。

「アンタ……この刀の事、知ってんのか？……」

声を震わせてサクヤに問う出雲那。彼が刃を抜く事を拒むその太刀は物心が付いた時から出雲那の手に有り、実は彼はこの太刀の正体を知っているわけではない。

過去に第七機関の研究施設で調べてもらって見たところ、太刀はオリハルコンすらも凌駕する硬度を持つ謎の希少鉱物（レアメタル）で作られており、ウルムⅡマナダイトを遙かに超えるエネルギー量が秘められている事が判明した。その時に第七機関は研究の為に出雲那に対して太刀を引き渡すように言い、出雲那はそれに応じて太刀を研究員に手渡そうとしたが、研究員の手に太刀が渡った瞬間突然太刀が怒り狂うように雷撃を放電し、まるで「貴様に我を持つ資格は無い」と言っているかのようにその研究員を焼き殺してしまうという惨い出来事があった。どうやらこの太刀——【創生の雷刀】は純星煌式武装と同じで自ら使い手を選ぶようであり、出雲那にしか扱えない代物なのであった。

創生の雷刀の素材である「強大なエネルギーを秘める未知の希少鉱物」の情報を公にするのは危険だと判断した第七機関はカモフラージュとして創生の雷刀を純星煌式武

装として登録し、「武内出雲那に創生の雷刀という純星煌式武装を貸し出した」という偽りの設定を作った。しかし出雲那は「魔術師」、基本的に純星煌式武装は気力以外のチカラを持つ者を使い手として選ぶ事は無く、魔術師である出雲那が矢鱈と純星煌式武装を使えば外部に情報を隠蔽する事が難しくなるだろう、その為第七機関は出雲那に「創生の雷刀の存在を知る者以外への情報の口外」と「創生の雷刀の刀身を鞘から抜く事」を余程の事が無い限り極力禁止する事を言い付けたのだった。

以上の事から出雲那はこの「創生の雷刀」が何なのかをずっと前から知りたかったのだ。この太刀は何処で自分の手に渡ったのか？何故自分を使い手として選んだのか？何時何所で作られた物なのか？・・・それを知る者が目の前に居るかもしれない、出雲那はそう思うと居ても立っても居られなかった。

「知っているんなら教えてくれ！こいつは一体何なんだ——うおっ!!」

出雲那は腰のベルトに差す創生の雷刀を手に取り、それを前に掲げて急かすようにサクヤに情報を求めようとするが、その時突然として前に掲げた創生の雷刀がバチバチと帯電し、蒼い雷光を発して光りだしたのであった。

「な・・・何だよこれ!!?コイツどうしちゃったんだ!!?」

さすがにこれには狼狽えざるを得なかった出雲那は動揺しながらサクヤに説明を求めめるのだが、サクヤもまた驚いたかのように眼を見開いて表情を強張らせている。

「これは・・・まさか、《神刀の共鳴（レゾナンス・デイバイド）》?!? 近くに居るっていうの？ 八百万の神刀のもう一振り、【冥界の死刀（イザナミ）】の所有者である《伊邪那美の使徒》が!!」

「何だよそれ！ 下手なラノベみてえに訳の分からねえ単語並べたって意味解らねえよ！ ちゃんと説明しよ——のあぁっ?!?」

出雲那は一人で勝手に解釈しているサクヤに詳しい説明を求めようとするが、その時蒼く光っていた創生の雷刀から蒼く細い光線が南に向かって伸びるように放たれた。

「っ、次から次へと何なんだよ!?!」

「・・・どうやらゆっくりと話している時間は無いみたいね」

「っ?!?どあぁあぁっ!!!」

そう言うのとサクヤは困惑する出雲那の腕を取って上空に跳んだ。当然出雲那もサクヤに腕を引つ張られて上空に身体が投げ出される。

「い、いきなり何しやがるこのアマアツ?!?」

「いいから暴れないで！ 事情なら後で説明するわ。【伊邪那美の使徒】を有する【奴等】が動いたとなると一刻の猶予も無いの！ 急がないと明日香の身が危ないかもしれないわ!!」

「何だっ?!? どういう事だよ、おいつ!!」

「今は黙って着いて来なさい！この光の線が〔神刀の共鳴〕によるものならこの光が射す先に冥界の死刀の所有者が居る筈……〔彼等〕の狙いが今回の明日香の目標（ターゲツト）と同じだとしたら、あの子もこの先に居る筈よ！」

「……この線の射す方にあるのは……この東エリアの中央区か！」

空中で光が射す方角にある高層ビル郡を見据える二人、サクヤの言う事が確かならばあそこの何所かに明日香が居る筈だ。そしてこの先に何か大きな困難が待ち受けている……だが今日知り合ったばかりとはいえ、学園の仲間であり、もしかしたら自分の命の恩人かもしれない少女を見捨てる事なんて考えられない。出雲那は息を呑み、意を決する。

「……いいぜ、騙されたと思って今はアンタの言う事を信じてやるよ！だがな、もしコレがオレや柊を陥れる罠だったんなら、テメエのその首を刀華さん直伝の雷切で斬り落としてやるからなっ!!」

出雲那はサクヤにそう言い放つと光指す方にある高層ビル郡を睨みつけながら自らの背中から雷光を放電する、雷光は光り輝く鳥類の双翼を形作り、出雲那は夜空へと羽ばたいた。出雲那の飛行スキル《天鳥（あまどり）》である。

「そうと決まりやあ先に行くぜ！遅れるんじやねえぞっ!!」

「え？ちよ、ちよつと!？」

サクヤの制止も聞かず出雲那はそのまま【雷光石火】を発動し、稲妻と見紛う速度で高層ビル郡に向けて飛翔して行った。

「・・・ふう・・・まったく、幾ら急いでいるからといって、せっかちなものかどうかと思うわよ・・・」

猪突猛進な少年が翔けて行った雷光の軌跡を眺めて溜息を吐く漆黒の美女は【夜天に足を踏みしめて】少年の後を追うのであった・・・。

紅蓮の劫火の様に朱い空・・・まるで血の様な緋色に染められたビル郡の中央を走るハイウエイの最果てに航空母艦らしき建造物が連結しており、その上には都市が存在している。

「うわあああああああつ!!」

「きやあああああああつ!!」

その都市の一角にある闘技場（コロシウム）のフィールド上にクレア・ハーヴェイ達青学風紀委員の姿は有った。彼女達は今、追突した赤い罅の中にある謎の空間のこの場所です。正体不明の人影と遭遇し、百武装を纏ってその人影と激しい戦闘を繰り広げている。

「リディっ!? エリカッ!!」

経った今リディとエリカに豪雨のように容赦の無い無数のレーザーが襲い掛かり、爆による爆風で吹き飛ばされ闘技場の内壁に背中から叩き付けられた二人を見てクレアは悲痛の叫びをあげていた。

リディとエリカは大の字で壁に埋まった状態のまま気を失い、これで戦闘継続可能なのはクレアのみとなってしまう。

「温い・・・温過ぎますわ。クレア・ハーヴェイとその側近たる者が随分と腑抜けたものですわね。その体たらくでは話になりませんわ」

「・・・くっ！」

満身創痍で片膝を着くクレアの目の前に立つ敵と思わしき人物がクレア達を見下すような目線で見て彼女達を蔑み、クレアはその人物を睨みつけて呻く。クレアは既に全身武装を展開しており、敵が彼女が全力を出さなければならぬ程の戦闘力を秘めているという事が窺える。その全身武装となったクレアの百武装である気高き姫君も今はその気高さが見る影も無いくらいに半壊し、彼女が空に展開した六機の浮遊砲台と十機の小型浮遊砲台（ペダル）はその半数が敵の手によつて撃墜されてしまっている。

「あの二人はもう邪魔ですわね、敗者は外に放り出しておきましょうか」

敵はそう言うのと片手を朱き天に掲げ、それと同時に顕れた転送陣によつて気を失っているリディとエリカはこの場から姿を消したのだった。

「何なんですの・・・あなたは・・・」

満身創痍のクレアは怯えるように震えた眼つきで敵の顔を見上げ、戸惑うような声音で目の前に立つ敵に問いかける。

何故クレアは敵の姿を見て戸惑っているのか？・・・それは――

「わたくしが何者ですか？・・・ふふっ、聞くまでも無いでしょう？――

——わたくしは無敗の女王（パーフェクトクイーン）——気高き薔薇の守護者（ロズガードイアン）、クレア・ハーヴェイなのですから！」

その敵が自分と全く同じ姿をし、全く同じ百武装を展開しているからであつた……。

街を照らすライトの光が無数に輝き、夜空を彩る・・・そんな夜空を武内出雲那は雷光のように翔けて行く。

「・・・あそこかっ!!」

出雲那の腰のベルトに差してある「創生の雷刀」から伸びた光の線を辿って雷光石火で飛翔する彼はその光が途切れている場所に眼を向けた。街の中央を走るハイウェイの下にある暗い歩道・・・どうやら光はそこを射しているようである。

「——よつとー!」

【天鳥】を解除してそのハイウェイ下の歩道に降り立つ出雲那、すると創生の雷刀から伸びていた光の線は消えてしまった。

「・・・何だよ、誰も居ねーじゃねえかよ・・・」

その場で周りを見回してもあるのはコンクリートで固められた歩道とハイウェイを支える太くて円柱状の無骨な柱、それと申し訳程度に歩道の端に植えられている小木があるだけ・・・【冥界の死刀】の所有者らしき人物どころか人っ子一人見当たらない（ま

あ、日が暮れた時間にこんな場所に子供が居たらそれはそれで問題だが・・・。

「ったく！あの女やつぱり騙しやがったんだな！何が神刀の共鳴だよ？終も【伊邪那美の使徒】なんて奴も何所にもい「いや・・・居るわ」ってのああっ!?急に現れんなよ！驚くだろ!!」

出雲那が愚痴を叩いていると何時の間にかサクヤが出雲那の隣に立っていた。出雲那はその事に驚いてギョツとし、サクヤに文句を言う。

「【居る】って何所見て言ってるやがるんだよ!?人の姿なんて何所にも——っ!?」

出雲那が怒り心頭の形相でサクヤを睨みつけ、この場所一帯を指さしてギャーギャー騒いでいると突然ピキピキキィーと甲高く鳴る音が耳に入り、「空間が脈を打った」のを感じ取って騒ぐのを止め、恐る恐る円柱状の柱が立つ場所を振り返った。

「——なっ?!?!..あ、あれはっ!!!」

振り返るとそこにはいつの間にか見覚えのある罅が顕れていたのだった・・・空気を割って入ったかのような赤い罅・・・間違いない、昨晚の夜に出雲那の前に顕れ、彼を正体不明の化物共が跋扈する謎の空間へと追いやったあの罅だ。

「.....私達は、【異界化（イクリプス）】と呼んでいるの.....」

「.....異界化?」

「そう、君は知っている筈よ。霊体の【異形】達が蔓延る、あの世界を」

「・・・・・・・・」

因縁の相手を見るように出雲那は正面に浮かぶ赤い罅を睨みつける。

——昨晚の出来事はもしかしたら夢だったのかもしれないと心のどこかで思っていたのかもしれない、一度死にかけてビビったのかもしれない、あんな地獄のような世界にもう一度関わるだなんて考えたくもなかったから夢だと思った方が気が楽だと、そう思っていた・・・。

強気に睨みつけながらも、出雲那の手は震えていた。

血のように朱い世界に跳梁跋扈する悪魔のような霊体の化物達・・・いかに戦士の卵であるスクエアの学生であろうとも、そのような悍ましいモノに関わるには心構えと精神がまだまだ未熟であると言えるであろう、況してや出雲那は昨晚その化物達に殺されかけているのだ、込み上げて来る恐怖が体面に表れるのも無理はない・・・だが——

——でもな・・・今日知り合ったばかりとはいえ、ダチが危ない目に遭っているかもしれないっていうのに見て見ぬフリをするマネなんてオレにはできねえっ！柊は：アイツはもうオレのダチなんだっ！！

知らない【全】よりも大事な【個】を助ける・・・それが武内出雲那の流儀（スタイル）だ。もし柊明日香という人間が全くの他人ならば自分が死にかけた空間に入っただけに行こうとは思わなかっただろう。

だが今日一日だけで明日香とは一緒に昼飯を食べた、共に歩いた、共に決闘を観戦した……武内出雲那にとつて終明日香とはもう失いたくない大事なダチなのだ。だから出雲那はここから……引かない！

「……覚悟……決めたのね……」

「……ああ」

出雲那の腕の震えが止まったのを視認したサクヤが気持ちを確認するように出雲那に呼び掛けるが、もう彼女に言われるまでもない。出雲那は罅の向こう側の世界——《異界》に足を踏み入れる為には何をすればいいのかがまるで解っているかのよう、罅に向けて足を一步踏み出した……そして彼は……自分の持つ【第三の刀】の名を呼ぶ。

「闇を斬り払え！《十拳（とつか）》!!」

隠していた【靈力】が解放され、出雲那の右腰に三つ目の刀が顕現される。葵柳の門を潜った時から今まで共に戦ってきた自慢の愛刀《黄旋丸（おうせんまる）》に、自分が持つ意味を未だに知らぬ無限のチカラを秘めし太刀【創生の雷刀】、そして経った今顕現した雷光渦巻く白い鞘に刀身が収められた太刀型の靈装【十拳】・・・出雲那はこれ等三つの刀を所有する。

——【八百万の神刀】が主として認める者の絶対条件・・・それは【氣力】【魔力】【靈力】——俗に【三大源力】と呼ばれる三つのチカラを内に秘め、その全てを行使する事ができる者であるという事・・・成程、創生の雷刀の所有者なのに何故彼から靈力を感じないのかと思っていたけれど、何らかの封印術で靈力を封じ込めて隠していたのね。

出雲那は【魔術師（ダンテ）】としてスクエアの運営委員会に学生戦士登録をしており、自分が魔術師であると同時に【伐刀者（ブレイザー）】でもあるという事は世間に隠していたのであった。

古来より世間一般では魔力と靈力を両方持つて生まれた者は前例が無く、「三大源力」という異なるチカラ全てを同じ器に存在させる事など不可能であるとされている。もし出雲那が「三大源力」全てを持つて生まれた特異存在であるという事が世間にバレれば世界中の異能研究者達が出雲那の人体構造を調べる為に彼の許へと押し寄せて来て大騒ぎになる事だろう、最悪の場合解剖される事も十分に有り得る。

故に出雲那は普段から強力な封印術式で自分の靈力を封印して外に漏れないようにして、周りにこの事を隠しているのだ。この事を知っている者は彼の親友である黒鉄一輝をはじめ、彼が信頼を置く知り合い数名だけである。

——それにしても流石は創生の雷刀に選ばれた「伊邪那岐の創り手」だわ、氣力と魔力は勿論、靈力も相当な総量を持つているわね。

サクヤが後ろで見守る中、出雲那は赤い罫の前に立ち、顕現させた「十拳」の柄を左手で握り締めて居合の構えを取る。

「……ふう……すうくっ」

息を吸つて精神を整えると「十拳」の鞘に靈力の電流を流す。

——もし出雲那が「適格者」なら、その《異界の裂け目》に靈力をぶつけければ「ゲート」を顕現させる事ができる筈——

靈装の太刀の刀身が収まった鞘の内部に磁界が発生し雷光が激しく火花を散らす。

「……いくぜ……刀華さん直伝——」

それは現青学最強候補の一人にして現生徒会長の少女より教授された伝家の宝刀、彼の抜き放つそれはまだ未完成ではあるものの、異次元の速度で繰り出される一刀は人の身で太刀打ちする事など許さない。

——まあ、だけど——

超電磁加速銃（レールガン）のように雷速で刀身を鞘から撃ち出す超電磁抜刀術、その名は——

「——雷切っ!!!」

居合いと共に抜き放されし雷速の一刀が目の前に浮く赤い罅を横一閃に斬り裂く。するとその赤い罅に異変が生じはじめた。

——八百万の神刀に選ばれたんだから、適格者じゃないなんて事は有り得ないでしょうね……。

そして「ソレ」は顛れた。赤い罅は完全に姿を消し、なんと代わりにアーチ状の赤い扉（ゲート）が其処に立っていたのだ。

——……この中にあの化物達が居る世界が……柊の奴もそこに……。

出雲那は顛れた扉を眺めて息を呑む、この扉の向こう側に待ち受ける化物達や恐らく来ているであろう「冥界の死刀」を持つ「伊邪那美の使徒」なる者……それを思うと

今まで彼が感じた事の無い緊張感が彼の脚を畏縮させる。

「……………よしっ!!」

それでも……この扉の向こうで明日香が危険な目に遭っているのならばこの程度の緊張で立ち止まってなどいられない。出雲那は気を引き締め、扉に掌を押し当てて、勢いよく押し開いた。

灼熱の様な朱い光が開いた扉から溢れ出て来る、まるで地獄への入り口の様だ。出雲那は畏縮する脚の震えを抑え、朱い光が導く扉の中へとその脚を踏み出した。

——待ってろよ柊、今行くぜ！

出雲那とサクヤが扉を潜り抜けると扉は自動的に閉まり、東エリア中央区のハイウエイ下よりその姿を消したのだった。

朱き摩天楼、襲い来る怪異（グリード）達！

扉を抜けた先に現れた景色は朱く染まった空と幾重もの連絡橋が繋ぐ無数の摩天楼の空中回廊であつた。

「……」が……【異界】……」

一つの超高層ビルの屋上にある空中庭園に降り立った出雲那は昨晚も目にした【朱】に感慨し、確認するように呟いた。

息が詰まるような禍々しい空気、奈落の底に広がる灼熱地獄を思わせる紅蓮の業火、朱い空が照らす摩天楼は大量の血をブチ撒けたように緋色に染まっており、この場はまさに滅びの日を迎えた世界を連想させる。

「そう、ここが【異界】……人の負の感情によつて引き起こされる【異界化】の影響で現世を侵食し顕れる世界の裏側、人に害を成す【怪異】——《グリード》達が支配する迷宮よ」

出雲那の隣に降り立ったサクヤが周囲を警戒しながら簡単に説明をする。この場に来る前の女神の様に優しい雰囲気とは違い、今の彼女の顔は凛々しくも勇ましく気が引き締まった表情をしていて、まるで戦い赴く戦乙女（ヴァルキリー）の様な雰囲気を感

じさせていた。

「【グリード】？何だよそれ？」

サクヤが口にした聞き覚えの無い単語に疑問を抱いた出雲那はサクヤに説明を求め
る。するとサクヤは周囲の警戒を解かずは何故か右手に持つ霊装らしき黒い刀――

《霊鍵砕破（れいけんさいは）》を構えた。

「……君も感じるでしょう、この世界に満ちる禍々しい霊圧を――

――……私達を取り囲んでいる、【怪異】達の悍ましい霊力を！」

サクヤがそう言い放った瞬間、「奴等」は顛れた！

「なっ!? コイツ等は!!」

中央に立つ出雲那達を包围するように空中庭園全域の床に妖しく光る【点】が無数に出現し、その【点】に孔が開くとその孔から黒い悪魔のような形状の霊体が無数に顛れた。その数は百にも及びそうな程多く、空中庭園を黒で埋め尽くして中央に立つ二人の逃げ道を完全に塞いでしまった。

——・・・見間違ひじゃねえ、コイツ等は昨晚オレが襲われたあの霊体の化物共だ！

出雲那は顛れた化物達を見て確信する、やはり昨晚の出来事は夢などでは無く紛れも無い現実であつたのだと。

——そうだ・・・思い・・・出した!!

それを確信した瞬間に【出雲那に掛けられていた記憶の封印】が解き放たれる、昨晚の出来事を鮮明に思い出したのだ。

『・・・これは・・・夢・・・なのか?・・・』

『・・・ええ、その通りよ・・・ただの一夜の【悪い夢】・・・少なくとも貴方にとって
は・・・』

『・・・アンタは・・・一体・・・』

『……でも安心して……悪夢も、いつかは覚めるもの……今、日常に帰してあげるわ』

『……あ——』

『おやすみなさい……』

出雲那の脳裏には今、とある場面が思い浮かんでいた。綺麗に整った亜麻色の長髪で水晶の様な碧眼をした自分と同年齢ぐらいの少女が重傷を負って意識を失いそうになつている自分に向けて何らかの術式を掛け、その後自分は糸の切れた人形のように眠りに就いてしまつている……そう、これは昨晚、謎の霊体の化物達から死にかけの自分（とついでにシグナム）を救つてくれた少女が化物共を一掃した直後の記憶である。

——そうか……やつぱりあの時オレを助けてくれたのはお前だったんだな……終。

出雲那の記憶はこの時に封印されていたのだ、その亜麻色の長髪の伐刀者の少女——
——終明日香の記憶封印術式によって……。

——化物共にやられた傷を治してくれたのも、寮の前まで運んでくれたのも、全部終だったつてわけか……ははっ！格好悪りーなあ、オレ。バカやった挙句に下手打つて助けられて、命を救つてくれた恩人の事を疑つて、刀華さんや一輝達に心配かけて……何から何まで情けねえ。

自分の情けなさに気が滅入る思いを感じながらも、出雲那はにじり寄つて来ている周

困の化物共に睨みを利かせている……それでもって——

「ふふ……ははっ！」

アホかつ！と言うかのように笑った。

—— 柀の奴、オレの記憶を封印してオレをこの異界から遠ざけるようにしたつもりだったんだろうよ！危険な事に巻き込まれまいと……。それが奴の優しさによるモンか、あるいは責任感によるモンなのかは判らねえ、けど残念だったな！——

出雲那は自身の持つ第三の刀……「十拳」の柄に左手を添えて腰をおとし、抜刀の構えをして戦闘態勢に移行……。その脚にはもう、畏れによる震えは無い。

「オレの剣はな！誰かに助けられればなしで借りを作つたまま引くような鈍らじゃねえっ!! テメエが何を思おうと何と言おうと、絶対に助けてこの借りを返しに行くぜ、柀っ!!」

出雲那はこの地獄のような光景が広がる世界に宣言するかのようには決意を言い放つ。意志は固まった、後は行くだけだ！

「出雲那……」

「分かつてるよ！コイツ等が『グリード』なんだろう？」

「……ええ、そうよ。異界に跋扈する怪異……。人の負の感情に引き寄せられ、人に害を齎す悪霊とも言うべき存在……」

「つまりオレ達の敵って事だろ!? ならやるべき事は一つしかねえっ!!」

サクヤから説明を聞いた出雲那はそう言い放つのを合図として床を蹴り、グリード達の包圍網に向けて勢いよく躍り出て行った。

右腰に携えし十拳の柄に左手を添えたまま真つ直ぐ向かって来る出雲那を迎え撃つは黒い子悪魔を思わせるような姿をしたグリード、《ゴブリン》の群れだ。出雲那が切り込む先の最前列に位置取っているゴブリン数十体が、群れの一番槍だと言わんばかりに鋭く尖った爪をもって接近して来た出雲那に飛び掛かって行く。

「化物共! この前はよくもやってくれたなあ、オイッ!!」

出雲那は正面180°から一斉に飛び掛かって来るゴブリン達に怒声をぶつけて十拳の柄を握り、走りながら抜刀の体勢に入る・・・その気迫は鬼気迫るものであり、並の者ならばその気当たりに気圧されて怯んでしまふだろう。

・・・出雲那は昨晚、このゴブリン達に後れを取ってしまった、深手を負った・・・実際にやられたのはコイツ等よりも大型の《エルダーグリード》だったが、あの時にコイツ等の爪に傷を負わされた右肩が疼いて仕方がないので、受けた屈辱は百倍にして返せと。

「ハアアッ!」

全方向から敵の凶爪が迫ると同時に、出雲那は十拳の刃を鞘から引き抜き横一閃! 霊

装の靈力によって靈的な干渉を受けた子悪魔の先陣達は一体残らず上半身と下半身に両断され、霧散するように一齐に消滅して行く・・・そこへ抜刀後の大きな隙を狙って敵群の第二陣が飛び掛かる。敵ながら完璧なタイミングだ、刀身を抜き放って振り抜いた直後は自らの得物に引つ張られて大きな隙を生んでしまうのが抜刀術の欠点なのだから、これで無防備状態の出雲那は数十に及ぶ凶爪によって身体を引き裂かれる事であろう・・・しかし、それは彼が「葵柳流」の劍士では無ければの話だ。

「もう一丁っ!!」

出雲那はなんと抜き放った一振りの勢いを殺さず、左脚を軸にその遠心力を利用して一回転・・・そのまま十拳をもう一度横一閃に振るって敵の第二陣を一掃したのだった。

葵柳流抜刀術の基本の型、《双円閃（そうえんせん）》——居合いを放った後、片足を軸に素早く一回転してそのまま二撃目を放つ二段構えの抜刀術だ。初見の場合、相手は普通の居合いと勘違いをし、得物を振り切った隙を狙って来る事が多い為に二撃目でそこを狙い打ちする。葵柳流の門を潜った者はまず、この技の動きを修得する事が必修項目とされているのである。

「テメエ等の弱点が判っている以上、この前のようにには行かねえぜ!どつからでも掛かって来やがれ、この黒アリンコ共がっ!!」

刃を鞘に帯刀した出雲那が威勢よく咆えるとそれを合図にゴブリンの群れが一齐に

彼に襲い掛かった。

——【劍姫】葵柳流美が創設したとされる【螺旋】の型を軸に置く劍術【葵柳流】の使い手であり、雷撃の一刀で瞬く間に相手を斬り倒す事から【瞬雷（ブリッツ）】という二つ名で呼ばれる青竜学園の実力者、武内出雲那・・・情報としては知っていたけれど、こうして彼の剣を目の当たりにしてみるとその凄まじさが理解できるわね・・・。

冷静に後方で敵の包囲を突破する隙を窺っているサクヤは目の前で黒色の大波の様に押し寄せるグリード達の波状攻撃を落雷が地に落ちるかのように爆砕するかの様な帯刀術で蹴散らして行く出雲那に驚嘆を覚えていた。【伊邪那岐の創り手】である出雲那を味方に引き入れる為に彼のプロフィールは調べ出してはいたものの、実際に彼の戦闘力を目にしてみても自分の思っていた以上に彼の戦いが凄まじく苛烈であった事が予想外で少し驚いたからだ。

・・・しかし、それでもサクヤは訝しく眉を顰めていた。

——このまま行けば彼一人でこの場に存在するグリード達を殲滅できるでしょうけど・・・この数が相手だと流石に時間が掛かり過ぎるわ。

この異界の何所かに居るであろう明日香が【伊邪那美の使徒】に接触する可能性がある以上、雑魚共の相手に時間を掛けている暇は無い。サクヤは敵の包囲が最も薄い箇所を見定めると手に持つ霊装を振り上げた。

「下がちなさい、出雲那！」

「へっ？」

「刃（やいば）よ、敵を貫け！ 《陰陽一刀流》、《影動閃（えいどうせん）》!!」

前方で圧倒的無双を繰り広げる出雲那に大声で呼び掛けたサクヤが一回転すると同時に床に振り下ろした霊装の刃から地を這う閃光が放たれた。

「ちよっ!?!のわああっ!!」

唐突にむかつて来る閃光を避ける為に慌ててその場から跳び退く出雲那。敵の包囲の薄い箇所を狙って放たれた閃光は海を割るかの様に直線上の敵を吹き飛ばし、この空中庭園に連結する連絡橋への抜け道が開かれた。

「ゴラアアーッ!!?仕掛けるなら先に言いやがれっ!!」

「突破口は開いたわ!敵の包囲が崩れている間に急いで駆け抜けるわよ、出雲那!!」

「ちよっ!?!オイッ!クソッ!!」

開かれた突破口に向けて二人は全速力で駆け出す。

逃がすまいとバラバラに跳び掛かって来るゴブリン達を霊装で斬り倒しながら崩れた包囲網を抜け、連絡橋を通って空中庭園を飛び出すと、先の道は幾つもの連絡橋と摩天楼が入り組んで迷路となっている空中回廊が地平線の彼方まで広がっていた。

「いったいどこまで続いているやがるんだ・・・」

道行く間に立ち塞がる蜂型や異形の砲台型のグリード達を斬り倒し、星脈世代の跳躍力を使いショートカットを繰り返して進み続ける出雲那は果てしなく続く空中迷路に苛立ちを覚えていた。伐刀者でありながら星脈世代と同等の身体能力を持つサクヤもまた出雲那の隣を並走しながらその表情に若干の焦りの色を浮かべている。

「思ったより異界の規模が大きかったようね……この異界化を引き起こしたエルダーグリードは相当強力な個体だと考えた方がいいわ。【伊邪那美の使徒】を有する【彼等】がもう明日香と接触しているかもしれないし、不安要素は多いわね……」

「くそっ……こんだけ広いと探す範囲が広すぎて人一人見つけるのは難しいぜ！さつきみたいにもコイツがその伊邪那美の使徒とかいう奴の居場所を教えてくれれば探す場所を絞れるんだけどよお、もうウンともスンともいつてねえしよコイツ！」

出雲那は腰に差す創生の雷刀を握ってカチャカチャと揺すりながら悪態を吐いている。創生の雷刀はこの異界に入ってからというもの【神刀の共鳴】の光を消したままであり、どうやっても再び光を発する気配がない。異界の中だと発動しないのか、それとももう既に伊邪那美の使徒とその仲間はこの異界での目的を果たしてこの空間から去ってしまったているのかは判らないが、創生の雷刀が道を示さない以上自力で明日香を探すしかない。

急がなければ明日香の身が危険かもしれないというのに、搜索に手間を掛けなければ

ならないのかと嘆きたくなりそうになったその時——

「っ!? 出雲那、あのビルの屋上で誰かが大型のグリードに襲われているわ!」

サクヤが指さした正方形の広場の中央では、頭部が大きな一つ眼だけの大型の機械巨人の姿をしているグリードが床に倒れ伏している二人の女子学生を襲っているのが視えたのだった。

「……おいおい、まさかあの二人って……」

「……もしかして知り合い?」

「まあな……何でこんな場所に居るんだよ——風紀委員長の取り巻きの二人がよ
おおっ!?」

グリードに襲われている二人は青学の風紀委員、リディとエリカであった……出雲
那は二人が異界に居るといふ事実が訳が解らない為に戸惑いの叫びを上げて床を蹴り

「キエエエエエイツ!!」

鮮烈な朱い空に鮮やかな放物線を描き、特撮仮面ヒーローの如き跳び蹴りを大型グ
リードの横つ腹に叩き込んでビルの端までフツ飛ばし、風紀委員の二人を救出した。後
二秒くらい遅れていたら丸太の様に太い腕が二人に振り下ろされていたところだっ
たので間一髪であった。

「おいリデイ！意識はあるか!」

「・・・うう・・・うう・・・武内・・・出雲・・・那・・・?」

出雲那は自分が着地した場所より近い位置に倒れていたリデイを介抱して呼び掛ける、するとリデイは朦朧としているが、薄目を開けて出雲那の呼びかけに応えてきた、どうやら意識はあるようだ。

「あるようだな・・・テメエ等何でこんな所に居るんだよ?こんな露出狂の変態と勘違いされそうな程ボロボロになって、いったい何が有ったってんだ!?!クレア先輩は一緒じゃねえのかよ!」

出雲那の言う通り、リデイとエリカは眼を逸らしたくなる程無惨な姿であった。青学の女子の制服であるセーラー服は破れに破れて布が殆ど無くなっており、彼女達が内側に着ている百武装の性能を引き出す機能があるレオタード——《ヴァリアブルスーツ》が丸出しとなっていて、敵の攻撃によるモノかそのヴァリアブルスーツにも無数の穴が空いている（幸い女性の大事な部位を隠す部分は破けていない）。彼女達の得物である百武装——【漆黒の天槍】と【絶対運命の鎖】に至っては原型を留めていないくらいに大破していて、もう武装としての役割は期待できないであろう・・・いったい彼女達の身に何があつたのか、何故この異界に居るのかと出雲那は疑問に思つて今にも気を失いそうなりデイに問いかけると、彼女は弱々しい声音で語り出した。

「・・・クレア様を・・・自宅に送り届けている最中・・・突然目の前に赤い罅が・・・私達は・・・それに車で追突して・・・気が付いたらこんな辺鄙な空間に・・・」

「それでグリードに襲われたんだな?・・・クレア先輩も一緒だったみてえだけど、クレア先輩の姿は何処にも見当たらねえぞ! いったい何所に居るんだ!?!」

「・・・クレア・・・様は・・・」

「出雲那、危ないっ!!」

「チイツ!!」

行方不明となっているクレアの所在をリデイが話そうとした時、先程出雲那が蹴り飛ばした大型のグリードが出雲那とリデイに腹部の核を向けて、そこから靈力のレーザー光線を発射して来た。経った今出雲那を追ってこのビルに降り立ったサクヤの必死の呼びかけによって敵の攻撃に気が付く事ができた出雲那であったが、今はその腕にリデイを抱いてしゃがんでいる状態なので、咄嗟に動く事ができない為に彼は舌打ちをしてリデイに覆い被さり、身を盾にして彼女を敵の攻撃から護ろうとする。

そこでサクヤが動いた。

——くっ! 仕方がないわね!!

「モードチェンジ!——」

サクヤは胸元から碧（みどり）色のカードを取り出してそれを頭上に翳し、そのカー

ドが硝子が碎けるかの様に消滅してカードと同じ色の光がサクヤの身体を包み込む。

サクヤはその状態のまま駆け出し、レーザー光線が出雲那達に到達する前に敵グリードと出雲那達の間を割って入った。そして――

「――Modeグリューネ!!」

サクヤの身体を包み込んでいた碧の光がパアツと消える。そのときサクヤの姿は美しき漆黒の剣士ではなく、碧の騎士甲冑に身を包んだ勇ましい女騎士の姿に変わっていたのであった。

「守りの盾よ――《ガードアトラクタ》!」

サクヤは目前に迫ったレーザー光線に対して左手に持つ大盾を前に構え、碧色の盾状の結界を展開してレーザー光線を遮り、激しいスパークと共にレーザー光線を消滅させた。敵の攻撃を防ぎきったのである。

「な、なん・・・だと?・・・霊装が・・・変化した・・・だとおっ!!」

出雲那はサクヤの霊装が姿を変えた事に驚きを隠せなかった。彼女は衣装だけでは無く霊装まで変化させていたからだ。サクヤは今、先程まで手に持っていた霊鍵碎破は持つておらず、代わりに碧色の大盾と彼女の身の丈よりも大きな剣槍――《森羅万槍（しんらばんそう）》をその手に携えている。

――ありえねえ、霊装は伐刀者の魂を形として具現化した武装だぜ? 何らかの切っ

掛けで靈装の形が変化する事は稀にはあるが、自分の意志で自由自在に靈装を変化させるだなんて魂律師の斬魄刀ぐらいなモンだ……いや、属性そのものを変えるだなんて斬魄刀でもできねえ。

いったいサクヤは何者なんだ？……そう思った出雲那であったが、そんな事を考えている暇も無く敵グリードが続けてレーザー光線を撃つてきて、サクヤはもう一度大盾で攻撃を防御する。

「出雲那、貴方は倒れている二人を連れて下がりなさい！コイツとは私が戦わわ!!」
「なっ!?おいつー！何勝手に決めちゃう……う……う……う……」
「チツ！」

出雲那はサクヤの指示に反論しようとするが、腕に抱えているリデイが苦痛に喘いでいるのを見て舌打ちをし、仕方なく近くに倒れて気を失っているエリカを拾って後方に跳び退いた。満身創痍の彼女達を放置しておく事は流石にできなかったのだろう。サクヤは出雲那が下がったのを確認すると一瞬優しい微笑みを見せた。

「うん、素直でよろしい……さてと」

サクヤは森羅万槍を構え、のしのしとこちらに徐々に歩みを向けて来る敵グリードに向き合った。

「《レゾナンスゴレム》——人形（ゴレム）型の強力なグリードで、風の属性を持つ。そのチカラは小規模の異界化を引き起こせる程の脅威度を誇っているけれど……こ

の異界化の規模の大きさを考えるとさすがにコイツが元凶とは考えられないわ・・・」
サクヤは敵の自己分析を済ませ、戦闘を開始する為に気を引き締める。その姿はまさに今より戦（いくさ）に出る戦乙女の様に見える。

「じっくりと相手をしてあげたいところだけど、生憎と今は貴方に構ってあげられる時間はないの！悪いわね、速攻で決着を着けさせてもらおうわ!!」

そう凛々しく言い放つとサクヤは森羅万槍の矛先をレゾナンスゴーレムに向けて突騎兵の如く突撃（ランスチャージ）を仕掛けに行き、一対一の戦闘が開始されるのだ。

宿命の出会い、出雲那とブルート

「ハアアアッ!!」

朱い煉獄のような空の下で機械巨人が上から勢いよく振り下ろした片腕と強い踏み込みによって突き放たれた碧の女聖騎士の大槍が正面から衝突する。ガキイインツ! という金属が衝突する音を響かせて両者は火花を散らして相手に一撃を押し込もうと押し合う迫り合い状態となった。

「アホか!? あんな明らかにパワー馬鹿丸出しのデク人形相手に正面からパワー勝負を挑む馬鹿がいるかよ!」

瀕死のリディとエリカを連れて後方に下がった出雲那はレゾナンスゴーレムに対してガチンコ勝負を挑みだしたサクヤの行動を見て文句を言うように言い叫ぶ。確かに出雲那の言う通りだ、サクヤは女性にしては長身だがそれでも巨体を誇るゴーレム型のグリードと比べたら圧倒的に体格差で劣る。三大源力が世界に齎された百年前より小さな幼女がプロレスラーの大人を軽く投げ飛ばすなんて光景など当たり前現在の現在ではあるが、グリードのような超常的な化物が相手となるとそんな非常識など覆されてしまう事だろう・・・しかし――

「大地のチカラを．．．甘く見ないで！ハアアアアアアアアッ!!!」
 「なっ!?!」

出雲那は眼を見開いて驚きの声を上げてしまう。予想を裏切りサクヤの細腕で突き出された大槍はレゾナンスゴーレムの大木のような太腕を徐々に押し返しているからだ。

そして再び金属が衝突する鈍い音が朱い空に響き、サクヤの大槍がレゾナンスゴーレムの片腕を押し退けた。サクヤはそのまま森羅万槍を横一閃に薙ぎ払う。

「《連突大地穿（れんとつだいちが）》!!」

突きからの薙ぎ払いによる一閃がゴーレム型グライドの巨体をよろけさせて敵の体勢を崩し、好機を見出したサクヤは更に追い打ちを掛ける。

「これが、碧（みどり）の騎士のチカラよ——《撃衝槍牙（げきしようそうが）》!!」

長物を大きく振るった反動を感じさせる事も無い程に素早く大槍の切っ先を引いたサクヤはその切っ先に強大な靈力を収束する。その靈力はただの靈力ではない、自然を象徴する碧の光は清く鮮烈で、その光を伴う大槍の一突きは大地の怒りを表すように地を響かせてレゾナンスゴーレムの巨体を真っ直ぐ後方へと突き飛ばした。

「す．．．凄げえ．．．」

ピルの端にある落下防止の縁（ふち）に機械巨人が背中から激突し、その縁が爆発す

るような轟音をならして崩壊するのを目の当たりにして出雲那は感嘆の声を上げている。サクヤの流れるような連続技は鮮やかで戦士として未熟な出雲那の眼では反撃する隙を見つける事ができなかつたからだ……。

——なんつつう隙の無え連撃だ、半人前とはいえ「流れ」を極意とする葵柳流の剣士であるオレの眼でも全く付け入る隙が見当たらず無えなんて……。

出雲那の知り合いの中では今のサクヤの連撃を見切れるとしたら照魔鏡の様な戦術眼を持つ一輝と「ちよつと反則的な解析スキル」が使える師の刀華ぐらいのものだろう……出雲那が舌を巻いていると半壊した縁で仰転していたレゾナンスゴーレムが半身を起こし、縁が崩壊した時に巻き起こった煙に紛れてレーザー光線をサクヤに向けて撃ってきた。

「……モードチェンジ——」

もう一度「ガードアトラクタ」で防御するのかもしれないきやサクヤは今度は胸元から黄色のカードを取り出してそれを上に掲げてそう眩き、彼女の身体は再びそのカードと同じ色の光に包み込まれる。

「——Modeゲルブリッツ！」

光が弾けて消えると黄色い帯で腰を引き締めた黄色の軽装を身に纏う可憐な双銃士が姿を現した。身体の周りに電光がバチバチと迸っていることから、サクヤのこの双銃

士形態の属性は「雷」であるようだ。

「速攻で行くわ! 《雷閃(ライトニングムーヴ)》!!」

敵が撃ってきたレーザー光線が直撃する直前でサクヤは身体中に黄色い電光を纏い、音速を凌駕した驚異的な速度でレーザー光線を回避する。その動きはまるで雷そのものの様な錯覚を周囲の眼に映しており、出雲那の「雷光石火」やフェイトの「ブリッツアクション」の速度を大きく凌駕していた。

「ハアアアアアアアアッ!!」

サクヤは雷速のスピードをもつて縦横無尽に動き回り、立ち上がったレゾナンスゴレムが乱射してくるレーザー光線を容易く掻い潜りながら扇状のブレードが付属した双銃で雷弾を撃ちまくり、機械巨人の堅牢な装甲を砕き剥がしつつ敵に接近する。敵が迎撃として繰り出してくる腕の振り下ろしや上半身を捻って敵を弾き飛ばす横回転攻撃を雷速のヒット&アウェイで避けながら双銃のブレードで巨体を斬り付け、離れては双銃による雷弾の嵐を容赦なく撃ち込んで敵にダメージを確実に与えて相手を攪乱していく。

「っ!?!」

一方的に攻撃を受けて痺れを切らしたレゾナンスゴレムが両腕に霊力を収束して上に振り上げたのを視認したサクヤは「この攻撃は少し厄介かもしれない」という予感

がして目を見開き、上空へと跳躍する……直後組まれた機械巨人の両腕がビルの床に叩き付けられ、この場が崩れ落ちてしまうと錯覚する程の激震と共に広場の床を埋め尽くす程の無数の円形の衝撃波を発生させた。

「おっと、危ねえっ!!」

後方に控えていた出雲那も敵が両腕を振り上げた瞬間に身の危険を感じ、床に横たわるリディとエリカを両脇に抱えて付近にある連絡橋に跳躍していた。上に跳んだサクヤは無事だろうかと出雲那が朱い空を見上げてみると、彼の眼に異様な光景が入ってきたのだった。

——っ!!? ……何だ? ……サクヤが……【空に立っている】?

その光景は彼に動揺を生み出した……空に跳躍した黄色い双銃士がその朱い空の上で静止し、ビルの上のレゾナンスゴーレムを見下ろして【立っている】からだ。その理由は——

——何でサクヤの奴が魂律士の技術を使ってやがるんだ!?! 足下に靈力の足場を固めて空中歩法を可能にするアレは上位級の魂律士しか使えない靈術の超高等技術だった筈だ!!

阿散井恋次等上位級の魂律士が使う技術を使用している事に出雲那は戸惑いを隠せないでいる……だが驚愕はこれだけでは終わらない。敵対している相手を見失い頭部

の一つ眼でギョロギョロと周辺を見回してオロオロしているレゾナンスゴーレムに向けてサクヤは空中から右手の人差し指を指し向け……何かの詠唱を唱えはじめた。

「血肉の仮面・万象・羽搏（はば）き、ヒトの名を冠す者よ——」

—— なっ!?!あの詠唱はまさか!!

「雷鳴の馬車、糸車の間隙、光もて此（これ）を六（むつ）に別つ——」

—— しかも《二重詠唱》……だとおっ!?!

「蒼火の壁に双蓮を刻む、大火の淵そ遠天にて待つ——」

—— 縛道の六十一、《六杖光牢（りくじょうこうろう）》!!

サクヤが詠唱を言い切った刹那、強大な靈力で形成された六つの光帯が眼下のレゾンスゴーレムに向けて放たれ、それがその巨体を一瞬にして六方向から貫き、六つの光杖が強力な枷となつて機械巨人の身体をその空間に拘束してしまつた・・・そしてサクヤの怒濤の攻めはこれだけでは終わらない！

「破道の六十三——」

【二重詠唱】によつてそれを行使する靈力は既にその両掌に練り上げられている。両手首が上下に重なり合うように両腕を眼下で拘束された敵に向けて突き出し、花卉のように開かせた両掌から蒼炎の奔流を撃ち放つ——

「——《双蓮蒼火墜（そうれんそうかつい）》!!!」

蒼炎は極太の炎渦となり、光杖に拘束されている為に身動きができない機械巨人を慈悲無く飲み込んでビルの一部を焼き貫き、灼熱の炎海へと消えて行つたのだつた・・・。

サクヤがレゾナンスゴーレムを撃破した後、出雲那とサクヤは重傷のリデイとエリカに応急手当を施し、彼女達はなんとか一命を取留めた。

意識をギリギリ保っていたリデイにこの異界内で行方不明となっているクレアの所在について話を聞いてみたところ、彼女が言うにはこの空中回廊を越えた先にあるハイウェイの最果てで巨大な航空母艦が連結して存在していて、彼女達は先程までその上に存在している都市の一角にある闘技場で突然遭遇した正体不明の敵と戦闘をしていたらしい。

なんでもその航空母艦は二年前にワルスラーン社の企画（プロジェクト）によって始動する筈だった武芸者育成機関の海上学園都市艦、名は《リトルガーデン》というらしく、それはプロジェクトが始動した初日の日にとある海域で遊撃士協会が危険度Aランクに認定している超大型の魔獣《クラーケン》二体の襲撃に遭ってしまい無惨にも破壊されてしまったそうだ。

当時リトルガーデンの艦長とその補佐を任されていたクレアとリデイ達二人、海上学

園都市を運営するワルスラーン社のスタッフ達と学園の生徒達はクラークの襲撃を受けて死にかけたのだが、ある一人の幼い武芸者が身を犠牲にしてクラーク共を撃退してくれたおかげでクレア達は九死に一生を得たそうだ。・・・そしてその犠牲になった幼い武芸者の名は《リザ・ハーヴェイ》といい、ファミリーネームで判る通りクレアの妹であった。

身の限界を遥かに超えた気力を放出した所為でリザは全身を損傷し今も眼を覚まらず植物状態のままワルスラーン本社の地下研究施設の冷凍保存カプセルで眠っているそうだ。

このような事があった為に武芸者育成プロジェクトは凍結され、魔獣に破壊されてしまったリトルガーデンは当然廃艦となったそうだ。

「廃艦になった？それが本当なら何でこんなところの最果てにそのリトルガーデンが存在するんだよ？」

「ZZZ」

「って眠っちゃったよ・・・」

「さつきも言った通り【異界化】というのは人の負の感情によって引き起こされるわ。たぶんこの異界は彼女達の負の念から再現されたのでしょね・・・」

「だから廃艦になったリトルガーデンがあるって事か・・・」

「そう、恐らく話を聞いた限りでは妹が犠牲になったって言うクレアって子の・・・いつまでもこの場に止まっている場合じゃないわね。出雲那、彼女達を此処に寝かせてちょうだい」

「？」

出雲那は疑問に思いながらもサクヤに言われた通りにリデイとエリカをサクヤが立っている前の床に並べて寝かせる。するとサクヤは胸元から携帯端末らしき物を取り出して二人に向けて翳した。

——あれって、確か柀の奴が持っていた・・・。

出雲那はサクヤが取り出した端末を見てそれが今日の放課後に生徒会室でユーリとフェイトに事情聴取されていた時に明日香が弄っていた端末と同じ物だと気が付いた。サクヤが何かを呟くと翳した端末が淡い光を発し出し、リデイとエリカの身体からも同じ光が一瞬発せられると何事も無かったかのように光が消える。

「記憶消去——完了」

サクヤはそう呟くとその端末を胸元に仕舞う。彼女が呟いた言葉の通りならばサクヤは今二人の記憶を消したのだろう。

「・・・なるほどな、オレが柀に助けられたのを思い出せなかったのはアイツがこれでオレの記憶を封じたからってことかよ」

「そうね、あの子本当は君の昨日の夜の出来事を丸々封じたつもりだったのでしょけれど、この記憶消去は【適格者】には効果が無いの。その時はまだ君は適格者である事を自覚してなかったからほんの少しだけ術が効いたみたいね、だから一部だけの記憶が封じられていたのよ。まったくあの子ったらうっかり者なんだから」

「柊……本当に裏の組織の人間なんだな……」

改めて柊明日香というクラスメイトの少女が自分とは違う世界を見ているという事を出雲那は痛感した。今この朱い地獄のような世界の何処かで明日香がグリード達や【伊邪那美の使徒】とかいう奴かその仲間を相手にたった一人で戦っているかもしれない……明日香の実力を考えて滅多な事で彼女が簡単に他者に後れを取るとは思えないのだがそれでも万が一という事もあるのでできるだけ急いで明日香と合流したいところだ、しかしリディとエリカをこの場に放置して行くわけにもいかないだろう。

「さて、本当なら異界探索の素人である君を一人で行かせたくないのだけれども、時間を掛けてもらえないし仕方ないわね……出雲那、君は先に先行してちょうだい。私は一旦この二人を安全な外に避難させに行くわ」

「それは構わねえけど、ここから出られるのか？」

「ええ、普通ならこの異界の主であるエルダーグリードを倒して異界化を収束させるしかないのだけれど、私達終焉の盾のエージェントは皆不足の事態に陥った場合の為の緊

急脱出用の転移術を習得しているわ。異界化を引き起こしたグリードのランクによっては転移できない事もあるけれど、この異界はどうやらギリギリ大丈夫のようね」

サクヤはそう説明して霊装を上に掲げ、彼女を中心に古代文字が書かれた方陣が床に出現する。

「それじゃあ出雲那、明日香の事はお願いね。私もできるだけ早く追い付くから、それまで無茶をしちゃだめよ♪」

サクヤが出雲那にあざとらしくウインクすると一瞬にしてサクヤと床に寝かさされているリディとエリカはその場から姿を消したのだった。その場に残された出雲那は腕を組み、サクヤ・マキシマという女性の底知れなさについて疑問を感じた。

「サクヤ・・・アンタは一体何者なんだ？ 霊装の形態を自由に変えるわ、それと一緒に異能も別の属性に変わるわ、普通の伐刀者でありながら霊圧の足場や《鬼道（きどう）》といった魂律士の霊術を使うわ、鬼道の二重詠唱なんて高等技術を使えるわ、おまけにあの強さ・・・下手をしたら刀華さんよりも上かもしれないねえな。【終焉の盾】のエージェントってえのはみんなあの女のように底知れねえのだろうか・・・終、テメエも・・・」

もしかしたらあの今日クラスメイトになった亜麻色の髪の少女もまた出雲那の想像を遥かに超えた存在なのだろうか・・・もしかしたら自分が心配して助けに行くのは余計なお世話だったかもしれないと思いつつも出雲那は床を蹴り異界の先へと向かって

ビルから飛び出して行った……。

「あれが……【リトルガーデン】か？」

五分後、空中回廊を抜けた出雲那はビル郡のド真ん中を走るハイウェイに立って朱い炎海の水平線の先に見える船らしき建造物を眺めて確認するように呟いた。

「リディの奴が言った通りだったな、あそこに行くまでの道のりは一直線のハイウェイだ。迷う事はねえだろうがクソ遠いぜ……それに——」

ハイウェイの上には先の先まで無数の小型グリード達が徘徊していて出雲那の往く

手を阻んでおり、簡単には目的地に辿り着けそうもない。「天鳥」で空から行くにしても宙を跳び回っている蜂型や花型のグリード達との交戦は避けられないだろうし空中戦は飛行スキルを維持し続けて戦闘しなければならぬ故に気力・魔力・霊力を大量に消費する為、あの母艦に居るであろうこの異界化を引き起こした元凶のグリードや「伊那那美の使徒」なる者とその仲間とこの先で交戦する事を考えるとそれは避けるべきだろう……しかし——

「——あそこにクレア先輩が居て今も正体不明の敵と交戦しているつつうのがマジだとしたらザコ共相手にあまり時間は掛けてられねえな……仕方ねえ、すばしっこそうな奴だけ斬り倒しながら雷光石火で突っ切るか」

敵防衛線を突破する算段を澁々と決めた出雲那は左手に携える十拳を右腰のベルトに差して抜刀の体勢を取り、前傾姿勢で敵群の中に突攻を開始しようとするが……その刹那、上空から二つの影が飛来した。

「焼き滅ぼせ！ 《火ノ加具土（ひのかぐつち）》!!」

「天才魔導士マリさんとその他一名、只今参上っ!!」

突然悪魔の両翼の様な魔力翼を羽ばたかせて舞い降りた黒い外套を身に纏う少年が漆黒の焰を刀身に纏う刀型の霊装を右手に顕現し、出雲那が向いている約10m先の道に着地すると同時にその刀身を地に突き立てる。同時に地獄のような紅蓮の空に似付

かわしくないキャスケット帽を頭に被った少女が足下に展開された飛行輪をもつて宙に佇んでおり、空を蹂躪するグリード共を見据えて両掌を前方に突き出し巨大な虹色の魔法陣を展開していた。

「地に立つ魑魅魍魎共よ！闇の焰に身を焦がして冥界へと逝け!! 《地ヲ焼キ滅ス煉獄ノ黒焰（アポカリプス・インフェルノ）》!!」

「ええい！あの世へブツ飛べ、有象無象っ!! 《極光流星群（スターダスト・アウローラ）》!!」

漆黒の少年が地に突き刺した刀の刀身から闇の深淵の如くドス黒い焰が一直線状にハイウエイの表面を侵食して行き往く道の果てまで立ち塞がるグリード共を纏めて焼き払い、極光の少女が引いた右拳で殴り付けた魔法陣が爆散し無数の虹色が砲弾の嵐となつて朱き空を蹂躪し飛行するグリード共を極光の中へと消し去っていく、それはまるで光と闇が天地を別つ滅びの時（ラグナロク）のような光景であつた・・・。

「・・・なっ?!!」

突然現れた謎の二人組が大規模な広域殲滅スキルを放ち、異界の果てにあるリトルガーデンまで防衛戦を張っていたグリードの大群を一掃するという圧倒的な光景を目の当たりにした出雲那は啞然と絶句した。唐突な出来事に動揺を露わにしてしまったのもそうだが、何よりも何故特定の間人しか入れない筈の異界に人がいるのかという疑

いを抱いたからだ。

——な・・・何なんだコイツ等!?!いきなり空から飛んで来てこの先に居るグリード共を一匹残らず蹴散らしやがっただと!サクヤの仲間・・・ってわけじゃねえよな? 出雲那はまず二人組がサクヤと同じ【終焉の盾】のエージェントである事を考えてみる。サクヤは何も「一人で任務に当たっている」と言った訳ではない、故にその可能性を考慮して目の前の黒い外套を身に纏った銀髪褐色肌の少年に話しかけてみようと思っただが・・・。

「・・・ふっ!やれやれ、期待外れだな。この程度のランクの異界か、拍子抜けにも程がある。この異界化を引き起こしたエルダーグリードの底が知れるというものだ」

——つ!!?・・・まさか、アイツが持っている太刀は!!

銀髪の少年——【ブルート・A・イグナイト】が落胆の言葉を吐き捨てると共に外套を翻すと腰のベルトの左側に差してある【伊邪那美】と名が刻まれている紫色の鞘に収められた悍ましい雰囲気を感じる太刀を出雲那の眼が認識したのだった。彼はそれで確信した。

『これは・・・まさか、【神刀の共鳴】!?!近くに居るっていうの?八百万の神刀のもう一振り、【冥界の死刀(イザナミ)】の所有者である【伊邪那美の使徒】が!!』

『いいから暴れないで!事情なら後で説明するわ。【伊邪那美の使徒】を有する【奴等】が

動いたとなると一刻の猶予も無いの！急がないと明日香の身が危ないかもしれないわ
!!』

—— 奴の腰に差してあるのが【冥界の死刀】！間違いねえ！あの野郎がサクヤの
言っていた【伊邪那美の使徒】っ!!

「シツ!!」

出雲那は十拳の柄を握りしめて迷わずプルートの背中に向かって疾走、容赦なく抜刀
して彼に斬り掛かった・・・だがその一刀は簡単に受け止められてしまう、プルートが
振り返らずに無言で背中に回した火ノ加具土によつて。

—— 止められた!? 悔っていたわけじゃねえけど今のは素の全力でやったんだぜ。
それを後ろ向いたまんまで・・・初っ端から雷切をブチかました方がよかつたか？

二人はそのまま刃を合わせたまま無言になり、底知れない緊張感が周囲を包み込
む・・・そして数秒の沈黙の後にプルートが出雲那に顔を向け、出雲那はその顔を見て
時が止まったかのような錯覚を覚えるのだった。

「.....あ.....?」

出雲那はその顔に見覚えがあつた・・・いや、あるなんてものではない。何故なら――

「なんの冗談だよ.....お前は.....二年前の.....【あの事件】で――

——…死んだ筈だろ…尊(みこと)!!」

その顔は幼き頃から葵柳の修練を共にし、互いに理の高みを目指そうと切磋琢磨し合ってきたが、ある出来事によって無念にも道半ばで尽きた出雲那の盟友であった男――

——《葵柳尊(あおやなぎ みこと)》そのものなのだから…。

冥界の焰（ヘルフレイム）

葵柳尊は現葵柳流師範の息子であり、武内出雲那の同門で幼馴染の親友【だった】少年だ。

その少年は夜天の色に近い黒髪で、帝国ヤマト人とは思えないくらいに白い肌が印象的な容姿をしていたが、それ以上に――

「俺は葵柳の長男にして黒き呪いに蝕まれし【魔の右眼】を持つ男、名を尊という！死にたくなかったら666の魔獣が宿るこの魔眼を直視するな！獣共を抑えきれぬ自信がないのでな！フハハハハハッ!!」

・・・致命的な厨二病であった・・・。

親友【だった】というのは葵柳尊という少年は・・・既に亡くなった故人であるからだ。

現在より二年前に世界中を大混乱に陥れた【万応素（マナ）枯渇事件】は世界中の人々の社会や生活に大打撃を与えた故に知らぬ者がいない程の重大事件ではあったが、その事件を起こしたとされる組織は世界中の万応素を枯渇させようとする直前にそれを行う為の実験を世界各地で行っていた。

その実験に巻き込まれた犠牲者は数多く存在し、亡き者になった人間も少なからず存在していた……その内の一人が、当時出雲那と共に青学の生徒として戦士の道を志していた尊であった。

「嘘……だろ？ タイミングは合っていた筈なのに、何で倒れねえんだよ!!」

「ヒヤーツハハハハ！ せっかく覚えてきた必殺技だったのにぎゅんねんでしたああああ!!」

スクエア東エリアの一角にある廃墟の広場で当時中等部三年生であった出雲那は師である刀華と共にスクエアで実験を行っていた実行犯の男と対峙していた事があった。出雲那と刀華の目の前に存在するのは額と胸に紅い核が埋め込まれているヘドロ状の魔獣、頭部に湾曲した二本の角を持つ直立二足歩行の巨大な牛のような姿をしたその魔獣は廃ビルの上から高みの見物をして出雲那達を嘲笑している実行犯が実験の為に錬金術で練成して造り、二人に喚びよってきた《ヴェノムミノタウルス》である。

ヘドロ状のその身体は錬金術によってどんなに傷付けられても瞬時に超速再生するようになっており、音速を超えた攻撃で一瞬にして二つの核を同時に破壊しなければヴェノムミノタウルスを倒す事はできない、故に二人は雷速の一刀である雷切の同時攻撃によって二つの核を同時に破壊したのだが……何故かヴェノムミノタウルスは倒れなかったのだ……その上——

「なっ!？」

「嘘・・・破壊した核が、再生した・・・」

「あ、そういや言い忘れてたわ。クツクツク、実はよオ、その腐れ牛が再生する為に使っている燃料はなア」

せつかく破壊した核が映像を巻き戻すかのように直つてしまうのを目の当たりにして絶望的な表情を浮かべる出雲那と刀華を実行犯の青年は愉快そうに憐れみ、不気味な三日月の笑みをしてヴェノムミノタウルスの頭部を見上げる。

「・・・・・・・・」

その脳天には下半身がヘドロに沈められ、上半身のみを外に出してその場に囚われている黒髪の少年がハイライトが消えた虚ろな眼をして無気力に俯いていた。

「っ!!・・・まさかテメエ・・・アイツの・・・尊の生命力を!!」

「ピンポンピンポーン! 大正解! クツクツク、ヒャーハハハハハッ!! テメエ等がその腐れ牛を傷付ければ傷付ける程、オトモダチの命が再生能力の燃料として消費されるって事さ! あの様子だと後五回ぐらい再生したらあのオトモダチはおっ死んじまうだろうなア、ヒャーハハハハハッ!!」

「そんな・・・」

「テメエ・・・このゴミ野郎が!!」

「オトモダチの命が欲しかったら黙って殺されるこつたなア、クツクツク．．．ああそれから、腐れ牛のド頭からオトモダチを無理に引き剥がすのは止めておいた方がいいぜえ、ちよつとでも引っこ抜こうとしたらオトモダチの生命力を一瞬で吸い取り尽くす仕組みになつてゐるからなア」

「畜生．．．何か尊を救う方法はねえのかよ．．．」

高いところから見下してシヨールを樂しむかのように愉快そうに三日月の笑みで嘲笑する青年。出雲那はヴェノムミノタウルスの頭部に捕らえられている尊を救うにはどうすればいいのかと嘆くが、現実とは非情なものだ．．．ヴェノムミノタウルスが腐つた肉片をまき散らしながら巨大な斧を持った右腕を振り上げる。

「ヒヤツハー！二人纏めておつ死んじまえええええつ!!」

実行犯の青年の歡喜の叫びと共に巨大な斧が出雲那達に振り下ろされる。これで万事休すか．．．と思われたその時。

『．．．い．．．ずな．．．』

「．．．あ．．．」

斧が叩き付けられる直前で出雲那の耳には誰かの声が聴こえて来た．．．彼が聞き間違える筈がない、それは紛れもなく最後の意志を振り絞つた尊の呼び声であった。

そして尊は、出雲那にこう懇願してきたのだ．．．『頼む．．．俺を．．．殺して

くれ』と・・・。

「ぐっ！」

プルトが振るった火ノ加具土の一振りが出雲那の持つ十拳の刃を弾き返し、出雲那の靴底に強烈な摩擦が生じる。プルトの方を向いたままハイウェイのコンクリートを滑り敵から約10mの距離を空けて制止、出雲那は苦虫を噛み潰すように歯を軋らせて死んだ親友と瓜二つの顔を持つ漆黒の少年剣士に訴えるように呼びかけた。

「尊！テメエ尊なんだろ！？オレだ！出雲那だ！！」

二年前の事件で事の実行犯に利用され、自分の選択と葛藤の末に死んだ筈の親友が目の前で生きて存在している・・・出雲那はそのような焦燥に駆られ、目の前の漆黒の少年剣士に自分の存在を必死に示した。しかし――

「いきなり背後から斬り掛かって来たうえに訳のわからん妄言をほざくな！俺は尊などという輩では無い!!」

その漆黒の少年剣士は不快を露わにして怒鳴るようにその呼びかけを否定していた。他人に間違えられて否定するのは当然だ、そもそも尊は黒髪で世の女性が羨むような白い肌をしていたが、プルートは銀髪で褐色肌、おまけに顔の右側三分の一が不気味に黒くなっているしかも厨二の憧れとも言えるオッドアイだ、尊は厨二病ではあったが両目共に帝国ヤマト人らしく透き通った黒い瞳をしていた、尊本人だということにはあまりにも変わり過ぎている。

「俺はプルート――結社《終末の蛇（ヨルムンガンド）》、執行者No. XIII《冥界の焔（ヘルフレイム）》の「プルート・A・イグナイト」だ!!【伊邪那美の使徒】などというふざけた名で呼ばれる事もあるがな」

プルートは腰のベルトの左側に差してある「冥界の死刀」を左手に取り、出雲那に向けてそれを掲げ、自分の名と身分を高らかに明かした。やはり彼は【伊邪那美の使徒】であつたのだが、彼はその名で呼ばれる事を嫌っている様子に見える・・・。

「なっ?!?!」……【終末の蛇】……だと……!!」

そして出雲那はそれを聞いて驚愕を露わにした。プルートの伊邪那美の使徒であるという事は彼が冥界の死刀を所持している時点で判っていた事だが問題はそれではない、彼が【終末の蛇】という組織に所属している人間だという点である。

—— おいおい、想定外にも程があるだろ!? 【終末の蛇】つつたらあの【万応素枯渴事件】の黒幕で、構成員はどいつもこいつも化物だらけつつうSSS級犯罪組織じゃねえか!!

秘密結社【終末の蛇】—— 約四十年前の第二次遭遇後の超常大戦終結よりその存在が噂されていたが、二年前に彼等の計画により世界全体を巻き込む大事件【万応素枯渴事件】が引き起こされた事によりその頭角を現した世界的犯罪組織。たった一人で小国を陥れる程の強大な能力や戦闘力を有する幹部《使徒》や実動員《執行者》を擁していたり未知の技術で造られた自律機動兵器や一国の飛空艇団に匹敵する飛空艦隊を有しているなど戦力は計り知れなく、二年前の事件後も世界各国で暗躍する姿が目撃されている。彼等の実態・目的は今でも謎に包まれている、二年前の万応素枯渴事件の際はその全貌を知る機会があったのだが、事件の首謀者であった終末の蛇の使徒の一人である《ゲオルグ・ワイスマン》が捕縛目前で何者かによって暗殺されてしまった為に結局のところ彼等の事は表面上の事柄しか明らかになっっていない。

「終末の蛇の執行者がこんな所で何をしてやがる!? まさかまた二年前の事件のようなデカイ悪事を企んでるんじゃないぞだろうな!!」

目の前に立つ漆黒の少年剣士の正体が終末の蛇の執行者だと知り、出雲那はプルートの威嚇するように睨みつけてそう問い質す。二年前、彼等の構成員の一人が行った実験に巻き込まれて一人の親友を亡くした出雲那にとって終末の蛇には因縁を持っていると言つても過言では無い、故に彼等が何か良からぬ事を企んでいるならば放っておく訳にはいかないのだ。そう、志半ばで死んだ親友に報いる為にも……。

「……フツ！」

「ぐっ!？」

そして問いかけに対する返答は黒炎の刃の一刀によつて返されたのだった……瞬間移動と見紛う踏み込みで10mの距離を一瞬にして詰めたプルートが霊装を逆袈裟に斬り上げ、咄嗟に出雲那が振り上げた鞘付きの霊装とぶつかり合つて鈍い金属音が朱い空に響き渡り、鏗迫り合い状態となつて拮抗する。だが出雲那が歯を食い縛つていて表情に余裕が無いのに対してプルートの表情は涼し気で余裕があった。

「ぐぎぎぎぎぎ……!!」

「……ほう?」

徐々に出雲那が後方に押し遣られて行く中、プルートは出雲那の右腰にある創生の雷

刀に気付いてこれは面白いと声を漏らした。

「成程……この異界に入る直前で冥界の死刀（こいつ）が共鳴したようにも見えたが、見間違いでは無かったようだな。よもや貴様のような雑魚が【伊邪那岐の創り手】だとは滑稽の極みだ」

「なっ?!? あ・ん・だ・とおっ!!」

「フンッ!」

「げふっ!」

蔑まれてカチンと来た出雲那は怒りで押し返そうとするものの、プルトの一蹴りによって出雲那は後方に一直線に吹っ飛ばされてしまう。「く」の字に曲がった身体は対物（アンチマテリアル）ライフルの弾丸の如くハイウェイのガードレールを突き破って高層ビルの側面に叩き付けられ、勢いで外壁を削り窓ガラスを砕きながら側面を転がり上がって朱い空に放り出されて放物線を描き、そのビルの屋上にある貯水タンクに頭から墜落して派手な水柱が立った。

プルトがその様子を下から見上げて笑みを浮かべた。

「フツ、丁度いい、伊邪那岐の創り手を見つけたらそいつを【殺す】か或いはそいつの持つ【創生の雷刀を破壊】しろとレーヴェの奴から言われていたからな、今回の目的とは違うがついでにやっておくとするか……マリ、貴様は手を出すなよ? これは俺がやる

べき事だからな」

プルートの空に滞空して見下ろしているマリに手出しはするなど釘を刺す。

「プルート!? むやみに殺しちゃダメだからね!!」

「ああ、言われずとも解っている。奴が持つ創生の雷刀を破壊するだけに止めておく、それで良いのだろう、自称不殺の魔導士よ?」

「自称は余計よ! . . . それと、冥界の死刀を使うのは危ないから極力鞘から抜かないようにしなさいよね」

「善処はしよう . . . 尤も、それは奴次第だけどなつ!!」

そう言うと同時にプルートは足下のコンクリートを踏み砕いて出雲那が吹っ飛んで行った方に跳躍するとハイウエイを飛び出し――

《悪魔ノ風翼（デモンズウィング）》

空中で先程飛んで来た時に背中にあった悪魔のような魔力翼を再び背中に形成して飛翔、真つ直ぐと高層ビルに近づくと上一直線に崩壊した側面に沿うようにして垂直に上昇して行く。

「痛つてえ」

黒い悪魔が下から迫って来る中、全壊した貯水タンクの水で全身ずぶ濡れになって倒れていた出雲那が蹴られた腹部を腕で押さえながらヨロヨロと立ち上がった。十拳を

杖代わりにしていてプルートの蹴り込みがどれ程重い一撃だったのかがよく分かる、三大源力を持つ異能者じゃなければ身体はグチャグチャだっただろう……。

そして正面に見える壊れた金網フェンスの奈落から黒い影が天に昇り、朱い空を見上げれば悪魔の翼を羽ばたかせた伊邪那美の使徒がその二色の眼で見下ろしていた。まるで追いつめた獲物を仕留めに行く直前の鷹のように……。

——クソ！この野郎、本当に尊じゃ無えのか……世の中同じ顔をしている奴は三人は居ると言うけどよ、瓜二つにも程があるぜ……。

「無様だな、貴様のような雑魚にその剣は過ぎた代物だ……」

「ザコザコ言ってくれるじゃねえか、おい？」

見下して蔑んで来ている二色の眼を出雲那は癪に障った眼で睨み返す。プルートはそれを取るに足らないと感じて無表情のまま出雲那に火ノ加具土の切っ先を向けた。

「二度剣を交えただけで判る、貴様の剣は軽い。意志だけは有るようだが、そこには【鋼の強さ】も【確固たる覚悟】も感じられない……そのような半端者を雑魚と呼ぶ以外に何と呼ぶ？」

「ハンツ！半端者なあ……確かにそうだな。オレはまだ【自分の成すべき責任】を背負うどころか見つけてすらいねえし【確かな夢】も無え、オレを戦士足らしめているモノと言えばアイツとの……尊との約束を果たすという何時までも引きずった安っぽい使

命感だけかもしれないねえな・・・ハハツ！」

人の未来を導く為に慈愛の心で他者の助けになる事を自分の責任として背負う【鋼の強さ】を持つている自分の師のような存在である少女と弱き者を助けられる存在になるという夢の為に例え才能が乏しくとも天才と称される者達に喰らい付いて高みを目指す【確固たる覚悟】を以つて遊撃士を志す自分の親友の顔を思い浮かべて愚痴を言うかのように出雲那は苦笑をする。その二人や数々の一流の戦士達と比べて彼はあまりにも半端者だと言わざるを得ないかもしれない・・・だが出雲那はそれに怯む事無く空から向けられている黒い刃の切っ先に向けて十拳の柄尻を掲げた。

「でもなあ！テメエが何を言おうが、どんだけ強かろうが、オレは絶対にテメエに負けるつもりはねえっ！テメエをブツ倒して終の奴を見つけ出してクレア先輩も救う！そしてこのふざけた夜を終わらせて明日の学校に行くんだよ！必ずなっ！！」

自分が未熟である事など百も承知だ、そんな事人に言われなくとも自覚している。でもそれがここで敵の暴力に屈している理由にはならない。

「来いよ執行者！葵柳流【十旋（じゅっせん）】武内出雲那の意地（プライド）に懸けて、テメエをこの剣でブツた斬つてやるぜっ！！」

「・・・安い戯言だ」

もはや言葉はいらない、剣を手にして対峙したのなら後は刃を交えるのみだ。屋上の

床を踏みしめる出雲那が十拳を右腰に帯刀して抜刀の構えをとり、悪魔の翼を羽ばたかせるプルートも火ノ加具土の刀身を左腰の靈鞘に収めて居合の構えをする。朱く燃ゆる煉獄の空を挟み両雄は今、激突する！

「行くぜ！執行者！！」

魔力の電光を身体中から発して気合いを入れると共に屋上の床を蹴り出雲那は驚異的な跳躍力で空中に滞空するプルートへと向かつて跳んで行く、左手で握った剣は幼い頃から振り続けてきた愛刀の黄旋丸、その刀身が収められている鞘に電流を流し中に刀身を射出する為の磁界を発生させた。

———どんなに奴が強かろうが接近さえできれば雷切で一撃だぜ！

青学の生徒会長にして出雲那の師である東堂刀華の伝家の宝刀、その雷速の一刀は人には対応できぬ異次元の一閃、出雲那のそれはまだ未完成ではあるがそれでも人間が反応できる速度ではない。

終末の蛇の執行者がいかに精強であろうとも人間には違いない筈だ、接近して雷切を抜き放てば得体の知れない黒い炎を行使するプルートも恐らく一溜りもないだろう……。

「くらえっ！雷k———」

「……フンッ！」

パッチン！プルートは出雲那が雷切を放つ態勢を取りながら下から跳躍して来るのを見計らって居合の構えを解いて左手の指を鳴らす。それはプルートを雷切の射程圏内に捉える寸前のタイミングであり、今まさに雷速の抜刀術が抜き放とうとしていたところであった。

・・・だが、それが放たれる事は無かった。その刹那、出雲那の身体が爆音と共に発火したからだ。

「ぐああああああああつ!!!」

全身を黒炎で焼かれる苦痛で悲鳴をあげ、出雲那はその刃をプルートに届かせる事無く落下して行く。ハイウェイの上に背中から叩き付けられ、炎に焼かれながら無様にもコンクリートの上をのたうち回った。

「フンツ！所詮は口先だけか・・・」

出雲那のその無様な醜態をプルートは鼻を鳴らして憐れみ、黒炎による苦痛に転げる愚か者がよく見える位置まで飛行高度を下げて嘲笑するようにその醜態を見下した。

「もう少し手応えがあるかと思ったが結局その程度か、伊邪那岐の創り手と言えども所詮は世界のルールに従属せねば生きて行けぬ表の世界の戦士だな」

プルートは火ノ加具土を鞘から抜いて刃を天に掲げ、その切っ先に凄まじくドス黒い炎の球体を創り出した。出雲那にとどめを刺すつもりだ。

「その創生の雷刀は破壊させてもらう、実につまらぬ余興だつて——」

プルートが霊装の刃を振り下ろそうとしたその瞬間、無様に転げ回っていた出雲那が眼をカッ！と見開いて無理矢理右足をダンツ！と踏みしめ、瞬時に立ち上がってその勢いのまま右脚を軸にその場で黒炎に焼かれるその身を高速回転させ、凄まじい辻風を生み出すと共に黄旋丸を鞘に収めたまま腰のベルトから抜き放った。

「葵柳流帯刀術、《円旋陣（えんせんじん）》!!」

出雲那が技名を言い放った瞬間に出雲那の全身を焼く黒炎が辻風に移り空に舞い上がって消えて行った……【円旋陣】とは片脚を軸にその場で回転し、自分の周囲を囲う旋風を巻き起こして敵の攻撃を流して弾く防御陣を展開する葵柳流の技だ、出雲那はこの技で発生する風を利用して黒炎を吹き飛ばしたのだ。

「ハアツ、ハアツ、ハアツ！」

「……ほう、意外にも技は確かのようなだ、まさか俺の炎を吹き飛ばすとはな……」

なんとか窮地を脱した出雲那だったが数秒の間猛烈な熱量の炎に身を焼かれていた為に全身火傷を負っており、肩を下ろして息遣いも荒くなっている。プルートは自分が放った炎を吹き飛ばした出雲那の技に関心を示すものの、その表情は余裕そのものだ。

何故なら——

「まあ、無駄な事だがな」

プルートを再び指を鳴らして、今度は出雲那の周囲を囲むように漆黒の焔の壁を現出させたからだ。

「なっ?!?マジかよ!!」

「何度吹き飛ばそうが無駄だ、此処一帯は既に俺の《第七園》の支配領域に置いたのだから。この術は【この身体に流れる血族】しか使えぬ秘術なのだが、雑魚共を一掃するには便利なものでな、指定した領域内における炎熱系の術を詠唱や術式などの一切の過程（プロセス）を省略して即発動する事ができる。つまり貴様はこの領域内に居る限り俺の焔に抗えぬという事だ」

「くっ!!」

出雲那は悔しさのあまり下唇を噛み締める。この一帯に居る限り出雲那が何をしようとしてもその前にプルートの黒焔に焼かれてしまう、【第七園】の領域内に居る限り出雲那の勝利は無きに等しいのだ。

——この術・・・魔力による術式で構築されているようだな・・・なるほど、アイツもオレと同じ三大源力全てを持っている特異存在ってわけか・・・そりやそうだな、【伊邪那美の使徒】なんだしな・・・。

【八百万の神刀】の所有者になれる条件は【気力】【魔力】【霊力】の三大源力を身の内に秘めている事だ、なので【冥界の死刀】の所有者であるプルートが伐刀者であり魔術師

でもあるのは当然の理だ。

——初めて同類に会えた気がするぜ、今まで生きて来て色んなチカラを持つ人間と出会って戦ったりもしたけど、オレと同類の人間は一人もいなかった……だから、このままアイツに負けたくねえ！

プルートが自分と同じ特異存在だと知り、出雲那の心にはプルートに対していつの間にかライバル心が芽生えていた、同類だからこそ絶対に負けたくないと……しかし、この戦いに勝利する為にはプルートの「第七園」をなんとかしなければならぬ。

「……終わりにするぞ。漆黒の業火の前に灰となれ、創生の雷刀！」

「畜生!!」

無情にも三度プルートが指を鳴らそうと左手を眼前に掲げ、それを見上げるしかない出雲那は悔しみを吐き捨てる、これでこの戦いは終局か？

「させないわ！凍れ、世界よ——《セルシウスサンクチュアリ》!!」

瞬間、突如として女性の声が響き、出雲那の周りを囲う黒炎の壁諸共ハイウエイが凍り付いた。周囲のビル郡もその先の炎の海も気が付けば空と最果てのリトルガーデンを除く全てが一瞬にして氷のオブジェと化したのだ。

「・・・は!?!」

「何っ!?!」

「ちよっ!?!寒っ!!何でいきなり辺り一面が凍ってんのよ!?!プルト、アンタ何かした?」「する訳がないだろう!俺は冥界の死刀のチカラ以外は炎しか使わない!これは俺達以外の何者かがやったのだ!」

「何者って、一体誰よ!?!」

突然凍り付いたハイウエイに出雲那は訳が解らず表情を固まらせた。突然の事態に

プルートとマリは空でギャーギャーと口論を繰り広げ、場は騒然となった。

「氷……まさか!？」

「驚いたわね。まさか貴方が再び異界に足を踏み入れているなんて思いも由らなかったわ——武内君」

左方に見えるビルの屋上、其処にはいつの間にか青白い冷気を纏うレイピア型の霊装を携えた一人の少女が立っていた。

青竜学園のセーラー服を身に纏い、艶のある亜麻色の長髪と凜とした立ち姿が出雲那の眼に映る。その帝国ヤマト人離れした碧眼で見下ろす少女は見間違う筈はない。

「やっぱりお前だったか……終」

その少女は今日青学の新たな一員となり、昨晚の異界で出雲那を絶体絶命の窮地から救った伐刀者——終明日香その人であった。

靈劍使いVS極光の魔女

終末の蛇の執行者、プルート・A・イグナイトが操る黒炎に取り囲まれた出雲那を窮地から救ったのは彼がこの異界で探していたクラスメイト——柊明日香であった。

「また会ったわね、武内君。できれば明日A組の教室で会いたかったものだけど……」
自身の伐刀絶技によって氷のオブジェと化した高層ビルの屋上に立ち、出雲那が立っているハイウエイをその透き通った碧眼で見下ろす明日香はやれやれとその艶のある長髪を手で掻き上げるとその場から飛び降り——

「ハアアアッ！」

右手に持ったレイピア型の靈装「エクセリオンⅡハーツ」を振るって出雲那を閉じ込めている凍り付いた黒炎を砕きつつ同時にハイウエイ上に着地するという鮮やかな妙技で彼を氷の檻から解放して参上すると朱い空を見上げ、そこから怪訝な目でこちらを見下ろしてきているプルートを射貫くような鋭い双眸で睨みつけた。

「貴様、何者だ!?俺の炎を凍らせるとは只者ではないな!!」

明日香から向けられる強大な威圧感と靈圧を感じ取って彼女がこの周辺区域を自分が発した炎術ごと凍らせた張本人であるという事実を瞬時に把握したプルートが不愉快

快そうに明日香にその素性を明かすよう要求してくる、問答無用で一触即発の雰囲気だ。しかし明日香はその要求を拒みはせず――

「お初にお目にかかるわね、終末の蛇の執行者。私は結社【終焉の盾】の異界探索エージェント、《靈劍（れいけん） 使い》柊明日香」

と、尻込みする事もなく堂々とその素性を明かしたのだった。

「何？終焉の盾だ?!」

「柊……やっぱりお前も終焉の盾って裏組織の人間だったのかよ」

「ええ、黙っていてごめんなさいね。でも幾ら戦士候補生だからって表の人間を裏の事情に……って、何故武内君が終焉の盾の事を？それに【も】って!？」

「今日さっき終焉の盾のサクヤって女がオレに接触して来てお前がこの異界に居るって教えてくれて、それで連れて来てくれたんだよ！オレが【伊邪那岐の創り手】ってやつだから協力してほしいってさ!!さっきまで一緒だったけど此処に来る途中でグリード共から助けたりディとエリカを外に避難させるってから一旦別れて異界の外に転移して行つた。それで後で追いつくから先行してろって言つてやがったぜ」

「……………」

明日香の素性を聞いてプルートの驚いている間に明日香の隣に立った出雲那が明日香にその素性を確認するように聞く。明日香はバレてしまつては仕方がないと残念そ

うな表情で答えようとするが、その最中に出雲那の発言はまるで自分が所属する組織を知っているかのような口振りだったので言葉を詰まらせ、若干動揺気味にその不審を感じた疑問を聞き返すと、出雲那がサクヤという女性にこの異界に協力者として連れて来られたと返してきた為に明日香は無言で額を左掌で押さえて愕然と落胆する。

——サクヤさん、あなた来ていたんですか・・・はあ・・・何の任務かは知らないけれど表の人間を巻き込むなんて・・・。

いつもながらあの先輩は困った人だという呆れと表の人間を裏の事情に巻き込んでしまったという罪悪感、そして最近どうも自分の思い通りに事が運ばないという小さな嘆きが明日香の心境を掻き乱して彼女をなんとも言えない憂鬱感に苛ませていた。どうしてこうなったのかという空気が場を支配し彼女の落胆を増大させるが、今はそれを問題にしている場合ではないだろう。

「終焉の盾・・・【怪異狩り】の連中か。チツ！面倒なのと遭遇してしまったな」

朱い空に漆黒の両翼を羽ばたかせながらプルートの舌を打ち、いつでも二人を強襲できるような身構えていた。その右手に持つ霊装火ノ加具土の刀身には得体の知れない黒炎が渦巻き、眼下の愚者共を焼き尽くさんと唸りを上げているように見える。その威圧を感じた出雲那と明日香は気持ちを切り替えてプルートが滞空している朱い空を睨み、それぞれの得物を構えて迎撃態勢に入った。

「……武内君、話は後で聞かせてもらうわ。今は目の前の敵を退ける事を優先しましょう」

「へっ！言われなくても判つてんぜ！」

「二人同時か……おもしろい。少々面倒だが、纏めて灰にしとちよつと待つたああああああつ！！」

そのまま二対一で戦闘再開かと思われたが、突如プルートの後方からマリの制止が掛かり、飛行魔法で飛んで来たキャスケット帽の少女が黒き翼を広げるプルートの右隣に並んだ。

「マリ、どういうつもりだ!？」

「決まってるでしょ？敵も二人になったんだし、あたしも参戦するんだから!」

「必要無い、下がっている!たかだか雑魚と雑魚に毛が生えた程度の輩、俺一人で十分だ!」

「何恰好付けてんの!今現れたあの女、結構強そうよ。アンタの炎も凍らされたし」

「フンツ!その程度、脅威になどならん!俺の【第七園】はその領域内において最速で炎熱系の術を発動する事ができる。故に敵は第七園の領域内に居る限り、俺の炎から逃れられはしない!例え炎を凍らせる事ができようともな!!」

敵が二人に増えたので共に戦うというマリの申し出をプルートは不要だと頑なに拒

否する。何故なら例え明日香がプルートの黒炎を凍らせる事ができようとも【第七園】による即発動の炎で凍らされる前に相手を焼き尽くしてしまえばいいのだから援軍など必要は無い……のだが、その定義は話に明日香が割り込んで来た事により瓦解する。「お取り込み中のところ悪いのだけれども、この周辺に仕掛けてあった設置型の術式はさっきの【セルシウスサンクチュアリ】と一緒に【凍結させて無力化した】からもう効果は無いわよ」

「……は？」

「何だと？」

明日香が告げた宣告があまりにも驚愕的な内容だったので出雲那とマリは漠然と呆け、プルートはそんな筈あるかと事を確かめる為にバチンバチンと指を鳴らして黒炎を呼び起こそうとする。だが炎術は何度やろうとも発動しない……。

「莫迦な……そうか女、貴様伐刀者か。そしてその氷の異能、《自然干渉系》かと思っただがそうではない様だな？」

【第七園】による炎術即発の術式が凍結されて炎術が発動しなかった事に一瞬驚愕の表情を浮かべたプルートであったが、彼は明日香の右手に握られている得物が霊装である事に気が付いて彼女が伐刀者である事を瞬時に把握し、彼女の伐刀者としての異能が見た目通りの氷の異能ではないという事を即座に看破して明日香に真意を問い質す。

伐刀者の異能の系統は大きく分けて四種ある。靈力を自身の身体に行使して様々な身体能力を向上させる《身体強化系》、炎や氷などの自然現象を自由自在に操る【自然干渉系】、【傷を開く】【空を飛ぶ】などの働きを事象として引き起こす《概念干渉系》、そしてこの世の理を捻じ曲げる事象を発現させる《因果干渉系》……その中で明日香の能力は――

「ご明察ね。そう、私の異能は【凍結停止】、物体のみならず【ありとあらゆる働きを凍結して停止させる】という概念干渉系よ。ついでに教えておくとこの周辺に仕掛けられていた貴方の術式を凍結させた私の伐刀絶技【セルシウスサンクチュアリ】は【指定した座標の領域内の働きを凍結させ、その範囲を氷として現出させ停止する】というものの……残念だったわね、私には領域支配系統のスキルは通用しないわ!」

「チツ!面倒な……」

朱い空から見下ろすプルートの毅然と言い放つ明日香。彼女が居る限り厄介なプルートの【第七園】は封殺したも同然だ、その事実にはプルートは歯をギリツツと軋らせ、やってくれたなという怒気が籠った異色の眼で地上の二人を睨みつける、ここにきてプルートは初めて曇りの表情を露わにしたのだった。

だがこれが出雲那達が優勢になった訳ではない。何故なら【第七園】が封じられたところでこれはプルートのチカラの一端に過ぎず、故に彼はまだ実力の半分すら出して

ないからだ。

「ほらあ、だから言ってるでしょ！あたしも加勢した方が断然効率良く終わらせられるってーの！」

それに彼の仲間であるマリの存在もある為、彼女が参戦すれば数の優位も消える。その事を指をさしてギャーギャーと指摘してくるマリをプルートは鬱陶しく煙たがり、内心イラツときていた。

「それにあまり時間掛けるとこの異界化を引き起こしたエルダーグリードがあたし達のチカラを察知して場合によっては別の異界に逃げる可能性だってあるんだから！」

「煩い、そんな事など言われずとも解っている」

「だったら二人で戦ってとつとと終わらせる！んでこの異界の主が【例の眷属】だったら——」

「それ以上は終焉の盾（やつら）の前で口にするべき事では無い。仕方がないから加勢は許可してやる、だからその喧しい口を閉じろ！」

言い合いの中でマリが自分達の目的についてうっかり零しそうになったところでプルートがそれを制した。それで仕方なくマリの加勢を許した事によって彼女は「よっしゃあ！」と飛び跳ねて（空中だが）喜び、出雲那達とプルート達は再び向かい合う。

「痴話喧嘩は終わったようだな！それじゃあ戦闘再開といこうぜ!!」

「誰と誰の痴話喧嘩だ!? そのふざけた口を直ぐに黙らせてくれる!!」

「武内君、あまり無茶はしないでね。戦闘に関しては貴方は素人じゃないという事は昼の決闘を観て理解しているけれど、それでも貴方はプロではないのだから」

「安心して、殺しはしないわ。でもあたしの魔法はハンパじゃないから、メチャクチャ痛いだけは覚悟しておいてよね!!」

そして周囲の万応素に呼応して四者の内から湧き上がった三大源力が激しく流動し、膨大なエネルギーが大気を揺るがす・・・戦いの準備は整った。

「——行くぜっ!!!」

真っ先に朱い空へと飛び出したのは出雲那だ。魔術師としての飛行スキル【天鳥】をもって背中に雷光の翼を形成した彼は空で待ち構える終末の蛇の執行者達目掛けて一直線に飛翔して行く。

「単調莫迦だな。撃ち墜としてくれる! 《拡散スル飛炎（フレイム・バレード）》!!」
「弾幕行つくわよおおおお! 《極光の弾幕（アウローラ・ブラージュ）》!!」

対して下から向かって来る雷鳥を撃墜すべくプルートの火ノ加具土を連続で振るい刃に纏いし黒焔を無数に拡散させるように飛ばし、マリが弧を描くようにその場で旋回して数百にも及ぶ小型の魔法陣を展開しその全てからガトリング砲の如く七色の光弾の嵐を乱射する。

「へっ、こんな薄い弾幕屁でもねえ！一気に翔け抜けてやるぜ、【雷光石火】っ!!」

闇と光の雨が降り注ごうとも雷の振るうが如き速さで翔ける雷鳥は止まりはしない。閃光と見紛う速度で出雲那は弾幕の嵐を掻い潜つて行き――

「雑魚が！墜ちろっ!!」

弾幕を抜けた先からは黒き焔の翼を羽ばたかせるプルートがその炎刃をもつて弾丸の如く突進して来ていた。

「はあああっ!!」

「ぬうおおっ!!」

出雲那はプルートに接近すると霊装である十拳を抜刀、擦れ違い様に火ノ加具土の炎刃と交錯しソニックブームにも似た衝撃波が金属のぶつかる音と共に周囲の大気を吹き飛ばした。

「【雷光石火】！」

「《黒キ鳳凰ノ爆進（エクスプロード・オブ・ザ・ヘルフェニックス）!!」

大気の爆発が止み、闇と光の弾幕が地上を空襲爆撃すると同時に両者は光と闇の閃光となつて天高く舞い上がった。

音すらも置き去りにして翔ける二つの閃光が朱い空で曲線を幾重にも描き、僅かな間も無く鳴り続ける剣戟音が空間を蹂躪している・・・常人の目には黄と黒の軌跡が鳴り

響く剣戟音と共に朱い空を侵食し続けて行くように映っている事だろう。出雲那とプルートは今、それほどの超高速戦闘を上空で繰り広げているのだ。

「はやっ!?!これじゃあ援護できないじゃないのよ!!」

なんとかプルートの援護を試みて極光の魔弾を指先から射出する魔法《極光の鎌（アウローラ・パレット）》の標準を超高速で翔け回る出雲那に合わせようとするマリであったが、速過ぎて全くその標準が定まらず痲癩をあげてしまう。

「ええいっ!?!だからと言って引き下がってたまるかあっ!!この美少女天才魔導士マリさんを舐めるな「シユート!」ってうおっ!!」

それでも諦めの悪いマリは意地でも狙ってやると眼に動体視力強化の魔法を掛けて無理矢理超音速で跳び回る出雲那をその視界に捉えようとするが、その隙を狙って明日香が牽制用の射撃刀絶技《スプラッシュアロー》をマリに向けて不意打ち気味に放つて来た。不意を突かれて仰天し焦ったマリは地上から向かって来た二発の冷弾を不格好なポーズを取ってギリギリ避け、腹立たしい形相で眼下のハイウェイに立つ明日香を睨みつけた。

「ちよっど!?!いきなり何すんのよっ!!」

「隙を見せた貴方が悪いわ、私がいる事も忘れないで」

マリの文句を正論で軽く言い返した明日香は上空で超高速戦闘を繰り広げている出

雲那とプルートを一瞥して溜息を吐く。

——【あまり無茶はしないでね】って言った傍から……はあ……仕方ない、【冥界の焔】は暫くの間武内君に任せておいて、私はこっちの執行者を出来るだけ早く倒す事に専念しましょう……】。

「貴方の相手は私よ、可愛らしい執行者さん。遠慮しないで何所からでも掛かって来なさい！」

「……上等よ……ブツ飛ばしてやるっ!!」

左手で自身の艶のある髪を掻き上げる明日香の挑発に簡単に乗ったマリが右手に虹色の粒子を纏った二十メートルはある光の大剣を形成し大気が爆ぜる勢いでハイウエイ上で靈装を構える明日香に向かって急降下して突撃して行き、その全てを斬り裂く刃を振るった。

——虹色の魔力!?まさか、この魔法は!!!

「《極光の剣（アウローラ・ブレイド）》!!」

眼前で七色の大剣が振るわれる瞬間、明日香はマリの魔法の正体を察して受けたら危険だと咄嗟に判断し、大きく後方に飛び退いた。直後、彼女が飛び退く直前に居た場所を中心として横斜め上の軌道で道路を切り裂きながら光剣が通過し、飛び退いた明日香を追撃するように光剣が斬り返されてバツ字の裂け目がハイウェイに刻まれる。

刹那、バツ字に刻まれたハイウエイの一部は音を立てて崩落し無数の破片が煉獄の炎海に飲み込まれて行く・・・安全圏まで飛び退いた明日香はいとも容易く切り裂かれたハイウエイを目の当たりにして戦慄した。光剣で切り裂かれて崩落した場所は一見鉄の橋の表面をコンクリートで固めたハイウエイだが、異界の物質は全て現世には無い未知の霊子で構成されているものであり、その強度が見た目通りとは限らない。それをあのキャスケット帽の魔導士が形成した魔力剣はまるでバターを切るようにアツサリと切断したのだから驚愕せざるを得ないだろう。彼女の魔法は間違いなく通常のものじゃないと明日香は確信した。

——あの虹色の魔力、私の知っている限りだと二つの可能性が考えられるけれど、形成した魔力剣の驚異的な切れ味を考えると・・・少し試してみようかな。

「ハッ！」

マリが使う魔法の正体を掴む為の策を頭の中で即興で構築した明日香はコンクリートを蹴ってハイウエイから飛び出し、付近にあるビル郡の側面を跳び回りながら三次元の立体機動でマリから距離を稼ごうとする。

「——って、どつからでも掛かって来いと言っておいて逃げるんかいっ!!クールで優等生っぽい顔してんのにふざけてんじゃないわよ、逃がすかあああああああああ あっ!!!」

明日香の行動を見て自分を馬鹿にしていると思ったマリは当然逃げる明日香を怒りの形相で追撃して来た。

「おらあああつ!!逃げんなああああ!!うらあああああつ!!」

ビル郡の間を縦横無尽に跳んで凄まじい速度で移動する明日香を狙ってマリは【極光の剣】を無茶苦茶に振り回し周囲の高層ビルを次々と真つ二つに切断していく。しかし怒り任せの単調な攻撃軌道では明日香を捉える事などできる訳がなく、七色の大剣の刃は無駄な物を斬るばかり・・・空を飛べるマリの方が有利な筈なのに、何故か明日香の方が戦いの主導権（イニシアチブ）を握っている様だった。

「剣の扱いがなっていないわね。それに貴方、少し沸点が低すぎるんじゃないかしら？カルシウムはちゃんと接種した方がいいと思うわ、神経の興奮を抑える効果があるらしいからね。とりあえず定期的に牛乳やヨーグルトなどの乳製品でも飲んでみたらどう？」

「大きなお世話よっ！牛乳なら毎朝飲んでいるからアンタに心配される筋合いは無いってーのっ!!」

「そう？それにしては小さいわね（身長が）・・・」

「小さっ（胸部が）!!?・・・ああああ、あたしのココロ、コンプレックスををつ!!」

これも策の内なのか明日香は極光の剣を空振りしまくるマリを煽りに煽って挑発し

ていたのだが、どうやらその中で彼女の禁忌に触れてしまったらしく、マリは指をワナワナと小刻みに振るわせながら明日香を指し、ガチガチに引き攣らせた表情が体内にある魔核からの強大な魔力の噴出と共に段々と般若のような憤怒の表情に変わってしまった。

「ゆ、許さない。自分は少し大きいからって……」

明日香が言った事を盛大に勘違いしたマリちゃんは、それはもう、御怒りだった……彼女の背後に雷が落ちたような錯覚を感じさせて、ブチギレたマリは先程出雲那の前にプルートと共に参上した時に空のグリードの大群を纏めて葬った広域殲滅魔法「極光流星群」を放つ前に展開したのと全く同じ巨大な魔法陣を展開する。明日香がどれだけ動き回ろうが広範囲を絨毯砲撃して逃がさない魂胆なのだろう。怒りの拳が振り上げられる。

「ブツ殺す！死ぬ、巨乳っ!!【極光流星群】!!」

不殺の魔導士とはいったい何だったのだろうか(汗)、マリはブッコロ宣言と共に眼前の魔法陣に振り上げた拳を怒りのままに殴り付け、爆砕すると共に百を超える七色の魔力砲弾が撃ち出された。

———な、なんて出鱈目なの!?射線と照準を固定する術式の構築を全て魔力に回して形成した巨大な魔力ダムを決壊させて弾け飛んだ大魔力を無差別多弾頭砲撃として撃

ち出すなんて!!

「くっ!!」

明日香は迫り来る無差別絨毯砲撃を前にしてビルの側面のガラス窓を蹴破り、内部に侵入して朱く染まったテナント内を全力で駆け抜ける。廊下への扉を蹴破り内部通路に出たところで魔力砲弾の嵐が殺到、容赦なくビルを撃ち抜きその内部諸共無数の巨大な孔だらけにしていく。

——この砲撃、物質を「消し飛ばしている」!?!? . . . やっぱり間違いないようね。

右も左も上も下も虹色の砲撃が蹂躪して破壊して行く光景を目の当たりにして明日香はマリの魔法の正体を完全に見破ったようだ。

多量の魔砲弾がビルを全体的に撃ち抜いた為とその質量の殆どが消失し形が保てなくなつたビルは無数の瓦礫となつて崩落して行くがそれでも休まず爆撃は続いており、明日香はその爆心地の間を落下する瓦礫を乗り継いで潜り抜けるといふなんとも無茶無謀な方法で砲弾の嵐をやり過ごして行く。直撃はもちろん一発でも掠ればアウトだ。

そんな決死な状況だというのにこの終明日香という伐刀者は常に冷静に飛来する砲弾と砲弾の間を潜つて回避し続けている、なんと屈強な精神力なのだろうか、彼女は最後の瓦礫を蹴つて大きく跳躍し、遂には無傷で爆撃範囲から飛び出したところだ。【極光流星群】の砲撃が止むのだった。

遠くの空で光と闇の閃光が休む間も無く幾度とぶつかり続ける中、明日香は朱い空を滑空して地上を見下ろす。そこには地上と呼べる物は無く煉獄の炎の海が広がっているだけだった……。

「とんでもない破壊力ね、あんなに広大な範囲で展開していたビル郡を今の魔法だけで跡形もなく消し飛ばしてしまふなんて……これがこの世の森羅万象全てを七色の光によって問答無用で消し去る古代魔法。希少なながらも複数の方法で習得できる滅竜魔法などとは違い第一次遭遇期の《原初の魔導士（エンシエント・ウィザード）》の血筋にしか継承される事のない《純血属性（ピュアブラッド）》、その中でも絶対的な破壊力を誇る《極光（きよっこう）魔法》……なるほど——」

明日香は空中で身を翻して身体を正常の体勢に持つて行つて「足下の空間を凍結させて」その上に立ち、何時の間にか数メートル前まで迫つて来ていたマリにその澄んだ碧眼を向けた。

「——貴方が終末の蛇の【極光の魔女】ね。上から聞いているわ、道理で貴方のような純粹な魔導士が対霊武装も無しに通常の魔法が通用しないグリード達が蔓延る異界探索に赴いて来ているのかと思つたけれど、魂すらも消し去る極光魔法の使い手なら此処に来たのも納得できるわ、グリードを倒せる魔導士なんだしね……それにしても貴方、なんでも【不殺の魔女】を自称しているそうね、それにしては今の魔法は完全に私を殺し

に来ていたと思うのだけど？」

「もちろん身体の一部（胸部）だけは殺すつもりでブチかましてやったわ。でも舐めないでよね、あたしは美少女天才魔導士マリさんよ？人間を消し飛ばさないように魔法の殺傷力を抑える事くらい造作もないってーの！」

「そう、制御はお手の物ってわけか・・・極光魔法なんて殺傷能力の高過ぎる魔法を制御できるなんて、「フレイザー先輩」の神掛かった魔力制御とどっちが上なのか興味があるわね」

「冗談、あの《必中の星（サジタリウス）》の変態制御能力に匹敵できる奴なんて終末の蛇（ウチ）でも使徒の《紅の幻魔》と《緋色の絶望》ぐらいなもんよ・・・あ！あと「マザー」も居るわね」

「結構いるじゃないの・・・迂闊な事を言うんじゃないよなかつたわ、あんな変態制御能力を持つ魔導士が敵に三人も居るだなんて・・・」

「てかそういうアンタも伐刀者ながら大概じゃない？その足場になっている氷、重力に引つ張られて落下しないのはアンタが空間に上手く固定しているからじゃないの？」

「いや、これは「空間」という概念そのものを凍結停止させている」から落下しないってだけなの。伐刀絶技として名付けるなら《ブルーウォーカー》ってところよ」

・・・どういふ空気なのか二人は空中で雑談をしまっている。意外にも人として

の相性は良いのだろうか、普通に雑談している分には雰囲気は悪くなさそうだ。

もし組織の立場が無かったなら二人は良き友になっていたかもしれないが、今は雑談を長々と続けている場合ではない事ぐらい二人は理解している。

「ふーん……ま、軽いおしゃべりはこれぐらいにして、時間が押しているし、戦闘を続けるわよ！」

「そうね、向こうで【冥界の焰】と戦っている武内君の事も心配だし、無駄な事を話している場合じゃなかったわ」

うっかりしていたと再び気を引き締める二人。明日香が靈力を滾らせて靈装を構え、マリが両拳を腰に引き締めて魔力を昂らせた。

「名乗らせてもらおうわ！結社【終末の蛇】、執行者No. XIX【極光の魔女】二階堂マリよ！よく覚えておきなさい、終焉の盾の【靈劍使い】、終明日香っ!!」

「ええ、憶えておくわ。覚悟しなさいマリ、私の氷は貴方の極光でもそう易々と消し飛ばせる程柔じやないわよ！」

「上等っ!!」

両者共に戦意は上々だ。明日香は靈力を放出して概念に干渉する冷気を全身に纏い前傾姿勢でエクセリオンⅡハーツの切っ先を極光の魔女に向け、マリは眼前に五重の魔法陣を展開して両手を組み靈劍使いを見据えている……あとは、激突するのみ！

「氷迅の剣——《アイシクル・ノヴァ》っ!!!」

「空ごとブツ飛ばす——《極光の爆砕（アウローラ・インパクト）》っ!!!」

明日香が氷礫を撒き散らしながら突進するとマリが五重の魔法陣に極限まで収束させた魔力を籠めた両手をハンマーのように叩き付けた瞬間、朱い空全体を虹色の爆炎が彩り、氷華の大輪が咲いたのだった……。

もう一人のクレア

出雲那が明日香と合流して「終末の蛇」の執行者「冥界の焰」プルート・A・イグナイトと「極光の魔女」二階堂マリを相手に激戦を繰り広げている頃、異界から救出した満身創痍のリディとエリカを現世に避難させたサクヤは無人の廃ビルの屋上で夜風に当たりながら携帯端末で誰かと通話をしていたのであった。

『いや、さすがサクヤサンっす！任務初日で「伊邪那岐の創り手」の人を見つけて協力のOKを頂き早くも任務を達成するとは、相変わらず仕事がハヤい！』

サクヤが耳に翳している携帯端末から発せられるのは胡散臭そうな男性の声だ。どうやらサクヤは気を失っているリディとエリカを異界化の発生地である東エリア中央区から安全圏まで遠ざけて避難させ近くの公園のベンチに彼女達を寝かせた後、再び中央区に戻って来て携帯端末で上司らしき人間に連絡して事のあらましを報告していたようだ。

「ふふ、まだ正式な協力体制を結んだわけではないのだけだね。でも彼はきつと私達に協力してくれる筈よ」

『協力してもらわぬと困るな。《天の岩戸（ネメシスホライゾン）》の扉を封印し、【例の

神話級」の出現を阻止する為には「創生の雷刀」のチカラが必要不可欠なのじゃからな』

サクヤがまだ任務を達成したわけではないと言った後に端末から発せられたのはジジ臭い喋り方をする凜々しい印象の女性の声だった。その声の主は先程の胡散臭そうな男性と違って真剣に事の内容を話している。なにやら彼等にとつて重大な内容のようだが……

「ええ、重々承知しています。世界の命運を変える為、必ず出雲那を私達の味方に引き入れてみせるわ」

『頼みましたつスよサクヤサン。アタシ等も準備が整い次第そちらに向かいますんで、それまでに彼や柊サンと一緒に異界化を収束させてください』

「了解しました……これより異界探索を再開、再び異界内に入り次第出雲那と合流して明日香を探し、協力して異界化の収束に当たります」

『うむ、まあおぬしなら問題なくやり遂げられるじやろ。では、また後程な』

一方、異界内のリトルガーデンでは——
「フフフ……追われるのは心地が良いですね。自分が女王（クイーン）である事を実感させてくれますもの」

闘技場（コロシウム）を飛び出し、船の上の街中を跳び回りながら二人のクレア・ハーヴェイは激しい追走戦を繰り広げていた。

「ふざけるのも大概になさい！リトルガーデンの女王クレア・ハーヴェイはこのわたくし一人、それは絶対無敵（パーフェクト）の名を失った今でも変わりありませんわ！」
「ならば示してご覧なさい！あなたが女王であるという証を、この戦いで!!」

偽クレアがすぐ後方から追って来るクレアに振り返って彼女に指をピシッ！とさしつっそう高圧的に言い放つと自身の六機の浮遊砲台【気高き姫君（アリステリオン）を推進装置（スラスタ）として使って宙に舞った。

「臨むところですよ．．．覚悟なさい、青竜学園風紀委員長【薔薇の女王（ローズクイーン）】クレア・ハーヴェイの名に懸けて、人の誇りを侮辱したあなたを絶対に許しませんわっ!!」

敵の挑発にクレアは右腕を水平に払って激昂を露わにする。何故敵が自分と瓜二つの姿をしていて尚且つ自分の百武装（ハンドレッド）である【気高き姫君】を武装しているのかは解らない、だが得体も知れない偽物如きが自分の名を語り、剩れ地に堕ちてしまった【絶対無敵の女王】の名を名乗ってクレア・ハーヴェイの誇りを汚したあの冒読者を絶対に許す訳にはいかない。

「あの者を墜としなさい、ペタルッ！」

今のクレアは【全身武装】を展開している為自らの周囲には六機の浮遊砲台の他に十二機の小型浮遊砲台が展開されている。先程まで敵によって破壊されていた半数の浮遊砲台は【破損に比例した一定量の気力を流し込む事によって修復する】事ができる百武装の機能が働いて既に修復済みなので戦闘パフォーマンスについては問題は無く、彼女は全身武装の背中にある小型の推進装置を吹かして空に飛び出すと同時に前方に見えるビルの上付近を飛ぶ偽クレアに向けて有らん限りの浮遊砲台を全て撃ち出す勢いで一斉に差し向けた。

——【気高き姫君】の事は所有者であるわたくしが一番よく知っています。あの者

は今【単純武装】しか展開していない、気高き姫君は今わたくしが展開している【全身武装】でなら背中にある推進装置で飛ぶ事ができますけれども【単純武装】だと攻撃武装である六機の浮遊砲台を推進装置にしなければ飛ぶ事はできないのです。故にあの者は今攻撃する為の武装を全て機動力に回しているが故に全身武装を展開しない限り空中では逃げ回る事しかできない筈・・・それならば全ての浮遊砲台を使って迅速に包囲し息も吐かせない怒濤の連続全方位射撃によつて攻め立てれば然程苦もなくあの者を無力化する事ができる筈——

「——温い」

——・・・えっ!?

クレアの気高き姫君が偽クレアをあつという間に包囲してそれ等が一斉に彼女に強烈な弾幕を浴びせようとしたその瞬間、なんと瞬きする一瞬の間に偽クレアが気高き姫君の包囲を抜けてクレアの眼前に一直線に迫り一発の拳をクレアの鳩尾に叩き込んでいたのだった。

「——がはあっ!!!」

驚愕の表情を露わにしているクレアの表情は一瞬にして苦痛の表情に変わり、口の中から唾液が吐き出されると同時に彼女の身体は【く】の字に曲がつて弾丸のように吹っ飛び、ビルを二・三個突き破つてから市街地の道路に叩き付けられた。

「げほっ！げほっ！．．．《加速（アクセラレート）》．．．くっ！迂闊でしたわ、まさか空中射撃戦と見せかけた一撃離脱（ヒット&アウェイ）を仕掛けて来るなんて．．．」
 衝撃で蜘蛛の巣状の亀裂が入ったコンクリートの中心に片膝を着いて咳き込みながらクレアは即座に起き上がる。しかし受けたダメージは大きく、片膝を着いたまま立ち上がる事が困難のようだ。彼女は戦術と判断を見誤った失態を嘆きながら朱い空から蔑むような眼で自分を見下ろして来ている敵を睨みつけて忌々しそうに唇を噛み締めた。

「温い．．．」

偽クレアは先程から失望を禁じ得ないように同じ言葉を呟いている、まるでゴミを見るような冷たい目だ。一体奴はクレアの何が気に喰わないのか。

——全身武装も展開しないで見下してくれませうね。いい気になるのも今の内ですわ！

大きな痛手を負ってはしまったが、クレアは既に次の一手を動かしていた。敵の後方に位置取っている状態の小型浮遊砲台（ペタル）十二機が反転して一斉にレーザー光線を撃ち放ち、偽クレアの背中に無数の光条が殺到する。

「．．．．．」

だというのに偽クレアはそれを歯牙に掛けず、振り返る事もなくただ近場のビルに逸

ただだけで余裕で全てのレーザー光線を避けたのだった……だがこれでいい。それこそ薔薇の女王の目論見通りなのだから。

「貰いましたわっ!」

不意打ちの仕返しのもりか、今度はクレアが【加速】を使用して偽クレアが寄ったビルの屋上に瞬時に回り込む。その手には赤い薔薇のように真つ赤な長身の砲銃——
——《バスターキャノン》が握られていた。

——あの者に殴り飛ばされてビルを突き抜けた際、落下して行く硝子片と舞い上がる煙に紛れさせて浮遊砲台を六機共戻しておいたのですわ!あの者が小型浮遊砲台に気を取られてくれたおかげで容易にこのバスターキャノンを出す事ができましたの!!

【気高き姫君】は六機の浮遊砲台を変貌させる事によつて高火力殲滅が可能なバスターキャノンを作り出す事ができる。クレアの狙いは十二機の小型浮遊砲台を囿にして敵の注意を引きつけ、その隙を突いてこのバスターキャノンを形成し高火力の一撃をもって敵を撃墜する事だったのだ。

「これで終わりですわ!わたくしの前で女王を名乗り、その名を汚した事を後悔し懺悔なさいっ!!」

バスターキャノンの砲口に光が集まる、全身の気力をそこに収束しているのだ。

「ハアアアアアアアッ!!」

集まった光が極限まで輝きを放つと主の咆哮と共に極太のビーム光線が撃ち放たれた。

「……………」

朱い空を穿ち、異界の瘴気を吹き飛ばす巨大な光の束が女王の名を汚す愚か者を容赦なく飲み込んで行く。そこに許しは無い、まるでクレア・ハーヴェイという女王の怒りをそのまま体現したかのような圧倒的な一撃であった。

……やがて光の柱は収束し、朱が再び空を支配した……。その時、クレアの眼に映ったのは——

「嘘、でしよう……!?!」

バスターキャノンの一撃を受けても尚朱い煉獄の空に無傷で健在する陰の女王（クイーン）が氷のように冷たい眼をこちらに向けている姿であった……。全力で放った必殺の一撃が全く通用しなかったその無情なる結果がクレアの顔を絶望の色に染める。

何故偽クレアはバスターキャノンの大火力砲撃を受けたのに無傷だったのか？それは彼女が今無言で自身の正面より解除した黄色い気力障壁——《N（ニュートラル）バリア》にある。

武芸者が百武装を用いて使用する防壁障壁は大きく分けて二種類。一つは百武装を通して気力を放出し展開する相手の攻撃を受け止めて弾く性質の障壁（バリア）——

《E（エナジー）バリア》、対してバスターキャノンの砲撃を無力化した【Nバリア】は攻撃を中和して掻き消す特性がある。

バスターキャノンさえも通用しないなんてと言わんが如くクレアは最早万策尽きたと手に持つ赤い砲銃を床にガタンと落としてしまう・・・それを見た偽クレアの顔には徐々に地の底から煮え滾るような苛立ちが浮かび上がってきた。

「温い、温い、温すぎますわ！——

——貴様アアアアアアアアアアアツ!!女王を舐めていますのっ!!!」

「っ!？」

突如として天に轟く激昂がリトルガーデン中に鳴り響いた。偽クレアの突然の変貌にクレアは戸惑いを隠せず眼を見開いている。一体何がどういう事なのか意味不明だ、だがその理由は次に偽クレアがクレアに向けて突き付ける言葉によつて明かされた。

「華麗且つ圧倒的なチカラで刃向かう者を圧倒し、戦場に君臨する——覇者の威光をもつて制する戦いこそ、女王の真髄!それを微塵も体現する事ができない貴女など、もはや女王(クイーン)ではございませんわ!!否、クレア・ハーヴェイですら有りはしないっ!!!」

「なっ!!!……あなた……」

非情なる罵言が天壤より地に堕ちた女王を打ちのめす、それこそが真実だと幻視してしまう程の威厳が堕ちた女王を指さすあの陰の女王には有った。

——手が……震えている……恐れているというのですの?このわたくしが!己の存在すらも否定されたクレアの足は硬直し手の震えも止まらない。

——あの者の言っている事は詭弁ですわ!惑わされる事などありません!!

それでも奴の言葉を認める訳にはいかない、【絶対無敵】の称号も護るべき場所(リトルガーデン)も愛する妹さえも失ったクレアにはもう女王であり続ける事のみが己の存

在価値なのだから、それを失ってしまえばもう、彼女には何も残らない・・・。

「ここに宣言しますわ！このわたくしこそが、真の『絶対無敵の女王（パーフェクトクイーン）』であるという事をつ!!」

この朱い空を統べる偽クレア・・・否、この世界の絶対女王が高らかにそう言い放ち、絶対女王の身体を王者の威光たる朱い輝きが包み込む！

光が弾け、姿を現したのは赤い装甲を全身に纏った絶対女王——
「瞠目なさい、真の絶対無敵の女王のチカラを！」

全身武装を展開したこの世界の女王が、ここに降臨したのだった。

「女王（クイーン）はただ一人、このわたくしですわつ!!!」

伊邪那岐の創り手と伊邪那美の使徒による超高速戦はより激しさが増していた。

「地を這いずれ雑魚があああああつ!!」

「うがががががが!!」

出雲那の顔面がコンクリート上に押し付けられ猛烈な摩擦によつて火花を撒き散らしながらハイウェイを痛々しく滑走する。プルートが出雲那の後頭部を得物を持たない左手で掴み、気力強化を施した物凄い腕力で彼の頭を顔面からハイウェイ上に押し込みそのまま高速低空飛行をしているからだ。

「ハハハハッ!このままその汚らしい面を剥がしてくれるわ!」

「ぐぞつ、でめ”え”え”え”え”っ!!」

あまりに強いチカラで押し付けている為に通過した道に亀裂が生じている、漆黒の翼を背中に生やした悪魔が一人の少年の頭をコンクリート上に押し擦り付けて甚振るというあまりにも残虐で惨たらしい光景は一般人が見たら顔面蒼白ものだろう、幾ら星脈世代とはいえこのままやられ続けたら出雲那の顔面がスプラッタなものになつてしまふだろう……だが、このままやられる彼ではない。

「誰が汚ら〴〵 じい〴〵 面だあつ!? 舐め〴〵 ん〴〵 じゃね〴〵 え〴〵 え〴〵 え〴〵 え〴〵 え〴〵
— つ!!」

「つ!? なにつ!」

「葵柳流帯刀術【櫟風車】 ああああああつ!!」

「チイツ!」

ここで出雲那は起死回生の剣技を繰り出した。鞘に刀身を収めた黄旋丸を地に叩き付け、身体を無理矢理捻って超高速回転し、その遠心力をもって自分の後頭部を鷲掴みしているプルートの手を弾き飛ばしたのだ。

「クツソー! スペアのゴーグルもブツ壊れたじゃねえかよ、ふざけんなつ! やられた分を十倍にして返してやらあつ!!」

身体の自由を取り戻した出雲那は上空に逃れて距離を取ろうとするプルートを雷鳥の翼を羽ばたかせて追撃する、額から流れ出る血を止血したいところだが戦闘中にそのような暇は無く反撃の隙を逃す訳にもいかない。黄旋丸の柄を掴み、雷速移動スキルの【雷光石火】を行使して朱い煉獄の空を引き裂く閃光となつて漆黒の少年剣士に向かつて一直線だ。

「雑魚が凶に乗るなつ! 【黒キ鳳凰ノ爆進】!!」

対するプルートも超高速飛翔スキルを使用して黒い鳳凰となり、両者は再び音速を超

えた空中超ハイスピードバトルを展開。

「うおおおおおおおおおっ!!!」

「はあああああああああああっ!!!」

光と闇の軌跡が幾重にも交錯してぶつかり合い、その度に剣と剣を交える鈍い鉄の音が空に響き凄まじい衝撃波が大気を吹き飛ばして地上の建築物の窓ガラスを次々と崩落させていく。

やがて光と闇の軌跡は錐揉み状に上昇しながらの撃ち合い合戦に発展。プルートが【拡散スル飛炎】を放って黒炎弾の弾幕を張ると出雲那が黄旋丸を抜刀して【星墜とし】を放ち、飛ぶ斬撃が一発の炎弾を撃ち落とすと無数の光刃となって拡散し周囲の炎弾をも纏めて撃墜して行く。

このサイクルが数秒に渡り繰り返されると出雲那はプルートが放って来る弾幕の僅かな隙を突いて突攻を仕掛けたのだった。

—— もらったぜっ！

【雷光石火】で雷速反転し弧を描いて正面から来るプルートに【雷切】で不意打ちを仕掛けてケリを着ける、それが出雲那が咄嗟に考え付いた必勝プラン・・・だったのだが――

「貴様の脆い策など読んでいるぞ！ 阻め、《断絶スル黒焰ノ防壁（ブラック・オレイカル

コス》っ!!」

「な、何いつ!?——がああああっ!!」

出雲那が近接範囲（クロスレンジ）に入る直前でプルートの正面に黒焔の壁を出現させた事によって出雲那は黒焔の壁に正面衝突。

「あゝあゝあゝあゝあゝっ!!円旋陣————っ!!」

黒焔の壁に阻まれて身体に黒焔が燃え移り、焼かれて数秒間猛烈な熱量に耐え切れずにのたうち回ると直ぐさま先程黒焔に焼かれた時と同じように身体を高速回転させて旋風を起こし、黒焔を吹き飛ばす……そしてその勢いのまま目の前の漆黒の少年剣士に一撃を加えようとするが、プルートは既に遥か後方に退避していたのだった。

「ぜえっ!ぜえっ!……はあ、はあ……クソッ!」

額の流血は止まったが今度は身体中を大火傷……肩で息をする出雲那はもう満身創痍である、ギリツと齒を軋らせて前方数十メートル上の空から余裕綽々な表情で涼し気に自分を見下ろしているプルートを忌々しそうに睨みつけて悪態を吐く。

——畜生なんてヤローだ、こっちはもうボロボロだつてえのに奴は余裕でピンピンしてやがるしよ。チツ! 執行者や使徒等「終末の蛇」の幹部クラスはどいつもこいつも小国ならたった一人で滅ぼせるレベルの規格外揃いつて話を聞いた事があつたけど、これはガチだぜマジで。

出雲那はプルートの——終末の蛇の執行者の圧倒的戦闘力を直接体感し自分との途方もない実力差を実感して内心で僅かな焦りが生まれていた。

——柊の奴はどうやらもう一人いた執行者と互角に戦り合っているみてえだ。だとすると柊と今戦っている執行者もこのプルートって野郎と同格だとしたら、オレは柊に劣ってるって事になるな・・・ハハッ、マジかよ・・・。

プルートが滞空する位置よりずっと奥を見てみれば遙か先の空で氷の華が乱れ咲き、虹色の閃光が朱を蹂躪しているのが見える。あの空で「終焉の盾」のエージェントである明日香ともう一人の「終末の蛇」の執行者のマリが激戦を繰り広げているのだ。それを目の当たりにして出雲那は自分のチカラの無さを思い知って内心で嘲笑した、未熟者のくせにあの少女を助けるつもりでいたという自身の思い上がりに対して・・・。

これこそが裏の世界・・・「プロの戦い」だ。

プロの戦いは決闘（デュエル）のようなルールやソーサラーフィールドによる非殺傷ダメージなど存在しない生死を賭けた戦い、故に敵は体勢を立て直す時間も作戦を練る時間も待つてはくれないし容赦もしてくれない。

「余所見をするとは見た目に反して随分と余裕のようだな？その余裕、直ぐに崩してくれる！」【拡散スル飛炎】!!

「全っ然余裕じゃねえよっ！クソツタレエエッ!!」

火ノ加具土を振るい無数の炎弾を容赦なく放つて来るプルートにそう吐き捨てて【雷光石火】で弾幕の中を掻い潜つて行く出雲那——

「ぐっ!?!」

しかしこの戦鬪で受けたダメージは大きく身体はもう満身創痍、よつて動きのキレが落ちてしまうのは自然の理であり、先程のように全ての炎弾を確実に躲す事ができなくなつてきている為何発かが頬や脚を掠り、徐々にダメージが蓄積していつてしまうのは当然であつた。

——くっ!もう少し・・・後5mで——

【断絶スル黒焰ノ防壁】

「ちよっ!?!テメe「おまけだ、《瞬ク間ノ座標爆破（ラピット・フォトンブラスト）》」ぐはああっ!!」

根性で接近しても黒焰の壁に道を阻まれ、その上発動すれば瞬時に座標指定した空間が爆発する伐刀絶技をモロにくらわされるといふ豪華特典付きだ。

「ふっ、無様な姿だ。貴様のような雑魚は羽虫の様に逃げ惑うのがお似合いだな」

黒い煙を上げて落下して行く出雲那にプルートは黒炎の弾幕を放つて容赦なく追い打ちをかけてくる。出雲那は瞬時に翻して朱い空の中弾幕から逃げ回るしかなく、もう戦いと言えるものではない程一方的な展開となつたのだつた。

——畜生、全快ならこんな弾幕楽勝なのにダメージがデカすぎて身体がいう事を聞かねえから奴に近づけねえ……いや、近づけたところでさっきの黒い炎の壁を出されて返り討ちに遭うだけか……。

「仕方ねえ……これマジ苦手なんだが……——」

しばらく逃げ回った後、プルートから距離を取って黒炎弾の嵐の中から逃れた出雲那は溜息を吐くみたいにそう呟いて右腕を前に伸ばし——人差し指の先をプルートに向けて詠唱を唱え出した。

「——【猛き雷帝よ・極光の閃槍以て——」

——・刺し穿て!!」

そして詠唱を言い終えると出雲那の指先から一条の雷光が迸り、漆黒の焰を刀身に纏う霊装を今まさに振り下ろさんとするプルート目掛けて真っ直ぐ一直線に突き進む。

「何っ!?!」

予想外の不意打ちに流石のプルートも驚きを隠せない。向かって来た雷閃は自分の身体を中心より若干左上にズレた位置に飛んで来たので身体を右側に傾ける事で難なく躲す事ができたのだが、攻撃の手は止めざるを得なかったようだ。

「チッ! やっぱ当たらねえか・・・」

「黒魔《ライトニング・ピアス》か：：フツ、まさか貴様のような頭の悪そうな輩が《詠唱術式》を使用するなど思いも由らなかつたぞ」

「うるせーっ! バカで悪かつたなチキショー!!」

学園のペーパーテストで毎回赤点ギリギリの点数で凌いでいる出雲那はプルートの皮肉に対してヤケクソに開き直り癩癩を起こしていた、人間凶星を突かれるとどんな形であれ冷静ではいられないものなのだ。

【魔導士(ウィザード)】などの魔核を体内に持つて世に生まれ魔力を使う事のできる者が行使する【魔法】には大きく分けて三種類の発動術式がある。心に思い浮かべたいメージで現実に影響を与える《心象術式》、魔装錬金武装や魔道具に彫られたルーン文字

で魔力に意味を与える《刻印術式》、そして言葉に発して唱える詠唱で己のイメージを現実に介入させる——一般的に《魔術(まじゆつ)》と呼ばれる「詠唱術式」の三種類だ。【詠唱術式】は詠唱という形式上術の発動までのインターバルが長い故に他の二つの術式より隙はデカイが詠唱する言葉の有り方によつて細かく術式を改変できるので汎用性に限つては魔法術式系統随一を誇っている。

——奴の攻撃は一旦止めさせる事ができたが……少しくらい過ぎたぜ。クソツ、もう体力がやべえ……。

「ハア、ハア……ゼエ、ゼエ……」

「……長く遊びすぎた、そろそろ終わりにするぞ。貴様のような雑魚には過ぎた一撃だが、【冥界の死刀】を抜いていない状態の俺が使える最強の伐刀絶技で灰にしてやろう！」

あまり時間を掛けている暇がない割には時間を掛け過ぎてしまった。激しく肩で息を吐く出雲那に向けてプルートの決着を着けると宣言をする。

「冥界の底より出ずる死の黒焔よ、現世の光に陰を墮とす暗黒の陽と成りて、生きとし生ける全てを灰燼に帰せ——」

朱き天に掲げた刃の切っ先に今居る異界中から集まるように万応素(マナ)が集束され、黒い太陽が形成されていく、その規模は出雲那の眼に映せる範囲の地上に丸ごと影

が覆い尽くす程巨大だ。

——なっ?! マジかよ、魔導星防軍のエース・オブ・エースが集束魔法をブツ放す時に作る魔力球体より二十倍はデケエ上に万応素の濃度も尋常じゃねえ! あんなのくらったら一卷の終わりだぜ!!

その規模の大きさと尋常ならざる威圧感に出雲那は恐れ慄いてしまっている。それはそうだ、これ程の超大規模を誇る攻撃スキルなど彼は今までに生きて来て初めて目にしたのだから。

……だが、畏れの中で出雲那にはほんの少しの余裕も存在していた。

「へっ、でもこの距離なら問題ねえよ! 体力はやべえけどあんなだけ大掛かりなスキルなら速射性に劣る筈だ! ここは根性見せて〔雷光石火〕で避けt——」

しかし現実とは非情なものだ。出雲那がプルートの必殺技に対してどう対処するのかを決めて行動に移そうとしたその時、突如彼の後方約200m先——異界化が再現したリトルガーデンから耳を劈く程の大爆発音が聴こえて来た。

「キヤアアアアー——!!!」

咄嗟に振り向いてみると出雲那から見て手前側——リトルガーデンの船尾付近の左舷の甲板が爆炎に覆われており、その場所から爆風に吹き飛ばされて悲鳴を上げながら煉獄の炎海へと転落して行く一人女性の姿が見えたのだった。

「——なっ?!?アレはまさか……クレア先輩!!!」

特徴的な金髪ドリルツインテールに豊満なボディラインをクツキリと浮き出す派手な真紅のヴァリアブルスーツ……あんな超個性的な風貌を見間違える筈がない、あの女性はどこからどう見ても青学の風紀委員長クレア・ハーヴェイその人であった。

——わたくし以上に、これ程までに「気高き姫君」を使い熟すなんて……あの者は、一体？

何故クレアが爆風に吹き飛ばされているのか?……それは甲板から彼女を哀れな目で見下ろす陰の女王の仕業だ。

「地に堕ち、誇りを失った愚鈍なる家畜よ。その偽りの眼に確と焼き付けるがいいですわ——」【絶対無敵の女王】クレア・ハーヴェイの真の姿をつ!!」

その陰の女王、王者の色たる赤の装甲を身に纏い、二十にも及ぶ浮遊砲台を女王を守護する騎士のように付き従える貫禄は、まさに「絶対無敵の女王」クレア・ハーヴェイそのものであった。

——おいおいおいつ?!?一体どうなったんだ!!クレア先輩が二人?訳わかんねえ……けどたぶん転落している方が本物だな、そこはかとなくポンコツ臭がするし。

「このままじゃクレア先輩がやべえ!急いで【雷光石火】で——」

「——墜ちるがいい、闇の太陽よ!《天カラ舞イ降りシ滅ビノ黒陽(デスヘリオス・カ

タストロフィー》——ッ!!!」

炎の海へと転落して行くクレアを救わんべく出雲那が雷速で向かおうとするが、最悪な事にそこへプルートが「天カラ舞イ降りシ滅ビノ黒陽」の形成を終えて天に切つ先を掲げる火ノ加具土を勢いよく振り下ろし超極大の黒い太陽を放つて来たのであった。

「——つてヤベツ、野郎撃つて来やがった!こんな時に……つてこの弾道(コース)最悪じゃねえかつ!!」

黒い太陽は斜め四十五度の角度で落ちるように向かつて来ており、出雲那が回避した場合それはリトルガーデンへの直撃コースであった。

——どうする?今すぐクレア先輩を助けに行かねえと先輩が炎の海にワンチャンダイブしちまうし、かと言ってコイツ(黒陽)をシカトしたら結局先輩はコイツに巻き添えをくらつて灰になつちまう……それどころかコイツの被爆規模によつてはオレと稀も無事じゃすまねえかもな……クソッ!

迫り来るプルート・A・イグナイト必殺の「天カラ舞イ降りシ滅ビノ黒陽」!煉獄の炎海へと転落して行く絶体絶命のクレア!さあ、どうする出雲那?何を選択しても絶望的なこの状況、果たして切り抜けられるのか!!

墮ちた女王の闇

・ ・ ・ 朱き煉獄の世界の絶対女王の前に成す術もなく敗れ、獄炎の海へと投げ出された元リトルガーデンの絶対無敵の女王——クレア・ハーヴェイの意識は今、蒼穹の空の下潮風が肌を撫でる大海原を行く航空母艦の上にあった。

『ここは・ ・ ・ リトルガーデンの船首・ ・ ・ ですよ・ ・ ・ ？』

眼前に広がるオーシャンブルーとスカイブルーのコントラストを見てクレアは呆然と立ち往生してしまっている。

『何がどうなっていますの？ わたくしは確かにあのわたくしの偽物が撃ち放つて来た一斉射撃を受けてしまって・ ・ ・ それで——』

爆風に吹き飛ばされて船から落ちてしまった筈だ・ ・ ・ 記憶が確かならばその後の彼女の運命は異界の奈落に広がる煉獄の炎海の中に落ち、その身を灼熱地獄によって・ ・ ・ ・ ・ その筈なのに彼女は今何故カリトルガーデンの船首付近の甲板の上に立っていて、目の前には煉獄の炎海ではなくどこまでも広がる大海原と水平線と雲一つ浮かんでいない蒼穹の青空が景色を青一色に彩っている・ ・ ・ この海域は——

『温暖気候で生物が住みやすい穏やかな海流・ ・ ・ まさか此処は——』 《リベリア海》・ ・ ・

ですの？』

武闘王国ダイランディアの最南西部にある港湾都市《ブルーヴェイル》、その行政区画の一角にクレアの実家が経営している民間軍事会社ワルスラーンの本社が存在している。

二年前の夏、【万応素枯渴事件】が起きる約一ヶ月前にワルスラーン社が開発した対サページ用の武装兵器【百武装（ハンドレッド）】を武装して戦う戦士【武芸者（スレイヤー）】を育成する《小さな箱庭（リトルガーデン）プロジェクト》が始まった事でブルーヴェイルの港から約五百人の武芸者候補生とその他スタッフを乗船させたリトルガーデンが母なる海へと旅立った。

クレアが唾然と呟いた【リベリア海】とはブルーヴェイルの港から出て真っ直ぐ約300km海路を進んだところにある海域であり、彼女の悪夢の始まりの場所でもある因縁深い海であった……。

『っ!?!』

突然大きな岩山に衝突したかのような衝撃が船を揺らす。その直後に悲鳴のような警報音（アラート）が鳴り響き、船の至る所に設置されている拡声器から緊急放送が流れた。

『緊急事態発生！緊急事態発生！船底に大型魔獣が取り付きました！各職員、中等部以

下の武芸科生、その他学科生は避難誘導の指示に従ってミリタリー区画のシエルターに避難。高等部の武芸科生は選抜隊（セレクションズ）各員の指揮の下、各自対処に当たってください!!』

不器用でクソ真面目っぽい感じの女性の声が拡声器を通してリトルガーデン全体に行き渡り、慌ただしい複数の騒ぎ声が船内から聴こえて来る。動揺でてんやわんやする者、恐怖のあまり逃げ出す者、冷静に行動を始める者と様々いるが、緊急放送を聞いたリトルガーデンの乗組員達が総動員で動き出したのだ、事態を打開する為に。

『今の放送は・・・エリカですの!?!』

緊急放送の声はエリカのものだと瞬時に把握したクレアはこの状況に既知感（デジャヴ）を感じ、息を呑んで眼前に見える海の底を眺めた。

——リベリア海を航海中にリトルガーデンが何かにぶつかり、エリカが船底に大型魔獣が取り付いたと緊急放送を流したこの状況・・・忘れもしませんわ、この状況は二年前の——

『——多脚生物系大型魔獣・・・クラークンの襲撃——キャアアッ!!』

クレアが感じた既知感は現実となつて顕れた。眺めていた水面を突き破つて天を突く異形に彼女は一瞬悲鳴を上げて尻餅を着いてしまう。それは仕方のない事だ、何せ目の前には無数の吸盤が付いた大木の如く太くうねうねした軟体生物の脚が天に向かっ

て聳え立っているのだから。

『間違いありませんわ：これは二年前の小さな箱庭プロジェクト始動初日、魔獣クラークンの襲撃に遭ってしまった時の出来事ですの』

船を包囲するように次々と水面を突き破って現れる巨大な軟体生物の脚——遊撃士協会が危険度A級に認定している大型魔獣「クラークン」の脚を見回して彼女は確信した。何故だかは不明だがどうやら今彼女の目の前で起きている事象はクラークンの襲撃でリトルガーデンが撃沈してしまった二年前の悪夢を再現しているようであった。

クレアが顔を青ざめさせていると眼前に聳え立っているクラークンの脚の鋭利な先端がリトルガーデンの甲板に向き、水中の魚を狙う銛が射出されるかのように勢いよく伸びて来る。

——つ!?しまった!!

『キヤアアアアア——』

そして運が無い事にクレアはその着弾地点に居た。回避は間に合わず己の迂闊さに苦虫を噛み潰して死を覚悟した彼女は悲鳴と共に顔を伏せたのだが——

『——アアアアアア……え?』

クレアは思わず間抜けそうな声を出して呆けてしまう。襲い掛かって来たクラークンの脚は何故か彼女の身体を透過してその後方にある砲台を刺し穿って行ってしまっ

たからだ。

『どういう事……ですの？今、確かにわたくしの身体を魔獣の脚が貫いた筈ですのに……』
艦内が無数の異形に蹂躪されて耳を塞ぎなくなるような破砕音が周囲に鳴り響く中でクレアはクラーケンの脚が透過して行つた腹部を摩つて困惑していた。

これは一体どういう事なのか？身体を質量が透過するというこの状況……もしや自分は今霊体になってしまつているという事なのだろうか……そんな事を考えていると無数のクラーケンの脚に蹂躪されて火災が起きている艦内から武芸科の生徒と思わしき数名が飛び出て来て各所のクラーケンの脚に向かつて突撃して行くのを確認する。

武芸科の生徒達は全員当然百武装を展開しており、その中心に居るのは——
「目標補足、各自展開なさい！艦が沈められてしまう前に魔獣を叩きますわよ!!」

——っ!?!……生徒達を指揮するあの者はもしかして、過去のわたくし……?

じゃあやはり今見ている事象はあの悪夢の日の出来事……クレアは此処に来る前偽物の自分に無様に負け、灼熱の炎海に落ちて焼け死んでしまったと言ふのだろうか？……だとしたら此処は彼女にとって地獄に他ならないであろう。

「漆黒の天槍（ミドガルドシユランゲ）っ!うおおおおおとおお!!」

「もう一息で全て駆逐できますクレア様！一斉射撃で一気に終わらせてしまいましょ!!」

「もちろんですわ！近接戦要員は後方に下がらなさい！！ロングシューター型の者はわた
くs——」

フアランクス型のリディを起点にシュヴァリエ型等近接戦闘員が艦の周囲の水面から出る各所のクラーケンの脚を叩いて数を減らして行き、後は根本を一斉射撃で殲滅して船底に取り付いている魔獣本体を表に引きずり出して決着を着けるだけだと判断し、過去のクレアが武芸科の生徒達に指示を出そうとするが、その声はバキイイ！という骨が砕けるような鈍い音と共に途切れてしまう・・・突如として第二陣が出るかのように海の水面を突き破って一直線に伸びて来たクラーケンの脚が過去のクレアの身体を突き刺し、彼女が後方に位置する建物の壁面に縫い付けられてしまったからだ。

「——ガハアツ?!」

「ク、クレア様——————ツ!!」

腹に大孔を空けられた過去のクレアが口から血反吐を吐き、それを見て過去のリディとエリカが悲痛の叫びをあげる。戦勝ムードだった武芸科の生徒達は突然の出来事を目の当たりにして愕然と困惑するばかりであった。

『そう、あの時艦の船底に取り付いた敵は一体ではございませんでしたわ・・・敵の数を誤認していたわたくしは一瞬女王にあるまじき油断をしてしまい、その隙を突かれて重傷を負って死にかけてしまったのです・・・』

その光はこの場では場違いな程幼く、クレアと同じ金色の輝きを放つ長髪を揺らして、星空のように青い瞳の奥には大きな意志を宿している。そう、彼女こそが——
『リザ・ハーヴェイ』、生まれながらにして最大気力保有量SSランクオーバーの天才星脈世代』

「クレア！大丈夫、今、傷を癒すわ!!」

リザはグツタリと仰向けに床に倒れる過去のクレアの許に寄り、その小さい手に膨大な気力を集中してクレアの腹部に空けられた孔に翳す。三大源力の中でも気力は身体能力を強化するのに向いている、故に人間の細胞を活性化させて怪我の治癒能力を高める事も可能なのだ。

「クレア様っ!!」

「ご無事でしょうか!?良かった・・・」

リザの治癒術が過去のクレアの負傷を治し、過去のクレアが体力の低下のあまり壁に背中を預けて座り込んだところで敵の妨害を切り抜けて来た過去のリディとエリカが合流する。その時リトルガーデンの船首側と船尾側のそれぞれの海面からクラークンの本体が浮上し姿を現すのだった。

「・・・リディ、エリカ。クレアを——わたしのお姉さまをお願い」

弱りきった過去のクレアを過去のリディとエリカに預けて船首側に現れた巨大イカ

の魔獣を見据えるリザ・・・彼女は駆逐するべき敵に向かってゆっくりと歩き出し、全身全霊を振り絞るような強大な気力を解放して大気を激震させた。まるで消えゆく前に激しく燃え盛る炎のように・・・。

『まるで何かを覚悟するかのように命を削る程の膨大な気力を身体から放出させて敵に向かって行くリザ・・・この時にわたくしは切れかけの意識の中でとても嫌な予感を感じたのを今でも鮮明に覚えていますわ』

「リザ・・・あなた・・・何・・・を・・・」

「心配は要らないわクレア。大丈夫、大好きなお姉さまとわたし達の大切な居場所（リトルガーデン）はわたしが絶対に護ってみせるから・・・だから安心して。あなたが目を覚ます頃には全部終わっているわ」

「リ・・・ザ・・・」

『こうして、わたくしの意識は命を懸けて敵へと向かつて行く妹を見送りながら闇へと堕ちてしまいましたの・・・その後リザの言った通り、わたくしが目を覚ました時には全てが終わっていましたわ——わたくしにとつての最悪の結末で』

この瞬間、独白を続けるクレアが見ている光景がまるでDVDの映像を早送り再生するかのように切り替えられ行く・・・停止すると彼女が居たのは床も壁も天井も真っ白な密室であり、部屋の中央に設置されているカプセル型の寝台の中には眼を閉ざして

身体の活動を停止してしまつた一人の小さい少女が眠っている……。

「リザーリザツ!!……どうして……どうしてこんな……事に……」

過去のクレアは……最も愛する妹が眠るカプセルに覆い被さつて泣いていた。今の彼女に女王の威厳など何所にも無く、ただの一人の姉として妹が犠牲になつた事を悲しんでいるのだつた。

『結果的にリザは二体のクラーケンを倒し、皆を救つたのですわ。ですがクラーケンはA級の手配魔獣……戦闘のスペシャリストである遊撃士ですら苦戦を強いられる程の強力な魔獣を単独で二体も相手にするのは幾ら生まれながらの天才であるリザでも……』

部屋の傍らに立つて過去の自分が悲しみに暮れる姿を胸が引き裂かれる思いで眺めていたクレアは非常に辛そうに語つていた言葉を詰まらせ、目の前の過去から目を逸らして黙り込んでしまう……。

それは無理もない事だろう。今彼女が見ている事象はリザが二体のクラーケンを撃退した一週間後——死闘によつて身体を損傷し植物状態となつてしまつたりザをワルスラーン本社の地下研究室の冷凍保存カプセルに収容した日のものなのだから……。

『……何故リザが犠牲にならなければいけなかつたの? わたくしが弱い所為なの? ……なら、わたくしはこれから先、誰にも負けてはならないと——【絶対無敵の女王】で

あり続けなければならぬと心に誓いましたの』

そしてまた彼女が眼に映す風景が早送り再生されて行く……。

『その後【小さな箱庭プロジェクト】は凍結され、魔獣の襲撃で大破してしまったりトルガーデンも廃艦となってしまい。ワルスラーン社の社長であるお兄様が小さな箱庭プロジェクトで行う筈だった百武装の最終調整を【戦島都市スクエア】にテスターを派遣して行う事を決定しましたの……そしてわたくしはそのテスターの一人としてリディとエリカと共にスクエアの学園に編入する事になった……』

風景が停止すると今度は青竜学園内にある教室内であつた。過去のクレアが青学の制服である紺色のセーラー服を身に着けて教壇に立ち、毅然とした態度で丁寧に自己紹介をおこなっている。

それを教室内の奥側中央に立つて正面から眺めるクレアは感慨深く感じながら語り続ける。

『お兄様は四大学園の名門校【ナイツニクス学園】へ行く事を進めてきましたが、あの兄の言いなりになるのが嫌でわたくしは自分の意志で【青竜学園】に行く事を決めましたの。わたくしはこの学園でのし上がり、勝利を重ねて季節毎に行われる四武祭も全て制し、スクエアの頂点に立つてみせると心に誓いました。全ては愛する妹が再び目を覚ました時、【これからはわたくしがあなたを護る】と堂々と約束できる姉である為に……』

その筈でした——』

「クレア・ハーヴェイさん、初めまして。私は一年A組のクラス委員長、東堂刀華といいます。クラスを代表して、これから学園生活を共にするクラスの仲間として、貴方を歓迎します！」

自己紹介を終えた過去のクレアの前に出て彼女にこれからよろしくと握手を求めて来たのは柔和そうな雰囲気で眼鏡をした栗毛の女子生徒——当時青学の高等部一年であった過去の東堂刀華であった。

「え．．．ええ、これからよろしくお願いいたしますわ」

「ふふ、よろしく！何か解らない事が有ったら遠慮せずに聞いてくださいね。この都市は生活のルールが特殊なので色々と苦労するかもしれませんが、クレアさんが慣れるまで私達がしっかりとサポートするので安心してください」

「ありがとう、感謝しますわ」

手を取って握手を交わす二人。歓迎の拍手が鳴り響く中、クレアはそれを複雑な気持ちで眺めている。

『——青学に来て最初に知り合ったクラスメイト【東堂刀華】．．．．わたくしは彼女を前にして思わず畏れを抱いてしまったのですわ．．．』

クレアは出会ったその時から刀華を恐れていたと言う。優しそうな瞳の奥に宿る大

きな意志の光、それは遙か未来(さき)を見据えている。この少女は本物だ、本気で人々を慈しみ助けになりたいと願っている穢れ無い人間だと一目で見抜き、それに圧倒されたのだ。

『わたくしとて軍事施設に居た百武装の黎明期に人々を世界のあらゆる脅威から護る【薔薇の守護者(ローズ・ガーディアン)】として名を馳せた身、世の中の平和を願ってはいますわ。しかし、究極的に言えばそれは名門ハーヴェイ家の者として、何よりも天才武芸者リザ・ハーヴェイの姉として相応しくある為に……ですが、このクラスメイ卜の少女はわたくしとは決定的な何かが違う。わたくしはそれに畏れを抱いてしまつたのです……』

東堂刀華の内には目を逸らしてはいけなような何かがある……一昔前、武内出雲那の親友である黒鉄一輝は彼女を見てそう思ったという。

『当時のわたくしには判りませんでした、今はこの畏れの正体を理解しています……恐らくこれは嫉妬の感情に近い恐怖だったのでしょう。他者の為に本気で尽くす事のできる【慈愛の心】、わたくしはそれを持っている彼女の事を心底羨ましく思いましたの。故に畏れていた……』

そして三度事象は加速する……。

『それから一月の間、わたくしはスクエアという都市に順応するように努め、同時に百武

装の最終調整という目的の遂行の為、都市の戦士候補生を相手にひたすら決闘に興じていたのですが、わたくしは東堂刀華と決闘をする事だけは避けていましたの……」

百武装に限らず戦闘関係の技術の成果を測るにはより強い者を相手にした方がその成果を示す事ができるのは当然だ。クレアは当時一目で刀華を強者だと見抜いており、本来ならば彼女は調整の相手にうってつけの筈なのだが……。

『彼女を相手に今のわたくしが勝てるかどうか……そう思うとどうしても彼女に決闘を申し込む事を躊躇ってしまうのです。以前のわたくしならば勝てると思っていて堂々と挑んでいたのですが、リザを失ってしまったあの日からわたくしは表向きは堂々としつつも無意識に保身を優先するようになっていたのですわ。それは何故か？……正直わたくしは怖かったのです。【絶対無敵の女王】の二つ名、それすらも失ったらわたくしという存在に何の価値が残るのかと……』

この瞬間に加速していた事象は停止する……頭れた場所は約200mはある高さの天井から降り注ぐ多色のスポットライトの光に彩られた広大な空間。全長100mはあるであろう正方形の鋼石のフィールドを中心にすり鉢状に囲む観客スタンド、そこを埋め尽くす観客達の声援が空間を異常に熱狂させている。

『……ですがスクエアの頂点に立つ事を目的とする以上、彼女との激突は避けては通れない道でした。わたくしが青学に編入して一ヶ月が経った十月の頃、スクエア四大学

園最大のイベント【四武祭】の個人戦【王竜四武祭（リンドブルス）】が始まったのですわ』

バトルフィールド上に立って向かい合っているのは過去のクレアと普段からは考えられないような覇気を感じさせて射貫くような鋭い目線で相手を見つめる栗毛の女子生徒——東堂刀華。

『予選Gブロック決勝、本選進出を賭けたこの試合でわたくしは戦うのを最も恐れていた伐刀者の少女と相對する事となつてしまいましたの』

「百武装、展開（ハンドレッド・オン）!!」

「轟け、《鳴神（なるかみ）》っ!!」

赤い六つの浮遊砲台【気高き姫君】を展開した過去のクレアに対して過去の刀華が雷鳴を迸らせて顕現させたのは黒漆の鞘に刀身を収めた刀型の靈装【鳴神】、それを左腰に差して抜刀の体勢で臨戦態勢に入った刹那、会場は観客達の大歓声で熱気に包まれ、運命の試合の始まりは告げられる。

『DUEL standby 3・2・1——LET'S GO AHEAD!』

同時に過去の刀華は靈力を解放し雷光の如き速度で過去のクレアに向かって駆け出して行くのであった。

『わたくしは例え相手が誰であろうと絶対に負ける訳にはいかないと今までに培つて来

た【絶対無敵の女王】の全てをもつて東堂刀華を迎え撃ちましたわ。しかし、彼女はわたくしの動きも戦術も【まるで何もかもが判っているかの様に】気高き姫君の包囲網を掻い潜り、わたくしは無様にもバトルフィールドの端に追い詰められてしまいましたの……そして――』

「――雷切」

端に追い詰められて表情を絶望の色に染める過去のクレアに過去の刀華がとどめに抜き放った無敗の一刀——【雷切】……弟子にあたる出雲那のそれとは違い、その一閃はどこまでも鮮烈で世界を雷光の光に染め上げて行つた——ここで、クレアが見る過去の事象は終幕を迎えた。

『——わたくしは……その一閃に引き裂かれて敗れたのですわ。完膚なきまでに……東堂刀華という本物の強者には【絶対無敵の女王】なんて小さなものに縋つたまま前に進む事ができないでいるわたくしのチカラなど通用しなかつたのです。笑えますわね、ワルスラーン社という箱庭の中で【絶対無敵の女王】とあれだけ持ち上げられておきながら、結局箱庭の外に出れば簡単に負けてしまったのですもの。本当に救いようがない

愚か者ですわ、わたくしは……』

この世の全てを溶かしてしまいいそうな光の中でクレアは静かに悔し涙を流して泣いていた。

ハーヴェイ家の者として、ワルスラーン社の武芸者として、そして今も眠る皆の命を救った幼い英雄の少女に相応しい姉である為に誇り高い女王（クイーン）であり続ける……それが彼女の想いであり絶対的価値観（アイデンティティー）であった。でも

『あれ程無様な負け恥を晒しておいて未だに女王などと宣うのは見苦しいかもしれないわね……ふふふ、確かに偽物の言う通り、わたくしはもはや女王では無いのでしよう』

なんて自分のみつともないのだろうか。クレアは自身を嘲笑する。あの異界の女王に言われた事が悔しくて仕方がないのに否定できない、それが悲しくて可笑しく……悔しい。

『リデイ、エリカ、お兄様、リトルガーデンの皆、そしてリザ……わたくしはあなた達が誇れる女王にはなれませんでしたわ。二年前の王竜四武祭で東堂刀華に敗れて【絶対無敵の女王】の名を地に墮としてしまったのもきつとわたくしの運命だったのです。恐らくそれはあの襲撃の時に乗組員を護るべき艦長でありながら何もできずに妹を犠牲

にしてしまったわたくしへの天罰だったのでしょね……』

クレアはひたすらに今までの己の過ちを悔いていた。もう、そこにはいつも凜々しく
気風溢れる女王の姿はない。ただただ泣き言を連ねるしかできない無力な少女が居る
だけだった。

『ああ、なんだか胸が苦しくなってきましたわ……ふふ、きつとこれがわたくしの咎の
重さなのでしょうね。なんとも……んぐつ!? なんか……凄く……苦しくなつて……
きましたわ。首に縄を掛けられて……圧迫される……よう……な——ぐええつ
!!!』

そしてクレアは懺悔の念に駆られたのか息が苦しくなり、【背中に何か硬い物が衝突
したかのような】衝撃を感じ取って意識を手放した……。

．．．出雲那とプルートは突如として目に入って来た光景を前に動揺と驚愕を露わにしていた。

「な、なにいつ?!?俺の【天カラ舞イ降りシ滅ビノ黒陽】を止めただとオオオオオツ!!!」

プルートが放つて来た必殺の伐刀絶技【天カラ舞イ降りシ滅ビノ黒陽】、その射線上には【天鳥】で滞空する出雲那を中間に挟んだ先に煉獄の炎海に転落している最中のクレアが居る為、出雲那は避ける事も出来ず一刻の猶予もない選択を迫られて万事休すな状況に追い込まれていたのだが――

「なっ!?!．．．氷の．．．壁?」

その刹那出雲那に迫る黒き太陽を阻むようにして朱い天の先まで届くような極大の氷壁が出現して墜ちる黒き太陽を妨害したのだ。

圧倒的質量と熱量を誇るプルートの【天カラ舞イ降りシ滅ビノ黒陽】を妨害できる程の氷壁を出現させた猛者、それは――

「傷を癒せ、《ヒール》!」

「っ!?!あの野郎に負わされた火傷が消えていく．．．これは．．．回復術か」

「ふう、危ないところだったわね出雲那」

「……ってサクヤ!? テメエやつと追い付いて来たのかよ!!」

今も向こう側で黒き太陽と鬩ぎ合っている氷壁と唾然とする出雲那の間の【空間に立つ様にして】参上した黒髪ポニーテールの神秘的な女性——結社【終焉の盾】の凄腕エージェント、サクヤ・マキシマであった。

今の彼女は氷の矛の様な形状の錫杖《氷天牙戟（ひょうてんがげき）》を携え、アイスブルーに彩られた魔導服を思わせるようなドレスを身に纏っていた。氷の術を主に操る魔導戦スタイル——《Modeセルリアン》である。

「それよりも早く行きなさい出雲那! ぐずぐずしている場合じゃないでしょう!!」

「っーそうだ、クレア先輩がヤバイツ!!」

クレアが炎の海にダイブしてしまうまで後約5m。彼女を救うのに躊躇している時間はまだ無い。

「ここは私が食い止めるわ! 君は至急彼女を救出して艦に居るエルダーグリードを撃破しなさい! 奴がこの異界化を引き起こした元凶よっ!!」

「わかった! 最速で飛ばすぜ! 【雷光石火】アアアアアアツ!!」

プルートの相手をサクヤに託し、出雲那は今にも炎の海に飲み込まれそうになっているクレアを救い出すべく一筋の雷光となって一直線に翔け降りて行く。

「ふう、一時はどうなるかと思つたぜ。まっ、クレア先輩も無事に助けられたんだし、これで一安心だな・・・さてと——」

いったいこれの何所が無事に助けたんだか小一時間問い質したいところだが、どうやらそんな暇は無いようである。船首付近に建つ司令塔の上を見上げると、そこには六つの浮遊砲台と十二の小型浮遊砲台を周囲に付き従えている陰の絶対女王が出雲那と氣絶したクレアを下賤の者を蔑むような眼で見下ろしていた。

「・・・なるほど・・・今オレをあそこで偉そうに見下して来てやがるクレア先輩の偽物がこの異界化の元凶つてわけだな」

『そう、あの陰がこの朱き煉獄の世界を現世に侵食させている存在・・・人の心の奥底に眠る闇を映し出す陰——エルダーグリード《ドツペルゲンガー》よ!!』

自分が倒すべき敵を見定める出雲那にサクヤが念話術を通して陰の絶対女王の正体を伝えてきた。

クレアが心の内に秘める闇を流出させて彼女を苦しめる怪異・・・奴を撃破すれば少なくともこの夜を終わらせる事ができる!

「OKOK、上等だ!絶対無敵の女王だかモノマネ女王だか知らねえが、そのふざけたナリ、このオレがブツタ斬つてやるぜ!!」

闇を斬り裂きこの夜を終わらせる!【伊邪那岐の創り手】、武内出雲那!!今こそ己のプ

ライドを懸け、雷神の刃を抜く時だ!!!
……そう告げているかのように創生の雷刀
(イザナギ)は今、静かに鳴動していたのだった。

その一刀を以って偽りの陰を斬り裂け!

エルダーグリード——「ドッベルゲンガー」

「シッ!」

戦闘開始!司令塔の頂上にて無数の浮遊砲台の防衛線を張って嘲笑の笑みを浮かべ、見下すように妖艶に手招きをして挑発をして来ている絶対女王——クレアに化けたドッベルゲンガーに向かって出雲那は甲板の床を蹴った。

「女王に楯突く下郎がまた一人……地に撃ち墜として跪かせて差し上げますわ!」

山なりではなく弾丸の如く一直線に直進跳躍で向かって来る出雲那を迎撃するべく絶対女王が周囲に浮かぶ下僕達に号令を発する。女王に仇名す反逆者を蹴散らせと命を受けた紅き守護者達が女王の前に集合し隊列を組む。横に広がるように並び左右を前面にせり出させた鶴翼の陣(クレインウィング)、どうやら防衛線に飛び込んで来た出雲那を挟み込み、前方180度包囲射撃を浴びせるつもりのようなだ。

「抜かせよモノマネ女王っ!こっちこそそのポンコツお嬢様芸人面の顔型を取って、お面作って、青学の校門にある青竜像の顔面に張っ付けて晒してやらあああああああああ——!!!」

出雲那は相手が本人でないのをいい事に普段から心の内に抱いているクレアの印象を叫びぶち撒けて気高き姫君の防衛線に突攻、二十の浮遊砲台が一斉に放つて来る包围射撃を鞘に帯刀したままの十拳を手にとって振り回し、幾重にも連なつて次々と襲い来るレーザー光線を一条、また一条と叩き落して直進して行く。

豪雨の様に左右前方から襲来する無数のレーザー光線を一発も被弾する事無く捉え続けるそのスイングスピードはまさに神速、それは通常の間人はおろか並の星脈世代でも到底できる芸当ではないだろう。

それを可能にしているのは出雲那の伐刀者としての能力にあった。彼は身体の神経や筋肉に靈力の電流を流して反射速度や運動能力を強化する事ができる身体強化系の異能を持っており、その伐刀絶技の名を《雷髓（ライズ）》という。

乱雑に高速回転するような動きで十拳を振り回しながらレーザー光線の豪雨の中を無傷で突つ切つた出雲那は司令塔の頂上に足を着けると同時に抜刀して偽クレアに斬り掛かるものの、弧を描く刃は偽クレアが余裕の笑みを浮かべると同時に床を蹴つて上に跳躍する事で虚しく空を切つてしまふ。

「ちっー」

舌打ちと共に蝶の如く頭上を舞う絶対女王を憎たらしく見上げると、何時の間にか気高き姫君がその周囲を固めていて空から二十の砲口の標準が出雲那に向けて定められ

ていた。その陣形は半球形の牢を地上の餌を取る鳥に被せて空を奪う鳥籠の陣（バードケイジ）、上空周囲360度を囲う浮遊砲台の包囲網から逃れる事は不可能だ。

「葵柳流抜刀術、星墜としっ!」

ならば殲滅砲撃が降り注ぐ前に撃ち墜とすのみ。踏み出した右脚を軸に流れるように一回転しながら十拳を鞘に帯刀し、瞬間的に練り上げた気力を鞘内に集中させて一回転し終えると同時に再び抜刀、飛ぶ斬撃が浮遊砲台の一つを穿つと爆発と共に無数の斬閃が飛び散り、それが包囲する全ての浮遊砲台を撃墜して雷鳥を閉じ込めて処分しようとする鳥籠を破壊した。

「なっ?!馬鹿な・・・」

「もらったぜーこのままブツタ斬るっ!!」

気高き姫君がこうも簡単に全て無力化された事に一瞬の動揺を覚えている偽クレアの間を突いて出雲那は床をチカラいっぱい蹴って真上に跳躍、十拳の柄を握りしめて弾丸の如く大気を貫き朱い空を舞う絶対女王に勝負を決めに行く横薙ぎを放った。

「ハアツ!!」

弧を描く剣閃が偽りの女王の胸を両断せんと振るわれる。射程圏内の近接（クロスレンジ）だ、もう【加速】を使おうとも十拳の刃からは逃れられない。

戦闘が始まってまだ数十秒しか経っていない為少々拍子抜けだが・・・この戦いは――

．．．まだ終わらない。

「そう簡単にはいかないよ、出雲那君」

「なっ!!?」

ガキインという鈍い鉄を打ち付ける音が虚しく朱い空に響き渡る、戦いを決する為に振るった横一閃は烏のように黒い刀の刃に受け止められて防がれてしまった。それは本来なら有り得ない事象だ、何故ならドツペルゲンガーが化けているクレア・ハー

ヴェイの百武装は無数の浮遊砲台を操る【ドラグーン型】で刀剣の武装を展開する【シユヴァリエ型】では無い、故に攻撃を刀で防ぐ事などあり得る筈がないのだ。

「・・・輝・・・!?!」

そう、今出雲那の眼に映る眼前の顔は彼曰くポンコツお嬢様芸人面のクレアでは無かった・・・男性アイドル顔負けの爽やかさが印象的ながら眼の奥に修羅の闘志を秘める【無冠の剣王（アナザーワン）】——出雲那の親友にしてルームメイトの同級生【黒鉄一輝】その人のものであった。

「ハアッ!」

「ぐっ!?!」

なんとドツペルゲンガーは刹那の一瞬にしてクレアから一輝に姿を変えていたのだった、さしずめ【虚冠の剣王】と言ったところか。

十拳を虚冠の剣王の陰鉄が押し返し、逆に薙ぎ払われた出雲那は来た道を戻るかのように司令塔の頂上に叩き落され、あまりの衝撃の大きさに塔が上から碎け落ちるようになり崩壊してしまう。出雲那は崩落した塔の残骸に埋もれて生き埋めになってしまった――

「うおらアアアアッ!!」

「・・・・・・・・」

・・・と思いきや三秒後床に散らばった瓦礫の山に無数の斬閃が走り、出雲那が大声で叫びながらその中から蹴り碎いて出て来た。あんなに派手にブツ飛んでおいていたという神経をしているんだと呆れたものだ、万有引力の法則に従って朱い空から甲板の上にシュタツと着地を決めた虚冠の剣王がその呆れた惨状を目の当たりにして若干遠い目をしている。

——— 何でいきなり一輝の姿に・・・そういやついさつきサクヤの奴が———

『そう、あの陰がこの朱き煉獄の世界を現世に侵食させている存在・・・人の心の奥底に眠る闇を映し出す陰———エルダーグリード「ドツペルゲンガー」よ!!』

——— つて言つてやがったな・・・つまり今度はオレの心の内を読み取つて奴は一輝の姿に化けたつてところか？

出雲那は戦闘に入る前に念話でサクヤが伝えてきた敵の情報を整理し今の状況を見定めてそう推測する。

心を映す陰、ドツペルゲンガー・・・その特性は相手の心や記憶を読み取り自らの形とチカラとして現実に具現する。

——— どうやらあのモノマネヤローは戦っている相手の姿に化けてミラーマッチをするだけが能じゃねえみたいだな。相手の記憶を読み取つてその一部を再現する・・・へっ、上等だ！

敵との距離は凡そ20m・・・出雲那は瓦礫の上に立ち十拳の刀身を鞘に収めて右腰に帯刀、抜刀体勢を取り偽一輝に不敵の笑みを向けた。

「?・・・何がそんなに可笑しいのかな?」

「ははっ、いやなに、おもしろくてツイな。そういや最近しばらく一輝とは本気で打ち合っていないかったし・・・丁度いいぜ、今のオレの剣が一輝相手にどこまで食い下がれるか——」

出雲那は不敵の笑みを崩さずに体勢を下げ——

「——試してみるかっ!行くぜモノマネ野郎おぉーっ!っ!」

足下の瓦礫を爆砕するように踏み砕いて疾風の如く疾走、正眼に陰鉄を構える虚冠の剣王に正面から挑み掛かりに行くその速度は無数の残像を生み出して後から追従する現象を発生させている。魔力と霊力の雷光纏いて突進するその姿はまるで一角を持つ雷の神獣のようだ。

「勝負だ出雲那君!僕の最弱(さいきよう)を以って、君の意地(さいきよう)を打ち破るっ!!」

対する偽一輝も本人の口上を模して迎え撃つ体勢に入った。

陰鉄の切っ先を正面から突撃して来る出雲那に向け左手を刀身に添えて柄を握る右手を引き絞る【突き】の構え、その切っ先一点に己の全てのチカラを集約し・・・突き

放つ!

「第一秘劍——《犀撃(さいげき)》イイ——ッ!!」

「はあああああ——ッ!!」

空気を突き破る勢いで繰り出された陰鉄、虚冠の劍王の全身全霊にして渾身の一撃と正面衝突する直前で出雲那は十拳を抜刀、迸る雷光の刃と岩をも突き崩す切っ先がぶつかり合い、反動の衝撃で二人の足下が蜘蛛の巣状に陥没して周囲の建物の窓硝子の全てが割れ落ちていく。

「なっ!?!」

同時に十拳の柄を握る出雲那の左手が若干左斜め上に引つ張られた、偽一輝の「犀撃」が出雲那の抜劍と衝突する瞬間に軌道を変えたのだ。結果左斜め上に切り上げた十拳の腹に陰鉄の切っ先が突き立ち、切り上げの軌道の運動エネルギーも相俟って出雲那の左腕が押し上げられてしまったのだ。

「ふっ!」

「がはあっ!!……なんのっ!!」

曝け出された懐に間髪入れず偽一輝の左拳が突き刺さる、強烈な推進力を伴った攻撃をモロに鳩尾にくらった出雲那は口から胃液を吐いて後方に吹っ飛びそうになるが、丹田にチカラを込めて足を踏ん張る事によって食い縛り、耐えきった。

そして二人は蜘蛛の巣状の小クレーターの上でそのまま斬り結ぶ。両者同時に振るった弧を描く剣閃が激突し鉄を打ち付ける鈍い音を響かせて火花を散らすと同時に弾くのを合図に激しい剣戟が開始された。全アドレナリンを放出しての全力の斬り合い、休まずに鳴り続ける剣戟音と共に弾ける無数の火花が両者の間で壁となり、弧を描く光の軌跡が四方八方から相手に向かい火花の壁に衝突しては消えて行く、常人の目には二人の剣筋が刹那の間に奔っては瞬く間に消えていく二人の周囲を取り巻く無数の細い光線に映る事だろう、その周囲に渦巻く無数の光の軌跡が旋風を巻き起こしているかのような錯覚さえ覚えてしまう。

——偽物でも確かに一輝の剣だなこりゃあ。オレの振るう剣が全部受け流されている、チツ、さすがだぜ、異能なしの真つ当な斬り合いじゃまだ一輝に勝てねえか……仕方ねえなっ!!

「っ!？」

このまま斬り結び続けたらいずれ致命的な隙を作られて斬り負けると察した出雲那は奥の手を行使した。十拳が眼を焼く程の強烈な光を発する紫電を放出し、それが柄を握る左手に流れて出雲那の全身を駆け巡る。紫電を全身に纏うと急激に出雲那が振るう剣の速度が爆発的に跳ね上がった。

「うおおおおおおおおおおおおおおっ!!」

「くっ！」

飛んで来る手数之多さと凄まじい疾さに虚冠の剣王は苦悶と驚きの表情を浮かべている、急激に上昇した相手の剣速に対応が追いつかないのだ。伐刀絶技【雷髓】の神経刺激による身体能力の向上が迅雷の如きスイングスピードを実現し、光の流星群の如き怒涛の剣閃が火花の壁を押し返して行く。

たまらず偽一輝は刃を引いて後方に大きく跳び退いた。

——チャンス！貰ったぜっ!!

それを好機と出雲那は足を強く踏み出して弾丸の如く飛び退いた偽一輝を追撃する。狙いは着地の瞬間だ、身体の重心が安定していて隙の無い体捌きを見せる一輝もさすがにその一瞬ならば身体を支える重心は不安定、強力な一撃を打ち込めば勝機を引き寄せられる筈。

低空を滑空するかのよう超高速で疾走しながら十拳の刀身を鞘に収め、右腰に帯刀して鞘の内に雷光を迸らせる、【雷切】で斬り抜けるつもりだ。師に及ばぬこの一閃でも人の身では対応できぬ雷速の一刀、偽物如きを斬り捨てるには十分だ。

「雷切イイーーーーッ!!」

偽一輝の両足が床に着く直前に一気に距離を詰めて着地と同時に受け継がれた伝家の宝刀を鞘より抜き放つ出雲那、音速を遥かに超越する一閃が大気を爆散させて衝撃波

が周囲に存在する有象無象を塵に変えて吹き飛ばす!それは目の前の虚冠の剣王も例外ではなかった……ん?

——っ!!?斬った手応えが無えっ!!しまっ——

「第四秘劍——《蜃気狼(しんきろう)》っ!!」

「ぐっ!!」

身体を無理矢理傾けるように咄嗟に横に跳び退いて出雲那は鉄の床を転がる、その刹那の間に鳥のように黒い刃が出雲那の頭上の空を切っていた。そう、出雲那の雷切は虚冠の剣王に躲されていたのだ。

足捌きの緩急で残像を作り出す黒鉄一輝のオリジナル剣技の一つ「蜃気狼」。出雲那が狙うべきは着地の瞬間ではなかったのだ、もし彼に雷切を伝授した師である刀華の真の雷切ならば残像を作ろうとも今の一閃で確実に虚冠の剣王を両断し勝負を決する事ができたのだろうか、生憎出雲那の不完全なそれでは地に足を着けた黒鉄一輝を捉える事はまだできない。

「ふうくあつぶねえあぶねえ。今のを避けた上にカウンターまでブチ込んできやがるとは、やっぱり一輝は強えな……だけどオレだつてまだまだd「八葉一刀流、《弧影斬(こえいざん)》!」つてのあああつ!!」

立ち上がつて敵に振り返ろうとする出雲那だったが、続けざまに三日月状の閃刃が飛

んで来た。出雲那は振り返った刹那に眼前に迫っていた閃刃に仰天して慌てて「雷髓」を発動し瞬間的に床に弧を描いてそれを回避し閃刃を飛ばして来た敵を文句を言いたそうな批難の目で見据えた。そこに立っていたのは虚冠の剣王ではない黒髪の剣士――

「出雲那、油断大敵だぞ。敵に五秒以上背を向けるなんて誘いじゃなければ自殺行為だ」
「……今度はリインかよ」

出雲那の記憶を読み取ってドッペルゲンガーが次に化けたのは出雲那のクラスメイ
トで友人の一人、そして八つの型から成る東方剣術「八葉一刀流」の使い手、「灰色の騎
士」リイン・シユバルツァーであった。さしずめ「無色の騎士」だろうか、新たな猛者
の出現に出雲那は表情を引き攣らせている。

――リインも手を抜ける相手じゃねえ。八葉一刀流は型に填まってはいるが読み
易いと思つて隙を突けばカウンターくらうし、初伝の技でも斬鉄をやらかしやがる。あ
とバフ無しの素なのにオレの雷光石火に追い縋つて来るし、星流闘技（メテオアーツ）で
もないのに気力で炎出す――

「心の中で愚痴を言っている場合か？こっちは容赦しないぞ！」

「おまけにあらゆる先入観を度外視して本質を捉える《観の眼》でこっちの考えはある程
度読まれているしよ、一輝の照魔鏡レベルの観察眼程じゃねけどコイツも大概良い眼し

てやがるぜチクショウツッ!

「行くぞ!二の型《疾風(はやて)》っ!!」

「だがブツタ斬る!【雷光石火】っ!!」

向かい合った両者は得物を手に同時に駆け出し、音を置き去りにして閃光となつてぶつかり合う。朱い空にも届くような甲高い剣戟音と共に差し交し位置が入れ替わるように駆け抜けると二つの閃光は跳弾するかのように方向を変え、不規則な位置で三度程同じように両者は一瞬刃を交えては駆け抜けた。その間僅か0.5秒、刹那の一瞬で四度の剣戟音がほぼ同時に鳴り響いた。

「ぐっ!?!」

互いに背を向けて得物を振り抜いた恰好で煉獄の炎海を眼に映す出雲那は左脇腹を右手で押さえてガクリと片膝を床に着いてしまふ、その脇腹は緋色の液体が滲み出ていて学ランの内側に着ている白いシャツの一部が液体と同じ色に染まつていた。今の超高速の打ち合いの最中に一撃無色の騎士の刃をまともに受けてしまったのだ。

「や・・・やるなりイン。去年の王竜四武祭のベスト16入りは・・・伊達じゃねえつか・・・」

彼は十拳の刀身を床に突き刺してそれを杖代わりに苦痛で倒れそうになつた身体を必死に支えながらもこの太刀筋も自分の記憶の中のライン・シユバルツァーのものとす

分違わないと実感していた。舞い散る木の葉を斬るように精密且つ疾く鋭い技は閃きの如く、「灰色の騎士」の名を貰った昨年の王童四武祭では惜しくもナイツニクス学園の【黒の剣士】に敗れはしたものの、聖ルシフェル学園の《絶氷（ぜっひょう）》を破ってベスト16入りを果たした。それは出雲那の記憶にもしつかりと焼き付いており、その八葉の一端の技は鮮明に印象に残っている——

「無明を切り裂く閃火の一刀……！」

「っ!!」

そう、背中に感じるこの静寂に燃ゆる焰のようなプレッシャーも——

「クソッ！」

「はああああっ!!」

振り向いた瞬間に激しく燃え盛り、夜の草叢を錯覚させるような威勢と共に一直線に自分に迫って来る紅も——

「はっ! せいっ! たああっ!!」

「うぐっ!」

その振るわれる三刀の刀身を包む燃え盛る焰も——

「おおおおおおおっ!!」

「——があっ!!」

自分を容赦無く切り刻む幾重にも連なる六花の剣閃も——

「終（つい）の太刀——《暁（あかつき）》っ!!!」

「がああああああああああああっ!!!」

その太刀を鞘に収める背に感じた哀愁も——全て出雲那の魂に刻み込まれているのだ。

八葉一刀流第七の型中伝の奥義【暁】。無数の焰の斬閃に斬り刻まれた出雲那の身体は奥義の締め巻に巻き起こった斬閃の爆発によって吹き飛び、リトルガーデンの艦上の街に建つ建物を幾つも突き抜けて薙ぎ倒し、商業施設や娯楽施設などがある華やかな繁華街——ファミリア区画の中央道路の一角に蜘蛛の巣状のクレーターを形成した。

「う……が……」

咄嗟に反応して辛うじて急所は避けたものの、無数の炎痕が刻まれた身体は深刻なダメージを受けてしまった。喉が焼けてうまく声が出せない。

——オレってホント弱えな畜生、自分（テメー）のチカラ不足と不甲斐無さに反吐が出るぜ……でもここで倒れるわけにはいかねえ——

「ぐ……おおっ……」

それでも十拳を杖に出雲那は何とか立ち上がった。例えまだ踏み入れるには早すぎる過酷なプロの戦場だろうと、例えどんなに自分が身の程知らずだろうと、負けるわけ

にはいけないのだ、死ぬわけにはいけないのだ。昨晚の夜に自分の命を救ってくれた少女と明日の学園で友達と共に笑い合う為にも。

——でもどうするよ？相手は人の心を盗み見てその記憶の中の知り合いに化けて惑わす能力を持ったエルダーグリードだ。あのヤロウ、オレの記憶を勝手に……記憶？

「そこにブツ飛んでいたのか出雲那っ！最後はこのオレが引導を渡してやらあああああああああっ!!!」

ドツペルゲンガーの攻略方を考えているうちに建物の屋根を乗り継いで空に跳躍して来たのは青学の仲間である「白竜」のステイング・ユークリフに化け直したドツペルゲンガーだった。竜が咆哮を上げて朱い空を舞い、満身創痕の獲物を全力で仕留めるべく聖なる息吹を放つ。

「くっえ白竜の——《ホーリーブレス》ッ!!!」

昼の決闘で放った「白竜の咆哮」とは比べ物にならない極大レーザーを吐き出し、瞬雷の剣士ごと艦上の街を貫く。聖なる白き光がドーム状に広がり、街を飲み込んで消えて行く。そこにはもはや何も残っていない、艦の底まで空いた空洞に、底から覗く地獄の炎だけだった。

「……へっ！どーだ、思い知ったか!?やっぱオレが最強だぜっ!!!」

跡形もなく消えて巨大な空洞となったファミリー区画を付近の時計塔の屋上に降り立って見下ろし、偽ステイングはドヤ顔で拳を天に掲げた。出雲那はホーリープレスによつて消し飛んだのだろうと思つて勝利を確信したのだ——

「葵柳流帯刀術——」

「……ひよつ?」

調子に乗つた白竜を螺旋の槍で突き落とさんとしている雷鳥が足下に潜んでいる事にも気付かず——

「——《螺旋鋼突（らせんこうとつ）っ!!」

「な——」

鞘に収めた刀身を柄を握りしめる両腕の捻りを利用して突き放つドリルを連想させるスクリー回転突きがステイングの足下の床を突き貫き……ポコチイ——ン♪

「があ☆\$#※%こ@べき?ア ア ア——————っ!!?」

……その一撃は女には一生理解できない激痛を偽ステイングに齎し、解読不能の言語で悲鳴を上げさせて煉獄の朱い空へとブツ飛ばした。鮮やかな放物線を描き、事故に遭つた我が子を気遣うように股間を両手で押さえながら心底痛そうに眼から涙を流して後方のミリタリー区画に落下して行く様は酷くシニールだ。

「・・・ハッ！マジで馬鹿だぜオレは。【オレの記憶の中の知り合いに化ける】って事は【オレが記憶している戦術しか使えねえ】って事じゃねえか！」

「っ!!」

落下しながら恨めしく天を見上げれば朱い空に雷光の翼を羽ばたかせて不機嫌そうに悪態を吐き捨てながら墜ちて行く竜を見下ろしている出雲那の姿があった。

実はホーリーブレスがファミリー区画に落ちた時、出雲那は【雷髓】と【雷光石火】を同時に発動し超高速でその場から離脱していたのだ。そして偽ステイングの落下地点にて建つ時計塔の中に入って屋上の一つ下の階に上がり竜が落下する場所を予測してその丁度真下で待機、竜が屋上に着地したのを気配で感知した瞬間真上の天井を突き破る技を放つ・・・数秒の間にこれだけの動きがあったのだ。

着ている学ランは先程無色の騎士の【暁】に斬り刻まれてズタズタで赤い血だらけだが、彼の表情に苦痛はもう見られない、寧ろ獲物を狙う鷹のような眼光を光らせて威圧感バリバリである。

いったい何故？何故身体中が血だらけになる程ダメージを負っているというのに彼はまともに動けるのだ？そう疑問を抱くところだが、出雲那は着ている青学の学ランの内ポケットに右手を突っ込んでそこから何かを取り出し、股間を押さえて落下中の偽ステイングにその存在を主張するかのように見せつける・・・額に青筋を浮かべて。

「見ろよコレ・・・オレのMyトマトケチャップの容器・・・」

出雲那が手に持ち出したのはズタズタで中身が消失している携帯用のトマトケチャップの容器であった・・・何で出雲那がそんな物と思うかもしれないが、大のトマト好きである彼は何時も何時も十以上の携帯トマトケチャップを持ち歩いているのだ。

「文字通り無残だろ? さつきテメエにくらわされた【暁】で上着の内や胸、ズボンの脇ポケットにしまっていたスペアのMyトマトケチャップも全部コレと同じ有り様だぜ・・・テメエ、どうしてくれんだ?」

・・・つまり着ている学ランが部分部分赤く染まっているのはダメージによる流血ではなく持ち合わせていたMyケチャップの容器が全て先程無色の騎士の【暁】をくらってズタズタになり中身が切り口から流出してべっちよりと付着したという事だ・・・落ち行く偽ステイングを冷徹な表情で見下ろし出雲那の眼光がキラリと光る、朱い空に背を向けている為に顔が半分影に隠れているのも相俟ってヤ○ザのように恐ろしい、持ち合わせのMyトマトケチャップを全部お釈迦にされた事に相当キレちまっているのは見るからに明らかだ。

「・・・オレのトマトを——」

こうなったら元凶を思いつきりブツ飛ばさなければ気が済まないだろう。怒れる雷

鳥は十拳という名の嘴の先を落下する竜に定めて足で天井を蹴る寸前の様に上に両脚を投げ出してバネを作る、それを引き金に身を弾丸に変えて——発射（フオイヤー）！

「——弁償しやがれコノヤロオオオオオオオオオオ——！！！！」

「ゲフウウ——————————！！！！」

そして怒りの嘴は落下の加速に乗ってコンクリートに叩き付けられる寸前だった偽ステイングの腹筋に突き刺さり、そのままの勢いで背中を派手にコンクリートに打ち付け、鞘とコンクリートでサンドイッチになった腹筋が圧力で潰れた。なんとも惨い一撃だ、衝撃で彼等の半径約30mの地に蜘蛛の巣状のクレーターが形成されているのが今の出雲那の怒りの大きさを表しているようにも見えて戦慄を禁じ得ない。そんなにもトマトが好きなのかこの男は？全身を「く」の字に曲げられて口から胃液を大量に吐き出している偽ステイングが哀れで仕方がない……。

「止めだ！このまま【雷流し】で——」

「ぐ……調子にのるんじゃねえっ！！」

「!!?」

出雲那がそのまま敵の腹筋に突き立てている十拳を通じて高圧電流を流しドツベルゲンガーを仕留めようとするが、敵は戦士候補生如きの未熟者にやられてたまるかと思地地の叫びを上げると同時に自身の全身を真っ黒に染めてドロドロに溶けだすという奇

妙な現象を起こしたのであった。奴は戦う相手の記憶を盗み見てその中の人間の姿に化けるがその正体はあくまでもグリードなのだから常識外れの行動を起こしても不思議ではない。

「あつ!?クソツ、逃げられた!」

全身を全て溶かして黒い水たまりと化した事によつてドツペルゲンガーが出雲那の拘束から抜け出した、不可解な現象に一瞬の戸惑いを覚えた所為で敵を仕留める好機を逃してしまった出雲那は悔しそうにそう吐き捨てる。そして水たまりが地をスライドするように移動して出雲那から約20m程距離を取るとその場で新たな人の形を形成しはじめた。

「またオレの知り合いに化ける気か?次は誰だよ、善吉か?マイか?それともオレ自身か?」

そして姿の形成が終わり、ドツペルゲンガーが成った姿は黒髪長髪で常に不敵な笑みを浮かべる黒衣の断罪者――

「――つてユーリかよつ!」

「飛ばしていきますかっ!」

「しかもいきなり切り札の《オーバーリミッツ》使つてんじやねえっ!!」

ドツペルゲンガーが化けて来たのはB級遊撃士「ユーリ・ローウェル」であった。実

は出雲那達はよく各四武祭の開催前に最終調整を目的として遊撃士協会に模擬戦の依頼を出す事があり、その過程でユーリやフェイトとも手合わせをした経験があったのだ。なのでドツベルゲンガーがユーリに化けたところで特別に驚く事ではないが、問題は彼が戦闘のスペシャリストである遊撃士だという事だ。

敵はここまで一輝やリインなど自分と同じ戦士候補生である青学の仲間化けて向かって来たが今度は戦闘のプロだ。限界まで練り上げた気を一気に解放して一定時間戦闘力を爆発的に上昇させるスキルを発動し鬼気迫る気迫で地を蹴る様は獲物に跳び掛かりに行く狼のようで更なる苦戦を強いられると予想される相手なのだが・・・何故だろうか出雲那は余裕の笑みを浮かべている。

「蒼破！・《蒼破追蓮（そうはつうれん）》っ!!」

「ほっ！はっ！よっ！」

相手への牽制として偽ユーリが前進しながら放って来た三発の衝撃波を出雲那は最小限の動きで躲しきる。その直後に偽ユーリが出雲那を近接戦（クロスレンジ）に捉え、肩に担いでいた白い刀——《ニバンボシ》を振り下ろして斬り付けてくる。

「そらっ！」

出雲那はそれを鞘に収めた十拳で受けて左下に流して隙を作ろうとするのだが、偽ユーリは受け流されたニバンボシを脇下から背中の上に投げてすかさず拳による三連

撃を放ってきた。

「《三散華(さざんか)・追蓮》っ!!」

出雲那がバックステップで拳を避けると偽ユーリが真上から落ちて来たニバンボシをキヤツチしてそのまま大きく踏み出し後退した出雲那に突きで追撃をかける。流石は戦闘のスペシャリストと称賛できる隙の無い連撃だと言いたいところだが――

「ふっ!」

出雲那は偽ユーリがそう来ると予め判っていたかのように余裕をもつて横に少しズレる事で迫り来るニバンボシの切っ先を避けていた。

確かに突きは〔点〕の攻撃であるが故に相手が放つて来るのを判っているのなら回避するのは容易なのだが、何故出雲那は偽ユーリが突きで追撃して来ると判つたのだろうか?

「はあっ!」

「っ!?危ねっ! 《義翔閃(ぎしょうせん)》っ!!」

「ぐうっ!」

「ここだっ!!」

突きの隙を突いて偽ユーリの懐に踏み込んだ出雲那は十拳の柄尻突きを偽ユーリの鳩尾に打ち込むものの、偽ユーリは見事にそれを見切つてバックステップで回避した。

すかさずニバンボシを振り上げ足下から広範囲に跳ね上がる衝撃波で出雲那に反撃すると出雲那はさすがに躲しきれずに足を踏ん張り、衝撃波で飛ばされないように食い縛った。そして相手が一瞬の硬直に陥った今が好機と偽ユーリはオーバリーミッツ状態の時のみ使用できる大技——《バーストアーツ》を放った。

「腹あ括れよ!!天r——」

だがその瞬間、出雲那の口端が吊り上がった。

「これを待っていたぜっ!!」

「な・・・なんだとっ!!?」

なんと出雲那は偽ユーリがバーストアーツを発動する瞬間を見計らって足の踏ん張りを止め、チカラを抜いて【義翔閃】の衝撃波の流れに乗り、自然に上に吹き飛ばされたのだ。よって偽ユーリのバーストアーツは空振り、大技直後による大きな隙が生まれる。

「もらったぜっ!」

偽ユーリの頭上で鞘に収めたままの十拳を両手持ちでやや後ろに引くように構え、自由落下と共に真上に振り上げ、半円を描くように敵の頭上に一撃を叩き落とす。

「やべっ、しくった!!」

「葵柳流帯刀術——《半月落とし》イイ——アーツ!!」

十拳を振り下ろすと同時にあまりの威力と衝撃に偽ユウリの足下のコンクリートが爆砕して粉塵が舞った。仕掛けたタイミングは完璧だった、完全に相手が大技後の反動で硬直状態のところを叩き付けた一撃、これが決まったのなら出雲那の勝利は決定的だろう……しかし――

「……ヤロー、また姿を変えやがった」

粉塵が晴れるとそこに居たのは十拳の鞘尻を大きく罅割れた道路に着けて苦虫を噛み潰した表情で朱い煉獄の空を見上げる出雲那一人しかおらず、決定的な一撃を叩き込まれた筈の偽ユウリの姿はどこにも見当たらなかった……その理由は簡単だ、今出雲那の目線の先には黒いレオタードの様な装甲の薄い防護服（プロテクター）を身に纏う金髪ツインテールの美しき空戦魔導士（エアリアルウィザード）が金色に輝く魔力で形成された大刃の双剣を携えて朱い空に滞空しつつ彼を見下ろしている。

「予想通りフェイト先輩に変身したか、しかもいきなり全力全開の《真ソニックフォーム》とはな……」

そう、ドツペルゲンガーは出雲那の「半月落とし」が叩き落とされる直前に彼の知り合いの中でも特に速力に長けている「フェイト・T・ハラオウン」に姿を変えて飛行魔法を発動しほぼ音速に等しい超高速で空に逃れていたのだった。今偽フェイトが身に纏っている防護服はいつもの黒い軍服調の《インパルスフォーム》ではなく、装甲を極

限まで軽くして防御力を度外視した金色の閃光最速の「真ソニックフォーム」、そして両手に持つ柄尻の魔力糸で繋がった双剣の魔装錬金武装は彼女の愛機バルディッシュが変形したもので、その最強形態《ライオットザンバー》である。

つまりC級遊撃士「金色の閃光」の本気モードという事だ。彼女もユーリと同様戦闘のプロ、普通なら彼女と戦えば苦しい戦いになる事は必至だ。だがあの金色の閃光の紅い眼で睨まれようととも武内出雲那は不敵の笑みを崩さない。

「誰に化けようがもう無駄だ！」

出雲那は大胆にもそう言い放つて十拳を右腰に帯刀して抜刀の構えを取ると全身から激しく流動する雷光を放出し背中に雷鳥の翼を展開、同時に放出した雷光を全身に巡らせて身体能力を激的に上昇させ、足下で雷光がバチバチと弾ける。全身全霊に流れる三大源力をフルに使った「天鳥」「雷髓」「雷光石火」の同時発動による出雲那の最速モードだ。

「テメエの弱点は——もうバレてんだよモノマネ野郎っ!!」

言葉で表すのならまさに「瞬雷（ブリッツ）」！出雲那は空を翔ける閃光となって地を蹴り、同時に偽フェイトも閃光となった。朱い煉獄の空を蹂躪して二つの閃光が何度も激突する、その度に落雷の如き轟音が轟き、大気を激しく揺るがした。

人の心の奥底の闇を映し出して自らのチカラとするドツペルゲンガーの弱点・・・そ

れは結局のところ「相手の記憶の中の人物にしか成れない」という一点に尽きる。

——「オレの記憶の中を映し取る」んだから「オレが記憶している戦術しか使えねえ」のは道理だ!

幾ら格上の戦士が相手でも一度体験した戦術でしか攻めて来ないのならば問題は無い。四武祭の本戦に勝ち進むような二つ名持ちの学生や遊撃士のようなプロの戦士は何百もの攻め手を持っているものだ、何故ならば猛者に同じ手は通用しはしない!

「二度オレを負かしたからって、二度も同じ手を通じると思ってるんじゃないやねえええええええええええ!!」

「ぐあああっ!?!」

急旋回（ブレイク）からの捻り込みで背後を取った出雲那が偽フェイトの綺麗な背中に強烈な慣性を持った肘打ちを叩き込んだ。周囲の雲を吹き飛ばす衝撃波と共に美しい金髪が揺れ豊満な胸を強調するように身体を反らして遥か上空に吹っ飛ばされる。

「くううっ!」

赤い雲海の上で堪えて止まり、雲海の下から迫って来ている雷鳥を偽フェイトは涙目で睨みつけた。そしてそれを迎え撃つ為に金色の双剣を一つに合わせ、身の丈の三倍以上はある巨大な魔大剣を作り出して肩の後ろに振り被る。

「負けられない! 負けてたまるものかああああああああああああああっ!!」

《ライオットザンバー・カラミティ》——出雲那はかつてフェイトとの模擬戦でこの金色の大剣の一振りをもとにくらい、模擬戦場を突き破って場外にブツ飛ばされて敗北を喫したという苦い経験をしている。

何故あの時全力全開の真っ向勝負をするという選択をせずに躲してカウンターを決めるという戦法を選んだでしまったのだろうか・・・何故——

「今度は受けて立つ！」

不完全だからと師のように慕う少女から受け継いだこの一刀を信じなかったのか。

「この【雷切】で——」

赤い雲海を突き抜け、光の矢の如く偽フェイトに向けて突貫する出雲那が左手で右腰の十拳の柄を握りしめ、鞘の中に激しい雷光が迸る！眼前に迫るは視界を埋め尽くす程の質量を持った金色の刃！その雷速の一刀を以って偽りの陰を——

「斬り裂く!!雷切イイ————ツ!!」

雷光迸る鞘から異次元の速度の一刀が抜き放たれた。巨大な金色の刃に十拳の刃が食い込み、その一閃のもとに金色の閃光最大の剣は両断された!!

「嘘っ!そんな——」

「うおおおおおおおおおおおおおおっ!!!」

「——がはああっ!!!」

そして出雲那が放った渾身の雷切はそのまま偽フェイト・・・ドツペルゲンガーにその刃を届かせるのだった・・・。

葵柳流VS葵柳流、踏み躪られた友と決定的な格の差

朱い煉獄の空を切り裂く一筋の光が走る。

超音速を超越する雷速の一閃によつて引き裂かれた大気が衝撃波となつて一気に広がり、目に映る赤い雲海の全てが那由他の彼方に吹き飛んで行く。

「届……いた……！」

光に貫かれて飛行魔法という名の翼を散らされた偽フェイトが落下して行くのを背に出雲那は雷速の一刀を振り切つた体勢で感じた手応えに喜悦と安堵の眩きを漏らしていた。今の雷切は間違いなくドツペルゲンガーを斬つた、敗戦の歴史を乗り越え、自分分は過去の闇に打ち勝つたのだと。

……だが戦士の卵として未熟を理由に油断する事はできない。【勝利を確信した時こそ最大の隙を生む】、それは学園の戦術抗議でも鉄則として教えられている。故に出雲那はそれ以上歓喜に浮かれる事はなく、直ちに昂りそうになつた気を静めて抜き身の十拳を鞘に収め、右腰に帯刀して警戒しながらリトルガーデンのミリタリー区画へと降下する。

「……………」

無骨な鉄板が敷き詰められた工場広場に降り立ち、雷鳥の翼を消して不自然な煙が上がつている路地裏の一角を無言で睨む、おそらく敵はあそこに墜落したのだろう。

——倒したのか？それとも……確認しに行ってみるか。

あの朱い空の上で抜き放った渾身の雷切は確かに偽フェイトを斬った、そしてフェイトの「真ソニックフォーム」は音速の速力を得る代償として一撃まともに入れれば墜ちる紙レベルの防御力と化す諸刃の剣……普通は倒したと確信するだろう、言わば某断罪歯車の名を冠する格ゲーの紙ニンジャをデストロイしてシツシヨ言わせたようなものなのだ……なのに——

——何だこの感覚、妙に懐かしいぜ……。

まるで掃除をしていたら遠い昔に紛失した思い出の品が出てきたような……そんな感覚に苛まれていると凝視していた薄暗い路地裏への狭い通路の先から何者かの声が聴こえてきたのだった。

「東堂先輩より受け継いだ雷光の如き一閃の下に斬り伏せる伝家の宝刀……多少オ리지ナルには劣るが見事な雷切であった——

——さすがは我が友だな・・・出雲那」
 「っ!!?」

薄暗い通路から姿を現した人物を目にした瞬間出雲那は驚愕のあまりに眼を見開いていた。帝国ヤマト人らしい黒髪黒眼の少年だがその肌は雪のように白い。仰々しくどこか痛々しい口調で懐かしみながら愉悅の笑みを浮かべて先程偽フェイトを撃墜した時に放った雷切の事を大いに称賛し、出雲那をその夜天のように黒い瞳で真つ直ぐと見据えるその雰囲気は大らかだが、その所謂厨二的な口調な為になんだか色んな意味で近寄り難い。

青学の学生服である黒の学ランを着ている事から出雲那と同じ青学の生徒である事が窺えるが、その上着は厨二らしく傾（かぶ）い着こなしで袖を通さずに肩に羽織っており、その地に着きそうな程裾の長い——所謂「長ラン」の背中には「我が志（こころ）」

常に夜桜の如く壮麗であれ！」と帝国ヤマト語（日本語）で桜色の字が刺繍されていて、右の胸ポケットには「葵の葉」を模したワツペンが縫い付けてある、所謂「改造学ラン」というやつだ。

そして丈が長くぶかぶかしたズボン——所謂「ドカン」の腰周りに通したベルトの左側に差してある太刀の刀身が納まっているのは葵の葉が彫られている荘厳な鞘。そんな伊達酔狂厨二病という単語を連想するようなこの少年は——

「このクソモノマネグリード、性根悪すぎだろ。まさか【尊】になってオレの前に出て来るなんてよ……」

出雲那は悪態を吐き、顔を引き攣らせて付近の船べりの先に見える朱い空を見上げてみる。氷の魔導服を身に纏った美女が艦に背を向けて空に立ち、黒き太陽を艦に墜とすまいと大質量の氷の壁を隔て黒き太陽の進行を防いで闘ぎ合わせているのが見えた。どうやらサクヤは出雲那の救援に駆けつけてから未だにリトルガーデンに落ち征く黒き太陽を防ぎ続けていたようだ、先程の念話も忙しいところ無理をして敵の情報を教えてくれたのだ。

そして黒き太陽を落とし放った張本人プルート・A・イグナイトは透き通った氷の壁の向こう側の空で「面白い」と愉悅の表情を浮かべている……出雲那の目の前に現れた少年の顔はプルートの顔と瓜二つであり、それが彼が二年前の事件の犠牲者となって

亡くなってしまった出雲那の幼馴染にして親友「葵柳尊」であるという事を物語っていた。まあ当然彼はドツペルゲンガーが化けた偽物ではあるのだが・・・出雲那は複雑な表情で視線を目の前の敵に戻す。

「テメエその様子だとさっきの雷切はくらわなかつたみてえだな。オレの雷切はまだ刀華さんのそれに届いてねえ不完全なものだし。大方、オレの雷切がザンバーを斬った瞬間咄嗟に《サンダーアーム》で相殺・・・いや、さすがに見切れねえだろうから放電による磁力の反発を利用して威力を緩和させてくらつたつてところか・・・」

「ふむ、良き眼だ。まあ防護服の装甲が心許なさすぎてそれでも耐え凌げるか危ないところだったが、見ての通りなんとか無事だ。まあそれも当然だな！何故ならば我が身体は【闇の深淵（アビス・ファルス）】の契約により不s——」

「厨二設定までマネてんじゃねえ！つたく、さっきの雷切でおとなしくブツ倒されていろよ・・・」

尊の姿に化したドツペルゲンガーのピンピンした様子を見て何故雷切で斬った手応えがあった筈なのに奴を仕留めきれなかったのかを即興で考察する出雲那。口にした【サンダーアーム】とは身体の一部に魔力の電撃を纏い、触れた身体や得物を通して相手を感電させる攻防一体の防御魔法だが、さすがに異次元の速度と威力を發揮する必殺の雷切を防げる程のものではなく、故に敵はそれで雷切の威力を下げ耐えたのだと仮説

を立てる。偽尊はその仮説を肯定し、自らに酔って闇がなんたらかんたら言い始めたので出雲那はイラッと来て再び悪態を呟いて頂垂れた。

・・・まあとにかく、まだ戦いは決着していないという事だ。出雲那は気を取り直して昔故人となつてしまった親友に化けて対峙する陰湿な敵を睨みつけて威勢よく十拳の柄尻を向ける。

「で？記憶から消し去りたい厨二病になつてどうするつもりだ？そんな事をしたところでオレをますますイラつかせるだけで記憶の中の戦術しかできねえ弱点は変わりはないねえ・・・まさかテメエ、それでオレの精神を揺さぶっているつもりじゃねえだろう――

――なっ!!」

死んだ親友を侮辱されたように感じて出雲那は内心怒り心頭だった。怒気の籠った静寂な声音で目の前の敵にそれがどうしたと威嚇し、言葉の締めを言い放つと同時に掲げた十拳を右腰に帯刀し直しつつ腰を落として疾駆した。

「はあっ!」

星脈世代が有する驚異の身体能力で約20mの距離を一秒経つ間も無く一瞬で詰めた出雲那は敵の懐に踏み込むと同時に十拳を抜刀。

「爆ぜ咲け、《火廣金（ひひろかね）》。ふっ!」

それに対抗するように偽尊は黄金の炎を纏う鞘に刀身が納まった刀型の霊装を左腰

に顕現して全く同じタイミングで抜刀する。

雷光迸る刃は反時計回りに、黄金の炎の梵字で刀身の側面に【桜花炎舞】と綴られた刃は時計回りに弧を描く。二つの刃は交差して軽い金属音を鳴らし、掠めるように弾くと両者は前に踏み出していた片足を軸にして素早く独楽のように一回転、再び雷と炎の刃は弧を描き、今度は重い金属音を響かせて刃が重なる。

葵柳流抜刀術の基本の型【双円閃】を全く同時に繰り出した二人はそのまま靈装を打ち合わせ、鏢競り合い状態で激しく睨み合った。

「舐めんじゃねえよ！尊はもうオレにとつて過去の人間だ。【今の大切を護る】、それがオレの信条（ポリシー）だからな！尊が死んだ事はもう吹っ切れてんだよこのタコツ!!」
「クツクツク、果たしてそうだろうか？貴様の心は今も後悔の念による後ろめたさで焦燥に駆られているぞ。二年前の事件の折にこの姿の者を自らの刃に掛けて亡き者にしてしまった事になあ！」

「くっ！」

偽尊は嘲笑の笑みで激昂する出雲那の怒れる眼を見て嘲りの言葉を言う腕にチカラを加えて出雲那の十拳を弾き飛ばす。苦渋に表情を歪めた出雲那は敵の切り返しが来る前に後ろに跳び退き、十拳を鞘に納刀して右腰に帯刀し戻し、苛立ちの眼を滑稽そうに笑う畜生に向けて口許を歪めた。

「クッククック、どうした出雲那、焦りで剣が鈍っているぞ？吹っ切れていると言うのは虚言だったのか？」

「黙りやがれ、それ以上その粹好かねえ口で喋ってみろ、八つ裂きにしてこの船の下の炎の海にばら撒いて捨ててやる」

抜刀の構えを取り、怒りの形相で尚も嘲り続ける口を止めない偽尊に脅迫の言葉を吐いて威嚇する。このままだと出雲那の怒りは憤怒に変わりつつあり、それを表すかのようには十拳の柄を握る左手は火山噴火の前兆の如くガチガチと震えている。

「それは恐ろしいな、この男を斬り殺した時の再現のようではないか。二年前のあの悲劇の事件、終末の蛇の執行者の一人である《ハザマ》という男が悩めるスクエアの戦士達や学生達が抱える苦悩を利用して誑かして騙し、その者達を《人体万応錬成》によって一人の形を保ったまま人外のチカラを持つ超人へと変える」実験を行ったが結果は失敗、奴が騙して実験材料にした者達は人の形を保てずに自我を失った腐る化物となってしまう、元に戻す方法に見当がつかなかったが為に哀れな被害者の者達は殺すしかなかったのだったな」

しかし偽尊はそんな威嚇などお構いなしに愉快そうに顔を歪めて尊がこの世を去った事件の概要を語りだした。

「この尊という男、東堂先輩とやらに好意を抱いていたらしいな。幼馴染である貴様と

共に随分と良くしてもらったようだが、同じ雷の異能を持つ貴様の方が東堂先輩とより親しい関係になっていた、少なくともこの男はそう見えていたようだな、故に幼馴染の友である貴様に嫉妬の念を心の内に抱いてしまった。「ならぬ」という意志をそれと衝突させて感情を抑え込もうと必死になっていたようだが、そこをハザマとやらに付け入れられてしまい、無様にも《呪縛陣（マインドイーター）》という術に掛かつて奴の操り人形になり、妬みの感情を憎悪に変えられて当時の貴様に差し向けられた」

「これ以上言うなと——っ!？」

これ以上は言わせるかと口封じに飛び出そうとする出雲那。しかし彼の脚は何時の間に鉄板の床に突き立てられていた敵の霊装「火廣金」から床を這って伸びて来ていた黄金の炎の縄に搦めとられて動きを封じられた。

「予期せぬ形で幼馴染の親友に敵意を向けられた貴様は動揺のあまり成す術もなく追い詰められ、この男の奥義で斬り倒されそうになったところで駆けつけた東堂先輩が横から割って入って来て戦いを止めた。貴様を護るように立ち、咎めるような眼で睨んでくる東堂先輩を見てこの男は悲しみの感情のあまり壊れてしまい奴は・・・弾けた」

ギリイイツ!と血を流す程強く出雲那が歯を軋らせる音が鳴る。そして——

「クツクツク、弾けてしまった時点で葵柳尊という人間の命運は決定された。「人体万応練成」とは三大源力を持つ異能者に精神の制御を失わせて身体の内に秘めた万応素を流

出させ、その膨大な万応素を対価に持主の身体を別の存在へと造り変えるというこの世の理に背いた練成術で、この男は「ヴェノムミノタウルス」という腐った牛の化物へと変貌してしまったのだ！ハーツハツハツハ！！実に陳腐で滑稽で愚かしい笑える話ではないかあ！少し良くしてもらった女に軽々しく恋慕などという感情を抱いてしまったが為に幼き日から共に切磋琢磨してきた最も親しい友に愚かにも抱いてしまった負の感情を隠し、挙句利用されて化物に変えられ、友と恋した女に殺されるという悲劇の運命で人生に幕を閉じたのだからなあああああつ！！」

「テンメエエエエエエエエエエエエエエエエツ！！」

過去の闇を踏み躪り幼馴染の親友の一生を嘲笑する畜生の嘲りを耳に入れて出雲那の怒りはとうとう天元を突破してしまった。はち切れんばかりの憤怒の怒声が朱き煉獄の空を揺るがし、放出された膨大な気力・魔力・霊力が渦を巻いて嵐のように周囲の工場倉庫を倒壊させる、身体から迸る激しい雷光が獣の如き咆哮を上げて、脚を拘束している炎の縄を一筋の電撃が焼き切った事により憤怒に狂い猛る雷鳥は解放された。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！」

スタートに踏み出した一步が鉄板の床を砕き、飛び散った破片が地を這い行く雷閃に撃ち抜かれて粉々に砕け散り、轟く爆音と共に砲弾の如く出雲那は怒りの雷光纏いて倒すべき怪異へと突貫して行く。コイツだけは許さない、敵を近接（クロスレンジ）に捉

えると同時に涎一滴この世に残してなるものと叫び声を上げて踏み込みと共に十拳の刀身を鞘より抜き放った。

雷光迸る刃は弧を描いて敵の首へと吸い込まれて行く。その首もらったあつ！そう思ったその瞬間鉄を打ち付ける音と共に十拳の刃は敵の首を落とす手前で止められた。

—— なっ!? 《槌楯（ついじゆん）》・・・だど・・・!!

驚愕で一瞬時が停滞したかのような奇妙な感覚に襲われる、敵の首を刈り取るべく抜き放った一刀が下から突き上がる偽尊の柄打ちに止められた事によつて怒りで眼尻が吊り上がっていた出雲那の眼は大きく見開かれていた。葵柳流帯刀術【槌楯】——相手が繰り出して来た物理攻撃に対して斜めから柄打ちを打ち込み衝撃とチカラを外側に逃がすという防御技である。

「哀れな人生であつたが奴は実に幸運ではないか。こうしてこの俺が、あの日に止められた貴様との決着を代わりに勝利という形で着けてやってやるのだからなあっ!!」

「——がっ!」

狂気に歪んだ眼をカッ!と見開いた偽尊が刹那の一瞬で火廣金の柄を持つ手を持ち替え、柄を押し付けている十拳の刀身を支点に納刀されている火廣金の鞘を下から回し上げる。自分の渾身の抜剣がいとも簡単に受け止められた事に一瞬の動揺を抱いてしまった出雲那、その一瞬の隙を突かれ、黄金の炎を纏った鞘の刃部が鳩尾に叩き付けら

れて彼は胃液を吐き散らし宙に突き上げられた。

「ハッハーツ！葵柳流帯刀術、《激流衝（げきりゆうしよう）》っ!!」

宙に突き上げられた反動で仰け反り、無防備状態の出雲那の脳天にすかさず彼の頭上に跳躍した偽尊の兜割りが落とされる。

「がはあっ!!」

黄金の炎を纏った鞘の刃部に脳天から叩き落された出雲那の身体が爆撃機から落とされる爆弾の如く鉄板の床に墜突し、衝撃で爆砕するように鉄床を砕き蜘蛛の巣状のクレーターを形成する。硬質な床だったが為に叩き落された運動エネルギーの勢いを殺しきれずに彼の身体は床をバウンドして転がり、先程倒壊した工場倉庫の瓦礫の山の内の一つに突っ込んで瓦礫の山を跳ね飛ばした事でようやく勢いが止まりそのまま俯せに倒れる体勢で制止した。

「うっ、うう……」

「ほう、あの一撃をまともに頭に受けて死なないどころかまだ立つか？オリハルコンを彷彿させるような呆れた頑丈さだな出雲那」

「うる……せえ……テメエだけは——」

強大な気力を持ち一般人を遥かに超越する強固で頑丈な身体を有する星脈世代とはいえ脳天に痛烈な一撃を叩き付けられても尚立ち上がり向かって来ようとする出雲那

を見て偽尊は亀裂が生じてない鉄床に着地しつつ驚きと感嘆の声をあげる。

脳震盪で朦朧とする意識の中出雲那は震える脚で碎けた鉄床を踏みしめて敵を睨みつけ強がりと言うものの、その脚の震えが示す通り出雲那の身体はこの異界に入ってから連戦による疲労とダメージで見えるからにもう限界寸前だった。

——倒れてたまるかよ！コイツは勝手にオレの記憶を盗み視てオレの過去と尊の想いと人生を踏み躪り、そして何よりも尊との絆を嘲笑いやがったんだ！コイツだけは

「——絶対えにブツタ斬るっ!!!」

震える脚に鞭を打ち、残りの持てるチカラを出し尽くしてでもあのクソモノマネヤローを打倒してやると裂帛の気合いと共に銃から撃ち出される弾丸の如く出雲那は敵に突攻して行く。複数の残像を追従させて近接戦（クロスレンジ）に捉えると葵柳流の使い手同士の激しい打ち合いが開始された。

抜刀術にせよ帯刀術にせよ、葵柳流の真髄は「螺旋」だ。繰り出す技も身体の動作も【回転】の軌道で渦巻く【流れ】を生み出している。さながら衝突して移動しながらせめぎ合う二つの台風だ、出雲那が弧を描く高速の抜剣を繰り出せば偽尊が【朧撫子】で受け流しカウンターの抜剣が円の軌道を描く、【雷髓】を使用した超反応で出雲那が偽尊の【螺旋鋼突】のスクリュー突きを回るように躲しそのまま相手の腹に回し蹴りを叩き込

み吹つ飛ばしても距離が開く間も無く跳躍して離れず追撃する、弧を描いて打ち合う剣が嵐のような衝撃波を発して周囲に見える異界の朱い風景を吹き飛ばして行く。罅割れた鉄板の床を剥がし、工場倉庫の残骸を吹き飛ばし、工場と工場の間を走るコンクリートを蹂躪して二人の打ち合いは激しさを増して行く。暴風渦巻く中で独楽のように回りながら剣戟を繰り広げる二人はまるでハリケーンの中心でダンスを踊っているようだった。

—— やっぱりコイツはオレが知ってる尊の技と戦法しか使つて来ねえ。痛え過去を侮辱された所為で頭に血が上つていたからさつきはやられたが、冷静になつて対処すれば訳無えぜ！

「もらつたあああつー！」

右上から引くように斜めに振り下ろされる納刀状態の火廣金をギリギリまで体勢を屈めて回避し、相手が腕を振り切つた完璧なタイミングで出雲那は右腰に帯刀していた十拳を鞘から引き抜いた。剣戟の間の完璧な隙を突いた出雲那が狙つたのは再び偽尊の首だ。お前は何処の妖怪首置いてけだ!と言いたくなる程抜き放たれた霊力の刃は綺麗に相手の首筋へと吸い込まれて行く。

—— 今モノマネヤローが振るつた霊装の柄はオレから見て奴の左腰の位置だ。今から引き戻したつて間に合わねえよ！さつきみたいに【槌楯】で止められる事は無えつ

!!

勝利を確信して一気に刃を振り抜こうとする出雲那、だがこの時彼は自分が負ける要素が異界に入ってからからの連戦による疲労とダメージの蓄積量ぐらいいしか見当がつかず、加えて斬り合いに興じる昂揚感に酔っていた為に失念していたのだ……【勝利を確信した時こそ最大の間隙を生む】という戦いの鉄則を――

「なっ!？」

瞬間ガチイッ!という勢いよく硬い何かで硬い物を挟み込むような音が響き、その原因である目の前で起きた事象を目の当たりにして出雲那は驚愕のあまり千切れてしまいうような程眼を大きく見開いた。それは文字通りの「真剣白歯取り」だった。偽尊の首を切断すると思われた十拳の刃に彼は首を前に倒してその黄ばみの見当たらない真っ白な歯でかぶり付いて止めるという奇天烈な方法で斬首を免れていたのだ。

「ひよおりしだとおごっただが(勝利したと思っただか)? あはがはだが(浅はかだな)っ!!」
「っ!!」

偽尊は十拳の刃に噛みついたまま憎たらしいドヤ顔をして宇宙語(?)を言い、十拳に噛みついたまま首を大きく左右に揺さぶり引くと十拳の柄を握る左腕が引つ張られ出雲那の身体がその動きに合わせて左右に引かれ、それに乗じて偽尊が十拳を放すと出雲那は揺さぶられた反動でバランスを失い体勢を崩してしまう。

「本当に浅はかだな出雲那、貴様の考えなど読んでいるぞ、「敵が自分が記憶している葵柳尊が使った戦技戦術しかやって来ないのなら全てに対処する事など容易い」と思っているのだろうか？それは確かに間違いではない、俺は心の闇を映す陰、人の記憶から【形】と【チカラ】を再現する事しかできぬ・・・しかしだ、貴様まさか永きに亘る刻の中で失念してしまったわけではあるまいな？貴様と俺——武内出雲那と葵柳尊の間には戦術戦技を熟知しているようが覆せない決定的な【格の差】があるという事を！」

「・・・あ・・・」

完全に体勢を崩してしまいよろめく出雲那の口から失意の聲が漏れた。たった今眼前の敵が放出し出した大気を揺るがす桜色の闘気に当てられて思い出してしまったからだ、出雲那と尊の間にある【葵柳流の剣士としての決定的な格の差】を・・・。

「葵柳流抜刀術の【奥義】の一つ・・・《新月一閃（しんげついつせん）》」

過去の親友の陰がこれまでベルトの左腰側に差しつばなしだった葵の葉が彫られている荘厳な鞘に刀身を納めている太刀の柄に右手を添え、腰を後ろに限界まで捻り引き絞って闘気を溜めている。出雲那がそれを前にして放心気味に呟いた【奥義】の名・・・奥義とは葵柳流において【千旋（せんせん）】の階位に至る事のできた者に伝授される必殺技の事である。

葵柳流の門を潜った者は修練と実戦により身に付いた技の熟練度に応じて相応の階

位が与えられるシステムが存在し、一番下の階位は【初旋（しよせん）】と呼ばれ、次に【二旋（いつせん）】【十旋（じゅっせん）】【百旋（ひやくせん）】という感じで上の段位に上がる度に十倍単位で数字が増えて行く数え方だ。

出雲那に与えられている階位は【十旋】、葵柳流においてはこの階位を与えられてようやく半人前なのだが、その実力は一兵卒が相手なら一騎当千どころか万人が相手でも返り血一つ浴びずに殲滅が可能な程の強さを誇っている。逆に言えばそれでようやく半人前として認められるという事なのであり、葵柳流で高みを目指すという事がどれだけ過酷な道なのか、想像するだけでも顔面蒼白になる事であろう。

そして生前の葵柳尊が持っていた階位は奥義の伝承が許される【千旋】、この階位に至ればA級遊撃士やダイランディア軍の将官クラスなどの最上位級の戦士達とも渡り合えるという脅威の戦闘力が身に付き、一人前の使い手として認められる。半人前と一人前、二人の実力差は二年経った今でも縮まっていない。どんなに相手の手札を熟知していても素人が達人に敵う事がないように、葵柳流の剣士として半人前の出雲那は【剣姫】葵柳流美の血を引き継ぐ一人前の葵柳である尊には決して届きはしない……。

「夜天の闇に融けゆく月に引き裂かれ、桜の華と散れっ!!」

【新月一閃】——放つ刃が納まる鞘が相手に対して身体の後方に隠れるように限界まで腰を捻って引き絞り、全身に溜めた闘気を一気に解放すると同時に左手で鞘を水平に

上げ、太刀を右手で引き抜く。引き絞った腰を戻すバネを利用した遠心力で放たれた豪快な横一文字が無防備な雷鳥の生を断つ桜色の光刃を走らせる。

「クソッ!!!」

時計回りに半円を描いて迫り来る偽尊の太刀。身体のバランスを崩して無防備な出雲那がこの奥義を回避あるいは防ぐ事など不可能であり、彼の表情に死相が浮かんだ。

—— 奴の剣が遅く見えるのに身体が動かさねえ・・・死に際に陥る知覚加速（オーバーループ）ってやつか、冗談じゃねえっ！

自分の胸に迫る太刀の刃がスローモーションのように遅く感じた出雲那は自分がかここで死ぬ運命である事を悟り、それを必死に否定していた。

—— オレはまだ尊との約束を全然果たしていねえ！刀華さんが言っていた「成すべき責任」だってまだ見当もつかねえし、今日の夕方あの人に死ぬなって言われているのに裏切れるか!!

ゆっくりと死の刃が迫る中、彼はどうしようもないと理解していても生きる意志を折る事ができずに心の中でチカラの限り叫んでいた、死んでたまるか、負けてたまるかと・・・その時——

『——トックン』

・・・と、左腰の十拳と黄旋丸の下に重ねて帯刀していた【創生の雷刀】が小さく脈

を打ちだした。

——それにオレは終と……このクソツタレな夜を終わらせてまた今日の昼みたい
に——学園で皆とバカやって笑い合うんだよっ!!!

死の刃が彼の胸を薙ぐその瞬間だった。出雲那が心で溢れ出る渴望を叫ぶと同時に
【創生の雷刀】が覚醒の光を解き放ち、朱き煉獄に眩い光が齎された。

「うおっ!? なっ、何だこの光はっ!!」

とどめを刺す直前で突如相手の右腰に差ししてある太刀が目が眩む程強烈に発光した
為とその光が至近距離で目に入り、偽尊は眩しさのあまり腕を引いて眼を覆い、攻撃を
中断してしまった。それが武内出雲那を倒す最後のチャンス逃してしまったとも知
らずに……。

「これは……創生の雷刀（コイツ）の……?」

かくして覚醒の光は解き放たれ、武内出雲那が【伊邪那岐の創り手】として目覚める
時がやって来たのだった……異界のリトルガーデンを包み込んで行く眩い光、果たし
て【創生の雷刀】が秘めるチカラとは……?

創生神との契約、解放されしチカラと受け継がれる宿命

覚醒の光が膨れ上がりリトルガーデンを覆い尽くしていく……。

「女、よくここまで遮り続けたものだと褒めてやるが、そろそろ限界の色が視えるぞ。どうやらここまでのようだな……」

「くっ！」

——出雲那に異界化の収束を任せた手前、何としてもこの伐刀絶技をリトルガーデンに墜とさせるわけにはいかない。でも彼の言う通りもうそろそろ私の霊力が尽きてしまいそうで限界が近いわ。なんとかしないと……ん？

艦付近の空でプルートが放った黒き太陽を出雲那達が居るリトルガーデンに墜とさせないよう大質量の氷壁を隔てて落下を遮り抜かせないと全身全霊の霊力を注ぎ込んで踏ん張るも、あわやもう限界寸前のところまで氷壁を削られて来た為に切羽詰まった苦悶の声を漏らしていたサクヤの背にもその光は届いていた。

「あ……」

「なっ!?! いったい何事だ? あの目障りな光はっ!!」

自分が撃ち放った最大級の必殺伐刀絶技が進撃する道を遮る氷壁を突破するまであ

と数ミリ程度だというところで突如としてその軌道着弾地点に停泊してある航空母艦が眩い光の球形に覆い尽くされた光景が眼に飛び込んで来た為にプルートの動揺を露わにしていた。透き通る氷壁を貫通して射し込まれて来る光の射線を非常に鬱陶しうに左腕で遮ろうとして思わず【天カラ舞イ降りシ滅ビノ黒陽】の制御を乱してしまい、サクヤはその好機を逃さなかった。

——なんて心地の良い光なの。不思議ね、失った気力と霊力が漲ってくるわ。これなら——

「この太陽を押し返せる！ はあああああああああああ——っ!!!」

覚醒の光を背に浴びて回復した渾身の霊力を眼前で薄皮一枚黒き太陽の進攻を遮り続けている氷壁へと注ぎ込み、黒陽と闘ぎ合わされて巨大なクレータ―状に陥没している箇所を急速に盛り上げて黒陽をトランポリンの要領で朱き煉獄の空へと弾き返してみせる。光の射線に弄されていたプルートは一瞬の間に真横を通り過ぎて行つた自身の最大級の必殺伐刀絶技に信じられないと言わんばかりに絶句する。

「なん．．．だと．．．っ?!? 一瞬の制御を誤つてしまったとはいえ、その一瞬で俺の【天カラ舞イ降りシ滅ビノ黒陽】を．．．っ!!!」

「ハア、ハアッ!．．．この光は．．．うふふつ、出雲那つたら、遂に覚醒させたのね。

【伊邪那岐の創り手】としてのチカラを」

危機を跳ね除けたサクヤがりトルガーデンを覆う覚醒の光を見下ろして祝福の女神の微笑みを贈る一方、彼女が居る場より数km離れた空の戦場で更に激しい戦いを繰り広げ続けていた明日香とマリの眼にもその光が届いた。

「っ!!これは・・・」

概念ごと凍てつかせる異能与森羅万象を消し去る極光による激しいぶつかり合いで眼下に広がる炎海に氷粉（ダイヤモンドダスト）と光粉（アウローラダスト）が散りばめられる中で突然射し込んで来た眩い光に靈劍使いと極光の魔女は戦いの手を止めて光が射し込まれて来ているリトルガーデンの方角を振り向き、遠目に見えた光のドームを目にして怪訝混じりの驚愕を露わにする。

「この感じって、雰囲気はまるで違うけれどプルートの『冥界の死刀』が発するチカラと同じ・・・まさか、あの出雲那とかいう奴のっ!!」

マリには既知感があった。あの光のドームの中から溢れ出て来ている神々しいチカラは人間が持つ三大源力三種全てを神刀に宿る神の供物として捧げる事で引き換え得られる神のチカラの一部。あの光のドームは神刀の奥底で永き眠りから目覚めし神の魂が生まれながらにして三大源力三種全てを有する選ばれし特異存在と契約を交わす際に顕れる一時的な神域・・・見間違いない、彼女が親しく思う同僚の漆黒の少年剣士が一年と約半月前に【冥界の死刀】の深淵に眠る《死命の女神》を【伊邪那美の使

徒」として永き眠りから目覚めさせて契約し、死の黒焔を操る【冥界の焔（ヘルフレイム）】となつてしまつたあの日も……。

「……フンツ、この数分の間は何があつたのかは知らないが、あの雑草め【伊邪那岐の創り手】として本格的に覚醒しようだな……」

遅いぞ、ようやくか、待ちくたびれたぞ。光のドームの中のそれをこの異界に居る誰よりも濃く深く感じ取っている【伊邪那美の使徒】はそう言わんばかりに宿敵の覚醒に二色の眼を細めて思わず微笑を零してしまつていた。

「そうだ、俺の宿敵となるならばそうでなくてはならない。お前もそう思うだろう……」
【イザナミ】

プルートがそう問いた相手は彼の左腰に差してある【伊邪那美】と彫られている紫の鞘の中で同感の意を表すように一瞬の間に不気味な紫光を薄く発したのだつた。まるで深淵の闇底に潜むドス黒い何かが憎しみを向けるべき者を見つけた事に狂喜しているかのよう……。

創生の雷刀が唐突に凄まじく眩い光を放出したお蔭で絶体絶命の危機を脱する事ができた出雲那は今、膨張してリトルガーデンを丸ごと包み込んだその光に取り込まれた中にてなんとも心地良い不思議な浮遊感に身を委ねて眼を閉じていた。

——あれ？・・・オレは・・・どうなったんだ・・・。

見渡す限り白一色に染まった光の海の中を、武内出雲那の身体はまるで心地よい眠りに就いているかのようにフワフワと漂っている。

——何所だよ此処？・・・確かオレ、尊に化したクソモノマネグリードにやられかけて・・・そしたら腰の【創生の雷刀】が・・・光を・・・。

今、彼の存在がある世界を支配している白が濃く眩過ぎる為かこの場に入る直前まで対峙していた偽尊の姿は何処にも見当たらず、その戦いの場（バトルフィールド）であった異界のリトルガーデンの背景すらも視界に映せない・・・いや、そもそもこの光の世

界は本当にリトルガーデンの上なのだろうか？【創生の雷刀】が輝きを放ったあの瞬間に何所か別の異世界に強制転移してしまったという事だつて考えられる。或いは実のところ偽尊が放たれた眩い光に目が眩んで【新月一閃】を止めたというのは目の錯覚であつて真実は奴の問答無用の一閃により胴を両断されて即死し、今自分は魂魄だけの存在となつてあの世の境を漂っているのではないのか・・・。

——オレは・・・——

『——目覚めよ、我が魂宿りし神刀を手にする【資格者】よ・・・』

「んん？・・・何だ？——は、はああっ!!?」

自分という存在はどうなつてしまつたのかと思いを馳せていると突然として自分を目覚めさせようとする男性らしき声が入った為に出雲那は何だ？と思ひ、早朝の寝起きの様に瞼を手で擦つて上体をゆっくりと起こし目を開く。すると意識を覚醒させた途端に地に身を着けている感覚が無く、飛行スキルを使用していないにも係わらず辺り一面光しか無い謎空間の中をフワフワと浮遊している自分の現状に彼は戸惑いの声を上げてしまう。

「いったい何が、どうなつてんだ!?地面が何所にも無え？オレの身体、何で浮いて——」
 『気持ちは理解できないでもないが落ち着くがいい。此処は私が一時的に創り出した《神域（バックヤード）》——神と人が対話する事を許された聖域だ』

「——っ!? 誰だっ!」

自分が置かれた状況に動揺する出雲那の耳に再び謎の男性の声が聴こえてきた。錯覚ではない、出雲那は警戒して声の聴こえて来た方に振り向きその正体を確かめようとする。彼の視界は光の世界の一部に浮き出てきている何者かの影を捉えたのであった。

『よくぞ私を目覚めさせてくれた、【天の戦神】が人々に齎した三種のチカラを持ちて現世に生を受けた選ばれし者よ——』

語りだした影はみるみる内にその【魂の形】を創っていく——

『——私は【八百万の神刀】が一振り【創生の雷刀】に宿りし《二大創産神》が片柱——
——《創生神イザナギ》なり!』

そして真名を高らかに明かした瞬間、その形は姿を得て光の世界に顕現した。

「我がチカラを振るう資格を持つ選ばれし者よ、汝（なんじ）に問おう——」

それは大地を抉り取る鋭い爪を持ち、土色の毛並みを全身に纏う——

「——そなたが私の主（マスター）かつ？」

頭にチョンマゲを生やした人語を話すモグラであった……。

「……」

フツ、決まった……と手乗りサイズのマスコットのチョンマゲモグラが二足直立で立ち（此処に足場は無い筈だが……）、某聖杯戦争に登場するサーヴァントのような口上を言い放つてドヤ顔を向けてきているのを前にして出雲那は口を紡いで沈黙し硬直していた。鬼が出るのか蛇が出るのか多少緊張して身構えていたのに現れたのが所謂チンチクリンな謎マスコットだった為に緊張感が台無しになったからだ。

——……はあ？いきなり出て来て突然何言ってるんだこのナマモノ。神域？創生神イザナギ??

なんと云えばいいのか判らないような沈黙の空気が光の世界を支配する中で、ひたす

らに神妙不可思議で胡散臭く、創生神イザナギと自称したチンチクリンなチョンマゲ小モグラが向けて来ているドヤ顔を、片眉を小刻みにピクつかせつつ最大級の怪訝を含んだジト目で無言凝視する出雲那。今の彼の心情を簡潔に言うと「クソ馬鹿らしい戯言をほざいてんじやねえよ、超怪しいなこのナマモノ」といったところである。

そんな中で時が止まったかのような沈黙の見つめ合いを数秒間……その直後に自称イザナギのチョンマゲ小モグラのドヤ顔が蠟燭が融けたかのように垂れ下がった。

「——なんだ……おぬし……男で……ゴザルか」

がつくし……自称イザナギのチョンマゲ小モグラは出雲那に超絶と表せる程に落胆した表情を見せるとその場で四つん這いに倒れ込み、非常に無念そうに項垂れてしまった。そのナマモノの失礼千万の行為を目の当たりにして出雲那は内心イラツときた。

「んだよ？オレが男だと何か悪いってのかよ？」

「【イズナ】というおぬしの名を聞き、拙者の主となる者はピチピチボインボインな女子（おなご）かと思うて、契約を交わすこの刻を誠に楽しみに目覚めの刻を待つておつたというのに。いざ目を覚まし顔を会わせてみれば、その主はこのように未熟なハナタレ小僧とは……はああ……解つておつたが、人の世とはなんとも残酷でゴザルよのく」

ブチツ！あまりにも人にケンカを売つたその呻きに出雲那の中で何かが切れる音がした。

いるのは世界最大級の宗教団体《七曜教会》が信仰している《空の女神エイドス》だが、世界各国各地にはそれぞれ独自に伝わっている民間神話があり、出雲那や明日香の出身国である帝国ヤマトの言い伝えである「ヤマト創世神話」もまたその一つであるのだ。

「いいか? 【創生神イザナギ】ってのはな、遙か昔の世界がまだ無かった頃に神が住む国《タカマガハラ》の統治を巡って【三大創産神】のもう片柱の《産命神イザナミ》と数千年間争い続けて【生命】と【この世界】を創って相討ちになった神武者なんだよ!」

当然ながら【創生神イザナギ】が描かれた絵画も帝国ヤマトの首都にある大美術館に展示してあり、その肖像は荘厳な武者鎧に身を包んだ精悍な偉丈夫の姿で描かれている。出雲那は芸術を深く嗜む趣味など持つてはいないが、初等部学生時代は帝国ヤマトの学校に通っていた為に歴史の教科書でその肖像を見て記憶している。故に――

「テメエみたいなウザったいマスコットがああイザナギのわけが無えだろが! 寝言かましてんじゃねえぞボケナスツツ!!」

目の前のチョンマゲ小モグラがそのイザナギだと言われたところでそれをハイそうですかと信じる訳がないのだ、こんな馬鹿げた戯言かと・・・しかし、それを聴き入れた数秒の後に自称イザナギは実に可笑しそうに腹を抱えて笑いだしたのだった。

「ぶふっ・・・だは、あははははははははは!!」

「おい、何爆笑してんだ? 今オレが言った事が何か間違っているってえのかよ!!」

「はははは！いやいや、すまん。おぬしが言った事が誤っているというのではないでゴザルよ。このぷりちーでピチピチギヤルの視線を独り占めしてしまう拙者のこの姿は仮の姿でな。本来はおぬしの言った通りのダンディーなハンサム侍なのでゴザル」

「アホかつ！んな馬鹿げた話、信じるとても？」

何と言おうと信じる気のない出雲那は心底鬱陶しそうに自称イザナギの主張を突つ撥ねる姿勢だ。そしたら「ならば仕方がない」と呟いた自称イザナギが小さな片手の爪先を天に掲げてみせる。

「ならばこれを見ても信じぬでゴザルかな？——ほれっ！」

ざつくばらんにもう言い放つと同時にどこか神聖さを感じさせる神々しい白い雷光が掲げた爪先に迸った。

「——つて、うおおおっ!？」

その雷光は一筋の閃となつて発射され、出雲那の頬を掠めて後方の彼方へと直進して行き光の中へと消えて行つた。唐突に不意打ちを浴びせられた出雲那は無論、それをやつてきた張本人に文句を吐き出そうとする。

「デメエ、いったい何を——んんっ!？」

だが雷閃が光の彼方へと消えて行つたその刹那に彼の後髪を一陣の突風が撫で、それを不意に感じ取つた彼はその方角——つまり経つた今自称イザナギが撃ち放つた雷

閃が消えて行った方に振り向いてみると、其処には何時の間にか世界樹を連想させるような神聖な気質を纏った大樹が聳え立っていた為に眼を剥いて仰天の唸り声をあげてしまった。

「な、なんだあぁーっ!!?」

「はっはっは! どうだ驚いたでゴザルか? これぞ創生神たる我がチカラ、千の死に対し万の生を創造する《創生の神雷（デイバイン・ゲネシス）》っ! この世の【生】を司るチカラなりっ!!」

「じゃ、じゃあテメエ、マジで・・・」

あまりにも信じ難い事実指をわなわなと小刻みに震えさせて自称・・・否、正真正銘の創生神イザナギの化身に向ける。確認されるまでもないとイザナギは腰に手首を当てて「ブオッホン!」と一威張り喉を鳴らすと、理解したのなら早速本題に入ろうと先程とは打って変わった真摯な目で未だに動揺の震えが治まらない出雲那を見据え、口を切り出した。

「うむ。激しい闘争の猛り、おぬしの心の叫び、深淵の眠りの其処まで聴こえてきたでゴザルよ。大切な者の為に負けられぬと、勝利と未来（あした）を掴みたいと・・・その猛き魂の咆哮を聴き、神刀の内にて眠る拙者はこうして目覚めた。そして今っ! おぬしを真なる【伊邪那岐の創り手】とし、拙者と《創世の契り》を交えよう!!」

——勝手に痛々しく話を進めんじやねーっ!!

「さあつ！我がチカラを封じたこの鞘から刃を抜き放ち、永きに渡りその内に精製し続けた【創生の神雷】を解き放つがいいっ！それをもって契約は成るでゴザル!!」

まるでノリの良い宣教師の如く小さな両腕を光の天に大きく広げて揚言するイザナギに出雲那が内心でツツコミを入れていると、二人（一人と一匹？）の間に出雲那の腰に帯刀してあった筈の【創生の雷刀】が神々しい光を纏いて顕現していた。

「此処に引き込まれてからやけに腰が軽いなど思ってたぜ・・・」

鐔と鞘口の隙間からバチバチイ！と超電圧を内包する稲光を漏れ出している荘嚴な太刀を前にして出雲那は盛大な呆気に取り残されている。もうどうにでもなれよとその柄を手にとるとそこでイザナギが神妙な顔付きで「待った」をかけてくる。

「確かにおぬしは【伊邪那岐の創り手】として選ばれし者でゴザル、この場で今その鞘から刃を抜き放てば、おぬしは【生】を司る神のチカラを手に入れる。拙者が覚醒する直前までまるで歯が立たず斃されかけたおぬしの過去の友の陰影すらも圧倒できよう・・・」

自分で急かしておいて何を今更と創生の雷刀の柄を握った体勢でこちらに振り向き、訝しそうなジト目を向ける出雲那に「しかし」と間を置いてイザナギは真剣に向き合い問いかける。

「そのチカラを手にするという事は我が誓いの宿命をも受け継ぐという事に他ならんでゴザル！その刃を鞘から抜き放てばもうおぬしは後戻りする事は許されぬ！」

誰が言ったか「大いなるチカラには大いなる責任が伴う」との事だ。故にイザナギは己のチカラを授ける前にその宿命を背負う覚悟を主となる者に問わねばならない。

帝国ヤマトに伝わる「ヤマト創世神話」にはこの世界の創世以前、神々の世界の【座】を永きに亘り巡り争った【二大創産神】の内、この世に産み出す【命】を司るチカラを持つていた【産命神イザナミ】は戦いの最中、【死】を司る邪神にイザナギへの激しい憎悪と殺意に付け入れられてしまい、全ての魂を焼き滅する【冥界の焰（ヘルフレイム）】をその身から撒き散らす《冥王イザナミ》へと変貌してしまったとされている。これによつて「イザナミが千の命を殺し、それに対してイザナギが万の命を創る」という対極構図が出来上がったのだ。

「真の【伊邪那岐の創り手】となればこの未来（さき）、おぬしは【冥界の死刀（イザナミ）】を持つ【伊邪那美の使徒】を不倶戴天の敵として争い続ける宿命を背負う事となる。それはおぬしだけでなく、おぬしの周りをも巻き込み、いずれは世界全土に災厄を齎すかもしれぬでゴザル。少なくとも冥王イザナミの【死】はおぬしに近しい千の命を殺しに掛かるであろう——」

つまり、この剣を抜けば出雲那はあの【終末の蛇】の執行者——【冥界の焰】プル—

ト・A・イグナイトとどちらかが斃れるまで未来永劫争い続ける宿命が決定付けられてしまう。更には出雲那の近しい友人・知人達をも争いに巻き込み、最終的にはこの世界全ての命運が懸かった戦いへと発展するという事だ。一輝が、ステラが、善吉が、マイが、リインが、アリサが、刀華が、サクヤが、そして明日香が【伊邪那岐の創り手】の宿命の因果によつて起こされる戦いの最中に【伊邪那美の使徒】であるプルートをはじめとする立ちはだかつてくる敵対者の手にかかり、その命と魂を冥王イザナミに奪われてしまう未来だつて有り得る。故に――

「――それでもおぬしはその剣を抜く覚悟が有るでゴザルか？ 大切な者達が宿命に巻き込まれて死に直面するかもしれないぬとしても、おぬしはチカラを――いい加減長えんだよ！ シラけるから少し黙りやがれ!!」なんとっ?!

真剣な威圧を籠めてその覚悟を問おうとしたイザナギに対し出雲那は無礼にも空気を讀まずに話の腰を折る罵声を飛ばした。最近の若者である彼はイザナギの長い問い質しに大昔から生きている不老不死の賢人が主人公にチカラを与える際のテンプレの如き諄さを感じて凄まじく苛立ったようだ。

「そんな事テメエに言われなくても分かつてんだよ。オレも一輝達もこの戦島都市スクエアの四大学園に在学している戦士候補生なんだ。戦争だろうが【伊邪那岐の創り手】の宿命だろうが、【戦いに生きる覚悟】なんてこの都市に來た時点ですぐに決めていん

だよ!!」

「し、しかしでゴザr「うるせえっ!!」」

仲間達共々、覚悟はとつくに決まっていると豪語してくる出雲那に納得がいかないイザナギが「この宿命はそんな安いものではない」とその覚悟の認識の甘さを論そうと言い返そうとするも、出雲那はそれを大声で制して聞く耳を持たない。

「確かにテメエの言いたい事は正しいんだろうよ。オレ達は三大源力というチカラを持つていてもまだ人生の半分も生きていないガキだ、何億年も生きてきた神様から見たらオレ達の覚悟なんて底が浅く見えるんだろうよ・・・けどな、別にオレは覚悟があるから周りがどうなろうと構わないと思っっているクズじゃねえ」

そう言つて彼は創生の雷刀の柄を握つたまま柄尻に自身の額を寄せて眼を瞑り、静謐の中で仲間達の笑顔を思い浮かべてみる。

中等部に入りたての頃スクエアに来て最初の友となり、共にこれまで切磋琢磨してきた黒鉄一輝。

寮生活に慣れてきた頃東エリア周辺区域で迷惑行為を働いていたならず者チームー共をシメる際に居合わせたのが切っ掛けで協力して奴等を壊滅させた以後につるむようになつた人吉善吉。

一輝と組んで初出場した鳳凰四武祭の予選決勝でぶつかり、一進一退の好試合の末に

認め合い友としての付き合いをはじめたライン・シュバルツアーとアリサ・ラインフォルト。

実家の事情と純星煌式武装の対価によって人生を狂わされ絶望の末に自殺しかけたのを救い、皆と共に心の支えとして共に居る事で笑顔を得たマイ・ナツメ。

今日青学に編入してきた一年で知り合ったばかりだが、親友である一輝の大切な彼女であるステラ・ヴァーミリオン。

中等部の頃に決闘を申し込んで完敗し、その技と在り方に憧れを抱いて慕い、二年前の事件で危機に陥った幼馴染の親友を救う為に自らの奥義を伝授してくれて、チカラ及ばずその親友を失った後の現在も尚師であり姉のような存在としていつも自分を心配して見てくれている東堂刀華。

【伊邪那岐の創り手】のチカラ目当てで自分に協力を仰ぎに接触してきて、この異界に自分を乗せて誘った【終焉の盾】という怪しい裏組織のエージェントだが、刀華とはまた違う大人の姉っぽさに惹かれる雰囲気をしていて悪い感じはなく、裏組織のエージェントに見合った強さを持ち、今こうしている間にもプルートの放った黒き太陽をリトルガーデンに落とさせないよう防いでくれていて（出雲那が知らないからこう言ったが、実際にはもうその攻防は済んでいる）頼り甲斐のあるサクヤ・マキシマ。

そしてステラと同じく今日自分のクラスに編入してきたばかりで知り合って間もな

く、サクヤと同じ「終焉の盾」のエージェントであるという謎の経歴を持つており、おまけに才色兼備の風貌で何かと付けての優等生ぶりと気の強さが少し鼻に付くが、昨夜の異界化に巻き込まれてグリードに殺されかけた自分を救ってくれた命の恩人でどこか危なっかしくて放っておけない、その未来（さき）まで見据えているような量り知れない意志を奥に宿した透き通る碧眼と目を合わせると自分は不思議と惹かれてしまう、そんな神秘性をも感じさせてくれる同級生の柊明日香・・・。

のほほんとしたトニー、ライブルで青学の仲間であるステイングとローグ、同じくスターと変態（ダクネス）、刀華以外の青学生徒会の面々、いつも規則規則と鬱陶しいクレア達風紀委員、東エリア支部の遊撃士であるユーリとフェイト、その他にも多くの大切な知人達の笑顔が出雲那の脳裏を過ぎって行く（シグナム？さあ、知らんなあ）。どれもこれも武内出雲那にとって大切になった「個」だ、本音を言うとなんな大昔の神様が現代まで引き摺ってきた宿命なんか巻き込みたくなんかない。でも——

「オレは信じているんだよ、心強いダチ達は、頼りになる先輩達や先人のスクエアの戦士達は、そんな事でやられたりなんかしないってなあっ！仮に万が一その誰か下手打って殺されそうになったとしても、その時はオレが絶対に殺らせねえ。千の死に対して万の「代わり」を創るなんて自己満足なんざオレはごめんだ、ふざけんじゃねえ——

——オレは降りかかって来る千の危機をこの剣で斬って万の大切を救ってや
らああ——ツツ!!!」

その決意と共に彼は威勢よく創生の神が宿る剣を鞘から引き抜いた。迷いのないその雄姿をその眼に焼き付けたイザナギは観念したかのように、または自分の眼に狂いはなかつたと感嘆するかのように表情を緩ませていた。

「・・・そうか——」

遙か古に世界を生み出した聖なる雷が刀身を抜き取った鞘の鯉口から解き放たれて神域中に迸って行く。無数の白い稲光が周辺の空間に突き刺さると、そこからスウウッ

と消えて広がるように光の空間が徐々に消滅し出すのであった。

「——おぬしの決意、しかと受け止めたでゴザルよ。この刻をもって契約は成った。おぬしはこれで正統な「伊邪那岐の創り手」としてその神刀を抜く度に我が「創生の神雷」を振るう事が許され、同時に果てしなき闘争の宿命を背負ったのでゴザルが——」

感慨に浸るようにながら出雲那の背にこれからの事を語りかけているイザナギの化身もまた神域の消滅に同調するかのよう消えかかっている。その愛らしくも生意気そうな顔にはもう目の前の主を心配する色はない。

「——その決意が本物ならば大丈夫でゴザルな。拙者はそういう真つ直ぐな気概を持った者がピチピチギヤルな女子に次いで大好きでゴザルよ」

「ケツ、ピチピチギヤルで全部雰囲気台無しだったの、このスケベモグラが！てかそれ現代（いま）はもう死語だから!!」

「ははははッ、ではこの夜を明かした後にまた会おう！おぬしの正道に創生の栄光あれ——っ!!」

ここに契約を結んだ主の祝福を祈る高らかな創生神の一声をもって、光の神域は完全に消滅した・・・そしてそこにはもう、手乗りサイズのチョンマゲ小モグラの姿も消え去っていたのであった・・・。

Welcome to the SQUARE

「創生の雷刀」に宿るイザナギの魂が覚醒し、契約を終えた出雲那は正式に「伊邪那岐の創り手」となった。

リトルガーデンを覆っていた神域がその役目を終えた事で消滅し白い燐光が天へと昇る。その白が異界の空を支配していた煉獄の朱と融け合い、異界の空はまるで明日の陽が東より出でる直前のような暁闇（ぎょうあん）に染まり変わっていた。

神域の消滅に伴いそれに覆い隠されていたリトルガーデンが再び異界のハイウェイ終着点にその威容を現し、その甲板上に築かれているミリタリー区画の工場地帯に武内出雲那は舞い戻って来た。

「いきなり野暮用に行つちまつて悪かつたな。待ちくたびれてねえよな？クソモノマネグリード」

無骨な鉄板で舗装された工場広場にて出雲那と偽尊——ドツペルゲンガーの両雄は20mの距離を挟んで再び対峙する。

「解せぬぞ……突拍子もなく唐突に吐き気を催す程悍ましい光の領域内に幽閉され、気分を害し酔っていたところでようやく解放されたと思いきや……貴様、いったい

「それ」は何だ？」

前方に上げて指し出した偽りのその人差し指は息が詰まるような動揺に震えている。創生の雷刀が神域を展開する直前まで余裕の笑みで出雲那を圧倒する戦いを見せていたドツベルゲンガーは今、眼前で先程と変わらず右腰に帯刀している鞆に納刀された得物の柄を左手で握り抜刀を抜き放つ体勢を執ってこちらを不敵に睨みつけて向かい合っている戦士候補生の少年に得体の知れない畏れを抱いていた。何故なら――

――奴の全身から漲り溢れているあの不快な白き雷光から感じ取れる底知れぬ不可解な寒気は何だ？まるで首元に絶対零度の氷鎌を突き付けられたかのようなこの威圧感、尋常ではないぞ!!そしてそれ以上に奴が手に握っているあの果てしなく悍ましき強大なチカラを内に感じ取れる太刀は、いったい何だというのだっ!!?

発しているチカラの質と手に取った得物が先程とはまるで異なり、それはドツベルゲンガーにとって抗い切れない脅威を感じたからだ。

日の出が放つ曙の如く出雲那の全身を包み込んでいく神々しい光の膜と、その内側より超高密度の白い雷光をバチバチと音を立てて外へと放出し周囲の眼を焼くスパーク現象がまるでその脅威を語っているかのようだ。通常の武装でも固有霊装でもないその太刀の内に感じる不可解な何かが吐き気を催す程怖ろしい……そう、確かに今この異界の主であるドツベルゲンガーは恐怖に怯えているのだ。

「ああこれか？さっきの野暮用で貰ったモンだ」

先程中断した戦闘を通して自分より格下だと確信した筈の武内出雲那に対して……そんな風の後退り、震える声を振り絞る偽尊。

「は、はんっ！そうかよ。で、でもそれが何だというのだ？き、貴様と俺とでは覆せない決定的な格の差があるという事実に変わりはn「尊オオツ!!」ぬおおっ!!」

そこへ逃がすまいと相手の強がりに被せて出雲那が言い放つ。

「確かにオレはあれから二年経った今でもテメエに届けていねえド三流剣士さ。このままだとテメエに交わした【あの約束】も果たせる兆しすらも見えなくて、いつも自分（てめー）の弱さにむしやくしやしちまってしょうがねえ。でもなっ!!」

白き雷光迸る創生の雷刀を左手に持って対峙する相手に柄尻を掲げ、胸の内の熱き想いを叩き付けた。

「オレは負けねえ、大切なダチ達と笑って過ごす未来（あした）が見てえんだ！約束の為だけじゃねえ、この背には……この剣にはっ！色んな奴等から託された想いが詰まってるんだよっ!!」

自分が不甲斐無い所為で本来自分が相手をするべき伊邪那那美の使徒の足止めを引き受けたサクヤが代わりにこの異界の収束させるといふ大仕事を託してくれたこの背中に懸けて、世界創世期より眠り続けていたイザナギが負けられないという自分の思いに

応えて永き眠りから目覚め誓いと共に授けてくれたこの覚醒した創生の雷刀に懸けて、戦島都市スクエアという非常識な日常（ひだまり）で待つてくれている青学の親友達の元へ今日クラスの仲間になった明日香と共に帰る為にも、ここで倒れる訳にはいかない！

「行くぜ・・・尊」

出雲那は多くの誓いを胸に掲げた創生の雷刀を再び腰のベルトの右側へと差し、帯刀。足下の鉄板が碎ける程チカラ強く左脚を前に踏み出し、腰を大きく落として居合の体勢に入ると創生の雷刀の刀身が納まっている【伊邪那岐】と文字が彫られた荘厳な鞘の内部に世界を創造した白き雷——【創生の神雷】による莫大な電流が流された。

「覚悟しろよ・・・たぶん——」

青学最強候補にして生徒会長、東堂刀華より授けられし伝家の宝刀、【雷切】を放つつもりだ。しかし今までとは想像もつかないような桁違いなエネルギーの磁界が鞘の中に形成されていくのを見るとこのまま刀身を射出すれば間違いなく想像を絶する超規模の一閃が炸裂する事だろう。故に——

「——一切加減出来ねえからな！くっえ、——」

——《神薙（かんなぎ）・創雷一閃（そうらいいつせん）》——ツツツ!!!」
最早別次元の技に昇華されたそれを、改して付けた銘を言い放つと同時に抜き放つ
た。

瞬間、終明日香はリトルガーデンから解き放たれて来る絶大な規模のエネルギーを直感で感じ取り、瞬時に適切な対応を構想して即行動に移した。呆けているマリに隙を突いて即座に接近し、腕を取って真下の炎海の上にポツンと浮かんでいるビルの残骸の上に彼女を組み伏せる。

「ちよっ?!? アンタいきなり何すんのよっ?!?」

「早く伏せなさい、来るわっ!!」

「だから何が——ンガッ!? コラッ、あたしの頭におもいつきしデカパイ押し付けてんじゃん——」

更にその瞬間、明日香の拘束を振り解こうともがくマリの喚き声を遮るように二人が経った二秒前まで居た空間を左から右に大きく薙ぎ払うように何かが光速で通過して行く。そのエネルギーがあまりにも巨大な上、一流の戦士として活躍する星脈世代ですらも眼に映せない程通過した速度が疾過ぎた為に、それが彼女達の頭上を通過して行った直後の数秒間周囲の時間が停止したかのような錯覚に見舞われた。

色盲に陥ったかのように色が消え、全てが止まった世界で経った今頭上の空を通過して行った巨大な何かに対して困惑を露わにしていると、世界の無色は数秒で砕け散る。

少しでも救出するタイミングが遅れていたら二人は灼熱地獄の中で焼け落ちていたかもしれない……。

「ひい、ひい。ぜえ、ぜえ……じ、死ぬ」がと思っただあ“あ”……」

「あ……ありがとうございますサクヤさん。助かりました」

「危ないところだったわね明日香。危機感知スキルの精度と素早く回避行動に移れる即応能力はさすがは若手のエースと云ったところだけど、適切な退避場所を選択する判断力がまだまだ甘いわよ」

「返す言葉もありません……」

掴まっていたサクヤの細腕から身を離し、明日香は自分の未熟さに愕然と反省する重い表情を顔に浮かべながら「ブルーウオーカー」を用いて宙に立つ。しばらくして死にかけて事により生じていた焦燥と混乱を回復して正気に戻ったマリもまだ気分は悪そうだが、いつまでも誰ともわからない巨乳美人になんか引っ付いていられないと飛行魔法を発動して無言のままサクヤから離れて行った。近場の空中で気分良さそうにリトルガーデンを見下ろしているプルートの許へと戻るのだろうか。

「サクヤさん、今のはいったい……何か凄まじく強大なチカラが、あの船から……ッ!!」

神妙な顔付きで異界のリトルガーデンの方を見遣る明日香。先程まで彼女はリトル

ガーデンからかなり離れた場でマリとの戦闘を行っていたのだが、艦付近で戦闘していたサクヤに助けられたので解る通りリトルガーデンは今明日香の視界に大きく映されている故、それが二人が炎の高波によつてかなりの距離を押し流されて来た事実を裏付けている。その艦体を丸ごと飲み込んでも釣りが来る程の高さがあつた炎の高波は艦を飲み込む手前で鎮まつたようであり、お蔭で艦の甲板上的様子が空から一望できた。

——何があつたと言うの？・・・甲板上の街全体がまるで・・・森林を丸ごと伐採した後のように・・・。

明日香は甲板上の街の惨烈な有り様を目の当たりにしてその透き通るような碧眼を驚愕に染めていた。

偽ステイングのホーリーブレスにより中央から広くぼつかりと空いていた空洞の外側周辺に僅かに残っていたファミリア区画、甲板内の外周三分の一を占めていたターミナル区画、艦首側のミリタリー区画、その全ての領域に建っていた建築物の全てが山程巨大なチェンソーか何かで纏めて根本から切り倒したかのように一階分を残して綺麗さっぱりと消えて無くなつてしまつている。

いつたいていどうしてこんな有り様に・・・と伐採森林化してしまつたりトルガーデンの街全体の様子を探るように見渡していると——

「あれは・・・武内君？」

ミリタリー区画があつた艦首付近に出雲那の姿を発見する。彼は今明日香達が居る艦の左舷側に向いており、左手に持っている神々しい輝きを放つ神秘的な太刀を居合いで振り抜いたような体勢のまま眼前に倒れている敵らしき人物を辛く儂げな目をして見つめていた……。

「悪いな尊、こんな決着の着け方しちまってよ……」

創生の雷刀の刀身を鞘に納刀し、出雲那はバツが悪そうに経つた今一閃の下に斬り伏せた偽尊……ドツペルゲンガーに心からの謝罪を入れた。

「あ……あがあ……!!」

ドツベルゲンガーは出雲那の前に這いずりながら断末魔の苦鳴をあげていた。身体は肩から上と足首から下を残して消滅させられていて、頭からは黒い瘴気を噴出させている。奴は何処からどう視ても致命傷だった、武内出雲那はこの異界の主を遂に倒したのだ。だがその顔に勝利の喜びは無く、どこまでも無念な悲壮感で満たされている。

「恐らくもうお前と戦える機会なんか無えだろうな。こんな反則(チート)なんか使つて勝つたところでお前を超えられた訳じゃねえ。本当ならオレが負けていた……結局、最後までオレは葵柳流の剣士としてお前に勝つ事ができなかったな……」

それが悔しくて仕方がない、そんな無念さでいっぱい顔だ。

創生の雷刀を用いて抜き放たれた雷切——【神薙・創雷一閃】の威力はもはや別次元のものであった。太刀に宿りし創生神イザナギのチカラである【創生の神雷】という世界を創り出せる程のエネルギーで形成した磁界をもつて射出された太刀の刀身は超雷速を遙かに超越した絶速で振るわれた事で全てを薙ぎ払い、結果として先程の天災的な惨状を引き起こしたのだった。一閃の間に幅広く横に弧を描いた刃の延長線上に存在していた全ては総じて異界の果てまで真空刃により切断され、絶速の居合いによって発生した衝撃波は暁闇の空と朱い煉獄に敷き詰められた炎海を爆散しそれ等を天変地異の如く荒れ狂わせ、真空刃に切り裂かれたリトルガーデンの街はその衝撃波の影響を

間近で受けた為にその全てが異界の果てまで吹き飛ばされて行ってしまった。

「デメエが本物の尊じゃねえって事は解っているけどよ。それでもオレは・・・」

自分のチカラで勝ちたかった。尊に化けたドツペルゲンガーを倒せたのはあくまでも【神様から貰ったチカラ】のお蔭だから。例え偽物だろうと幼い頃から良きライバルとして競い合つて来た親友とのこの先もう二度と無いかもしれない一騎打ちを借り物のチカラで決着を着けてしまった事を出雲那は虚しく想い、それが切なかつた・・・。

そんな罪悪感を孕んだ視線で徐々に消滅していく様を見下ろされていたドツペルゲンガーは清々しく鼻を鳴らした。

「・・・ふつ、気落ちするんじゃない、勝者は胸を張るべきだ」

その口から吐き出された言葉は倒された事の恨み言でも出雲那の泣き言に対する嘲笑でもなく、意外にも励まし言葉であつた。

「二振りの剣も使い手である剣士が一より鍛え製作したものではないだろう。他者から授かったチカラを行使して勝とうが卑怯な行為などではない。勝者は勝利を謳い、敗者は敗北を嘆く。それが勝負の掟なのだから、勝者である貴様がそんなに沈んだ貌をしていては、俺は倒された甲斐が無いではないか」

「お前・・・」

「解つたのなら誇らしくしている。俺はもう逝く・・・」

徐々に光の粉となって消えて逝こうとする偽尊が見せている精悍な顔付きは二年前に亡くなった親友のそれと遜色は無かった。ドツペルゲンガーというグリードの特性は「人の心を映し出す陰」なのだから、グリードを悪霊たらしめる人の悪しき感情が浄化されたのなら、その言葉と想いは紛れも無い、葵柳尊本人の・・・。

「尊——ッ!!」

出雲那は消え逝こうとする亡き親友の陰に誓いを叫ぶ。

「オレはお前との約束を絶対に果たしてみせる! 『伊邪那岐の創り手』としての宿命が何だ? 自分の成すべき責任が見つからないからどうした? オレはどこまでも強くなって、襲い掛かって来る奴等からオレの大切な『個』を救い続けてやるぜ!! だから・・・あの世で一時も目を離さずに観ているよな、尊っ!!」

「ああ、さらばだ出雲那。我が生涯の親友(とも)よ——」

尊の陰は出雲那にそう別れを告げると一切の未練も無しと言っているかのような澄んだ黙顔になり・・・完全に光の粉となって暁闇の天(そら)へと還って逝ったのだ。た・・・。

「あばよ・・・ダチ公!」

見上げる天へと昇って逝く親友にチカラ強く別れを告げ返したその顔にはもう、憂いなどは無かった・・・。

尊の陰が暁闇の空に消えて逝く様は魂律士が仕事の一環として行っている《魂葬（こんそう）》にも似ていた。その様子を最後まで見届けると煉獄の異界に光が満ち出した。「サクヤさん、これって」

「ええ、出雲那がこの異界の主を倒してくれたお蔭で異界化が収束をはじめたのね」

まるで世界が浄化されていくような景色の中で、明日香とサクヤは出雲那の活躍によつてこの異界を攻略完了したのだという事を実感していた。敵対組織の実力者と戦い、助つ人の少年が秘めたチカラを覚醒させるなど、色々な事があつて長かったこの夜もようやく終わりの時を迎えたのだ。

「フフツ、ちよつと危なかつたけれども、初めての異界攻略にしては上出来ね♪ ドツペルゲンガーはその性質故に戦う人間によつては《グリムグリード》級の討伐難易度になる事もあるS級のエルダーグリードだったっていうのに、それを一人で倒しちゃうなんて。彼は即戦力として十分役に立つてくれそうじゃない、ねえ明日香?」

「.....」

ドツペルゲンガーを倒してこの異界を収束させるといふ大役を果たした出雲那をサクヤは大いに称賛しているが、彼女に同意を求められた明日香は何やら難しい表情をしてリトルゲンデン上の出雲那をじつと見つめている。

「おい、貴様ら」

眉間に皺を寄せた明日香が何かを言いたそうにサクヤと視線を合わせようとすると、彼女達の後ろから厨二病臭い高圧的な男の声が掛かつて来た。二人がハツと振り返って見上げると其処に飛行スキルで滞空していた二人は無論の事、彼女ら終焉の盾の敵対組織である終末の蛇の執行者、ブルート・A・イグナイトと二階堂マリであった。

「あの伊邪那岐の雑魚に伝えておけ!」チカラに覚醒したからには貴様は俺の倒すべき宿敵だ。次に会う刻は容赦なくその魂、我が死の黒焰をもつて塵も残さず灰にしてやる。努々忘れるな、冥界の王の死手は何時だろうと貴様と貴様に連なる総てを死の世界に墮とさんと足下の血溜まりの底で蠢いているぞ!」となあつ!!」

と、プルートの右手に握った「冥界の死刀（イザリナミ）」が納められている鞆尻を眼下の明日香とサクヤ——並びに更にずつと下に居る出雲那に向けて高圧的に忠告を言い放つて済ますと、返事が返つて来る間も待たずに踵を返して飛び発つて行く。

「この異界の主はハズレだ、もう此処に用は無い。とつとと帰還するぞ、マリ！」

「あ!? コラッ、ちよつと待ちなさいよプルート!!」

マリの制止も聞かずに素つ氣無く徐々に光が満たされていく暁闇の空へと飛び去るプルート・・・彼が言つたように次に出雲那とプルートが出くわす事があれば、その時は恐らく周りを巻き込んだ本気の殺し合いになつてしまふ事だろう。それが「八百万の神刀」に宿る「二大創産神」に選ばれし二人の宿命なのだから・・・。

「まったくアイツはもう、少しは人の話を聞けつてーのっ!・・・ったくー!」

自分のパートナーが飛び去つた方を見上げてマリは無視された事に悪態を吐き、しようがない人だなと両腕と両脚を組みつつ苛立ちを吐き捨てるように呆れ顔を作つて明日香に視線を向ける。その眼は何やら照れ隠しをするように宙を泳いでいて、妙にこそばゆそくな表情だ。若干頬も朱らいでいる。

「あのさ・・・そのう・・・さつきはありがとう、助けてくれて・・・」

さつきというのは明日香が彼女を出雲那が放つた「神薙・創雷一閃」の真空波が通過する射線上から引き下ろして庇つた時の事だ。もしあの時明日香が自分の身を優先し

てマリを庇わずにより安全な回避行動に移っていたとしたなら、彼女は今頃魂魄となつて暁闇の空へと消えて逝つた尊の陰と共に黄泉の国へと旅立っていた事だろう。故に敵同士でありながらも自らの命を顧みず自分の命を救つてくれた明日香にマリは律儀にも感謝を伝えているのだ。右手の人差し指で蟀谷を掻きながら彼女が不器用丸出しでお礼を述べる様はなんとも初心で可愛らしい感じがする。

「マリ、貴女……」

「か、勘違いしないでよね。べ、別にアンタと友達になりたいと思つてお礼を言つたわけじゃないんだからっ！」

「友達つて、何もそこまで……」

相手から優しい眼を向けられた事にテンパつてマリは思わずまるで隠せていない心の内を盛大に曝け出しつつ明日香に蟀谷を掻いていた指をビシツと差し向けて顔を真っ赤にしながら教科書通りのツンデレ台詞をかました。なんて恥ずかしい発言をしているのこの子は？明日香はマリの言動に軽く引いたが、内心拒絶しているわけでもないように、相手の熱視線から逃れるように眼を閉じこちらも照れ隠しするように若干頬を朱く染めているのを見ると満更でもなさそうだ。お互いにツンケンしたりクールぶつて本音を隠してしまつたりと素直になれないところがある故にどこか通じ合える要素があるのかもしれない。そんな二人の微笑ましいやり取りを見ているサクヤが「ク

スクスツ」と温かな微笑をしている所為で余計に二人は居た堪れない気持ちになった。「と、とにかく！あたしとアンタ達はあくまでも敵対組織のエージェント同士、馴れ合う訳にはいかないのよ！」

「ええ、そうね、貴女の言う通りよ。個人的にはちよつと残念だなとは思うけどね・・・貴女、あの終末の蛇の執行者にしては良い子っぽいし」

「ななな、なに言つてんのアンタツ?! よよ、余裕かましてんじやないわよよよ——つ!!」

だが精神的な面では明日香の方が一枚上手のようである。余裕の笑みで思いがけない言葉を返されたマリは益々赤面して明らかな挙動不審となり、もう我慢の限界であった。

「お、憶えてなさいよ！今日のところは退いてやるけど、次に会った時はこの美少女天才魔導士マリさんがアンタをケチョンケチョンにして今日着けられなかった決着を着けてやるんだからねっ!!」

「ふふっ、それはこつちも同じよ。次の機会があつたら決着を着けましょう、その時を楽しみにしているわ」

嘗められて堪るかとかケっぱち気味な勢いで明日香に向けて徹底抗戦の意を伝え飛び去ろうとするマリだったが、明日香が余裕の笑みを全く崩そうとせず自身の豊満な胸

を張って返答してくるものだから——

「キィーッ！ やっぱこの女ムカつくわーッ！ ほんとマジで次に会ったらそのデカパイ、極光魔法で消し飛ばしてやるうーッ！ おぼえてろよチキシヨオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！！」

追撃で自分のコンプレックスまで刺激されたのが精神的なとどめとなり、マリはテンプレな捨て台詞を絶叫しながらプルートの後を追って逃げるように飛び去って行ったのだった……。

こうしている間にも異界化を収束させていく光はどんどんと煉獄の朱を侵食し満たされてきている。どういう訳か謎だが完全に収束が完了すればこの異界内に身を置いている外の世界の生命は皆例外なく外の世界に強制送還させられる仕組みになっている。この分だとそれはもう間もなくだ。

「明日香。出雲那を迎えに行つてあげなさい。貴方、彼に何か言いたい事があるのでしよう？」

明日香はサクヤの言う事に従い殺風景と化したリトルガーデンの甲板へと跳び降りて行く。本当はサクヤにも問い質したい事柄は山程あるのだが、今は連戦で疲れ切っている出雲那を異界化が収束する前に回収するのが先決だ。外の世界に戻される際に付近に居なければ別の場所に放り出される可能性がある為、普通ではない消耗をしている

彼がもし単独で外の世界に戻されたところを都市の警備隊やギルドの遊撃士などの【表】の公務組織の人間に見つかりでもしたら彼女達【裏】の人間にとつて非常に面倒な事に成り兼ねないだろう。故に明日香は裏のプロとしてこちらを優先したのだ。

「ハア、ハア。ああ、マジ疲れたあ・・・ハア、ハア、ハア、身体中が痛え・・・死ぬう・・・」

案の定出雲那は既に光の絨毯となり果てているリトルガーデンの甲板の上に仰向けで大の字に倒れ込んで激しく疲労困憊していた。この異界に突入してから煉獄の瘴気の中長い距離の空中回廊を襲い掛かって来る数多のグリードを殲滅しながら駆け抜け、ハイウェイに現れた終末の蛇の執行者にして【伊邪那美の使徒】であるプルートと限界ギリギリの死闘を繰り広げ、人によつては最上級のグリードクラスにもなるドツペルゲンガーを相手に死力を尽くして戦うという強敵との連戦に継ぐ連戦を続け様にやったのだ、こうなるのも無理はない。

「武内君ッ！」

血相を変えて光の絨毯の上に降り立った明日香は倒れている出雲那の許へと駆け寄つて行き、険しい表情で彼の顔を睥睨する。見下ろした碧眼には心配と怒りの色が入り交じっていた。

「よう終、お前無事だったんだな。よかつたぜ・・・」

「【よかつたぜ】じゃないわ！貴方をやっているのよっ!!」

「うおおっ!? 何いきなりキレてんだテメー——うっ?!」

人が身を安じた事を言ったのに叱咤罵声が返つて来た為に出雲那は訳が解らずその劍幕に慄き、咄嗟に上体を起こしてその事に抗議をしようとするが、明日香の尋常ならざる威圧に気圧されて開こうとした口を黙らせてしまう。クールな美少女優等生面をしていた筈の彼女の整った顔付きが今にも泣き出しそうな険相に染まっていたからだ。

「初めて会った時から思っていたけれど、貴方バカなの? 先日死にそうになったというのに懲りず、頼まれたからといって【裏】の事情に首を突っ込んで自分が死にかけた場所に再び足を踏み入れて来て! 人の言う事も聞かずに勝手に単独で【裏】のプロ相手に挑み掛かつて行つて! 挙句に背負わなくてもいい責任を背負い、こうして死にそうになる程ボロボロになるまで無茶をする!! 貴方がいい加減にしなさい!」

「柊……お前、なにを言つて——」

異界を満たしていく光が一瞬にして霧散するような錯覚を見せられる程の威圧的な劍幕を彼女から浴びせられる理由が理解できず出雲那は動揺するままに理由を罵声を浴びせてくる張本人に求めようとするが、険相の表情のまま彼女が急に自分の顔にズイツと迫るように屈み込み勢いで両肩を掴み押さえつけてきた為に驚いて言葉を詰まらせてしまう。唇同士が触れそうな至近距離で睨み訴えるような彼女の迫力が相手に一切の問答を許さないからだ。

「裏」の世界の戦いは遊びじゃないのよ。運に運が重なったお蔭で辛うじて異界の主に勝てたからって、ヒーローを気取って調子に乗らないで！ 貴方その間に何回死に掛けたと思っているの？ 私やサクヤさんが居なかつたら無事じゃ済まなかつたでしょうね！」

「——ッ!!」

言葉だけなら見下した蔑みのように聞こえるが、至近距離で視界全体に広がっている彼女の表情は真剣そのもので蔑みは一切存在していない。激しい怒気を滲ませた視線で真つ直ぐと相手の眼を射貫いている碧眼の奥に見え隠れしているのは相手の身を安じる気持ちそのもの。要するに明日香は「表」の人間である出雲那を非常に心配している、そんな出雲那が死ぬ程無茶な戦いをした為に物凄く怒っているというわけだ。全ては出雲那を気遣うが故の剣幕なのだ。

「勘違いしないで、別に私は貴方を貶める為に言っている訳じゃないわ。サクヤさんは貴方の実力を過剰な程に認めているみたいだけど、「表」の人間を「裏」の世界に関わらせるべきではない。この異界が収束し終えて外の世界に戻ったのなら、貴方はもう二度と裏世界（わたしたち）の事情に立ち入って来ないで。これはプロとしての忠告よ」

冷徹な言葉で言いたい事を言い終えた明日香は両手で押さえ込んでいた出雲那の両肩を解放して立ち上がり、拒絶と心配を入り交じらせた視線で圧倒されっぱなしの彼の顔を見下ろし無言の圧力をもって返答を訴えてきている。忠告を素直に受け入れて引

き下がるのならばそれでよし、もし半端な覚悟でこれからも【裏】の世界に土足で踏み入るつもりならば容赦はしない。

——私は貴方に手荒な事はしたくないわ。お願いだからおとなしく忠告を聞き入れて。貴方が裏に関わって傷つく必要はないの、だから——

「——ぎげんじゃねえよ……テメエ」

最大限の威圧と慈悲を込めた彼女の氷視線に対して出雲那が返してきた応答は了解でも拒否でもない、驚く事に何かを傷付けられて憤りを覚えたような熱視線を正面衝突させてきたのだ。

「誰がヒーローを気取って調子に乗ってるだ？ふぎげんな！オレはそんなくだらねえ自己満足の為に戦ったんじゃねえっ!!」

「っ!？」

床を足で叩き割るような勢いで立ち上がり、数秒前のように唇同士が接触しそうな程に迫って胸の内の憤慨を機関銃の如く叩き付けてきた出雲那に、今度は逆に明日香の方が気圧された。尤も、それは自分がした忠告に対して相手がしてきた行動が予想外過ぎた故の驚愕に他ならないが、いつの間にか攻勢が逆転してしまつた事に動揺が隠せない。何故そこでヒーローを気取つたとの指摘に心外だと義憤を訴える？明日香はまるで珍獣を前にしたかのように眼を見開いた。そんな彼女に出雲那は至近距離で心の内

に溜まっていたモノを吐き出すように言う。

「柀・・・お前なに人に何も言わねえで一人で勝手にこんな危険な戦いをしに行きやがってんだ？心配・・・したんだぞ」

それは誰にも内緒で単独危険を冒しに行った明日香に対する不満による悲嘆であった。その言葉の通り出雲那は心配に嘆いた面に表情を変化させ、困惑する明日香の碧眼を哀しみを入り混じらせた焦がれるような視線できつく見つめ、離さない。言いたい事があつて仕方がなかったのは彼女だけではないのだ。

「お前の言う事をシカトして無茶をした事は謝るよ。【裏】の世界の戦いの厳しさは昨日今日の戦いを通して思い知った。確かにオレは命知らずの未熟者だ・・・けどな、お前がどんなに凄腕のエージェントだろうが、お前はもうオレの大切なダチで仲間なんだから。仲間が危険な目に遭っているかもしれねえつてのに、心配して助けに行かねえ理由があるかよっ!!」

「な？・・・貴方・・・」

次々と相手の口から吐き出されて来る予想外でド直球な言葉の数々を受けて思わず呆氣に取られてしまう明日香。

——武内君、貴方今日学園に編入してきたばかりの私の事を仲間だなんて・・・。そんな風に思っていてくれたんだ。そう相手の氣心を理解した彼女はこの状況が恥

ずかしく思つたのか、頬を朱らめて内心動転している。プロでもない君に心配される筋合いはないとも思つてはいるがその反面知り合つたばかりである自分の存在を仲間だと認めてくれていてはいる彼に対して嬉しくも感じている。たとえ彼女自身がそれを望んでいなくとも、真正面から好意を向けられるのは照れくさくて仕方がないだろう。明日香はそんな浮付いた気を落ち着けようと一度呼吸を整える。

「ううん、コホンツッ！・・・それは余計なお世話よ。心配してくれたのはありがたいが深く思ふけれど、私は【裏】の人間。【表】の世界の人達とは表面上の付き合いはできるけれど、深く相容れる事はできないし、してはいけないものなの。それが【表】と【裏】の秩序というもの。【裏】の世界の脅威が【表】に危害を及ぼさないようにするのを仕事としている私が【表】の住人を巻き込んで危険な目に遭わせていたら本末転倒でしょう。だから——」

「だから自分の事は気にしないでもう係わつて来るなつてか？イヤだね。見ず知らずの他人なら何所で何をしてどうなるうと知つた事じゃねえが、大切な知り合い——ましてや仲間が危険な事をしているのを知らん顔をして平和な日常を過ごすだなんてクソ野郎みたいな真似できるもんかよ！」

「貴方、いい加減に——？」

幾ら言つても全く退く気配もない出雲那に苛立ちが頂点に達しそうになつた明日香

は、こうなったらハッキリと「貴方は実力不足で足手纏いだわ、だからもう【裏】の戦いに踏み入って来ないで！」と言う文句をぶつけてやって現実の前に黙らせてやろうかと思っていたが、異常に辛そうな雰囲気纏って呻きだした出雲那の悲愴な顔付きを見て思いとどまった。

「イヤだ。もう何にも、オレの大切な何かを奪われたくねえ。奪われて、堪るかよ……!!」

「……」

「プロじゃねえからとか【裏】の世界の秩序だとか、【伊邪那岐の創り手】の宿命だとか、そんなの関係あるかよ。オレはオレが大切に思った【個】が大事だ。非常識で騒がしく退屈しねえスクエアでの日常が、死んだダチと約束して絶対に達成してやりたいと必死こいて目指している個人的な目標が、一緒につるんで決闘（デュエル）してバカやって笑い合うと楽しくて仕方がないバカな仲間達がよお。そんなオレの大切な【個】の中にお前はもう入れちまってんだ、そんなお前の助けになつてやりたいと戦う事が欺瞞だなんて誰にも言わせねえ。言わせて堪るかっ!!」

武内出雲那が持つ絶対的価値観（アイデンティティ）は【知らない【全】より大事な【個】を救う】。その言葉は偽りではないというのは彼の眼を見れば理解できる、濁りの無い真っ直ぐな眼だ。明日香はそんな熱苦しいような視線を至近距離で受け止めた

為に再び呆気にとられて沈黙してしまふ。

「……ふふ、ふふふ——」

そして数秒の沈黙の後、真剣に暑苦しい訴えを孕んだ熱視線を至近距離で受け続けるのが何だか居た堪れなく感じてきたようであり、調子を狂わされたのがおかしく思つたのか、突然口を片手で押さえて笑い声を出していた。

「あはははははは！ふふつ、あは、あはははははは——つ!!」

それはもう恥ずかし過ぎて、おかし過ぎて、とてもじゃないけど耐えられない。そんな風に彼女は至近距離で見つめて来ている相手から身を振じらせて距離を少し離し、腹を抱えて大★爆★笑！お前クールな優等生キヤラは何処に行つた？それ程までに気持ちの良い笑い声が収束の光に覆われかけている異界の空に響き渡っている。そんな彼女を見た出雲那もまたちよつとした羞恥心を感じて思わず頬を朱らめてしまふ。

「んだよう？確かにオレも今のはちよつとばつかクセエ事言つちまつたなどは思つたけどよ。何もそこまで爆笑する事ねえだろおが！」

「——ははははは！ふふつ。ご、ごめんなさい。くくつ、だつて貴方。そ、そんな真剣にまじまじと私を見つめてきて、よくあるマンガの主人公みたいな恥ずかしいセリフを本気で……ぶぶつ、あー、おかしいわ！」

こうして一通り愉快に笑い尽きると、明日香は一度深呼吸をして自分の気の荒れ模様

を鎮静し、改めて出雲那と向き合った。

「貴方の気持ちはよくわかったわ、ヒーロー気取りだなんて言つてごめんなさい。あなたを協力させるかどうかは少し考えさせてもらうけれど、少なくとももう何も言わずに異界探索に出て行つて心配させるような事はしないわ、約束する」

「こつちこそ、異界探索のプロであるお前の言葉をシカトして行つてすまなかつた。それからありがとうな、二度も危ないところを助けてくれて。お前なんだろ柙？ 昨日の夜、異界化したアーケード街でオレ（とついでにシグナム先輩）がグリード共に殺られそうになったところを助けてくれたのは」

「ふふふ。やっぱり昨夜貴方に掛けた記憶消去の術は効いていなかったのね。昼間、貴方が遊撃士さん達の事情聴取に曖昧ながらも昨夜の出来事の内容を述べられていたから、まさかと思つて少し焦つたのよ。組織の《技術開発局》から支給されていた最新式の機能を搭載した特殊携帯端末が故障しているかどうかを慌てて調べなおしてしまつたくらいに」

「ああ、あの時横目で見たお前の携帯いじりはそれだったのかあ。てつきり話を聞かないで不真面目に携帯アプリを開いて遊んでいるのかと」

「あら、失礼ね。端末を調べながらしつかりと聞いていたに決まつているじゃない。貴方、生徒会長さんの怖い眼で睨まれて視線が宙に泳いでいたわよ？ ふふつ、どうやら

人に何も言わないで誰かを心配させているのはお互い様のようなね」

「ぎくつ！何で携帯見ながらそんなとこまで目が回せるんだよお前。べ、別にオレは……」

「ふっ、ふふふふー！」

「あ……ふ、へへっ！」

光満ちていく世界の中で互いに至らなかつたところを謝罪し合い、良い雰囲気のまま時間の許す限り他愛ない談笑に花を咲かす二人。そこにはもう先程のような重い陰相は存在していない。これで心置きなく明日の学園の教室に顔を出す事ができるだろう。この先如何なる困難と宿命が彼等を待ち受けているであろうが、創生神イザナギとの契約により覚醒した「創生の雷刀（イザナギ）」のチカラと仲間達との結束の絆で立ち塞がる壁を乗り越えて未来（さき）へと進み続ければ、きっと……。

「あ、そうだ終。もう一つお前に言うべき事があつたぜ」

「ん？何、武内君」

この長かつた夜もようやく明ける。二人が征く未来（あした）を祝福する朝日のような光に包まれながら、武内出雲那は気取るような微笑みを浮かべて目の前の編入生——
—青竜学園高等部二年A組の新たな仲間、柊明日香へと歓迎の手を差し伸べた。

「Welcome to the SQUARE（ようこそ、戦島都市スクエアへ）！」

ハチャメチャな戦士達との非常識な日常ライフの中で、楽しく一緒にバカ騒ぎしていいぞ、終明日香！」

そのあまりにも頭の悪く清々しい歓迎の言葉に呆れるように苦笑しながら明日香が差し出されたその手を取った瞬間、収束の光が煉獄の異界を完全に満たし、夜は明けるのだった……。

銀綺の一刀と復讐の幻弾編

夜明けと共に目覚める出雲那、新たなる非日常の始まり

『——いたぞ、〔反乱軍（リターナー）〕だ！』

——？・・・なん・・・だ？

『男とガキは射殺し、女は捕らえろ！』

——うるせえな・・・けどなんだかやけに柔らけえし温けえ。それに妙に心地がいぜ・・・？？

『この先の岬に船を泊めてある。俺が奴等を引き付けている間に君はその子連れて早く脱出するんだ！』

『そんなのイヤよ！あなたも一緒に!!』

——この柔らかさと声は女か？抱きかかえられているみてえで身動きがとれねえ・・・てかオレの手ってこんなに小っこかったっけか？

『頼む。その子と・・・出雲那と共に未来を生きてくれ!』

——つ!?!・・・このオッサン、何でオレの・・・名前を・・・？

『じゃ、暫くお別れだ、元気でな〔リリア〕！心配しなくても大丈夫だよ、奴等を撒いた

「俺も直ぐに君達の後を追うからさ！」

—— おふくろの名前まで……じゃあまさか、このオッサンは……!?

『それまで出雲那の事は頼んだ、しっかりと守ってやってくれ!』

—— ……駄目だ、この女の胸が心地良過ぎて眠くなってきた……。

『成長してデカくなったらきつと女の子にモテモテなナイスガイになるぞ』出雲那は！
何故ならその子は俺と君の——』

—— ……温ったけえ……。——

が隙間無く綺麗に並べるように嵌め込まれている。寮の自室だとしたらルームメイトの一輝と共同で使用している二段ベッドがある筈なのに何故か自分は畳の上に敷かれた布団に入っているというこの現状は全く身に憶えの無い場に居るのだという確たる証拠であった。

「この部屋の様式は帝国ヤマトの・・・アンタ、いった——い」

中年男性を布団から追い出し、この状況について問い質そうと上体を起こすとズキリと脳天に鈍い痛みが奔り、掌で押さえる。するとその掌と額の間を遮るザラリとした布のような感触が。

「これは・・・包帯?」

気が付くと自分は何故か全身包帯姿になっているではないか。何時こんなになる程の負傷をしたんだと一瞬の戸惑いを露わにするが、狼狽えていても何の解決にもならない。故に出雲那は落ち着きを取り戻し、気を失う前に何事があったのかを可能な限り自分の記憶から引つ張り出して情報を整理してみる。

———「そういう俺、終の奴を連れ戻しに異界に入って、【終末の蛇(ヨルムンガンド)】の執行者である【伊邪那美の使徒】のプルートの癖好かない厨二野郎にフルボッコにされたり、【創生神イザナギ】とかいうチンチクリンエロモグラと契約してオレの持つ【創生の雷刀(イザナギ)】の内に眠っていたチカラを解放して、それでドツペルゲン

ガーとかいうモノマネ好きの化物を倒して異界を収束させたんだっ・・・か？

全身包帯姿になる程のダメージを負っている事から考えてそれはおそらく夢ではない・・・。だつたら何故自分は今こんな見知らぬ部屋でぐっすりと眠っていたのだろうか？と困惑気味に疑問に思っていると唐突にこの部屋の出入り口である襖が開き、またもや見知らぬ一人の男性が劇軽な装いで入室してくる。

「ホラホラ、ダメでしよ武内サン、傷なんてまだまだ塞がっちゃいないんだ。あんまり動くと死にますよん♡」

手に持った扇子を口許に翳して飄々と話し掛けてきたその男性の第一印象はあからさまに胡散臭いの一言であつた。身に纏っている甚平の上に翠の半纏を羽織り、翠と白の縞模様の帽子を頭に被つた装いで人を押揃うようににやけている様は相手に掴みどころを悟らせない怪し気な雰囲気醸し出している。

「誰だアンタ・・・もしかして此処、アンタの家か？」

「ご名答♡ アタシは東エリア郊外に構えさせてもらっているこのしがない駄菓子屋【浦原商店】の店長（オーナー）で《浦原喜助（うらはら きすけ）》っていいます。んでこっちは店員の《握菱鉄裁（つかびし てっさい）》サン」

「ドーモ、浦原商店に店員として勤めている握菱という者デス。以後お見知りおきを」

「は・・・はあ、どうも・・・」

とにかく現状を確認する為に警戒心を露わにして目の前の見知らぬ男性二人に訊いてみたが、こうも簡単に自分達の個人情報を知り明かしてくれるとは意外だったので、なんとも毒気を抜かれてしまう……。

——なんか調子狂うぜ、この人等がオレを此処に連れて来て寝かせたのか？あの異界での戦いの後、いったいどうなって——

怪訝に眉を寄せてそう思っていると、喜助が入って来た開いたままの襖から今度は出雲那の見知った顔が二人覗き込んで来る。

「武内君？目覚めたのね、よかつたわ……」

「ウフフ、思ったより元気そうで何よりね。でも傷が塞がらないうちはできるだけ安静にしていなきやだめよ。」

「——なつ、柊？それにサクヤも!？」

話し合いの場をお茶の間に移して明日香があゝの異界化収束後の経過について説明をしてくれた。話を聞くとうろやら出雲那は初の異界での激戦によって身体に限界まで疲労が蓄積していたらしく、現世に帰還した直後に気を失っていたようだ。

「いやー、皆さんが無事で本当に良かったツス！まあ終サンとサクヤサンについては実力的に特に心配なんてしていませんでしたかねえ」

んでもって「ワツハツハー！」と手に持った扇を扇いで調子良く笑っているこの喜助と――

「フ・・・じゃが異界化を収束させた後の隠密退去についてはまだまだじゃのう。あれだけの規模の異界化が顕れたのなら「表」が観測できる程に空間の乱れが生じるのは自然の理というものじゃ。ド素人を一人抱えていたとはいえ二人共用心が過ぎるぞ、あの場に農らが来なかったら今頃おぬしらは護廷隊かギルドにしょつ引かれてカツ丼でも食っていたところじゃったかもしれんしのう」

部屋の隅の柱に背を預けて擲擻うような微笑を浮かべているこの妖艶さと気軽さを感じさせる猫のような雰囲気を醸し出す褐色肌をした妙齡の美女——《四楓院夜一（しほういん よるいち）》が空間の乱れの原因を調査する目的で東エリア中央区に集まって来ていた護廷隊士や遊撃士達の目を上手く掻い潜って駆けつけて来てくれたおかげで今回の件を「表」に漏らす事なく危なげに退散できたのだという・・・その話が正しいのならつまり彼等もまた明日香達【終焉の盾（エインヘルアル）】の関係者であるという事だ。

「その事については私の詰めが甘かった為に余計な苦勞をかけてしまつて申し訳ありませんでした。しかしまさか浦原さんと夜一さんまでサクヤさんの任務に協力していたなんて驚きましたよ？」

そして疲勞とダメージの負担で倒れた出雲那を手当して休ませる為に運んだ此処【浦原商店】は青学に通うにあつての明日香のホームステイ先なのだという。

大体スクエアの四大学園に在学する学生戦士は学園都市という構造上殆どが親元を離れて来ている為に学生寮に入る者がその数に比例して多くなつてはいるのだが、都市を開発した【ダイランディア武闘王国】をはじめ、出雲那や明日香の出身国である【帝国ヤマト】などの武闘王国と同盟を結んでいる国々から大勢の戦士候補生を募つている為に王族の子などの複雑な事情を抱えている者も少なくはない、故に四大学園の関係者は

スクエア内に別荘や住宅街などのホームステイ先を見繕う事を許可されていたりする。「ふふ、それはごめんなさいね。別に内緒にしていたわけではないのだけれど、まさか学生一人を協力者に引き入れるだけの任務で異界関係の内容に係わるとは想定していなかったものだから」

「・・・自分から彼を焚きつけておいてよくもまあそんな事を・・・」

「もぐもぐ・・・それよりもさ、アンタ達は何でオレの・・・【伊邪那岐の創り手】のチカラを必要としているんだ？ 協力者になる事はもう腹を決めているけどよ、詳しい内容も知らないまま利用されるのはちよつと不安があるぜ」

含み笑いをするサクヤの白々しさに呆れて自分の額を押さえる明日香の隣に座って Myt マトケチャップを上部いっぱい塗りに塗りたくった蜜柑のような赤い何かを口の中に放り込んで食した出雲那が自分の利用目的について詳しい説明を求めてくる。確かに幾ら【裏】の組織の情報を【表】の人間に漏らすのは御法度とはいえ、協力する以上は必要最低限の説明を受ける権利が彼にはあるだろう。そこで待つてましたと言わんばかりに喜助がウキウキした顔で何所からか何故か紙芝居道具を取り出して食卓の上でそれをドンツ！と立てるのであった。

「それもそうツスよね！ てなわけで皆サンお待ちかね、【浦原商店良い子の紙芝居劇場】の始まり始まりい〜♪」

「誰も待つてなどおらん」

夜の冷めたツツコミをスルーしつつ楽しそうに紙芝居の絵を捲り始める喜助。

「むかしくむかし、あるところにお爺さんとお婆さんが住んでいました。ある日お爺さんは山へ芝刈りに、お婆さんは川へ洗濯に行きました。——」

——普通に帝国ヤマトにある有名な童話の件（くだり）じゃねえか・・まさかあのご都合主義だらけの童話が【伊邪那岐の創り手（オレ）】に何か関係しているつていうのかよ？

「——川に着いたお婆さんが洗濯をしていると上流の方から、それは大きな大きな——」

——確か何故だか桃が流れて来るんだったよな、主人公になる赤ん坊が中に入っている・・確かに訳が解らねえ展開だし、それがもし異界化や二大創産神の宿命が何かで関係していたとしたら!?

ゴクリ！川の上流に目を向けて驚いているお婆さんの絵が捲られようとするのを息を吞んで見守る出雲那・・緊張の中で喜助がその絵を勢いよくスライドさせて捲ると、そこに描かれていたのはなんと——

「——おっぱいが流れて来たのでした♡」

「阿呆がッ!!」

「きやいん！」

紙芝居の画用紙全体に無駄にリアルに描かれた何でもできる証とも男のロマンとも言われている自主規制確実な果実ごと喜助は瞬間移動の如き速さで一瞬にして接近してきた夜一に蹴り飛ばされて障子を突き破った。アホ丸出しで隣の部屋の畳に倒れ込んだ喜助を夜一は額に青筋を浮かべながら塵を見るような目で見下ろしている。

「それはおぬしが昔、質の悪い悪ふざけで帝国ヤマトの童（わっぱ）に聴かせて、酷い悪影響を与えてしまった為に現地警察の御用になりかけおった卑猥な作り話じやろうが！ 真面目にせんか!!」

「あつははー、いやツスねえ夜一サン。なにやら武内サンがすつごく堅そうにしていたもんツスから、軽くその緊張をほぐしてあげましょうと、ちよつとお茶目な冗談をしただけじゃないですかあ♪それにアタシ、どちらかと言うとお尻派でスし♡」

「死ねツ！」

「あべしっ！ あーれーっ☆」

そして他者をイライラさせるようにヘラヘラとふざけた言い訳をした為に夜一の蟀谷に青筋を増やし、外の庭まで蹴り飛ばされて行く喜助を眺めて出雲那は唾然と言葉が出せず表情を固まらせていた。

「……………」

「アラアラ、二人のペースにすっかり戸惑ってしまっているみたいね」

「……ごめんなさい武内君、浦原さんと夜一さんは結社に入る以前の旧友同士で何時もああなの。慣れない間は難しいかもしれないけれど、できるだけ流してくれると助かるわ」

「ああ、なんとなく理解した……」

つまり自分はまた厄介な変わり者と知り合ってしまったという事かと、出雲那はそう俯瞰して呆れるように目を細める。やれやれ、こんな調子でこれからやっていけるのだろうか……。

「あの、確か夜一さんでしたっけ。あの帽子のオッサンがウザイと思ったのは同感ですが、そろそろ話を進めてくれよ」

「……フツ、仕方がないのう。あの阿呆に代わって儂が説明してやるとするか」

内心を察してもらった事で気分が良く思ったのだろうか夜一は出雲那の催促に応えて気取るように微笑を浮かべつつ両腕を組み、耳の穴かっぽじって良く聞けとでも言うかのように説明を切り出した。

「まずは儂らが係わる『異界化（イクリップス）』についての成り立ちから話す必要があるじやろうな……出雲那、おぬし百年前の『第一次遭遇（ファーストアタック）』と四十年前の『第二次遭遇（セカンドアタック）』についてはさすがに知っているじやろう？」

「ああ、そりや幾らオレが馬鹿でもそれぐらいの一般常識は把握しているっての」

約百年に突如としてこの星に降り注いだ未曾有の大災害【落星雨（インベルディア）】によつて齎された【万応素（マナ）】により【星脈世代（ジエネステラ）】【魔導士（ウィザード）】【伐刀者（ブレイザー）】といった【三大源力】をチカラとする超人戦士を誕生させた【第一次遭遇】に約四十年前に再び降り注いだ落星雨の影響で人間に仇名す多種多様の怪物が世界中に跋扈する事となつてしまった【第二次遭遇】。この二つの事件は世界の情勢と歴史を劇的に変化させた故に世界的にもあまりに有名な出来事であり、出雲那の言う通りこれはこの世界の一般常識と言つても過言ではない為聞かれたところで今更だろう。

「フツ、さすがに愚問じゃつたな・・・それで【異界化】という事象が初めて観測された時期についてなんじゃが、実はな、それは魔獣や虚といった人類の天敵がこの星にやつて来おつた【第二次遭遇】以前の【第一次遭遇】直後なんじゃよ」

「・・・え？」

あまりにも意外な事実を聞かされてポカンと口を開けてしまう出雲那。

「ふふふ、驚いておるようじゃのう」

「無理もないわ、異界に潜む怪異（グリード）のような怪物が世に現れたのは【第二次遭遇】直後であるというのが【表】の世界の常識なのだもの・・・人類が【第一次遭遇】時

の落星雨によって齎された万応素の影響で手に入れた三大源力を用いて戦いを始めたのもその超常的なチカラを巡った政治的な小競り合いが始まりで、それが後の【第二次遭遇】が訪れるまでに【超常大戦】という大規模な世界大戦に発展するのだけれど、その間にも世界各地では【神隠し】や【魔の海域】などといった都市伝説や怪奇現象が数多く観測されていた」

そのサクヤの説明を引き継ぐように明日香が話す。

「【裏】の世界ではその多くの原因が異界が現世に侵食して顕れた影響であるという事実を、組織を設立してそれ等と対峙した事で証明したわ。その組織というのが私達【終焉の盾】なの」

【終焉の盾】の発足は【第一次遭遇】から二年後、地上に降り注いだ【落星雨】の被害が齎した荒唐が徐々に回復しつつある世界各地で観られるようになった不可解な現象とあるマフィアが独自に調査する目的で組織内の異能力者を招集し構成させた調査隊が始まりだった。

世界中に蔓延した万応素の恩恵を受けた異能力者が台頭する時代を予期させるようにチカラを持った権力者がチカラ無き民達を異能によって弾圧や搾取などをするといった能力至上主義者による非道な行いが徐々に増え出していた当時、それを象徴するかのように魔法の暴力に物を言わせて無力な貧民層を虐げる事で嗜虐的快楽を満たす

という悪逆非道な行為を日常的に行っていた事で問題視されていたとある富裕層の魔導士がある日を境に突然人前に姿を見せなくなったらしく、その時期に観られるようになった不可解な現象と併せて不審な何かを感じ取った組織の首領（ボス）は立ち上げたばかりの調査隊を派遣。

件の魔導士が頻繁に危害を加えていたとされる貧民層が暮らす貧民街に赴いて聞き込み調査を行った後、入手した情報を元に調査隊がたどり着いたのは強欲な悪魔が封印されているとされる民間伝承がある祠だった。

調査隊は件の魔導師の行方を突き止めるべく様々な検証調査を行ってみるものの幾ら可能性を模索したところで大した進展は見込めず、その場の調査を切り上げようとしたその時に調査隊の隊員である一人の伐刀者が唐突に悍ましく異様な霊圧を祠の出口付近より感知した。その場へ急行すると其処へ偶然通りかかっていた犬の散歩中だった女性が空間に顕れていた朱い罅の中へと悍ましい異形の手によって引きずり込まれているという非常極まりない光景があつた為に調査隊は咄嗟に異形と女性を追つて得体の知れない罅の中へと飛び込んだ。

罅を潜った先には瘴気に満ち溢れた地獄と件の魔導士と女性を餌として喰らい殺していた巨大な体躯を持つ地雷蜘蛛の異形が調査隊を待ち受けていたのだっらしい。

「【異界】・・・それは第二次遭遇の影響によって開いた異次元の扉とは別に第一次遭遇が

齎した万応素が世界中に蔓延しはじめた時より度々現世に顕われ出したものじゃ。昨日の夕刻におぬしが霊装を使って現出させた異界に通じる門（ゲート）は「適格者」と呼ばれておる選ばれた伐刀者が霊装で「特異点」を攻撃する事で顕現させる事のできる異界への入り口で、現世に生きる者が異界に入るにはその門を潜るか、又はその異界に住む異形（グリード）の手によって引きずり込まれるかの二つしか方法はないのじゃ。故に異界に関する問題は霊的な存在を監視・管理しておる瀟靈護廷隊すらも例外なく「表」の組織にどうにかできるものではない。何故なら護廷隊が抱えておる魂律士が「適格者」に選ばれた例はなく、また伐刀騎士連盟に加入しておる伐刀者の中に「適格者」である者は今のところ存在していないようじゃからのう」

「それが異界関係についての事を「表」沙汰にできない理由だつてわけかよ・・・」
「その通り。問題を解決する手段のない「表」の司法に異界の存在が下手に公になれば私達の活動に介入されて厄介な事に成り兼ねないわ、だから異界に係わりを持つ「裏」の組織は異界関係の事柄に対して「表」に情報が漏れないよう細心の注意を払って活動しているの」

「それと「異界化」という現象は今夜一さんが話してくれた「特異点」を起点にグリードが居る迷宮が現世と重なり、様々な形で現世を侵食して顕現する・・・それは人間の悪しき感情によって引き起こされるとされているわ。今回の場合、どうやらあの風紀委員

長さんが心の内に抱いていた【焦り】と【不安】が増長されて異界化が起きた可能性が高いわね」

明日香の見解の通り、確かに異界化に巻き込まれたクレアは過去の過ちと近頃の自分の不甲斐無さで内心に押し潰されてしまいそうな程の焦燥と不安を抱いていた。彼女は其処にドツペルゲンガーというグリードに付け入れられてあの滅亡する世界のような煉獄を顕現させてしまったのだろう。先程話した悪逆非道の限りを尽くした過去の魔導士も嗜虐的快樂を求めるあまりに悪しき感情が暴走して強欲の異形が住まう異界を呼び起こしてしまったのだ。

「なるほどな。わかっていた事だったが、あのままいつたらクレア先輩は結構ヤバかったってわけか・・・アレ？　そういうあの異界が収束した後クレア先輩はどうなったんだよっ。」

「ふふっ、その心配ならいらないわ。あの武芸者のお嬢さんなら君と明日香が良い雰囲気になってる間に私が記憶消去を施して回収しておいたからね♪」

「ちよっ!!?」

「ほほう」

あざといウインクを向けてくるサクヤに悪戯っぽく恥ずかしい場面を暴露された出雲那と明日香は思わず出た声をハモらせつつ赤面してしまう。それによって二人が危

惧する事が現実になるようにそれは面白い話を聞いたと夜一が羞恥に縮こまった二人にニヤニヤと意地悪な笑みを向けてきている。

「フッフ、なんじやなんじや？二人共近頃に知り合つたばかりじやというのにもういかがわしい関係になつてしまつたのか？グッフ、いやゝ参つた参つた。まったく最近の若者はお盛んじやのゝ♪」

「すつげえムカつく笑い方をするんじやねえつ！オレと柊はそんなんじやねえつての！！」

「サクヤさんも誤解を招くような言い方をしないでくださいよ！」

「あら、そうなの？今回の異界化が収束した後、回収した武芸者のお嬢さんを都市のデーターベースをハッキングして調べた彼女の住まいに私が送り届けて戻つて来た時も貴女、ぐつすりと眠つたままの出雲那を気に掛けて彼に膝枕までしていたつていうのに♪」

「サゝクゝヤゝさゝんツツ!!」

学園ではクールな優等生キヤラでいる明日香もサクヤにかかれば形無しであつた……閑話休題（それはさておき）耐え難い恥ずかしさに身悶えていた明日香が昂つた憤慨の感情を冷ましつつ「うん、ゴホンツ！」と一つ咳を払うと空気を落ち着かせて「終焉の盾」に関する補足を入れる。

「そして、そんな【異界】に潜む異形（グリード）は今回のように人の弱い心に付け込ん

で【表】の世界に危害を及ぼす存在なの。グリードの魔の手から人々を護る為、異界を監視しこの世から一匹残らずグリードを駆逐する事を目的とする【刃の盾を掲げる戦士達】・・・それが私達が所属している結社【終焉の盾（エインヘルアル）】という組織よ」

そう言つて彼女はスカートから携帯端末を取り出すとその背面に浮かび上がった紋章を出雲那に見せた。おそらくそれは【終焉の盾】のロゴマークだろう、光輝く刃が正面に立ち塞がる壁を貫くかのように中心から突き出ている大盾を模したデザインのようだった。

先程語つた過去の調査隊はあの後激しい応戦の末に地雷蜘蛛の異形を倒して異界を収束させた。しかし搜索していた魔導士も巻き込まれた何の罪も無かつた女性も、霊的存在に対抗する術を持たない伐刀者以外の仲間達の多くもが犠牲となつてしまい、これ以上このような事などあつてはならないとその後組織から独立した彼等が【終焉の盾】となつた訳なのだ。

「は、はは・・・。スクエアの戦士候補生として超常的な事柄には慣れていたつもりだったんだけど、ここまできたら流石に頭がついていかねえ・・・」

出雲那も三大源力というチカラを生まれながらに有した異能力者の端くれだ、今更非現実的な事象や超常的な存在なんかに驚きはしないと思つていたが、世界は彼が思つてゐるよりも奇なりである。参つたなど言わんばかりに左手の人差し指で蟀谷を搔くと、

それよりも知りたかった本題に入ろうとした。

「アンタら【終焉の盾】が何を目的として存在している組織なのかは解ったけどよ、それとオレの宿命やチカラに何が関係あるって言うん『ピピピピピーツ!』——ってうるせえな。急に何の音だよ……っておあああつ!? 今七時かよツ!!」

突然鳴ったアラーム音は午前七時に鳴るように設定してあったお茶の間の時計からだ。青学のホームルームは八時からだ、急いで学園に登校しないとまた遅刻だ……焦る出雲那の肩に背後から誰かの手がポンツと置かれる。

振り向くと其処には先程夜一によつて屋外まで蹴り飛ばされていた喜助がまるで反省の色が見られないようにヘラヘラとした態度でもってドクロマークのステッカーが側面に貼られている怪しいボトルを持って来ていたのだ。つた。

「これから一時間毎にこのクスリを一錠ずつ飲んでください。そうすれば夜までに傷の殆どは回復します」

そう言つてずいっ!とその怪しい薬が大量に入れられたボトルを出雲那に差し渡し、「思ツクソ、ドクロ書いてんじゃねえか……」と不安気にそれを受け取る出雲那。

【勉強会】はそれからにしましよ♪タダでさえアナタは異界探索に関して素人だというのに今無理をして今後の活動に支障が出てもらつてもナンですからねエ」

そう言つて踵を返し、喜助は手を後ろにヒラヒラと振る。

「ホラ、それまで終サンと学校にでも行ってらっしやい。学生なんだから今しかない青春を謳歌しないと」

「・・・何なんだよ、いったい・・・」

「あはは・・・取り合えず学校に行きましようか。折角気を利かせてくれたのだしね」

「お、おう。そうだな・・・」

「そうだ、彼女を連れて今日の学校に行く為に昨日の夜を戦ったのだ。何時の間にか自分の鞆を持って来てくれていた明日香の微笑みを見ると勝ち取ったんだという実感が心の奥底から湧いてくる。」

「行こうぜ終、オレ達の青学へ!!」

新たななるハチャメチャな非日常が今、始まった・・・。

可憐なる銀綺との邂逅

あの朱い煉獄の異界での死闘を潜り抜けて、出雲那は己のプライドに懸けて誓った言葉通りに自分の命の恩人であり昨日青学に編入してきたクラスの新たな仲間である亜麻色の髪の少女を無事に朝という光の空下に連れ戻す事ができた。

その亜麻色の髪の少女——柊明日香と共に待望の今日の青竜学園へと登校するべく、二人は東エリア郊外の海沿いの道を気分よろしく並んで歩いて行く。

「おい、決闘（デュエル）しろよ、武内出雲那ッ！」

だがそんな二人の前に想定外、今日の学園への最後の刺客が立ち塞がる。

「武内君。あの騎士風の防護服（プロテクター）を身に着けている背の高い女性、なにやら貴方の名前を呼んで凄く情熱的な視線を向けてきているみたいけど・・・」

「あー、気にすんな。あれはただバトルマニアという不治の病を患った女ニート侍だからさ・・・」

だがその刺客に名指しで決闘状を叩きつけられて喧嘩を売られた本人にとつては想定外でもなんでもなかったようだ。スクエアの非日常な日常にまだ慣れていない故、不意にやって来た言葉のドッジボールに呆気にとられて困惑してしまっているのか、目の

前の道に毅然と立ち塞がりつつ手に持った騎士剣型の魔装錬金武装の切っ先を烈火の如き熱視線と共にこちらに向けてきてきている桃色ポニーテールをした女騎士を摩訶不思議な珍獣を目撃したかのように指さしながら訊ねてくる明日香には目の前の存在を気に留めないように言っておく。

この手合いは毎度の事ながら自分の相手だ。いい加減に面倒な事この上ないが、仕方なく腰に差しした黄旋丸の柄を手に一歩前へと出る。

「今までに一度もオレに勝ててねえからって、ここまできるといい加減にテメエしつけえぜ、シグナム先輩。昨日の夕方も毎度の様にあれだけ派手にブツタ斬ってやったつてのによ」

程々に呆れた半目を向け、出雲那が皮肉でもって歓迎した相手の女騎士はやっぱりシグナムであった。彼女は切っ先を相手に向けていた自身の愛剣レヴァンティンを一旦下げ、相対する自分の永遠のライバル（自称）から受け取った皮肉に対して嬉しそうに微笑する。

「フツ、それは当然だろう。私はベルカの騎士にして『流離の烈火の将』なんだぞ。昨日の夕刻に貴様に負けて、気を失っているところを何者かが謀ったかのようにテスタロツサが通りかかって、またしても奴のライトニングバインドによって不条理にも拘束されて、今度はギルドの地下牢に不覚にもそのまま監禁されてしまったが、そんな事で私の

貴様への（勝利への）熱いこの想いは繋ぎ止められはせんツ！例え火の中、水の中、草の中、森の中、土の中、雲の中、あの壮齡の御仁が穿いているパンツの中ツ！私はベルカの騎士の誇りと矜持に懸けて、何度でも貴様の前に立ってやるツツ！！」

「あらまあつ。硬派そうに見えて情熱的な人ね」

「人が誤解するような事をこつちに指さしながら言ってきたんじゃねえよ!? それの何所が不条理なんだ、このムツツリスケベ女騎士がああーっ!!」

口に掌を当てて明らかに誤解をした驚きをする明日香。一応容姿端麗な美女から真顔で告白紛いな事を言われた為に猛烈な恥ずかしさに襲われて赤面し、罵倒気味の文句を吐き返す出雲那。永遠のライバルに向ける情熱的な台詞の合間の一瞬だけシグナムから視線を向けられていた、付近の歩道橋を渡るビジネススーツ姿の中年男性も妙な悪寒を感じて身を震わせている光景。その全てが名状し難いバトル前の空気のようなものだ。

「さあ、いざ尋常に勝負だ武内イツ！」

『DUEL stand by』

そんな空気の中でソーサラークューブが宙に打ち上げられ、決闘用の非殺傷領域ソーサラーフールドが周囲一帯空高く展開されていく。巨乳ニート・・もとい、流離の烈火の将の戦意は上々だ。此処で逃げたら男が廢る、故に出雲那も相手に売られた決闘

にに応じて買ってやると意気込むようにシグナムの立つソーサリーフィールド内に足を踏み入れようとするが、それを険しい表情を浮かべた明日香が引き留めた。

「ちよつと待ちなさい。貴方の傷はまだ治っていないのに、決闘なんて」

「さつき飲んだ薬のおかげで雷切一発くらいならギリギリ大丈夫だ。そんだけできればシグナム先輩くらい、いつもように速攻でカタを着けられつから、お前が心配する必要はねえよ——つと！」

そう言つて心配してくれる明日香の手を自分の右肩から振り解き、出雲那はソーサリーフィールド内に悠々と入り、20mの間を取つて日常のようにシグナムと立ち合つた。異界での死闘の負傷がまだ治りきっていないとはいへ、その表情は毎度のように目の前の女騎士との決闘で勝利している為、当たり前のように余裕そのものであったが――

「ふっふっふ、【いつものように】か・・・これはまた、随分と見縊つてくれるな」

「へっ、たりめーだ。生憎今はちよつと訳アリでな、学校に遅刻する訳にもいかねえし、悪りいが速攻でブツタ斬らせてもらうぜ！」

出雲那の不敵な短期決着勝利宣言を耳に入れても何故だかシグナムが不快感を浮かべる様子は微塵も窺えない。

「悪いがそういう事も通りにはいかないぞ。なんたつて今日は心強い味方がいるのだから

な！」

そればかりか彼女は自分の勝利を確信しているかのような不敵な態度だ。その理由は彼女の発言した意味が判らず「はあ？」と出雲那が漏らした直後、双方の間に割って弾けたコミカルな花火（？）と共に颯爽と見参した小さき第三者の存在があるからだ。

「その通りだっ！」

「うおっ!?!」

出雲那の眼前で花火が弾け、気が付くと驚き慄いたその顔を勝気に覗き込むような恰好で燃えるような紅いツーサイドをした小悪魔が眼前に浮いていた。見た目約30cmの妖精サイズの何処からどう見ても人間には見えない生意気そうな女の子、その第一印象通りの挑発的な笑みを作り、唐突な彼女の登場に呆気に取られている出雲那を調子付いた眼つきで睨みつけて、口を開けば出て来る言葉は機関銃。

「やいやいやいっ! シグナムの永遠のライバルだかなんだか知らねーが、そんな余裕ぶっこいていられるのも今日が最後だぜ! なんてたつてシグナムにはこの《烈火の劍精》、炎の《魔導融合機（ユニゾンデバイス）》の《アギト》様が味方に付いてやったんだからな! 覚悟しろよ? アタシとシグナムが組めばお前みたいなバカっぽいガキなんか、けちよんけちよんn「うっせえっ!」げふうっ!?!」

人を煽りに煽ってくる言葉がその小さな口から吐き出され続ける度に『パンパンパン

パン!』と連続して背景に弾けていく花火の炸裂音も相俟って騒がしい事この上なく、この眼前に浮く耳障りな小悪魔——アギトに瞬間的な苛立ちを覚えた出雲那は黄旋丸の刀身を納刀した鞘による軽い打ち払いを蠅を払うかの如く一閃。

「ふぎやーぐーっ!がぼっ!あべっ!わらばっ!ひでぶっ!」

まるでピンボールの球のように吹っ飛んだアギトはまるで世紀末の小物が四散消滅する時の断末魔のような愉快な言語を吐き出しながら、街灯や歩道橋などといった周囲にある公共物に小さな身体を何度か衝突させて数回程反射を繰り返し・・・ポヨオオン

♥
「ひゃんっ♥」

最終的にはシグナムの巨乳クッションがアギトの小さな身を受け止めて収めたのだった。

「むぐ?もががっ!?!もががもごっ!」

「ん。あ、あんっ♥ た、武内いんっ♥ 貴様、いいいきなりアギトに何をするひやあん♥、こらアギト。あ、あまり私の胸の中でもごもごしないでくらんっ♥」

「むつももがもごっ(だったたら早く放せっ)!ごもでがばむがっ(このデカパイがっ)!!」

「.....」

自身の豊満な胸元に妖精サイズの子を埋めさせて抱え、それが原因で自分の胸に吹きかけ続けられるアギトの吐息に悶えながら扇情的で甘い喘ぎ声を連続して漏らしつつ、腰を抜かしたような中腰のエロイ体勢をする女騎士・・・それが胸をひたすら襲い続ける性感刺激に必死に抗いながらも赤面涙目の上目遣いでもって苦情を訴えてくる様は男の目には猛毒かもしれないが、それ以上にこうなつた原因が彼女達の自業自得であつた為、寧ろ白けて毒気が抜かれるだろう。

「ぶはああつーく、くるじ〜！ 空気空気が・・・はあ、はあつ！・・・あ、あぶねー。も、もう少しで窒息死するところだつたじゃねーか・・・はあ、はあ・・・！」

「す、すまないアギト・・・はあ、はあ・・・武内、貴様あ・・・ツー！」

「そんな睨まれる筋合いなんかこつちには無えよ。ていうか誰が永遠のライバルだ誰が？・・・まったく、一体全体何なんだよその喧しい事この上ないハエ女はよ？」

「誰がハエ女だテメエコラアアーツ！」

「アギトは拾つた」

「拾つたあ？」

やつとの思いでシグナムの乳圧峽谷から脱出する事ができたアギトを指さして、彼女という存在が何故お前と共に居るのかと息を整えつつこちらに批難の目を向けて来きているシグナムに出雲那は不機嫌なジト目を合わせて問い質してみたところ、実に簡潔

な説明が返ってきたので呆ける事しかできない。昨日決闘した時には連れていかなかったのでシグナムがアギトを拾ったというのが真実ならば出雲那達が異界を攻略している最中か、或いは出雲那が初めての異界攻略に疲れ果てて眠っている間に二人は出会っていた事になるだろうが……。

「へへんっ、お前には関係ねーよっ！何はともあれアタシはシグナムを相棒（ロード）と認めただんだ、なら魔導融合機（アタシ）は共に行くのが道理つてもんだろ！」

「【魔導融合機】・・・第二次遭遇期以前に存在したとある魔導機関が開発したとされる姿と意志を与えられた魔装錬金武装。融合適性のある魔導士との融合を可能とし、自身に身に宿る魔力と術者の魔力を融合合わせる事で術者の魔力量を大幅に増幅させられる上、融合した魔導融合機の意識が膨大な魔力の管制・補助を行う事によって驚異的な感応速度を得る事ができるのだけれど、融合適性を持つ魔導士の絶対数は少なく、その適正と相性が低い術者と融合すれば暴走状態に陥る可能性もあった為、過去に開発された魔導融合機の八割は適正と相性の合う魔導士が見つからず、第七機関などの研究機関に魔導科学研究の実験サンプルとして提供したり、出来が悪ければ廃棄処分されたりしたらしいわ。つまり拾ったという事はアギトちゃんは——」

「どこかの研究所から逃げ出して来たか、或いは昔に捨てられたレア物つてところだろ？わざわざ優等生な説明ありがとうよ、終！」

疑問も解消できたところで、そろそろ決闘（デュエル）を始めるとしよう。

「さあアギト、私とお前の初陣だ！来いっ!!」

「おうよ、やってやる!」

「ユニゾン・イン!」

アギトがシグナムの中へと融けて、永遠のライバル（一方通行な思い込み）を決闘にて打ち倒すべく流離の烈火の将の身体は紅蓮の光を放ち、己の内に融けて混じわった烈火の劍精の魔力（チカラ）が彼女の姿に変化を齎した。

紅蓮の光が収束し、そこに姿を現したのはまさに烈火の精霊騎士を思わせる威風へと変貌を遂げた彼女であった。防護服の外套は消失し、彼女の豊満で引き締まった上半身を余す事無く強調させる青紫色の軽服に同色のリボンが薄桃色に変色した頭髪を束ねており、長い丈の白腰帯が陣風に揺らめく様は元々の凛々しさと清涼感を益々顕著に感じさせるが、特に注目すべきは背に顕れた二対四枚の魔力翼だろう。その揺らめく紅蓮の翼は幻想的で炎の精霊を連想させる。魔力量も威圧感も普段とはケタ違いに感じられる。

「どうだ武内、驚いたか？これがアギトと融合を果たした私の新たな姿だ!」

「ほぅ、こりやあまた随分とセクシーな格好になったじゃねえか。そんなにデカイバストラインをオレみたいな男に平気で見せつけて、痴女に目覚めたのか？でもその程

度の露出じやまだまだだな、フェイト先輩の真ソニックフォームなんてワガママバストが強調されているどころかエロいケツが丸出し——」

「武内君？ 決闘をやるのなら早く始めたらどうなの？ そんなくだらない事を喋っている時間なんて無いでしょう？」

「いゝいゝ つ!? ひひ、柊？ な、何でそんなに冷ややかな目をして笑ってるんだ？ その顔、凄え怖えんだけど!？」

「ウフフ、私の事はいいからさっさと始めてとつとと終わらせてちょうだい。私、編入二日目で遅刻なんてしたくないから、フフフ……」

「わわわ、分かったからその眼でこつちに笑顔向けてくるのやめろよ、マジで怖えから!」

女性に関する下ネタを複数の女性が居る前で全く躊躇せず発言するデリカシー皆無な出雲那に向けられた明日香の視線は絶対零度の氷の如く凍てついており、それが表面に浮かばせた満面の笑顔と相俟って何か得体の知れない迫力と威圧感があった。何事にも無謀と言えるくらい勇猛果敢に立ち向かえる出雲那ですらもその有無を言わせない恐怖に一瞬で畏れ慄き、畏縮しながら彼女に許しを請うような残念な姿を曝してしまっている程なので、皆も気になる女子の前では下ネタ発言は控えるようにしよう

☆

さあ、気を取り直して――

「戯れはそこまでにしてそろそろ決闘を始めるぞ？こつちはこのチカラで早く貴様と戦いたくて、身体中が今にも火照りきつてしまいそうな程に、胸が疼いて疼いて仕方がないんだ！」

『へっ、シグナムはこう言っているけれど、尻尾を巻いて逃げ出すなら今の内だぜ！』
『3・2・1――』

「ほざけよ、誰がテメエら相手に逃げるかっての！例えどんな姿になって掛かって来ようが、いつだって勝つのはオレだ！」

『――LET'S GO AHEAD!』

決闘開始！

「朝のホームルームの始まりまで時間もあまりないし、十秒でケリを着けてやらあつ!!」
「来い、我が永遠のライバル、武内出雲那ツ！今日こそは今までの雪辱を晴らさせてもらう！故に勝つのは私だツ!!」

気合い十分。腰に帯刀した黄旋丸を手に雷光纏いて烈火の精霊騎士へと突撃して行く出雲那。ソーサラーフィールド外で決闘を見守る明日香はこの戦いの行方よりも、遅刻と異界探索に関してのこれからの事の方が心配に思つて頭痛を患うように額に手を当てていた。

——こんな調子で彼を頼りにしても本当に大丈夫なのかしら・・・？
前途多難過ぎて非常に不安であった・・・。

・・・一方その頃青学では。

「きやあああつ!?!」

「何?突風!?!」

高等部と中等部の校舎を繋いでいる一階の渡り廊下に闊歩して歩く生徒達の間を縫

うようにして、出雲那の親友にしてルームメイトである黒髪の男子生徒——黒鉄一輝が疾風の如く駆けていた。その精悍さと爽やかさを併せ持つ印象の顔付きには今、誰が見ても明らかな焦燥が浮かんでいて、その証拠に側を自分が全力疾走で通り過ぎた事による猛烈な風圧によって制服のスカートが捲れ上がり穿いている下着を外気に晒してしまっている女子生徒達が咄嗟に上げた甲高い悲鳴すらも全く耳に入っていない様子だ。

——あれから一晩経って、柊さんを探しに別れて行った出雲那君は未だに戻っていない。昨日ハラオウンさん達が生徒会室に來訪して出雲那君に事情聴取を行った時に話をしていた、出雲那君がこの間の深夜に頭れて殺されかけたという謎の化物の件もあるし、いよいよあの後の彼の身に何か良くない出来事が降りかかった可能性が出てきたね。

当然その理由は別れてから一晩経っても寮の部屋に帰って来っていない親友が心配で居ても立つても居られないからで、平時の彼ならば疾走しながらでも可能とする道行く他人への配慮が大変疎かになってしまっている（それでもこの人混みの間を激突せずに疾走できているのは、さすが無冠の剣王と言えなくもないが・・・）程である。

——急いでこの事を東堂さんに知らせに行かないと！彼女の言いつけを破った事で、後で彼女からキツイおしおきをされるだろう出雲那君は気の毒に思うけれど、事は一刻を争うかもしれない行方不明な彼の事を思うともうそんな事を言っていられる場

合じやない。ステラ達にも登校したらすぐに生徒会室に来るよう連絡しておいたし、僕も一秒でも早く――

額に汗を滲ませながら人通りが少なくなつた曲がり角を速度を落とす事なく曲がろうとしたその時。一輝の剣士としての感覚の鋭さからか、曲がり角の先に誰かの気配を不意に感じ取る。

「――っ!?!」

直後に曲がり角の死角から小柄な体躯の女子生徒が走つて飛び出して来た。危ない! このまま両者が激突すれば幾ら三大源力というチカラを持った戦士候補生と言えども惨事は免れないだろう。女子生徒の方も一輝の存在に気が付いたようで驚くように見開いた眼を疾走で自分に向かつて来ている一輝に向けているが、今更慌てて速度を緩めてももう遅い。

「くっ……こうなつたら――っ!!」

一輝はやむを得ず脳の制御（リミッター）を解放する。今は不要な世界の色を意識的に排除してその分の容量（キャパシティ）を身体能力向上にまわし、足捌きを利用した無理矢理な方向転換によつて右への回避を試みた。

常人なら不可能な体捌きだが、伐刀者として有るべき霊力を一度の身体強化にしか使えない程度の極小の量しか持つていなかったが為に武術の研鑽のみで「無冠の剣王」と

称される程の域に至った黒鉄一輝という男ならばそれでこの窮地を回避する事など造作も無い事だろう。一瞬とはいえ脳の制御を外しての極限の行動だった為に頭に電流が走るような痛みが襲ったが、それだけの事など激突してしまう事で目の前の女子生徒に掛けてしまっただろう被害と迷惑を思えば安いものだ・・・そう安堵した一輝だったが、何故か身を捻って回避した先にはその女子生徒の可愛らしい顔が・・・。

「ちよっ!?!」

「えっ!?!」

これには照魔鏡の如き洞察眼を持つとされる一輝も流石に想定外の事象だったようだ。どうやらこの女子生徒は相当優れている星脈世代（ジエネステラ）だったようで、その並外れた身体能力と反射神経をもってあちらもまた緊急回避を試みていたのだ・・・不幸な事に一輝が回避しようとした方向に重なるコースで。

「くっっ……うおおおおおっ!!」

「きゃっ!?!」

今度こそ激突するかと思われたが、ここで一輝が男の気合いを見せてくれた。激突に備えて足を踏ん張った女子生徒が急激に減速を掛けた事によって体勢を後ろに崩したのを速度の緩急と反射的に切り返す曲がり（カット）によって鋭く回り込み、同時に転倒しかけていた女子生徒の背中を腕で支え、更には彼女に掛かる反動を軽減させるべく

そのままその小さな身体を横抱きにしてから足に踏ん張りを利かせてブレーキを掛け、靴底を磨り減らして疾走の勢いを見事に殺してみせた。

「はあ、はあ……ふう、なんとか止まったか……」

乱れた息を整えて自分の世界の色を元に戻す事で激突の惨事は無事に回避できたのだった。お見事！

「あ、あのおう……」

「あ、ごめん。大丈夫？どこか怪我はしていないかい？」

「あ、はい……大丈夫、です……」

「そうか、それはよかった。僕の不注意の所為で君みたいな女の子に怪我をさせてしまったらどうしようか……と……っ!？」

今度こそ安堵の色を浮かべた一輝の腕に抱きかかえられたまま気恥ずかしそうに頬を朱く染めている女子生徒が恐る恐る呼びかけてくる。一輝はその声によつて彼女に迷惑を掛けてしまった事を思い出し、すぐさま自分の腕の中で自分の顔を見上げてきている女子生徒の眼に視線を合わせて謝罪を言うが、動揺混じりの優しい微笑みで礼を返してくれた彼女のこの可愛らしい顔は……何処かで見覚えがあった。

「君は……」

彼女が身に纏っている薄紺色のセーラー服は青学の中等部生のもの。気弱そうな印

象がする大きな瞳はクリクリとしていて可愛らしいがその奥には白金のように強靱な意志が秘められていて、二結びにした銀色の長髪がその輝きを一際際立たせている。中等部生という歳相応の少女の背丈だが、冬物の制服の上から見ても判る程にスタイルが引き締まっっていて、特に目を惹くのはその細くて小柄な体躯に反して制服の胸元を豊かに盛り上げている柔らかそうなマシユマロと表現すべきものだろう。それはステラやマイ程の領域には流石にまだ及んでいないようだが、明日香やアリサのものに匹敵できる大きさで、しかも歲的に将来性があるのが素晴らしい。しなやかな細い腰に視線を落として見れば彼女の得物らしき刀のような物が鞘に納刀した状態で差してある事から、彼女は剣士・・・それも相当凄腕の・・・。

記憶力に自信のある人は一輝達が昨日の昼に青学の敷地内にある「ドラグーンスタジアム」内の模擬戦場に通じる通路を歩く暇つぶしに「青学最強の学生戦士」の話題で盛り上がりつつあったのを憶えているだろうか？その際に一輝が挙げたのは「疾風刃雷」の二つ名を持った中等生の剣士であったのも・・・そう彼女こそが――

「青竜学園中等部生最強の剣士・・・『刀藤綺凜（とうとう きりん）』・・・さん？」

銀綺の輝きを放つ可憐なる美少女剣士が今、物語に交差した・・・。

邂逅去つてまた天災？ 走れ一輝！

【疾風刃雷】 刀藤綺凜は昨年の四月にこの青竜学園の中等部に鮮烈な出来事と共に入学を果たした高位の星脈世代である。初日からいきなり《血盟の忠司（ブラッド・サイクス）》という二つ名持ちで当時青学中等部生最強の実力者とされていた伐刀者《ルベド・レッドストーン》に無謀にも決闘を挑んだ末に見事に勝利してみせた事で、電光石火の如き異例の速さでもって青学中等部生最強の学生戦士の名を欲しいままにしてみせた天才美少女剣士である。その衝撃デビューをもって文字通り彗星の如く新入生期待の新星（ニューヒロイン）として青学内で一躍注目の的となった彼女はその後も破竹の勢いで連勝を重ね続け、その年（去年）の秋に開催された【王竜四武祭（リンドブルス）】まで入学してから全戦無敗を貫いた輝かしい実績は高位の星脈世代とはいえ当時中等部一年生という彼女の幼さを鑑みれば、彼女はその華奢な身体にとても尋常とは言えない潜在能力を秘めているようで途轍もない末怖ろしさを感じる。残念ながらその王竜四武祭予選リーグの準決勝でナイツニクス学園の【閃光】に惜しくも敗れてしまった事で彼女の連勝記録はそこで止まってしまったのだが、その可憐な容姿で小動物のように可愛らしい雰囲気とは裏腹に疾風のように疾く鋭い剣速と雷を連想させる程に異常

な反射速度の連撃で相手を圧倒する彼女の剣技はまさに「疾風迅雷」の二つ名を持つに相応しく、彼女の試合を観戦していた人間の眼の多くをその容姿の愛くるしさも相俟ってセンサーショナルに惹きつけた。

「あ．．．あのう、すいません。ぶつかりそうなところを助けていただいて大変感謝してありますが、失礼ながらいつまでもこの体勢でいるのはちよつと．．．．恥ずかしい．．．はうう．．．」

今現在一輝に横抱き．．．所謂「お姫様抱っこ」の体勢で彼の腕に抱きかかえられ、乙女的羞恥心を感じるあまりに体温を急上昇させながら顔全体を朱に染めて恥ずかしさのあまりに全身を弱々しく縮こまらせて硬直しているこの銀髪的美少女はそんな青学のアイドルの存在の有名人で、これでも歴とした実力者なのだ。

「えっ?．．．はっ!?!(ごごご)、ごめん!今すぐに下ろすよ!」

だから幾ら学園内に名を連ねる程の学生とこうして出会ってしまった事が物珍しく感じたからとしても、そんな年頃の美少女を横抱きにした体勢のまま自分の腕の中にスッポリと収まって羞恥に悶えている彼女の愛らしい顔を上から覗き込むという無神経過ぎる行為をしてしまうのは些か紳士きに欠けるだろう。自分が今彼女にやっている行いがそんな第三者に目撃されたなら即豚箱行き案件となってしまうであろう通報的事項だという事に今更ながらようやく気付く事のできた一輝は慌てふためきながら

も相手への気遣いを忘れずに優しく綺凜の足を床に降ろす。そして深々と頭を下げ、謝罪を敢行した。

「本当にごめんっ！何分急を用していたものだから、不注意が過ぎてしまったね。それに幾ら衝突しそうになったからって、今みたいな行為は君のような女の子に対して物凄く軽率で失礼だった！加えて謝るよ」

「い、いえ、わたしの方こそごめんなさいです。音を立てずに歩く癖が抜けなくて、いつも伯父様に注意されるんですけど・・・」

パンツと両手を前で合わせて軽率に恥ずかしくてしまった相手に必死に弁明する一輝。事故だったとは言え思春期真っ盛りの少女になって事をしてしまったんだという罪悪感でいっぱいな声音だ、偶々この時この辺りに他人が通り掛らなかつたから、そして迷惑を掛けた相手がうっかり気配を断つて歩いていた自分の方にこそ非があつたと逆に謝罪を返してくるような、相手を思い遣れる心優しい人格をしていたから事無きを得る事ができたが、一つ間違えれば社会的に抹殺されていた事だろう。そう思うと冷や汗ものだ。

——それにしても驚いたな。幾ら気を焦つて走つていたからといって、この距離で曲がり角から人が来る気配を僕が感じ取れなかつたなんて・・・。

黒鉄一輝の気配察知能力は一流のそれ以上に研ぎ澄まされている。生まれ持った戦

士としての才能の低さ故にその他の要素を過剰なまでに鍛えて遊撃士となる事を志している一輝は己惚れではないが少なからずそれに自信があつた故に接触する直前までその存在を自分に把握する事をさせず、しかも無意識に接近を許した程の綺凜の気配操作技術には感嘆する他ない。

——流石は昨年の入学日当日から青学中等部生最強の名を初めての決闘で勝ち取つてみせるという異例の衝撃的デビューを果たし、二年生となつた現在も青学中等部には敵無しとされている天才少女剣士、【疾風迅雷】の刀藤綺凜さんだと言つたところか。こうして会つてみるまで僕も噂程度でしか彼女の事を知らなかつたけれど、実際に会つてみれば彼女の實力は剣を合わせる事なく本物だという事が理解できるね。恐らく今ぶつかりそうになつたのも、お互いに身を躲そうとして同じ方向へ動いてしまつたからか・・・だけど速度の出たあのタイミングで進行方向を変えようとするだなんて通常の人間はもちろん、並の星脈世代や魔導士、伐刀者にだつて難しい筈だ。僕だつて通常3%程度しか使つていない脳の制御(リミッター)を一瞬だけとはいえ、外して無理矢理身を捻つた事でやつとあの緊急回避が実現できたんだ。それをもし今日の前に居る可愛らしい女の子は素の反射神経のみで成してみせたのだとしたら・・・。

「あ、あのお、なにか・・・」

急に顎に片手を添えて黙り何かを考えだした一輝を不思議に思つた綺凜が小首を傾

げて訊ねてくる。いつも人に気を遣えるよう配慮を忘れない性の一輝だが、ルームメイ
トの親友が一晩も帰って来ない事態を受けていれば流石に調子を狂わして、このように
うっかり人に失礼を働いてしまうのも仕方がないのか・・・とにかく訊かれたからは
応えてやらなければ相手に対して失礼が過ぎる。

「あ、ごめんね。ちよつと考え事をしていたんだ。それにしてもさっきの君の身躲し、陳
腐な言い回しだけど凄かったよ」

「え?・・・え、えくと、そうなのでしょうか?」

「うん。高速で向かって来る相手を視界に入れてからの対応も冷静だったし、身躲しの
タイムリングを計った丁寧な足捌きを使った曲り(カット)も迅速で、無駄のない身の捻
りはしなやかで非の打ちどころが見当たらない鮮やかな体捌きだと思ったよ。できれ
ばもう一度やって見せて参考にしてほしい程にね。うん、さすがは青学中等部期待の
星で、将来的に近年王竜四武祭において二連覇を成し遂げたナイツニクス学園中等部の
【狂犬】に勝てる可能性のある四大学院中等部の筆頭候補にも名前が挙げられている
【疾風刃雷】の刀藤綺凜さんだ、此処で知り合えた事を光榮に思うよ」

澄ました表情で一輝が差し出した右手を綺凜が「あわ、あつ、いえ!こちらこそよろ
しくおねがい致します!」と咄嗟に恥ずかしく慌てふためいた様子ながらも礼を忘れず
に右手で取って初対面の握手を交わした。初対面の相手が自分の名前を口にした事を

疑問に思う素振りを見せていないのは自分の名声が学園内に知れ渡っている事を自覚しているからだろう。それでも一輝のような爽やかイケメン男子な上級生に面と向かって褒められるのは嬉しくも少し恥ずかしく思ったのだらう、彼女の柔らかそうな頬に仄かな朱色が浮かび上がっている。

「そ、それで大変失礼ですが、身に着けている制服から察するに此処の高等部の先輩……ですよね?」

「え? あ、そうだね。僕は青竜学園高等部二年A組の黒鉄一輝。よろしくね、刀藤さん」
「くっ!? 黒鉄一輝って、昨年の鳳凰四武祭でベスト4まで勝ち上がった青学の黄金(ゴールデン) コンビの片割れで【無冠の剣王(アナザー・ワン)】の二つ名持ちで知られているあの黒鉄先輩なのですか!? 確か王竜四武祭にも出場して、Fランクの靈力程度しか持たない最低級の伐刀者でありながらもその靈装の剣一本の類稀なる剣技の冴えのみを以って本戦まで勝ち抜いた青学のダークホースと囁かれている、あの!」

名を聴かされた途端のこのテンパリ具合からして、どうやら綺凜の方も一輝をある程度知っていたようだ。興奮と動揺を抑えきれない綺凜が大きく可愛らしい眼の熱視線を上目遣いで送って来る姿に圧されて一輝は逆に動揺させられてしまう。

「あ、うん。そうだよ……」

「やっぱり貴方様はあの黒鉄先輩なのですな! 先程の緊急回避がお互いに重なってし

まって危うく激突しそうになったあの極限体勢の中で再び動作変更を行える技術を体得しているだなんて無名の学生戦士ではないだろうとは思っていましたか・・・こ、こちらの方こそ知り合えて光栄に思います、黒鉄先輩！」

「い、いや。そのう・・・あははは・・・参ったな・・・」

随分と熱心さを孕ませた美少女の尊敬の眼差しを受けて、鋼の精神力を持つさすがの一輝も両掌を肩の上に翳す程にたじろぎを隠せないでいる。自分の在学する学園の二つ名持ちの上級生を前にした興奮に思わず盲目していた綺凜だったが、苦笑いを浮かべて額から冷や汗を垂れ流しながら困り果てている相手の様子にようやく気付いた綺凜は慌てて佇まいを正し、深々と頭を下げて謝罪を敢行した。

「はわわわっ!?!ももも、申し訳ございません黒鉄先輩!何分上級生の二つ名持ちの方と知り合ったのは初めてだったものでして、そのお・・・」

謝って謝り返して、このままではキリがない。そろそろ生徒会室に呼び出した仲間達も集まって来る頃合いだろうし、そろそろ失礼して速急に目的の場所へと向かった方がいいかもという焦燥に駆られ気味な思いと相手のひたむきな厚意を前にこれ以上失礼な対応はできないという誠実な思いを天秤に掛けて、どうしようかと悩ましく思っている——

「き、綺凜さああん。そんなところで何をしているんですか?」

そこへ思いがけない助けが入った。不意に中等部校舎側の通路に通り掛かった綺凜と同級生らしき背丈をした金髪の癖毛が特徴的な少女がこちらの揉め事に気が付いて呼び掛けてきたのだ。彼女もまた綺凜と同様に歳相応の小柄な体格をしていながらも、なかなかスタイル抜群なロリ巨乳である。

「あ、レクテイさん」

「き、綺凜さん。そ、そのう、おはようございます。そそ、そろそろ朝のホームルームの鐘が鳴ってしまいそうですし。それで、あのう、そのう……すぐに教室に向かわないと遅刻してしまうのでは?」

「え?……はわわわっ!?そ、そういえば教室に向かう途中でした!」

同級生の女子生徒からもじもじとした引つ込み思案な雰囲気の口調で言われた事にハッ!?となった綺凜はスカートから取り出した携帯端末のディスプレイに表示されていた時計数字を見た途端に表情を青ざめさせる。現在時刻は午前七時五十七分、朝のホームルームまで後三分しかない。

「こっ、こうしてはいられません!レクテイさん、急いで教室へと参りましょう!黒鉄先輩、ご迷惑おかけして申し訳ありませんでした!そ、それじゃ……!」

「う、うん。急ぎ過ぎて転ばないようにね……」

「ああっ!?まつ、まま、待つてください綺凜さああん!置いて行かないでえええええ

えーっっっっ!!」

遅刻するかもしれない焦燥に駆られた綺凜は焦った口調で一輝に一礼すると星脈世代特有の超人的速力で中等部校舎方向へと駆け出して行き、貪臭く出遅れた綺凜の同級生の少女が慌ててその後を追いついて行く背中を見送った一輝は呼び出した仲間達が集まっている本校舎の生徒会室へと再び駆け出して直行するのだった。

昨日の放課後にその日クラスに編入してきた女子生徒にどうしても聞きたい事がある

ると、ルームメイトで中等生時代からの親友である出雲那がその女子生徒を探しに自分と別れてからも丸一晚が経っている。それなのに寮に帰って来ないどころか携帯端末に連絡一つ寄越さないでいる安否不明の不在状態が続いているとなると流石に親友の身に何かが遭つたのかと想定してしまい危機感を覚えるのは当然であり、そんな緊急事態に信頼できる仲間達を招集して対策を話し合う場を設けられる有難さは、本当に良き縁と絆に恵まれたなと一輝は心から思う。

——とにかく、一刻も早く生徒会室に向いて、集まつた皆と一緒に出雲那君と佟さんの行方を捜す対策を練るしかない。事と次第によつては遊撃士協会や《戦島都市警備隊(ガルグイユ)》に捜索願を出す程の事態になつてしまう事も想定しておいた方がいいだろうね。

「出雲那君……無事でいてくれ!」

行方不明の親友が今もどうか何事も無く壮健である事を願いつつ、眼前に見えてきた本校舎の通路口を目指して一輝は駆け抜ける。時刻は間もなく八時になろうとしていたが、一輝達は事前に今日の朝のホームルームの出席を(生徒会権限で)免除してもらつたので今日のところは遅刻のペナルティーを科せられる心配は無用だ。渡り廊下に行き交う青学の生徒達を巧みな足捌きを使って避けつつ走り、時計が八時を刻もうとすると同時に通路口に差し掛かったその時、明後日の空から流れ星がっ!

スギリギリに曲がり（カット）を切つて最短コースを最速で駆け抜け、内側から黒い煙が漏れ出て来ている生徒会室の扉をバアアンツ!!とチカラいっぱい叩き付けるようにスライドさせて室内へと駆け込んだ。

「皆ツ!!怪我は無い!?!いったい何が……ん?」

そこで一輝は生徒会室内の様子を目の当たりにした途端にその双眸を丸くする事となった。

まるで投石器から放たれた岩か何か突き破つて来た痕のような巨大な孔が窓にぽっかりと空けられており、そこから冬の寒気が僅かに残る四月の朝風が室内に入ってきている。執務机や椅子は全てが無惨に転倒させられていて、生徒会の仕事に関する様々な資料や筆記用具、調度品などの色様々な小物がバラバラになって床に散乱し、テレビやパソコン（副会長の泡沫が無断で持ち込んでいたゲーム機やソフトも）などの機械の類に至つては黒い煙を上げて原形を留めない程に破壊されてしまっていて、全体的に見て爆心地のような空間へと成り果てた生徒会室内の惨たらしさを窓に空いた大孔から入つて来る木枯らしの音が虚しく演出している。

だが一輝が立ち尽くして啞然となつたのはそんな天災に遭つた殺風景の中に居るといふのに割と平然な顔をし、事によって妙な空気を作っている人物達を目の当たりにしたからであつた。

「「あ……あ……?」」

「イズくうん? 柊さあん? これはいったいどういう事なのかな? ……かなあ?」

「ごめんなさい、マジでごめんなさい刀華さん……」

「何故私まで……」

「まったくどうしてくれるんだよ後輩君達? 昨日刀華に消されたセーブデータのところまで徹夜で到達させたっていうのに、ボクのゲームをこんな見るも無惨な姿に変えてくれちゃって、あんまりじゃないかあ……」

「あくあ、テレビもプ○ステ4も生徒会室に置いてあったゲームソフトもせくんぶ一瞬でスクラップになっちゃってんじゃないん。でも一緒に書類や仕事道具も纏めておじやんになったし、これで当分の間生徒会の仕事はできないんじゃない? アハハ、ウケる♪」

「いやいや、この惨状全然ウケる要素なんて見当たんねーよ。これだけの損害だと修繕と事後処理がどんだけ手間だか分かってんの?」

仲間として此処に招集をかけていた善吉、マイ、リン、アリスの四人が隅に立って室内の惨状に訳が解らず白目を剥き開いた口が塞がらず全身を硬直させているのは理解できる。一輝の恋人であるステラの姿がないのは恐らく昨日編入したてで通学に慣れていない為に何処かで道に迷って来るのが遅れているのだろう。だが朝風と朝日が入って来ている損傷が酷い窓際で何故だか一晩行方不明になっていた筈の武内出雲那

と終明日香が生徒会長である刀華によつて正座させられていて、その膝の上には大昔の帝国ヤマトにおいて拷問に使われていたとされる厚みのある石板が三枚程重痛しく乗せられ、死んだ魚のような眼をして背德的に首(こうべ)を垂れている姿を晒しているのはいったいどういう事なのか?二人の眼前で大虎の幻影を背後に幻視してしまう程の威圧感を放っている刀華が周囲を凍り漬かせる程怖ろしい笑顔を浮かべながら有無を言わず事の説明を脅迫的に求めてくる様はまるで死刑執行官が処刑前の罪人に死に際の遺言を聞いているかのような殺伐とした雰囲気非常に非常に寄り難い空気を放っている。そんな重痛しい空気を気にも留めず室内の惨状を見回して嘆いている刀華以外の生徒会役員達の神経の凶太さは呆れる程に大したものだとは思ふが……。

「え〜と……どうなっているんだい、コレ?」

「俺に聞くんじゃないよ……」

ルームメイトの親友と昨日クラスに編入したばかりの新しい仲間である少女が二人共無事な姿(?)で帰つて来たのは素直に嬉しく思うが、いったい全体何がどうして目の前の状況になったのかは善吉に聞いてみたところで解決しない。

非常に理解し難いこの生徒会室内の風景と惨状はどういう経緯があつてこうなつたのか?待て、次回ッ!

底知れぬ絶望の海につ、沈めエエーッ!!

青学の生徒会室に隕石が直撃し、それと同時にまるでその隕石に乗って来襲したかのように其処へ出雲那と明日香が出現していた訳は、遡る事三分前……。

「武内君急いで！朝のホームルームが始まる八時まであと三分を切ってしまったわ！」
「マジか!?クソツタレ、一発でも雷切が使えればいつも通り瞬殺できると思ったのに、シグナム先輩の奴無駄にパワーアップしやがって！」

海沿いの道で恒例のように出雲那の永遠のライバルを自称するシグナムから決闘（デュエル）を挑まれた出雲那は昨夜の異界での激闘による疲労とダメージが回復しきっていないうえに、寄り道すれば学園に遅刻しそうな時間帯であったにも関わらずその決闘を受けて立ったが。【烈火の劍精】を自称する魔導融合機のアギトと融合（ユニゾン）し、驚異的なパワーアップを遂げたシグナムはそう簡単にシグナムが瞬殺できない程に今までの奴とは一味も二味も違い、予想外に手こずらされていたのであった。

「フハハハッ！どうした武内、息があがっているぞ？先程までの威勢は何処へ行った、十秒で私を倒し決着を着けるのではなかったのか！」

「うるせえよ、ちよつとパワーアップしたからって調子に乗ってんじゃねえっ！」

互いに魔力翼を背中に広げて飛翔した海上の空で黄旋丸を納刀した雷光迸る鞘と通常よりも三倍以上に激しく燃え上がる紫炎纏うレヴァンティンの刃が一撃打ち合わせる度に周囲の大气が震動する程激しく斬り結んでは鏢競り合い、互いの唇が触れ合いそのうな超至近距離で睨み合い魔力の火花を散らす二人。一見互角に見えるがシグナムには哄笑と皮肉を言えるくらいには余裕があり、対して出雲那は相手の指摘してきた通り呼吸を若干乱していて明らかに披露の色が窺える為、意外な事に戦況は今のところシグナムが優勢であった。

——チッ！一発でも雷切が使えさえすればいつも通りに瞬殺できるだろうと思っていたのに、ハエ女（アギト）と融合して出力を底上げさせてきたシグナム先輩の火力が意外にもヤベエッたらねえし、おかげで厄介な炎に邪魔されてなかなか雷切を放つ隙が突けねえぜ。クソッ、昨夜の異界での戦いの疲労とダメージが無ければこんな奴っ!! 『へっへーん！どんなもんだい！アタシとシグナムに掛かればお前程度のヘッポコ魔術師なんかこんなもんだぜ！どーだ？思い知ったか!!』

「フツ、素晴らしく頼もしい相棒を拾ったものだ。なんだかお前とは遙か昔からの親友同士のように思えるな、アギト。とても他人だったような気がしない」

『へっ、アタシもだぜ、シグナム!』

「余裕ぶっこいて自分の中の融合機と仲良く和氣藹々と話してんじゃねえよ！だいたい

ソイツ昨日拾ったって言ってたけどよお、コンビ組んだばかりでどうしてそんなにも仲良しなんだよ?」

「フツ、なんだそんなに聞きたいのか武内? 私とアギトの実に運命的な邂逅を」

「いや、確かに少し気になっちゃあいるが、【運命的な邂逅】ってお前さつき拾ったって言ったよな?」

「そう、あれは昨晩、貴様への(勝利への)熱情と執念で遊撃士協会東エリア支部の地下の牢屋を破りギルドからの脱出を果たした後、再戦の為に貴様を探して夜風のざわつく月明かり照らす夜空を翔けていた時の事だった・・・」

「聞けよオイツ!!?人をシカトして勝手に語り始めんな!!」

『ふむ、武内を探し出して再戦を挑むのはいいが、このまま無策に奴へ決闘を挑み掛かっているところ、またいつものように返り討ちにされる結果となってしまうだろうな・・・』

日がすっかり沈み切った月夜に空戦魔導士の必需スキルたる飛行魔法を行使して翔し、生活のライトと天から降り注ぐ月明かりによって煌びやかに彩られた夜の街並みを見下ろしながら夕方の決闘でいつも通りに敗北させられた再戦を求めて懲りずに出雲那の行方を搜索していたシグナム。しかし今までに五百戦以上も出雲那に決闘を挑みに行つては一度たりとも勝てずに負けさせ続けられている彼女は、いい加減に何か対策を考えなければこれからも未来永劫ずっと出雲那には勝てないかもしれないという疑念を抱きはじめていた。

『そろそろいい加減に奴から白星を取りたいところだが、奴は私が学園生だった頃から私よりも実力有った上、青学内でも指折りの実力者であった東堂に弟子入りして奴は東堂が必殺としていたあの近接戦（クロスレンジ）殺しの雷切を習得したおかげで、それからというもの私の剣は奴に全く歯が立たなくなってしまったのだから、なんともやりきれん。いつその事私も戦闘力を大幅に強化できればいいのだが・・・』

そこで流離の烈火の将は考えた、どうすれば長年決闘を挑み続けて自分が一度も勝つ事ができないでいるあの瞬雷の剣士に一矢報いる事ができるのかと……そんな時

『くそお、あの腐れ研究者共めえく。ちよつと反抗しただけでこのアギト様を不良品扱いしやがつて〜!』

耳をすませば夜風に乗って何所からか何者かが何らかの不満に嘆く声が聴こえてきたではないか？出雲那やフェイトの高速機動に対応できるよう学園生時代から無駄に鍛えあげてきたシグナムの聴力はその微かな音量しか届いてきていない為に常人なら全く気付けないであろうその少女の声音を明瞭に拾う事など造作も無い。気になった彼女はその声に意識を集中してみた。

『そんで適合できる魔導士(ロード)も見つからない上に反抗的で役立たずの融合機なんか不要だから追放処分だとか、ふぎけんな!今に見てるよ、この世界中の草根を掻き分けてでも必ずアタシに適合できる相棒(ロード)を見つけ出して、そんでいつか絶対にテメエらの計画をアタシの炎で跡形も残さず消し炭にしてやる!この【烈火の劍精】の名に懸けてなあっ!!』

それを聴いてシグナムは確信する。この声の主は自分の騎士道に重要な転機を齎してくれるだろうと。故に彼女は夜天の虚空に手を伸ばす。

『フッフ、聴こえるぞ。夜天の闇に潜む新たな鼓動がっ!』

そして何らかの電波を受信したみたいに微笑し、厨二的セリフを言い出しながら静寂に耳を傾けて声の主を探る。

『私の手に捕らえられるのを・・・待っているのか?』

澄ましたシユールな顔付きでそう誰かに問く素振りをそのままに右掌をゆつくりと前方に翳した途端、突如として彼女の目の前に巨大な炎渦が立ち昇った。しかし眼前に渦巻いて立ちはだかった突発的災害に狼狽えるという無様は晒さない。シグナムは冷静さを保ちながらもあの炎渦の中にある強大なチカラを感じて心躍らせ、そして確信した。もう辛抱ならんと興奮気味に清涼な顔付きをすると激しく渦巻く膨大な熱量の中に向かつて正面から堂々と突入して行く。

『ぬおおおおおおおッ——!』

膨大な熱量が激しく流動する渦中に気合いの雄叫びと共に片腕を突き入れ、言葉にできぬ程に想像を絶する焼痛に耐えながらその炎の中の何処かに潜んでいるであろう【何か】を手探りで掴み取ろうとする。そして——

『ヴォルケンス・アクセスツ——!!』

炎の激流の中に流れて来た小さな【影】をその手に掴み取った。シグナムはその手応えを感じ取った瞬間炎の渦中から腕を引き抜き、経った今この瞬間自分の望む新たなチ

カラを手に入れたのだという絶対的な確信を持ってそれを掴み取った拳を開き——
『え．．．えっ!?!いいいい、いきなり何が．．．?』

中からその姿を現した戸惑いを浮かべる紅毛の小悪魔を視認すると彼女は喜悅したあまりに微笑を浮かべて恍惚と眩くのだった。

『良きチカラだ．．．』

「——と、これが昨夜に果たす事のできた私とアギトの必然にして運命的な邂逅」アホじゃねえのかテメエ等はあああああ——っ!?!」ぶげら——っ!?!」

鏝競り合いしながらの至近距離で無駄に誇らしそうに語ってきたシグナムの話の内

容があまりにも馬鹿らしく、そのドヤ顔もセツトで非常にムカツ腹が立った為に出雲那は罅迫り合う相手の得物の交差点を軸に回し、黄旋丸の柄でシグナムのドヤ顔を払い殴り飛ばした。葵柳流の帯刀、及び抜刀でも共通に放つ事が可能であり、武器を持った相手に対して發揮できる汎用技《轡（くつわ）回し》で眼前至近距離の薄ピンクポニテ巨乳女騎士の腹立たしく澄ましきったドヤ顔を約40m程ブン殴り飛ばしてやったのである。（大事な事なので二回言う）

「きつ、貴様ア！人に話をさせておいて不意打ちするとは!!」

『「おの卑怯者めえ〜!」』

「うるせえ、こっちは聞きたいなんざ一言も言つてねえのにテメエが勝手に話始めたんだろうが！バーカバーカ、このおっぱい魔人！」

海の潮風に煽られる身を翻すように飛行魔法を巧みに空中で体勢を直したシグナムと彼女の中のアギトが当然のようにギャーギャーと喧しく今の不意打ちに対して抗議の声を向けてくるが、自覚のないそれが余計にイライラして出雲那は幼稚園児レベルの罵声で返すしかない程に内心呆れ果てて仕方がなく、両腕を組んでムスツと愚痴を零すように言う。

「つたく！なあああにが「ヴォルケンス・アクセス」だ？こちとら時間がねえつて言つてんだよ。そろそろいい加減にケリを着けるとしようぜ」

「フツ、そうだな。もう暫くは楽しみたいところだったが……ならば最後はアギトと融合した私の現時点で放てる最強の戦技で貴様を母なる海へと墜とし、この決闘の終止符を打たせてもらおうとしよう——ッ!!」

朝のホームルーム開始まで残すところ後二分を切った。この場から青学までの距離的に全力で走ってももう間に合わないだろうと内心諦めだした明日香が気の抜けた半目で海岸線の歩道から見守る中、出雲那とシグナムは互いに不敵な笑みで睨み合い必殺の一撃を放つべく剣を構えて全身から凄まじい闘気と魔力を放出する。二人を挟む間の眼下の海上に巨大な渦潮が生じ、周辺の大気を激しく流動させて複数の竜巻が発生する程の圧倒的エネルギーの迸りが決闘の決着を予感させる緊張感を演出しているようだ。

「ゆくぞ、アギトッ!」

『よし、まかせとけっ!』

己の内に融ける盟友（アギト）と意志を確認し合った直後、シグナムが限界まで体勢を捻り右腰に引きつけるような恰好で構えるレヴァンティンに周囲の水分を忽ち蒸気に変えてしまう程の圧倒的熱量を内包した、文字通りの烈火が纏われだした。まるで山のように偉大な龍の唸り声を連想させられるその烈火の鳴動、まさに怒れる龍の息吹の如し!

「あの異界での死闘を何度も死になつてようやく乗り越えて、やつとの思いで柀の奴を連れ戻せた待望の朝の学園なんだ。そんな最高に気分良い登校を、ここでいつも勝つてるシグナム先輩なんかにはやられて負けたら折角の気分良さが台無しになっちゃうし、ここはいつものようにキツチリと雷切でバサツと勝つてやつて、気分爽快にアゲアゲで学園に行つて、クラスのダチ達に最高の笑顔で気持ち良く「おはようっ！」と言つてやるとするか！当然、柀の奴も一緒にな——ッ!!」

対する出雲那のバチバチに漲らせている剣氣と氣概もシグナム達のそれに全く引けを取つてなどいない。背に生やした「天鳥」の光翼を羽ばたかせ、宙に身を固定して青学最強の一角である生徒会長直伝の伝家の宝刀「雷切」を放つ準備を始める。左脚を前に腰を深く落とした居合い抜き構えで右腰に帯刀した黄旋丸の刀身を納めた鞘の内に最大に練り上げた魔力電流を流し入れ、その刀身を異次元の威力で射出する為の強大な電磁界を形成。そこから周囲に発せられていく超高エネルギーが大気を伝導し、周辺の至る所の空間にバチバチィーッ!と雷纏う竜を模つたスパーク現象を迸らせている様は、まさに今刹那の間に閃く雷光すらをも切り落とす必殺剣が抜き放たれんとしている予兆だ!

最大級の必殺スキルでこの決闘に決着を着けんとする姿勢で凄絶に牽制し合う両者の万応素(マナ)の急激な上昇を肌で感じ取り、荒立った海原を前にして決闘の決着を

地上で見守る明日香も表情を真剣に一変させて「ゴクリッ」と息を飲む。途轍もない重庄（プレツシャー）だ、両者の全身から溢れ出る目に見れる程に凄まじい闘気と此処一帯の景色を丸ごと荒れ狂わせて変貌させる程の高濃度の魔力が大気を蹂躪し尽くして圧迫し、場の緊張感と決着の臨場感が最高潮に高まりきった、その瞬間——両者共同時に動いたッ！

「受けるがいい武内出雲那！これが私とアギトの全力の一撃だッ！！」

『剣閃烈火——』

『——《火龍一閃（かりゆういつせん）》ツツ！！』

シグナムが内のアギトと共にその奥義の名を高らかに言い放ち、腰に引いた烈火纏うレヴァンティンを勢いよく前方に薙ぎ払うように、炎の連結刃をグリーン！と雷光唸らせる雷鳥（出雲那）へと伸ばされていく。その烈火が通過した空間に存在する酸素は余す事なく燃焼していつているようで、そんな火力からしてその攻撃力もかなり大したものであると推測できるだろう。なるほど流石だ、【火龍】の名を冠して必殺技を名乗りあげただけの威力はある。

「疾——ッ！」

それに対して臆する事なく出雲那も閃光となって翔け出した。彼の視界から見て左側から衝撃波を伴う程の速度をもつて大きく弧を描きながら力強く刀身を湾曲させて

薙がれて来るように伸長し向かって来る烈火の連結刃を真つ向から打ち破りに行く堂々の一直線コースでレーザー光線の如く空から斬り墜とさんとする相手への音速突撃を踏み切った。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおっ!!」

左方に浮かぶ雲を蒸発させながら力強く撓り迫る烈火の連結刃との接触到備え、出雲那は加速直進しながら気合いの雄叫びを荒れ狂う空と海に響き渡らせた。視界全体が炎の大蛇に覆い尽くされる程に相手が伸ばした攻撃が身近に接近しても臆して減速なんてしない。出雲那は烈火の連結刃が勢いをつけて引つ叩いてくる巨大な鞭のように自分の身体に斬り付けられる直前、右腰に帯刀していた黄旋丸を刃を納める鞘ごと左手で引き抜き、左から迫り寄る烈火の連結刃を防ぐ為に、そのままそれを両手に持つて左側面に翳した。瞬間、鮮烈な炸裂音と甲高い金属打撃音が鳴り響いた。

「ぐっ、おおおおおっ!」

予想以上に重たい衝撃だった為に攻撃を受け止めた鞘を持つ両腕が一瞬で押しきられそうになるも、根性でひねり出した気力で腕力を緊急強化した事でなんとかギリギリ烈火の連結刃を押し止どめられたが・・・。

「ははははは! どうだ武内? 私とアギトの全魔力を込めた【火龍一閃】の威力は!!」

『へっ! 生意気にも受け止めやがったみたいだけど、その刃に纏わせた鋼をも溶かす烈

火の熱量にそのみすばらしい剣の鞘なんかで、いつまで持つだろうなあっ！」

「ぐぐぐぐ——！」

熱い・・・鞘に猛烈な圧力を継続的に押しつけてくる連結刃に纏う魔力炎の超高温が鞘に伝わってきて、それを握っている両掌が火傷して焼ける苦痛がする。鋸のように引き削るよう動作している連結刃が直接押し付けられている鞘の接触部分はその摩擦による切削とそれに纏う凄まじい熱量の溶解によって徐々に黄旋丸の刀身が納められた鞘に切れ込が入っている様を見れば理解できるように、このままでは後数秒もしないうちに黄旋丸は鞘ごと両断されて、そのまま炎の大蛇が出雲那の身体を真っ二つに噛み千切っていく事だろう。もつとも、ダメージが精神的ダメージに変換されるソーサラーフィールドの中である故にそうなったところで実際に身体が真っ二つにされる事は無いが、もしそんなダメージを直接身に受けたならば一巻の終わりだ。遠目で前方を見遣ると今日まで出雲那に挑む度に連敗を苦くも喫し続けてきた流離の烈火の将が念願の初勝利を確信したかのように、嬉々として口端を吊り上げた澄まし笑いを向けてきているのが見える。

「ふっ、ようやくだ。ようやく私は今日、今まで戦いを挑んでは散々と何度も何度も無様に地に斬り伏せられ続けてきた武内の奴に初めて勝利する事ができる！これも全てアギト、お前という最高の相棒（パートナー）と邂逅できたお蔭だ、感謝する」

『えへへ、よせよお。アタシに掛かれば当たり前の結果だけど、そう言われるとなんだか照れくさくなるじゃねくかよお♪』

——アイツらあ、もう勝った気でいやがつてえく……。

出雲那はひたすらに自分に掛けて来続ける火龍一閃からの負荷に耐えながら、勝利した気分のシグナム達を苛々しく睨み遣つて歯をギリイツと軋らせた。冗談じゃない、ここでいつも勝つてる相手なんかに敗北して、昨夜の異界での死闘からやつと迎えられる朝の登校を台無しにしてたまるか!

——……いいぜテメエ等。だったら今、この技で目に見せてやるぜ。そのいかにも名の知れた女騎士染みしたムカつく澄まし笑いを、直ぐに目玉飛び出させた女芸人風の変顔に変えてやらああつ!!

「う……うおおおらああああ……ッ!!」

出雲那は腹立ちのあまりに激怒した。必ずやあの戦闘狂デカパイニート侍ムツリスケベ女騎士を海にブツタ斬り墜としてやると思つた。伝わってくる烈火の連結刃の熱量に両掌が焼け爛れて握力が失われる前に彼は更なる魔力を体内の魔核から捻り出し、その両掌の表面に強力な電磁界を展開した。するとその掌の中で鞘が転がるように高速で回転し出し、雷鳥が再び空を進撃し始める。

「なっ!?!連結刃に斬り付けられた剣の鞘を手に発生させた電磁界による強力な吸引力と

反発力を利用した高速回転で、まるでゴンドラの滑車をロープウェイに滑らせるように、相手の連結刃を押し止どめながら前進を！」

海岸線からその技の全容を見上げて確認した明日香が驚嘆に目を見開いている。その驚きの声で説明した通り、出雲那は烈火の連結刃を辛くも防いでいた黄旋丸を握った両掌に展開した電磁界で高速回転させて、撓り燃え盛る炎の長蛇剣の接面に転がした滑走をもつて再びシグナムへと前進し翔け出したのだ。

「『な、なん・・・だとおツ!!?』」

相手の得物に斬り付けた事で左手に伸ばしたレヴァンティンに掛かっていた負荷の重みが急速にこちらに迫って来ているのを感じ取って、ようやく事の変化に気付いて戸惑いに動揺しだした烈火の阿呆共。今出雲那が發揮して来ている異質な技は、本来ならば相手の持った長物に己が持つ得物を絶妙に斜めらせた角度でもって押し付けてやる事で掌と相手の長物の間を器用に滑らせる摩擦を利用して得物を車輪のように回転させ、その相手の長物が齎してくるあらゆる傷害を防ぎつつそれを伝って相手の懐に踏み込んでいくという、帯刀及び抜刀のどちらの場合でも相手の持つ長物に対して行使する事を可とする、葵柳流において守動一体の汎用技——名を《火擦滑車（ひすりかつしゃ）》と言うのだが、出雲那のそれは己に秘めた雷属性の異能を活用して通常の火擦滑車よりも機動効率を大幅に上昇させた《電磁滑車（でんじかつしゃ）》と言う改良した技

なのである。

「底知れぬ絶望の海につ、沈めエエーッ!!」

故に、あと約15mも開いていた両者の距離が一秒の間も無い瞬く間に消し飛んだ。手を伸ばせばもれなくシグナムの胸にたわわと膨らんで実る柔らかなメロンを鷲掴み揉めるであろう、この至近距離。レヴァンティンの連結刃が伸長されきった完全無防備状態で困惑のあまりにその表情を引き攣らせるシグナムの眼前には、既に烈火の連結刃の負荷から解き放された黄旋丸を右腰に柄を左手に握った出雲那がその刀身が納まった鞘に高魔力電流を流し込み終え、鮮烈にそこから雷光を迸らせて抜刀体勢を完了させている・・・これ以上はもはや言うまい。

「閃け——雷切イイ——ッ!!!」

雷光 一閃ッ!

『コンナハズデハアアア——ッ!』

抜き放たれた近接殺しの一刀を綺麗にくらわされたシグナムとアギトはソーサラ—フィールドの効果による非殺傷の超過ダメージに耐え切れず融合を分離させて、プロの女芸人も脱帽する変顔で奇声を叫びながら海へと落下し、水面に大きく立派な水柱を建造したのであった・・・。

『END OF DUEL! winner 武内出雲那!!』

「武内君」

ソーサラーキューブの機械音声が決闘の勝者を告げ、この辺一帯を広く覆っていたソーサラーフィールドが解除される。緩やかな螺旋を描きながら悠々と地上へ降りてくる出雲那を呆れ果てたようにやれやれと自分の蟀谷に片手を押さえつつ明日香が困り顔でお出迎え。何故なら朝のホームルーム開始までの時間は残すところ一分を切っている……。

「貴方って人は、昨夜の戦いの怪我はまだ治っていないというのにつまらない意地を張って、する必要のない無茶をして……はああ……いったいどうするの？もうこんな時間だと身体強化スキルを使って全力疾走しても、とてもじゃないけど間に合わないわ」

「あ……あははは、悪りいな終。シグナム先輩相手ならすぐにケリを着けられると思っただけど、あのアギトとかいうハエ女と融合強化したアイツが予想以上に手強くなっただもんだから、思ったよりも手こずっちゃったぜ☆」

片手で後頭部をボリボリと掻きつつ苦笑いを浮かべて調子よく謝罪する出雲那だったが、明日香から向けられるジト目は仕方のないやるせなさを感じさせている。

もう潔く諦めて学園に遅刻して行って、クラスの教室の廊下に二人仲良く水が満たされたバケツを両手に立たされる事を覚悟するべきか……。

「きゆううく……」

そんな観念した臭いを空気に漂わせていると、側の海岸線に両目をぐるぐるくつと回して気絶したアギトが流れ着いて来た。「マタカテナカツタ……」と遠目で海面にプリプリとした肉付きの良い大きさのある扇情的なケツを浮かび上がらせた非常にコミカルなやられ姿で気絶しているシグナムと思わしきものが浮かんでいるところから流されて来たのだろう。

「まったくシグナム先輩ときたら、こんな魔導融合機なんて拾ってきてまでオレに勝りたいのかよ……」

それでほぼ毎日決闘を挑み掛かって来るのはいい加減にウザったく思うし、今度ワザと負けてみようかと戦士として心にもない事を思案しかけていると、なんと海岸線に倒れていたアギトがおぼつかない小さな足で目を回しながらヨロヨロと立ち上がったではないか。ソーサラーフィールドによる精神ダメージは魔導士に融合した状態の融合機にはかなり堪えるもので、故に彼女は出雲那の雷切の超過ダメージをモロに受けた筈。

——ほぼ朦朧とした無意識下だとしても、オレの雷切をくらってまだ一分も経ってねえのに立ち上がってくるだなんて。このハエ女、意外と大したド根性持つてんなあ……。

そう彼女に感嘆を向けると今度は唐突に「フ、フツ、フウウーッ」と、なんだか立ち上がったアギトが無意識に何故か鼻から大量の空気を吸い込みだした。目の前で理解不能な行動を取り始めた妖精サイズの小悪魔に首を傾げて当惑を露わにする出雲那と明日香。この間にも時計の針は刻一刻と青学の朝のホームルームが始まる八時に近付こうとしているし、もうどうしようもなく何がなんだかサツパリだと言った感じの妖精が背景に通り過ぎて行く錯覚を覚えたその直後――

「――フンガー――――――ツッ!!!」

アギトが「はないき」を吐いた。(笑)

「へ? って、うわ(きや) ああああああーっ!!?」

無意識に彼女が吹き起こしたその「はないき」の勢力はまさに台風(サイクロン)のように、目の前に立つ二人を容赦なく飲み込んで明後日の空へと吹き飛ばして行ったのだった……。

と……まあこんな聞くも馬鹿らしい経緯があつて、出雲那達は空から青学の生徒会

室へと飛来して、遅刻ギリギリに超ダイナミック登校&入室を果たせた訳なのだが：「まったく、昨日あれほど口を酸っぱくして皆に心配を掛けるような事はしないでねって言ったのに、君って子は・・・反省してる？」

「はい、《イセリア海溝》のように深く反省致しました。もうしませんので許してください・・・」

「柊さんも学生という立場を弁えて、できるだけ夜遅くまで外に出歩かないようにしてください。この前に武内君が襲われたついでに正体不明の化物の件だってあるんですから、くれぐれも危ない事は控えるように。わかりましたか？」

「はい、この度は皆さんに御心配をお掛けしてしまい、誠に申し訳ございませんでした。今後は学生の身分として規則正しい行動を心掛ける事を約束します・・・」

その直撃の被害がこの爆心地と化した生徒会室なのだと言うのだから登校時間に滑り込みセーフな訳がない、アウトどころか危険行為で一発退場もいいところだ。判決は有罪（ギルティ）、無論の事昨日一晩帰らなかつた事情も含め、鬼のように大層御怒りな極刑人（刀華）によって拷問のように厳しいO☆S☆E☆L☆T☆U☆K☆Y☆O☆U（実際、重痛しい石板三枚を正座の上に乗せられた拷問そのもの）を耳に膀胱が作られる程に受けさせられた罪人二人（出雲那&明日香）は、それはもう首をぐつたりと垂らして眼のハイライトが消えてしまったグロッキー状態と化してしまい、心配と迷惑を掛けた皆に罪

を懺悔し許しを請うしかなかった・・・。

「あははは☆どう？刀華のO☆SSE☆LTU☆KYO☆Uはキツ過ぎるかい後輩クン達？まっ、ボクのゲームも粉々に壊してくれちゃった訳だし、これも必要以上に皆に心配を掛けた罰だと思つてよね。ははははっ☆」

「あははは、ていうかこれマジな拷問だし。ウケる♪」

「ははは、まあ東堂会長を怒らせたのが運の尽きだったな少年少女よ。まあこれも良い教訓だったと思つて将来の糧にしたまえ、若人よ」

生徒会の問題児三人衆の冷やかしが耳に痛い。一晚連絡一つ寄越さずに帰らなかつた詳しい事情を〔表〕の人間である彼等に説明するわけにはいかないが、その所為で皆を心配させて非常に迷惑を掛けてしまった為に出雲那と明日香は返す言葉が見当たらず、気まずい思いに頭が上げられなく参つて仕方がない。二人の膝に乗せられた三枚の石板よりも遥かに重苦しい静寂が爆心地と化した生徒会室内風景に漂い、それ以上はさすがに見兼ねた一輝が苦笑を交えて助け船を出してくる。

「はははは・・・まあこれだけ厳しく叱られて、流石に二人も深く反省しただろうし、そろそろその辺で許してあげたらどうですか、東堂さん」

「はあ・・・ま、さすがにこれ以上はやりすぎでしょうし、今回はこのぐらいで勘弁してあげるとしましょうか」

出雲那と明日香の精神が著しく限界に消耗しているのを視て、これ以上二人を戒めるとなると流石に再起不能なまでに精神を追い詰めてしまうかと、刀華は氷点下に厳しくさせていた表情を解いて不本意そうな嘆息を漏らしてから生徒会庶務の霞とユーマに出雲那と明日香の膝に重痛しく乗せられている石板を回収させた。地獄のようなO☆SE☆LTU☆KYU☆Uからようやく解放された二人は軽くなつた重力に安堵した脱力を感じつつそれぞれ楽な姿勢に立ち上がり、凝り固まつた四肢を回しほぐしたところに一輝達クラスメイトの友人等五人が声を掛け寄つてきた。

「出雲那。明日香も一晩も帰らないで何所に行ったの？心配したよ！」

「何か深い事情があつたのかもしれないけれど、それならそうと連絡ぐらいはしてくれ。仲間だろう俺達は」

「ホントよ。出雲那はいつもの事だけど、明日香も編入初日の放課後から深刻な問題事を匂わせるような事しないよね。貴女は問題事とは無縁な規律正しい優等生だと思つてたのに・・・」

「つたく。【部活荒らし】なんて呼ばれてる俺も言えた義理じゃねーが、羽目を外すのも程々にしとけよ」

マイ、リイン、アリス、善吉がそれぞれ叱責や呆れを露わに心配を掛けた二人の行動を戒めるよう注意を言つてきた。無理も無い、それ程までに一晩行方不明となつていた

二人の事を皆心から心配していたのだ。ここまで真摯に詰め寄られては出雲那と明日香も流石にこれで言い訳をするのは無粋だなと観念し、「す、すまねえな、心配させちまって・・・」「本当にごめんさい。これからは極力、皆に心配をさせないように気を付ける事にするわね」と素直に謝罪の言葉で返すしかなく、最後に心から反省した二人の姿勢に一輝が優しく労いの言葉をかけてくる。

「ははは、でも二人共何事も無く無事に帰って来て、本当に安心したよ。一晩も連絡がつかずに帰って来ないものだから、一時は最悪の事態を想定して皆を此処に緊急招集した程に切迫した状況だったけれど」

「それでお前ら今日の朝のホームルームをわざわざサボって、全員こんなところに雁首を揃えてやがったのか?」

「それは、本当に心配を掛けてしまっていたみたいね。改めて謝罪しましょう、深くお詫びするわ・・・」

「それならもういいよ、東堂さんが皆の分までやりすぎなくらいに叱ってくれたし。とにかくお帰り、出雲那君、終さん」

あまりにも皆に多大な迷惑を掛けていた事に負い目を感じた様子をする出雲那と明日香にフォローの言葉で場の空気を和らげた一輝がいつも通りの爽やかな笑みをして二人が無事に帰還した事に快く会釈したところで、これにて一件落着と落ち着いてもよ

いだろう。

何はともあれ、問題が無事に解決したのなら学生としての本分をまっとうする事に戻るべきだろう。出雲那達のフライングメテオダイナミック登校のお蔭で爆心地と化してしまったこの生徒会室の事後修繕については生徒会の社畜に全部丸投げするとして満場一致なのだが、床に愕然と四つん這いに伏せだした霞は無視してこの場に居る人数を見回すと、そういえばと未だにこの場にやつて来ない紅蓮の皇女様の事が気になった・・・その時、今度は此処より北東の近場からも特大の爆発音が鳴り響いた。

「って、次から次へといったい何なんだよ今日はっ!？」

「摸擬戦場(ドラゴンスタジアム)の方から聴こえてきたわね。かなり大きな爆発音に思えたけれど、また隕石か何かが降って来たのかしら?」

一つの問題が解決したところにまた問題・・・ホント、このスクエアで発生する問題事の数々ときたら、ブラック企業も真っ青になる程うんざりするくらいに暇がなく立て続けに起こるのだから困ったものだ。しかし、事は会議室で起きているんじゃない。

「それじゃあジュード君、江迎さん。二人には摸擬戦場に出向いてもらって、事の対応をお願いします」

「「わかりました。まかせてください!」」

「オレ達も行くぜ刀華さん。散々皆に迷惑掛けちゃった詫びとしちゃあ難だけど、手伝

わせてくれ!」

「人手も足りないし、仕方がないですね……ですがくれぐれも無茶だけはしない事、いいですね?」

こうして出雲那達は、生徒会会計のジュード・マティスと江迎怒江と共に爆発現場のドラグーンスタジアムへと急行する事となった。あの昨夜の異界での死闘から、ようやくやつと今日の学園（にちじょう）への帰還を果たせたと思つた途端にこの騒動。果たしてドラグーンスタジアムで発生した爆発音の正体や如何に?

「あ、そうだ言い忘れてたぜ一輝、善吉達も」

「ん?」

「どうしたんだよ?」

「柊」

「え?・・・あ。ええ、そうよね」

まっ、こんな非常事態が発生したかもしれない時でも、朝学園に登校したら友達にこの言葉を言うのが常識というもので、出雲那と明日香はお互いの眼を見合わせてから「「せーの!」と息を合わせ——

「おはようっ!」

と、最高の笑顔で掛け替えのない仲間達にそう朝の挨拶を交わした。そう、二人はよ

うやく戻って来られたのだ、この青竜学園に。